

令和2年度指定

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム 構築支援事業

研究報告書・3年次(令和4年度)

研究開発構想名

「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版AL ネットワーク



令和5年3月

長野県教育委員会

カリキュラム開発拠点校 長野県上田高等学校



目次

はじめに	学びの改革支援課長 長野県上田高等学校長	曾根原好彦 北澤 潔	1 2
【1】 事業の概要	構想概要 令和4年度事業実施計画書 イメージ図 令和4年度事業完了報告書		3 5 11 12
【2】 管理機関の取組	I A Lネットワークの構築 1 文理融合のカリキュラム開発 2 より深い学び 3 国際的な学び 4 高度な学び 5 主体的な学び II 信州WWL High Lights		28
【3】 高校生国際会議	I 高校生国際会議の概要及び報告 II 共同宣言（資料）		42 49
【4】 拠点校の取組	上田高等学校 I ALネットワークの構築 1 カリキュラム開発拠点校 上田高校におけるWWL事業の教職員支援体制 2 信州WWL高校生国際会議 3 信州WWL高校生国際会議実行委員会 4 研究発表交流 5 信州大学 長野県内高校生による科目等履修生 II 文理融合のカリキュラム開発 1 令和4年度WWL研究開発活動 2 グローバルスタディ I 3 グローバルスタディ II J（日本語） 4 グローバルスタディ II E（英語） 5 グローバルスタディ III 6 JICA＊ICAN連携による国際理解教育「世界が100人の村だったら」 7 JICEとの連携授業「地域に暮らす定住外国人との共生について考える」 III より深い学び（探究的な学び） 1 県内フィールドワーク（1年） 2 探究の日（2年） 3 第1回アカデミックプレゼンテーション 4 第2回アカデミックプレゼンテーション 5 研究発表 長野県上田高等学校グローバルスタディ報告会 IV 国際的な学び 1 上田高校の海外研修概要 2 台湾 高級中学オンライン交流 3 ヒューマン アクト イン マニラ（令和3年度の研修報告） 4 ボストンスタディプログラム（令和3年度の研修報告） 5 海外留学・進学セミナー		54 55 58 58 58 59 60 63 66 69 71 72 73 75 76 76 77 80 81 83 84 85

	V 高度な学び	
	1 松尾ゼミナール	86
	2 1年生課題研究入門講座	87
	VI 主体的な学び	
	Take Action－課題研究から発展した生徒たちの様々な自主活動	88
	VII 特色ある取組	
	校外における研究発表	89
【5】 共同実施校の取組	I 松本県ヶ丘高等学校	91
【6】 連携校の取組	I 須坂高等学校	95
	長野高等学校	96
	長野西高等学校	97
	篠ノ井高等学校	99
	屋代高等学校	100
	上田染谷丘高等学校	101
	野沢北高等学校	104
	諏訪清陵高等学校	106
	諏訪二葉高等学校	108
	伊那北高等学校	109
	伊那弥生ヶ丘高等学校	110
	飯田高等学校	111
	飯田風越高等学校	112
	松本深志高等学校	113
	長野日大中学・高等学校	115
【7】 評価	I WWL事業の評価と考察	
	1 生徒によるWWL活動に関するアンケート	117
	2 WWL活動がどのような能力を高めているかについてのアンケート	118
	3 WWL事業に関する教職員アンケートの分析と考察	120
	4 WWL事業に関する保護者アンケートの分析と考察	121
	5 GPS－Academicテストによる3つの能力評価についての分析と考察	121
【8】 運営指導委員会	I 第1回運営指導委員会議事録	125
	II 第2回運営指導委員会議事録	138
	III 第3回運営指導委員会議事録	145
【9】 検証会議	I 信州WWLコンソーシアム構築支援事業令和3年度検証会議のまとめ	154
【10】 資料	I ALネットワークで育てたい生徒像	155
	II 信州WWLループブック	156

令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究開発報告書に寄せて

学びの改革支援課長 曾根原 好彦

将来、世界で活躍できるイノベティブなグローバルリーダーを育成するため、令和2年度の指定以来、すべての高校生に高度な学びを提供する仕組みであるAL（アドバンスト・ラーニング）ネットワークの構築に尽力してきた本事業も、3年目の節目を迎えようとしています。

長野県が「SDGs 未来都市」を標榜することから、構想のテーマに「SDGs 未来都市 長野から世界へつなげる信州版ALネットワーク」を掲げ、拠点校の上田高等学校を軸に、共同開発校の松本県ヶ丘高等学校、さらに連携校と協働し、これまで、SDGsの持続可能な開発目標を切り口にした探究的な学び、高度な学び、国際的な学びの機会を生徒に提供してまいりました。

事業申請時点で8校であった県内連携校も、今や15校を数え、国内外の連携校も合わせるとALネットワークは着実に広がりを見せるとともに、主体的・対話的で深い学びを実現しております。

その象徴が、昨年6月に拠点校の上田高等学校を会場に、学びの集大成として参集とオンラインのハイブリッドにより開催した「信州WWL高校生国際会議」です。

開催に当たっては、50余名が実行委員として、事前準備から当日の運営まで主体的に携わりました。そして国際会議当日は、県内からのべ約100名余、県外から約30名、さらに台湾、アメリカ合衆国、インド、カナダなどの海外各国から約60名、総勢約200名の高校生が参加し、エシカル消費をはじめとする6つのテーマ別分科会に分かれ、流暢な英語を駆使した発表とディスカッションを行いました。そして、閉会式では分科会ごとに全参加者へ向けて報告を行った上、最後は1日の議論の成果を共同宣言に収斂し、学びの集大成として広く世界へ発信しました。

本県では今年1月、「高校改革～夢に挑戦する学び～再編・整備計画【三次】」を策定し、「新たな学び」と「新たな高校づくり」に一体的に取り組んでいるところです。

この「新たな学び」の核を成す「探究的な学び」は、今や人口に膾炙するところですが、本事業の取組がこの「探究的な学び」を牽引し、生徒たちの、ひいては社会全体のWell-beingの実現につながるものとなることを願ってやみません。

最後になりましたが、3年間ご尽力いただいたALネットワーク参加校の関係者様、的確な、そして温かい御指導・御助言を賜りました運営指導委員の皆様、たいへんなお力添えをいただいた連携先の企業・団体・大学・研究機関の皆様にご心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。今後とも何卒よろしく願いいたします。

自走に向けての歩み

長野県上田高等学校長 北澤 潔

本校はグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的教養を身に付けることを目的とした学びを推進するとともに、「探究的な学び」をネットワーク化することを目指し、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校として、目標達成のための様々な取組を行ってきました。

平成 27 年度に S G H（平成 26 年度はアソシエイト校）に指定されて以降、グローバル人材育成に係る県内の拠点として長野県の取組をリードしていくという気概を持って、21 世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきたわけですが、A L ネットワークの構築については、管理機関である長野県教育委員会、共同実施校である松本県ヶ丘高等学校、さらに連携校 15 校とともに、各校独自の取組を基本とし、これを尊重しながらも横の連携を重視しての歩みであったといえます。各校の課題研究発表会等に相互に参加したり、場合によっては訪問校で発表を行ったりするなど、新たな試みもみられるようになりましたが、これらは、今後の取組の方向性を示す重要な一例といえるでしょう。

また、高大連携については、県内の国公立 2 大学が先取り履修に係る講座を開講してくださり、本校からも 8 名が受講しました。来年度はさらに多くの講座が開講されることになっています。これは、先取り履修という観点だけでなく、高度な学びに高校生が触れる機会の提供という観点からも、大きな前進であると思います。関係大学及び窓口となっていた県教育委員会に感謝いたします。

令和元年度末からの新型コロナウイルス感染症による教育活動への影響により、当初の計画どおりに諸企画を推進することはできませんでしたが、本年度は 6 月 11 日に「信州 WWL 高校生国際会議」を、参集とオンラインのハイブリッドで開催することができました。生徒実行委員会を核として、企画・準備そして運営にあたりましたが、実行委員を本校生徒だけでなく、他校からも募った方式（8 校から約 50 名）は、長野県独自のものであり、平成 30 年度に長野県で開催された全国総文祭の経験を活かした意義ある取組であったといえるのではないかと思います。もちろん、課題も多かったわけですが、長野県の高校生が創り上げる「高校生国際会議」という形式は、今後も継続できればと考えています。

3 年間の取組により、生徒及び教員のスキルも飛躍的に向上したと考えています。もちろん、新学習指導要領の実施により、本校だけでなく、すべての高校において「主体的・対話的で深い学び」を本格的に推進するようになってきたこともあり、相互に刺激を受け合っていることもあるでしょう。また、新型コロナウイルス感染症対応もあって、I C T に係る生徒及び教員の技術向上と、オンラインによる会議や企画の実施は、実施方式や内容そのものについても幅を持たせるという効果をもたらしたといえますが、「探究的な学び」の深化と進化にあたっては、この変化はかなり大きくプラスに働いたといえるでしょう。

令和 5 年度以降、とりあえずは、財政的な裏付けのない中での事業の継続となりますが、継続性を念頭に置いての取組を引き続き検討していきたいと考えています。さらなるプラットフォームとネットワーク拡充のために。

期間	ふりがな	ながのけんきょういくいんかい	都道府県番号
令和2年度 ～ 令和4年度	管理機関	長野県教育委員会	長野県
	ふりがな	ながのけんうえだこうとうがっこう	20
	事業拠点校	長野県上田高等学校	

令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 構想計画書（概要）

構想名（30字程度以内）

「SDGs未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク

構想概要（400字以内）*テーマ設定したグローバルな社会課題について必ず記載すること

長野県では、将来WWLコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版ALネットワークを3年後までにWWLコンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、SGH校としてこれまでグローバル人材育成にかかる拠点の役割を果たし、21世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』ALネットワークを構成する。これにより、地方公立高校の生徒たちに、単独校では得られない教育の機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成を目指す。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名		
管理機関		長野県教育委員会						内堀 繁利		
事業拠点校		長野県上田高等学校 (公立)						北澤 潔		
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模			
	対象:	全日制普通科	320	320	320	960	960			
	対象外:				0	0				
事業共同実施校	①	長野県松本県ヶ丘高等学校 (公立)						金井 繁昭		
			学科・コース名	1年	2年	3年	計			学校規模
		対象:	自然探究科・国際探究科	82	79	78	239			961
		対象外:	普通科	245	245	232	722			961
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)	①	KDDI株式会社						松野 茂樹		
	②	一般財団法人日本国際協力センター(JICE)						山野 幸子		
	③	台湾高雄市政府教育局						王 進焱		
	④	ミネルバ大学						杉本 亜美奈		
	⑤	長野県知事部局各課						阿部 守一		
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	長野県長野高等学校 (公立)						宮本 隆		
	②	長野県篠ノ井高等学校 (公立)						濱 勝彦		
	③	長野県屋代高等学校 (公立)						馬場 正一		
	④	長野県上田染谷丘高等学校 (公立)						山越 弘		
	⑤	長野県野沢北高等学校 (公立)						柳沢 敬		
	⑥	長野県伊那北高等学校 (公立)						埋橋 浩		
	⑦	長野県飯田高等学校 (公立)						駒瀬 隆		
	⑧	長野県松本深志高等学校 (公立)						石川 裕之		
	⑨	長野県長野西高等学校 (公立)						小金 典子		
	⑩	長野県須坂高等学校 (公立)						松原 雄一		
	⑪	長野県伊那弥生丘高等学校 (公立)						松村 明		

【別紙様式4-1】

⑫	長野県諏訪清陵高等学校	(公立)	小口 雄策
⑬	長野県諏訪二葉高等学校	(公立)	浅井 秀俊
⑭	長野県飯田風越高等学校	(公立)	新津 志保美
⑮	長野日本大学高等学校	(私立)	添谷 芳久
⑯	延平高級中学	(私立)	劉 栄順
⑰	苗栗高級中学	(国立)	劉 瑞圓
⑱	新竹女子高級中学	(国立)	呂 淑美
⑲	科学工業園区実験高級中学	(国立)	李 健維

(別紙様式1)

令和4年5月13日

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 長野県長野市南長野幅下 692-2
管理機関名 長野県教育委員会
代表者名 教育長 内堀 繁利

1 事業の実施期間

契約締結日～令和5年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 長野県上田高等学校

学校長名 北澤 潔

3 構想名

「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク

4 構想の概要

長野県では、将来WWLコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版ALネットワークを実施3年間でWWLコンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、SGH校としてグローバル人材育成にかかる拠点の役割を果たし、21世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』ALネットワークを構築する。これにより、地方の高校の生徒たちに、単独校では得られない多様な学びの機会を設け、個々の生徒が置かれている様々な状況を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造することができるグローバル・リーダーの育成をめざす。

5 令和4年度の構想計画（本事業における教育課程の特例の活用：有・無）

II ALネットワークの形成

A 組織強化・拡充

- (1) これまでに形成したALネットワーク（拠点校、共同実施校、連携校、大学等連携先等）の連携を更に強める。
- (2) 事業初年度の9校に加え、令和3年度に6校（須坂高校、伊那弥生ヶ丘高校、諏訪清陵高校、諏訪二葉高校、飯田風越高校、長野日本大学高校）が新たに連携校に参加。更にネットワークの拡充を図る。
- (3) 運営指導委員会、検証委員会の実施。

B 情報共有体制の整備

- (1) 高等学校間での定期的な推進会議を継続して実施する。

- (2) ウェブサイト等でこまめな情報発信を行う。
 - (3) 高校生国際会議実行委員による SNS 等を用いた情報発信を行う。
- C 修了生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた計画
- (1) 海外進学・留学ワークショップ
 - ① NPO 法人グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップの協力を得て、海外進学・留学講座を引き続き実施する。
 - ② 長野県教育委員会が主催し HLAB OBUSE 等が企画するサマースクール等に AL ネットワーク（拠点校、共同実施校、連携校）生徒の参加を勧める。
 - (2) グローバルに活躍する講師による講演会
拠点校・共同実施校・連携校でグローバルに活躍する講師や地域に住む外国人による講演会を引き続き実施。講演会は AL ネットワークの高校間で遠隔配信し、希望生徒の参加を可能とする。
 - (3) 海外大学生の参画
国際会議実行委員会等でミネルバ大学生等、海外大学生の協力を得る。
- D カリキュラムを研究開発する人材の配置
- (1) カリキュラムアドバイザー：依頼予定だった内堀繁利氏の後任について検討。
 - (2) 海外交流アドバイザー：配置は初年度で終了したが、海外研修が難しかったところから、令和3年度のアドバイザー（ICAN、松本空港国際化特別顧問）に引き続き指導をいただく。オンラインの交流についても助言をいただく。
 - (3) グローバル講師（外国人講師）：拠点校に外国人講師を引き続き配置。日本人教師と協力してカリキュラム開発を継続。
 - (4) 事務職員：非常勤職員を拠点校に配置する。
- E テーマと関連した高校生国際会議の開催に向けた計画
- (1) 高校生国際会議の実施
 - ・6月に拠点校で行っている北陸新幹線サミットを母体として、外国の生徒や留学生が参加できる高校生国際会議にバージョンアップして実施する。
 - ・オンラインを併用して全国、海外の生徒も参加できる形にする。
 - ・「高校生による高校生のための信州 WWL 高校生国際会議」と位置づけて、生徒実行委員会が企画・運営に参画する。
 - ・SDGs 探究サポーター等連携機関や大学生がアドバイザーとして参加する機会を設ける。
 - (2) 国際会議実行委員会
 - ・AL ネットワークの生徒により組織する国際会議生徒実行委員会を定期的実施する。
 - ・引き続き6月の国際会議に向けて、テーマ、実施方法などを検討し、実施計画を作成する。
 - (3) 海外連携先との交流
AL ネットワーク各校がすでに連携している海外の高校等とのつながりを活用し、オンライン等も用いて交流していく。
- F フォーラムや成果報告会等の実施に向けた計画
- (1) 学習成果報告会・アカデミックプレゼンテーション
 - ア 2月に拠点校ですべての2学年生徒が課題研究の成果をポスターセッションの形式で発表する学習成果報告会を行う。令和3年度は、全ての AL ネットワーク校に参加を呼びかけた。令和4年度も引き続き AL ネットワーク全体の成果報告の場とする。
 - イ 拠点校で引き続き年2回のアカデミックプレゼンテーションを実施。AL ネットワーク校にも参加を呼び掛けるとともにその内容を配信し、意見交換を行う。

ウ AL ネットワーク校における探究の発表会では、相互に参加を呼びかけて、学校の枠を越えて学び合う機会とする。

(2) 「高校生学びのフォーラム長野」「理数科探究発表会」

県教育委員会が主催する高校生学びのフォーラム長野（マイプロ長野県 Summit）等に AL ネットワークからの積極的な参加を促し、探究的な学びを更に深める機会とする。

(3) 全国高校生フォーラム

令和3年度は3校が参加。AL ネットワーク参加校に積極的な参加を呼びかける。

(4) 県のSDGsの取組と連携した高校生の探究・発表機会

「SDGs 未来都市」である本県の施策に関わって国内外での発表の機会の提供を依頼する。

G 情報収集・提供等、その他の取組に関する計画

(1) 教員研修会

ア 引き続き「探究的な学び」「探究学習の評価」等をテーマに教員向けの研修会を実施。

イ 「学びの改革」フロンティアスピリッツ事業（教員の国内外での自主的な研修）

(2) 海外の高等学校との姉妹校提携

過去2年間は新型コロナウイルス感染拡大の影響で進んでいないが、海外の学校と協働のための姉妹校提携に向けて協議していく。

(3) 「学びの指標」の試行の検証

令和3年度を試行期間として実施した全県共通質問の回答結果について分析・検証を進める。

また、各校においては、引き続き全県共通質問を実施するとともに、各校独自質問について検討を行う。

(4) 生徒の自主活動の推進

共同実施校主催の全県対象生徒会交流会を引き続き実施する。

III 研究開発・実践

A テーマとして設定するグローバルな社会課題

『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』

SDGs 探究サポートプラットフォームを活用し、外部機関とも協働しながら、SDGsを「いのち」という視点で探究する。

B 関係機関による先進的なカリキュラムの研究開発・実施体制

(1) KDDI との連携による授業開発

令和2年にKDDI株式会社と県教育委員会が包括的連携協定を締結。この連携を活用し、生徒の探究的な学びに役立つ授業等を継続的に実施する。

(2) 国際関連機関、学術機関、民間企業等でのフィールドワーク

拠点校が連携協定を結んでいる東京外国語大学を始め、JICA や佐久総合病院、県内外の大学など学術機関及び民間企業等で拠点校・共同実施校ともフィールドワークを行い、学びの深化を目指す。

(3) 教育現場の課題解決を目的とした海外大学の学生インターンシップ受入れ

過去2年間は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で受入れられなかったが、海外大学生のインターンシップ受入れに向けた協議を行う。

C 新たな教科・科目の設定(令和3年度からの継続)

(1) 地球市民としての感性や価値観の養成を目的に、教科等横断的な学びの視点を取り入れた教科

「グローバルスタディーズ」の開発を拠点校で継続するとともに、令和4年度から実施の新教育課程で設置予定の文理融合科目、CLIL等の研究を進める。

(2) AL ネットワークの生徒が参加できる仕組みの構築

◆1年次

「グローバルスタディⅠ」「グローバルシチズンシップ」（「公共」及び「歴史総合」の代替）

・「グローバルスタディⅠ」（1単位・学校設定科目）

探究的な学びを通して、協働性・可塑性や国際感覚などの汎用的な能力を養成する。個々のSDGsの課題の背景となる構造的で複雑な側面を教科等横断的な視点で探究する。県内のフィールドワークやJICAによる講演会を実施。

・「グローバルシチズンシップ」（3単位・学校設定科目）

広い視野に立ち、社会的事象を歴史的にながめ、人間と社会の在り方について見方・考え方を働かせ、国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を育成。

◆2年次

「グローバルスタディⅡ」（2単位・学校設定科目）（「社会と情報」の代替）

「グローバルスタディⅠ」で育んだ資質・能力の更なる養成を図る。1学年で取り組んだ課題を県外のフィールドワーク等を通じて更に深め、議論し、解決策を校内外で提言する。その際、課題の中にある対立・ジレンマに特に着眼しながら、全体性・統合性という視野の中で、否定性受容力の向上をはかる。ICT機器を駆使した調査やプレゼンテーションの技術を身につける。2単位のうち1単位を英語で行うことで発信力の向上を図る。

◆新教育課程で実施予定の新科目「デザインシンキング」「グローバルスタディⅢ」の内容について、研究・準備を行う。（両科目とも3年次に配置）また、「グローバルスタディⅡ」の令和4年度からのシラバスの研究を進める。

D カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

以下の海外研修を実施する。渡航が不可能となった場合でも、なるべく同等の成果が得られるよう、オンラインでの代替プログラムについても並行して準備していく。

(1) 台湾研修旅行【海外研修】【拠点校・共同実施校】

「総合的な探究の時間」の一環として、2年次の秋に全員が台湾での研修を実施する。現地で研究課題に関わるフィールドワーク、研修先での研究課題をテーマに英語による発表や討議を行う。また、現地の高級中学生徒と、グローバル課題について発表、討議を行う。

(2) 拠点校・共同実施校との海外研修の合同実施

拠点校・共同実施校が従来から、独自に実施してきた以下のプログラムについて、ALネットワーク各校からの参加を受け入れる。NPO法人などの協力を得て、プログラムの充実をはかる。

a ボストンスタディープログラム【短期留学・拠点校】

b ヒューマンアクトインマニラ【海外研修・拠点校】

c カンボジア井戸プロジェクト【海外研修・拠点校】

d イギリス研修【短期留学・共同実施校】

e マレーシア研修【海外研修・共同実施校】

f ネパールオンライン研修【d, eが実施できなかった場合の代替として実施】

(3) 高校生海外留学支援事業「信州つばさプロジェクト」の活用

県が整備する留学プラットフォーム「信州つばさプロジェクト」を活用し、海外での探究活動を希望する生徒を支援。

E バランスよく学ぶカリキュラムの編成

人文科学分野・社会科学分野・自然科学分野の科目をバランスよく学ぶことのできるカリキュラムの研究。KDDIの協力を得て、教科等横断型の探究活動に資するカリキュラムに取り組む。

F 工夫された学習活動の実施に向けた計画

(1) 県立高校「未来の学校」構築事業【管理機関】

連携校のうち、県独自事業で、先進的・先端的なカリキュラムの研究開発に5年間取り組む実践校に指定されている野沢北高等学校・松本深志高等学校・須坂高等学校・飯田風越高等学校の取組を共有。

(2) 連携校間での自由選択科目群の共同実施や教員の相互乗入計画

引き続き各校間で、遠隔通信を活用するなどして、自由選択科目の履修を可能にするシステムについて研究、調整。

(3) 外部講師として民間の知見を活用し、より実践的な課題解決の方法を学ぶ

PBL型の学びに協働機関から講師を招いたり、フィールドワークの受入を依頼し、実践的な学習ができる環境を整備する。

G 大学教育の先取履修の実施に向けた計画

(1) 県内大学による「高度な学び講座」の実施

県内大学等と連携し、高校だけでは実現が難しい学びの機会を提供する。

a 「総合的な探究の時間」研修会と「主体性を育む夏合宿」

b 高校生対象講座の開催（大学教員等による特別講座など）

c 「JIBUN 発旅するラボ」の開催

(2) 県内大学との先取履修の実施に向けた研究

長野県立大学、信州大学と先取履修に係り実施に向けた具体的な研究を進め、可能になったところから実施する。また、松本県ヶ丘高等学校探究科生徒が、信州大学松本キャンパスでの聴講あるいは科目等履修をカリキュラム内に設置できるかについて、大学側と研究協議を継続する。

H 留学生受入れのプラットフォーム

留学生受け入れ可能な家庭のリストの活用。

IV 財政等支援

A 自己負担額の支出計画

(千円)

事業名	内容	予算
留学支援事業「信州つばさプロジェクト」	県内高校生の留学支援事業。「企業版ふるさと納税」も活用し、県・民協働で高校生の主体的な留学を支援する。	34,791
高校生学びのフォーラム長野（マイプロ長野県 Summit）	「探究的な学び」の成果を発表し合い学び合う場として、「マイプロ長野県 Summit」を位置づけ、全国大会へ出場のチャンスを与える。関係校の生徒の研究を広く発表する機会となることを期待。	3,675
県立高校「未来の学校」構築事業	先進的・先端的な研究開発に5年間取り組む実践校を指定。成果をALネットワーク内で共有。	6,334

B 人的又は財政的な支援、研修やセミナー等の実施に向けた計画

(1) グローバル講師の配置

授業の一部を単独で行う特別非常勤講師のALTを拠点校に配置する。（県費負担）

(2) 教員の研修等への財政支援

ア「学びの改革」フロンティアスピリッツ事業・探究Frontiers事業

選考によって選ばれた教職員が国内外で研修する際の費用を一部負担する。

イ「海外での学び」推進事業「信州つばさプロジェクト」

県が企画する1週間程度の高校生短期留学プログラムの引率に、今後活躍が期待される若手教員を充て、教員のスキルアップの研修機会ともなるよう設定する。

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
ALネットワーク組織強化	学びの改革支援課	高野英美
情報共有体制	学び・上田・県ケ丘	高野英美・宮下美和・徳永佳代
評価検証	学び・上田・県ケ丘	高野英美・宮下美和・徳永佳代
海外進学講座	学びの改革支援課	高野英美
グローバル講演会	上田・県ケ丘	白鳥敏秀・鈴木健斗
人的配置	学びの改革支援課・上田	高野英美・宮下美和
海外高校との連携	学びの改革支援課・上田	高野英美・北澤有里子
北陸新幹線サミット	上田高校	中澤東樹・山浦温子・宮下美和
成果発表会	学び・上田・県ケ丘	高野英美・宗倉 祐・宮坂正議
学びのフォーラム長野	学びの改革支援課	三木舞子
SDGs 探究発表会・国際フォーラム	学びの改革支援課	高野英美
学びの指標	学びの改革支援課	卯之原智也・高野英美
生徒の自主活動推進	松本県ケ丘高校	宮下達郎
先進的なカリキュラム開発	上田高校	宮下美和・中澤東樹・小林まゆ子
新たな教科・科目	上田高校	宮下美和・中澤東樹・小林まゆ子
海外研修	上田・県ケ丘	北澤有里子・小林まゆ子・近藤 慎
信州つばさプロジェクト	学びの改革支援課	藤田洋子・卯之原智也
カリキュラム編成	上田高校	宮下美和
未来の学校	学びの改革支援課	前山和志
工夫された学習活動	学びの改革支援課	高野英美
アドバンスト・プレイズメント (AP)	学びの改革支援課	高野英美
留学生受け入れ	学び・上田・県ケ丘・連携校	高野英美・宗倉 祐・塩野英雄

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間 (令和4年4月1日 ~ 令和5年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ALネットワーク組織強化	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
情報共有体制	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
海外進学講座			→						→			
学びの指標	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
グローバル講演会	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
生徒の自主活動推進	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
人的配置	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
海外高校との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
国際会議実行委員会	→	→	→									
高校生国際会議	→	→	→									
成果発表会			→				→				→	
学びのフォーラム長野	→	→	→	→	→	→	→	→	→			
全国高校生フォーラム							→	→	→			
SDGs 探究発表会	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
先進的なカリキュラム開発	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
新たな教科・科目	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
海外研修									→			→
カリキュラム編成	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
未来の学校	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
工夫された学習活動	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
AP	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

8 再委託先の有無 無

9 所要経費 別添のとおり

【担当者】

担当課	学びの改革支援課	TEL	026-235-7435
氏名	高野 英美	FAX	026-235-7495
職名	指導主事	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

長野県で育成する
イノベーター的な
グローバル人材に
求められる資質・能力

「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版 AL ネットワーク

- 混沌とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして協働しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができる資質・能力
- 社会（世界）との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」という自分の人生を構想する力
- 信州に根ざした確かなアイデンティティと世界に通じる広い視野、資質・能力

信州学びの改革 アドバンス・ラーニング・ネットワーク

長野県教育委員会

探究的な学び・STEAM カリキュラム開発

- ◆ 拠点校
長野県上田高等学校
◆ 共同実施校
長野県松本県ヶ丘高等学校

「マイプロ長野県 Summit」

海外留学・高校生国際会議

高大連携・AP 構築

企業等との連携

信州 SDGs

県内連携校 15 校：長野高等学校、篠ノ井高等学校、屋代高等学校、上田染谷丘高等学校、野沢北高等学校、伊那北高等学校、飯田高等学校、松本深志高等学校、長野西高等学校、須坂高等学校、諏訪清陵高等学校、諏訪二葉高等学校、伊那弥生ヶ丘高等学校、飯田風越高校、長野日本大学高校

台湾高級中学：延平高級中学、苗栗高級中学、新竹女子高級中学、科学工業園区実験高級中学
協働機関：KDDI、一般財団法人日本国際協力センター（JICE）、台湾高雄市政府教育局、東京外国語大学



- ◆ 地球市民としての感性や価値観の養成を目的とした新教科「GS (グローバルスタディ)」「デザイン・シンキング」
- ◆ 文理融合科目、CLIL による編成

- ◆ ミネルバ大学、高雄市政府教育局との連携
- ◆ フォリピン、ボストン等海外研修実施
- ◆ 留学フェロエーションシップ「海外大学進学講座」
- ◆ 留学生受け入れプラットフォーム整備

- ◆ 長野県高大連携プラットフォームとの連携
- ◆ 長野県内大学との単位先取履修の研究
- ◆ JMOOC 等オンライン講座のカリキュラム化

- ◆ 株式会社 KDDI と連携した STEAM 授業開発
- ◆ JICE による海外交流アドバイザー
- ◆ JICA 等国際関連機関、学術機関、民間企業でのフィールドワーク

- ◆ 「SDGs 未来都市」県の事業との連携
- ◆ 「信州 SDGs プラットフォーム」との連携
- ◆ 地方創生応援税制 (企業版ふるさと納税) で留学「信州つばさプロジェクト」の推進

高校生に高度な学びを提供する
持続可能かつ進化し続ける信州版 AL ネットワークの構築

すでに長野県にある“学びのプラットフォーム”を再構築し、イノベーターなグローバル・リーダーに必要な資質・能力の育成をめざす

(別紙様式3)

令和5年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 長野県長野市南長野字幅下 692-2
管理機関名 長野県教育委員会
代表者名 教育長 内堀 繁利

令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和4年4月1日（契約締結日）～令和5年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 長野県上田高等学校
学校長名 北澤 潔

3 構想名 「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク

4 構想の概要

長野県では、将来WWLコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版ALネットワークを3年後までにWWLコンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、SGH校としてグローバル人材育成にかかる拠点の役割を果たし、21世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』ALネットワークを構成する。これにより、地方公立高校の生徒たちに、単独校では得られない教育の機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成を目指す。

5 教育課程の特例の活用の有無 有（拠点校）

1年次 歴史総合（2単位）公共（2単位）

→「グローバルスタディⅠ」（GSI）（1単位）

「グローバルシチズンシップ」（GCS）（3単位）

2年次 社会と情報（2単位）→「グローバルスタディーズⅡ」（GSⅡ）（2単位）

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目		実施期間（令和4年4月1日～令和5年3月31日）											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
実施体制整備	ALネットワーク会議	第1回	第2回			第3回		第4回	第5回			第6回	
	運営指導委員会			→		第1回		→	第2回		→	第3回	検証会議
	情報共有体制	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	学びの指標	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	未来の学校	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
人的配置	グローバル講師	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	事務職員										→	→	→
グローバルな学びに係る取組	海外留学進学講座				第1回 第2回							第3回 第4回	
	信州つばさプロジェクト									→	→	→	→
	海外研修代替プログラム 支援										→	→	→
	小布施サマースクール					サマースクール			リユニオン				
	G7高校生ワークショップ										第1回 第2回	第3回	
より深い学び（探究）に係る取組	ループリック作成	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	成果発表会			アカデミックプレゼンテーション			中間報告会	アカデミックプレゼンテーション	課題探究報告会		成果報告会	成果報告会	
	マイプロジェクトアワード長野県Summit				Startupプログラム			中間報告会		Summit Day1 Day2	Summit Day3		
	KDDI共創プロジェクト	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	JIBUN発旅するラボ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	学びの改革ミニフォーラム										→	→	→
	全国高校生7フォーラム								→	→	フォーラム		
高度な学びに係る取組	A P（大学先取り履修）		県立大打合せ	県立大打合せ	県立大打合せ	県立大聴講生受入れ	信州大科目履修生募集	信州大後期授業受講		→	→	→	→
	国際ゼロカーボン会議										→	国際会議	
高校生国際会議に向けた取組	国際会議実行委員会	→	→	→	→	事後報告会							
	信州WWL高校生国際会議	案内、参加者募集	参加者顔合わせ会議	国際会議開催									

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a. 体制の整備状況

- ・事業申請時点で8校だった連携校は15校まで増え、計17校のALネットワークを構築した。
- ・拠点校では、教頭やグローバル講師（外国人講師）を含む10名のWWL推進係を組織した。
- ・共同実施校では、探究科主任、国際交流委員会、教育課程委員会、生徒会主任、学習指導係と教頭の6名がWWL担当となり、「探究的な学び」を軸に、職員全員がそれぞれの担当で事業を推進した。
- ・連携校においては、各校で担当者を割り当て、2か月ごとに連携校会議を行い、情報共有に努めた。また、高校生国際会議の開催にあたり、各校においても国際会議担当者を選出し、教員サポーターとして協力を得た。

b. 情報共有体制の整備

- ・ALネットワークの高等学校間で定期的な会議や打合せを年間7回実施した。

第1回	4月8日（オンライン）	管理職への事業説明，担当者顔合せ，情報交換
第2回	5月26日（オンライン）	国際会議の実施概要の説明，生徒募集，当日の運営体制について
第3回	6月11日（参集）	高校生国際会議終了後の事務連絡
第4回	8月17日（オンライン）	第1回運営指導委員会終了後 連絡会 高校生国際会議総括，諸プログラムについて
第5回	10月27日（オンライン）	第2回運営指導委員会の開催連絡，提供資料（各校「探究」に係るルーブリック）について
第6回	11月28日（オンライン）	第2回運営指導委員会終了後 連絡会 各校の成果報告会生徒参加について他
第7回	2月4日（オンライン）	第3回運営指導委員会終了後 連絡会

- ・カリキュラム開発拠点校，共同実施校，連携校の担当者すべてのメーリングリストを作成し，直接情報提供ができる体制を整えた。
- ・拠点校及び管理機関では本事業に係るウェブサイトを作成し，随時情報発信を行った。

c. **管理機関の長，拠点校等の校長が果たした役割**

構想の実現に向けて事業を効率よく進めるために，主として管理機関はALネットワーク内外の連携を進め，拠点校では，これまでの成果を生かしたカリキュラム開発を担当することとし，それぞれの学校長はこれらの取組を主導した。

○ 管理機関の長

- ・事業全体の計画や進捗の管理，助言
- ・先取り履修の導入に向けた長野県立大学，信州大学等高等教育機関との調整
- ・国の動向や他県の先進事例の情報収集
- ・諸会議の開催
- ・県知事部局との連携による生徒向けプログラムの実施 等

○ 拠点校等の校長

- ・校内での推進体制作り
- ・「グローバルスタディ」（「GS」）カリキュラムの開発と成果報告会の実施
- ・昨年度までに外部機関と開発した課題研究の「問の立て方」について連携したカリキュラムの継続実施，ブラッシュアップ
- ・海外連携校との連絡，プログラムの実施
- ・新教育課程の実施に向けたカリキュラムの研究
- ・海外研修プログラム・代替プログラムの実施 等

d. **本事業の実施に際し，運営指導委員会の開催実績及び検証するために収集した資料**

< 運営指導委員会 >

令和3年度に引き続き6名に運営指導委員を依頼し，令和4年8月17日，11月28日，令和5年2月4日の計3回，委員会を実施した。

ア 運営指導委員

公益財団法人国連大学協力会	常務理事兼事務局長	浅井 孝司
信州大学 教職支援センター	准教授	荒井 英治郎（副座長）
ベネッセ教育総合研究所教育イノベーションセンター長		小村 俊平（座長）
ライフイズテック株式会社	取締役	讚井 康智
東京インターナショナルスクール理事長		坪谷 ニュウエル 郁子
長野県立こども病院	感染症科部長	南 希成

イ 開催実績

第1回委員会

期 日 令和4年(2022年)8月17日(水)14:00~16:00

実施方法 オンライン

内 容 高校生国際会議開催報告,今年度の事業計画及び各校の取組について
実行委員の生徒を交えた意見交換・委員と教員の意見交換

第2回委員会

期 日 令和4年(2022年)11月28日(月)14:00~16:45

場 所 上田高等学校

内 容 事業の進捗報告及び下半期の取組について
テーマ「探究と進路指導」による運営指導委員と教員のグループ討議

第3回委員会

期 日 令和5年(2023年)2月4日(土)13:00~16:00

場 所 上田高等学校

内 容 事業の進捗報告
拠点校グローバルスタディーズ報告会参観,生徒と運営指導委員の懇談

e. 卒業生の卒業後の進路と成長の過程を追跡把握する仕組みの構築

- ・大学生が生徒のメンターとなり,課題研究についてアドバイスをを行っている。全卒業生にメールアドレスの提供を依頼し,卒業後もWWLの活動に協力を求め,探究活動に対するアドバイザーの発掘につなげている。
- ・高校生国際会議実行委員会のため,大学生サポーターをALネットワーク校の卒業生のネットワークを通じて募集。拠点校,共同実施校の卒業生18名がサポーターとして活動した。
- ・卒業生である教育実習生も「グローバルスタディI」(GSI)の授業に参加し,経験を生かして助言を行った。
- ・ALネットワーク校の卒業生のネットワークを通じて募集した大学生サポーター18名が高校生国際会議実行委員会にメンターとして参加し,高校生と共に活動した。また,拠点校から海外大学へ進学した卒業生も分科会のメンターとしてオンラインで参加し,高校生と共にディスカッションを行った。このように,事業実施の際には,何らかの形で卒業生が関わる機会を創出し,彼らの成長の過程が,生徒たちにとってロールモデルとなるように取り組んでいる。

f. アジア高校生架け橋プロジェクト等による海外留学生の日本での学習や生活を支援する体制

令和3年度及び令和4年度において,共同実施校の松本県ヶ丘高等学校,連携校の長野西高等学校で「アジア高校生架け橋プロジェクト」による長期留学生を受け入れている。当該留学生に高校生国際会議や,国内での多様な経験を積む活動への参加を促していく。

g. 本事業による取組が学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況

拠点校では,全ての教職員が1人あたり5~6名程度の生徒を担当し,生徒個々の探究活動に対して本人との対話やアドバイスをを行っている。このことは,生徒にとっては探究活動を深め,教職員にとっては探究活動の進め方を考えるよい機会となっている。また,様々な分野で活躍する同窓生を複数招いて行う分野別の1年生対象の講演会を,探究活動を始めるきっかけとして実施した。

【財政等支援】

a. 管理機関が、本事業の運営にかかる経費を国からの委託経費のみではなく、自己負担額として、計画段階よりさらに計上したもの

○県立高校「未来の学校」構築事業（計画の通り）

先進的・先端的な研究開発に取り組む実践校を県が指定し、新たな学びの場、学びの仕組みを構築する。令和4年度もALネットワークから4校が研究開発に取り組んでおり、研究成果をALネットワークに還元している。

学校名	実践校種別	参加年
須坂高等学校	信州に根ざしたグローバルな学びを推進する高校	令和3年
野沢北高等学校	卓越した探究的な学びを推進する高校	令和2年
飯田風越高等学校	国際的な教育プログラムを研究する高校	令和2年
松本深志高等学校	自治の追及により骨太のリーダーを育成する高校	令和2年

○マイプロジェクトアワード長野県Summit（計画の通り）

「探究的な学び」の成果を、学校の枠を超えて発表し、学び合う場を設けることで、全国大会へとつながる発表大会（「マイプロジェクトアワード長野県Summit」）を実施し、長野県における「探究的な学び」が、地域力などを借りながら生徒が主体的に課題を発見し自らの力で解決に向けて試行錯誤する学びへとステップアップさせることを目指す。令和4年度は、28校91プロジェクトが参加した。ALネットワーク校からは9校21プロジェクトの参加があり、1月28日（土）に行われた県予選では、ALネットワーク校の屋代高等学校が県知事賞を受賞した。

○信州グローバルセミナー（小布施サマースクール）（計画書に記載は無いが実施）

海外大学生との協働的な学びを通して、語学力に加え、多様な価値観やグローバルな見方・考え方に係る資質・能力を育成することを目的に5日間のオンラインプログラムを実施した。14名の県内高校生参加者のうち、ALネットワーク校から9名が参加した。

○グローバル講師の配置（計画の通り）

英語による高度なコミュニケーション能力の育成のため、拠点校の上田高等学校、連携校の長野高等学校及び屋代高等学校に通常配置のALTに加え、専従の外国人講師として配置している。

b. 人的又は財政的な支援、研修やセミナー等の実施状況

○人的又は財政的な支援

(1) 海外交流アドバイザー（拠点校で依頼）

海外に強いネットワークを持つ以下の2人に依頼。令和4年度は令和2、3年度に続き、COVID-19の影響で代替となるプログラムが多かったが、アドバイザーの協力で台湾の高校やフィリピンのNPOとオンラインプログラムを実施した。

NPO法人 アイキャン理事 直井恵氏（フィリピン）

松本空港国際化特別顧問 恵崎良太郎氏（台湾）

(2) グローバル講師

IB等の指導経験豊富な県独自雇用のALTをグローバル講師として拠点校に配置。2年生の「グローバルスタディⅡ」（GSⅡ）のうち1単位は英語で行うものとし、グローバル講師が中心になって指導にあたる。他にも、生徒の英語によるフォーラムでの発表などを指導した。

(3) 事務職員

拠点校にて、取組の評価、報告書作成等年度末のまとめの業務にあたる事務職員を

雇用した。

○研修やセミナー等

探究 Frontiers 講習

教員向けに「『探究』について探究する」研修を実施した。受講者が自ら研修テーマや研修内容を決め、グループ内外の様々な人との対話や協働を通して教育実践を行うことで、その過程で得た経験や新たな視点をもとに、これからのSTEAM教育や「教科等横断的な学び」における探究的な学びのあり方について提案することを目指す。

c. 国の委託が終了後も事業を継続的に実施するための計画

- (1) 信州大学・県立大学を中心に高度な学びのための先取り履修を含めた高大連携のネットワーク等を構築し、既存のプラットフォームとともに、オンライン・オフラインにより全県の希望生徒が参加できるものとして活用していく。
- (2) 生徒の探究的な学びに伴走する企業ネットワークを拡充し、学校間の活用を促進する。
- (3) 県総合教育センターの協力のもと、拠点校・共同実施校を中心に、ALネットワークで新たに開発したカリキュラムのオンラインによる全県的な普及。
- (4) 県独自の留学支援事業「つばさプロジェクト」の継続。
- (5) 県環境政策課、G7外相会合準備室、くらし安全・消費生活課などの知事部局やKDDI株式会社他、学校外の組織との積極的な連携。

【ALネットワークの形成】

a. ALネットワーク運営組織の実績

① 運営会議

前年度に引き続き、本事業における学びのあり方について、報告書及び実施計画に基づく専門的見地から検討し、運営委員やアドバイザーから指導助言をいただいた。6月に開催した高校生国際会議、拠点校・共同実施校及び連携校におけるカリキュラム開発や各種研修の実施内容等について、オンラインや学校訪問により管理機関担当者と必要に応じて打合せを行った。

4月2回、5月4回、6月4回、7月1回、9月1回、10月1回、11月2回、1月1回、2月1回、3月1回（計18回）

② ALネットワーク会議

4月の年度初めには、ALネットワーク校の管理職と担当者対象の顔合わせ会を実施した。会議はオンラインで開催し、改めて説明会を行い、本事業への理解を深める機会にするとともに、高校生国際会議開催への協力を依頼した。

令和4年度は参集及びオンラインにより、ALネットワーク校の連絡会を年7回実施した。

b. ALネットワーク運営組織による、情報共有体制の整備、協働事業の開発等

ALネットワークの高等学校間では、探究成果発表会、講演会などを実施する際、他校へも案内し、学校間の学びの交流を促すよう取り組んでいる。

c. 国際的な分野を学ぶ国内外の大学への進学や国内外のトップ大学等への進学、海外留学等の促進について

① 海外進学ワークショップの実施

海外大学に通う学生を招聘し、海外進学・留学講座を生徒向けに7月と1月に4回実施した。7月は新型コロナウイルス感染症の感染拡大によりオンライン開催とした。1月は参集とオンラインによるハイブリッド開催とし、大学生メンターによる海外大学の

魅力や進学までのプロセスに係る説明の後、参加した高校生や保護者との個別相談を行った。1月実施の講座では、拠点校から海外大学へ進学した卒業生が、留学中のカナダからオンラインで参加した。いずれも在籍する大学の紹介だけでなく、「自分のやりたいこと」を深く見つめ、語る内容で、参加者の満足度も高かった。

② 高校生海外留学支援事業「信州つばさプロジェクト」

希望生徒の海外における探究活動を支援する、県教育委員会主催の留学プラットフォーム「信州つばさプロジェクト」を2年ぶりに再開した。探究テーマに基づき県が提供する短期留学プログラムと、自らの探究テーマに絡めた明確な目的意識に基づき生徒個人が計画した留学費用の一部を補助する個人留学支援を行う。実施コースは以下の通り。

ア 県企画プログラム（短期留学）

- ・サステナビリティ探究コース（オランダ王国，スイス連邦）12月11日から17日まで ※県環境政策課・県教育委員会主催で，県内高校生3名派遣
- ・SDGs探究コース（カンボジア王国）3月8日から14日まで 15名派遣
- ・グローバルインターンシップコース（マレーシア）3月16日から22日まで 15名派遣

イ 個人留学支援

- ・8名の生徒に留学費用の一部を支援
- ・留学先：イギリス，ケニア，ニュージーランド，インドネシア，アメリカ

③ グローバルな活躍をしている講師による講演会や講座

- ・各校ではALネットワークからの参加が可能な以下のプログラムを実施。

上田高等学校：ボストンスタディプログラム（オンライン）

ヒューマンアクトインマニラ（オンライン）

須坂高等学校：SAC（須坂アカデミックチャレンジ with Harvard Students 2022）

長野高等学校：Future Global Leaders Camp 2022 Online

飯田風越高等学校：FUETSU Global Camp（海外大学生・卒業生による模擬授業など）

- ・ALネットワーク校においては，以下のグローバル講座を開催した。

上田高等学校：松尾ゼミナール「しなやかに働き続けるために」

講師：信濃毎日新聞社 井上裕子氏

国際理解教育「世界が100人の村だったら」

講師：JICA職員 木島史暁氏

NPO法人アイキャン理事 直井 恵氏

松本県ヶ丘高等学校：「ウクライナ危機から何を学ぶかー戦争と情報戦」

講師：NHK開設委員 二村 伸氏

屋代高等学校：「グローバルサイエンス」（英語による講義）

講師：信州大学 デイビッド・アサノ教授

伊那北高等学校：「こんにちは東ティモール」

講師：東ティモール民主共和国特命全権大使 北原巖男 氏

d. 人材の配置状況について

① 運営組織の状況

管理機関	担当者3名	
拠点校	WWL 推進係	管理職，各教科を選出母体に10名（外国人講師を含む。）
共同実施校	WWL係	管理職，WWL委員会（探究科主任，国際交流委員会，教育課程委員会，学習指導係，生徒会主任の6名で構成）

② カリキュラムアドバイザー

県教育委員会高校改革推進役の内堀繁利氏に継続を依頼していたが、令和4年5月13日付けの教育長就任に伴い離職。後任の人選について検討を重ねたまま事業完了時期が迫ったため空席とした。内堀氏には引き続き広い見地からの助言を仰ぎ、事業の円滑な推進に繋げていく。

e. テーマと関連した高校生国際会議

(1) 実行委員会の組織・開催

6月の高校生国際会議開催に向けて、「生徒による生徒のための国際会議」を謳い、令和3年11月から生徒実行委員会を立ち上げ、準備を進めた。生徒実行委員会には、ALネットワークの8校から52名が参加した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、実行委員会はオンラインによる開催を余儀なくされたが、毎月数回の会議を重ね、準備を行った。

ALネットワーク校の卒業生やAL Tに呼び掛けて、国際会議実行委員会のサポーターを募集し、当日までに18名の大学生サポーター、11名のAL Tサポーターが高校生とともに国際会議の伴走者として携わった。

<実行委員会の活動>

- ・令和3年9月 実行委員会募集開始 10月 実行委員会説明会（2回）
- ・令和3年11月から令和4年6月にわたり延べ11回の実行委員会をオンライン開催
- ・令和4年4月以降は毎週土曜日の午後に実行委員会を定例開催。
- ・実行委員会の開催に合わせてAL Tサポーターによる英語レッスン実施。
- ・5月20日（土）Zoom 接続テストも兼ねた参加者との事前顔合せ会実施。
- ・7月14日（土）事後実行委員会 国際会議のふり返り。

<支援体制>（※人数は延べ人数）

- ・教員サポーター24名
（内訳：ALネットワーク校国際会議担当者13名 AL Tサポーター11名）
- ・大学生サポーター18名
- ・講師8名（事前学習講師7名、当日分科会講師1名）

(2) 信州WWL高校生国際会議

ア 概要

開催日時 令和4年6月11日（土）9時30分から15時30分まで

会場 上田高等学校（オンライン併用）

参加者 187名（県内100名 県外32名 海外55名）

海外参加国 台湾，アメリカ，カナダ，ニュージーランド，インド，タイ

イ グランドテーマ：

Consider Multiple Perspectives & Find Solutions -Our Pledge to Take Action for a Sustainable Life-

多角的な視点から解決策を考える—持続可能な生活実現に向けた私たちの誓い

ウ 内容

- ・開会行事 開会宣言，主催者代表挨拶，実行委員長挨拶ほか
- ・基調講演 講師：露木志奈氏（環境活動家，Shiina Cosmetics Founder）
演題：「Z世代が考える地球の今」
- ・分科会 エシカル消費，人権，教育，環境，貧困，水衛生の6つの分科会に分かれて研究発表，討議及び共同宣言作成
- ・閉会行事 分科会報告，共同宣言採択，講評，閉会宣言

f. 社会に開かれたフォーラムや成果報告会などの実施

(1) 学習成果報告会

<拠点校>

2月に拠点校で学習成果報告会を実施した。「国際/人権/文化/地域/ビジネス/保健/教育/技術/環境」の9つのカテゴリーに分かれ、2年生全員が自分のタブレットを用いて1年生に対して2年間の課題探究の成果を発表した。20名ほどのフィールドワーク訪問先の方や、中間報告会でご指導いただいた探究アドバイザー、同日に実施されたWWLの運営指導委員会参加者にも参加いただき、助言をいただいた。

<共同実施校>

1月に「Kenryo Researchers Grand-Prix2022」として課題探究発表会を実施。地元の企業関係者にも審査を依頼し、直接講評をいただいた。

(2) アカデミックプレゼンテーション

6月と10月に拠点校でアカデミックプレゼンテーションを実施した。探究学習から発展した自主活動や、海外での学びについてプレゼンテーションを行った。コロナ禍でできることが限られる中、工夫した取組に対して活発な質問が出され、充実した議論が行われた。

第1回 6月18日(土)上田高等学校にて

テーマ「コロナ禍の中の探究活動」

- 1) 「私のロシア留学体験」
- 2) 「ヒューマン アクト イン マニラ研修報告」
- 3) 「ボストンスタディプログラム研修報告」
- 4) 「高校生模擬裁判選手権参加報告」

第2回 10月8日(土)上田高等学校にて

テーマ「暑かった夏の探究活動の成果」

- 1) 「地方演劇における劇場のあり方」
- 2) 「肉を食べるっていうことは！」
- 3) 「長野県立大学『高度な学び』実践講座参加報告」
- 4) 「HLAB OBUSE サマースクール参加報告」

(3) フォーラム

ア 多文化共生フォーラムの実施 (共同実施校主催)

10月と3月の2回、「異文化理解」の授業において、信州大学グローバル化推進センター 佐藤友則教授の御指導の下、松本市多文化共生プラザ及びNPO 法人中信多文化共生ネットワークの御協力を得て実施。松本市在住の外国籍市民の方が授業に加わり、自身の体験を語るとともに、参加した生徒と意見交換を行った。

イ マイプロジェクトアワード長野県 Summit

- ・令和元年度から長野県教育委員会が主催して実施。
- ・「探究的な学び」の成果を発表する場として設定した。令和4年度は、28校から45プロジェクト、91名の高校生が参加した。うち、ALネットワーク校からは9校21プロジェクトが参加した。

ウ 全国高校生フォーラム

文部科学省主催、全国のWWL等指定校在籍生徒が集まり、発表及び議論。

- ・拠点校、共同実施校及び連携校(屋代高等学校)から各1グループが参加。
- ・拠点校発表タイトル「食品ロスを減らす方法-Ways to solve the food waste problem」
- ・共同実施校発表タイトル「“代替”から創る学び」

・連携校発表タイトル「ソルガムを広めよう！ Let's spread Sorghum!」

g. 構想目的の達成に資する取組を計画し、情報収集・提供を行ったことについて

- (1) SDG s 探究に係る情報提供
 県内のSDG s の様々なプラットフォームの取組の情報提供を行った。
 - ・「世界津波の日」2022 高校生サミット in 新潟（新潟県，新潟県教育委員会）
 - ・国際学生ゼロカーボン会議（県環境政策課）
 - ・「未来へつなぐSDG s 高校生ワークショップ」（県企画振興部国際交流課G7外務大臣会合準備室）等
- (2) 探究バディシステムの構築
 - ・ALネットワーク内でもって探究する他校の仲間を教育委員会が仲介して探す取組。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目実施日程（R4年4月1日～R5年3月31日）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① GCS	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
② GSI	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
③ GSⅡ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
④ GSⅢ	→	→	→	→	→							
⑤ フィールドワーク				→	→	→						
⑥ オンライン台湾交流						→	→	→	→			
⑦ 問いの立て方	→	→			→	→						
⑧ ワークショップ					→	→						
⑨ GS報告会									→	→	→	
⑩ アメリカ研修									→	→	→	→
⑪ フィリピン研修										→	→	→
⑫ カンボジア研修			→	→						→	→	→
⑬ プレゼンテーション	→	→				→	→			→	→	
⑭ 外国人講師	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑮ 留学促進	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑯ 研究成果普及	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

(2) 実績の説明

a. 設定したテーマ

「いのちをテーマに据えたSDG s 探究」

(1) 授業内での取組

1年のGSIでSDG s について学び、課題研究の際に関連づけてテーマを設定する。

(2) JICA・ICAN国際理解協力（「世界が100人の村だったら」）

1学年全員。クラスごとに疑似体験ワークショップや講義を通して世界の構造や矛盾を知る。クラスに1名、2年生がファシリテーターとして参加。（8月26日）

(3) 1学年課題研究入門講座（対面）

各専門分野15名の講師を招聘、研究内容やその手法を伺う。（8月26日）

b. 体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発を外部機関との協働により行ったこと

(1) スマートニュースメディア研究所による、メディアリテラシーの研究授業

（6月13日）メディアの報道の仕方による心象操作の実験

(2) 1学年県内フィールドワーク（9月14日）

1年生8クラスが16コースに分かれ、それぞれ市内の企業・NPO法人から事前に頂

いた課題について探究し、その内容をプレゼンテーションした。

- (3) 2学年「探究の日」(9月13日から14日まで)
 - ・首都圏フィールドワークに替えて、2日間実施。
 - ・全員が課題研究について少人数で中間発表、質疑応答、ディスカッション。
 - ・探究アドバイザー20名弱にもご参加いただき、研究にアドバイスをいただいた。
- (4) JICE連携授業(2月15日)
 - ・「定住外国人との共生」をテーマに全1年生にオンラインで実施。
 - ・JICE職員の講義、現地連絡調整員(日本在住の外国人)による自己紹介・課題提起後、自分たちにできることについてグループワーク実施。

c. 外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行う「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況。外国人講師等を活用した実績

- (1) 「グローバルスタディⅠ」(GSⅠ)[1年全員 1単位, 学校設定科目]
 - ・「歴史総合」「公共」を学校設定科目とし再編成し、1単位で行う。
 - ・「GCS(グローバルシチズンシップ)」と「総合的な探究の時間」「英語」と科目横断融合型授業を展開。
 - ・課題研究の基礎となる学習
- (2) 「グローバルスタディⅡ」(GSⅡ)[2年全員 2単位, 学校設定科目]
 - ・「社会と情報」2単位を学校設定科目とし再編成し実施。情報リテラシーや情報スキルを養いつつ、実践的に探究の場面で活用した。
 - ・生徒個々の課題研究について、多角的に検討させ探究を深めた。
 - ・共通の課題を持つ生徒同士がICTを駆使しながらグループ学習を進めた。
 - ・台湾オンライン交流やGS報告会を通して研究発表の実践的な取組を行った。
 - ・2単位のうち1時間はグローバル講師(外国人講師)の授業とし、英語を用いて探究活動を行った。
- (3) 「グローバルスタディⅢ」(GSⅢ)[3年希望者 1単位, 学校設定科目]
 - ・選択者は増加単位分として、放課後や休日などを利用して調査研究を行う。
 - ・実情に即した政策提言でその影響評価まで含めて研究を行った。
 - ・他のWWL指定校が主催する発表会等で取組の成果普及と共有を図った。

d. 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等

本年度の海外研修もカンボジアを除いてオンラインで実施となったが、代替プログラムを実施した。

- (1) オンライン台湾交流プログラム(11月8日)
 - ・2学年全員が台湾研修で行う現地の高級中学訪問に代え、両校オンライン交流。メール等でのやり取りをして事前学習。当日は折り紙体験・食文化・学校生活、男女平等などについて情報交換を実施した。
 - ・交流校4校 国立科学工業園区実験高級中学, 台北市立中正高級中学, 国立苗栗高級中学, 私立延平高級中学
- (2) ボストンスタディプログラム(12月13日から令和5年3月18日まで)
 - ・世界最先端の知性に触れ、持続可能な社会づくりに貢献できる人材になるための知識を身に付ける。オンラインで実施。
 - ・グループでオリジナルグッズのデザイン開発を行い、アイデアを米ボストン大の教授等に英語でプレゼンテーション、質疑応答、指導助言を受けた。12月～基礎研修を行い、3月16日から18日まで現地とリアルタイムで結んでのセッションを実施した。生徒10名参加。
- (3) ヒューマン・アクト・イン・マニラ(令和5年1月23日から3月19日まで)
 - ・NPO法人アイキャンが行う支援活動を学ぶ体験プログラム。オンラインで実施。

- ・ 2月28日にNGO相談員による事前学習，3月16日から19日まで現地とのセッション。計16名参加。
- (4) カンボジア井戸プロジェクト（通年）
- ・ 現地に渡航し井戸を掘って寄付する体験プログラムで，生徒の自主活動が発展。
 - ・ 毎年度4月に組織が発足し，生徒が中心となって運営する。3月に解散。
 - ・ 2019年度に，井戸2基分の資金を集めた。2019年度以降，実際の渡航はできていなかったが，資金集め（バザーや書き損じ葉書集め等）や広報を継続。
 - ・ 2023年3月に3年ぶりに渡航。井戸掘りを行う。
- (5) 個別最適な海外研修の実施（共同実施校）
- 共同実施校である松本県ケ丘高等学校では，探究科については，教員が生徒を集団で引率する海外研修から，個人のテーマに沿って，各自が研修先を決定する「個別海外研修」という新たな取組を始めた。これまで生徒は，学校が設定する海外研修2コースから選択していたため「どちらのコースに参加するか」を考えることが主となっていた。しかし，個別研修になったことで，「何のために」「何をしに」「どこに行くか」を主体的に考えるようになった。
- (6) 海外大学と指定校推薦協定の締結（共同実施校）
- 共同実施校である松本県ケ丘高等学校とマレーシアのテイラーズ大学が指定校推薦協定を結び，海外進学個別説明会を実施した。3年生1名が受験合格し，来年度からの進学を予定している。
- e. 文系・理系を問わず，各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたこと**
- (1) KDD I株式会社との連携による授業開発
- ・ デザインシンキング 2年生
昨年度，KDD I講師で実施した内容を，担当教諭が実施
 - ・ 「課題研究テーマの見つけ方」 1年生
5月26日 進路を考える第一歩として，自分が興味を持つ「ワクワク」を探す。
9月22日 課題研究テーマの見つけ方
課題研究の問いの立て方の陥りがちな例と，分解することで解決につなげていくことを演習および講義で提案。
- (2) 令和5年度からの教育課程の編成
- これまでの教育課程を見直し，新科目グローバルシチズンシップ，「グローバルスタディⅢ」（GSⅢ）を全員必修科目とする計画を立てた。
- f. 学習活動が，構想目的の達成に資するよう工夫したこと**
- (1) イノベティブでグローバルな人材の育成に向け，課題研究の「問いの立て方」に関するカリキュラム開発を行った。
- (2) ALネットワークの構築を進め，信州大学，長野県立大学と連携し，生徒が教授や大学生から指導を受ける機会を得る機会を設けた。
- (3) 高校生国際会議を，生徒たちが自らの手で企画運営するために実行委員会を設置した。また，オンラインを利用しコロナ禍でも海外の学生も参加しやすいように運営方法を工夫した。
- g. 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取組**
- 長野県立大学の夏期集中講座「コミュニティデザイン各論Ⅰ」に聴講生としての高校生の受講が可能になった。拠点校の3年生1名，2年生2名が受講し，フィールドワークや大学生とグループを組み，プロジェクトの共同発表を行った。今年度については，拠点校において，学校外における学修として単位認定を行った。なお，長野県立大学とも大学での単位認定に向けて引き続き協議していく。

信州大学では、今年度後期授業において「データサイエンス入門」「繊維科学の基礎」の2科目において県内高校生を対象に科目等履修生（先取り履修生）の募集を開始。授業を履修し、所定の成績を修めた生徒には同大学の単位が授与される。拠点校から6名、連携校から3名を含めた13名が受講した。なお、令和5年度前期は、教員志望の生徒を対象に教育学部の科目を含めた8科目において科目等履修生を募集する。

h. より高度の内容を学びたい高校生が学習できる環境を整備したこと

・ J I B U N 発 旅 する ラ ボ

在籍する高校の枠を超え、参加する他の高校生だけでなく、企業経営者や学生等年長の他者との交流を図り、身近な事柄から自ら立てた問いを自ら考える探究（探求）を通して、自分が何者であり、何を実現したいのかを明らかにする。長野県教育委員会、KDDI株式会社、長野県立大学の包括連携協定締結を契機に、長野県中小企業家同友会を加えた4者で主催。令和3年度、令和4年度において延べ49名の生徒が参加。

・ 「未来へつなぐSDGs高校生ワークショップ」

G7外務大臣会合の本県開催を契機に、県内の高校生と外務省などグローバルな機関とのSDGsをテーマにした交流により、将来世界で活躍する若者の育成を目的として開催。県企画振興部国際交流課G7外務大臣会合準備室と県教育委員会が共同で実施。ALネットワーク校から34名の生徒が参加した。

1月に「環境」と「ジェンダー」をテーマに、外務省職員による講演会やチームディスカッションなどのワークショップをオンラインで実施。2月には外相会合が行われる軽井沢町に参集し、これまで得た新たな気付きをもとに、グループごとSDGsの達成に向けて自分たちでこれから目指すアクションをスライドにまとめ、発表した。外務省職員による講評やドイツ駐日大使との対談を通してSDGsに係るテーマについて自分事として議論し「私たちが創りたい未来」について提案した。当日の提言の内容はリーフレットに取りまとめ、4月のG7会合の際、参考資料として参加者へ配布予定。

I. アジア架け橋プロジェクト等による留学生の受入れ

（日本人高校生と留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制）

アジア架け橋プロジェクトの留学生を共同実施校の松本県ヶ丘高等学校で2名（スペインと中国）、連携校の長野西高等学校で1名（モンゴル）受け入れている。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材の育成状況

生徒に身に付いた資質・能力を測るため、GPSアカデミックを実施している。1年生のうち、着眼点が突出している答案を書いた生徒の数と割合の推移をみると、令和2年度入学生では43人（13%）だったのに対し、令和3年度入学生では134人（42%）、令和4年度は168人（57%）に増加した。SGHからWWLにかけての校内の実践の蓄積により、自由な発想を認める学校全体の雰囲気醸成されている結果と思われる。

また、昨年度来、「問の立て方」について1年次に行っているカリキュラムの結果、その能力の伸長を感じた生徒は、2年生で72%、1年生では70%に増加している。

外部に発信する能力については、2年生に課題研究の中間報告会を設定するなど、機会を増やした結果、全国平均の60%のデータに対して、本校2年生は77%に及んでいる。

コロナ禍の継続により、海外に出ることは困難であるが、新たな視点で地域を見直す生徒が増えてきている。1年次には県内の大学や企業を訪問するフィールドワークを実

施してきたが、今年度は学校近隣でSDGsに貢献している企業の取組を学ぶ内容とした。こうした取組から、地域の課題に目を向け、課題解決に向けて動き出す生徒が増えている。

具体的には、地元の商店街の活性化を目指す団体を学外で結成する生徒や、さらに地元の外国人が求めることを考えたことをきっかけにフードバンクを自分たちで実施する生徒たちが出てきた。昨年度、教室の断熱化を目的に、外部と連携して工事に取り組んだグループは、今年度も継続して教室の断熱工事を実施した。ICT活用能力の向上も著しい。コロナ禍のオンライン授業や、個人のタブレット利用の増加によるところも大きい。

b. ALネットワークが果たした役割等

<管理機関>

- ・定期的なALネットワーク会議の実施、情報交換や研修機会の提供。
- ・各種会議の開催、関係機関との連絡調整。
- ・大学の先取り履修に向けた大学との協議。
- ・「信州WWLループリック」の作成及びALネットワーク校への提供。
- ・管理機関主催のプログラムの実施。
- ・連携先事業の高校生への周知。

<拠点校>

- ・文理融合、教科等横断的なカリキュラム開発。
- ・オンライン海外研修（ボストン、マニラ、台湾）の実施・共有。
- ・探究的な学びへの取組。
- ・「高校生国際会議」「成果報告会」の実施。

<共同実施校>

- ・個別海外研修の研究・実施。
- ・留学生受け入れ。
- ・探究的な学びへの取組。
- ・成果発表会「Kenryo Researchers Grand-Prix2022」の開催。
- ・「中信地区高等学校探究フェスティバル」の事務局として会を運営。

<連携校>

- ・探究的な学びへの取組。
- ・拠点校や共同実施校のプログラムへの参加。
- ・各校の取組の共有。

<協働機関>

- ・県教育委員会と包括連携協定を結んでいるKDDI株式会社は、県内高等学校における探究的な学びを支援している。ALネットワークでは、令和2年度から2年間、拠点校、共同実施校の探究の授業に参画し、授業コンテンツを開発した。また連携校の須坂高等学校、松本深志高等学校、飯田風越高等学校の3校において共創プロジェクトを実施した。
- ・JICE、ICANは拠点校において国際理解教育に係る講座を実施。コロナ禍で海外との交流が不十分な中で、貴重な機会となった。
- ・県環境政策課と連携し、信州つばさプロジェクトサステイナブルコースにおける生徒のオランダ・スイス派遣、同課が主催する「国際学生ゼロカーボン会議」等に高校生が参加する機会を設けた。
- ・県企画振興部国際交流課G7外務大臣会合準備室と連携し、県内高校生が外務省や大使館から講師を招き、ALネットワーク校の高校生が、SDGsの環境とジェンダーをテーマに持続可能な未来について議論するワークショップを開催。

<カリキュラムアドバイザー>

- ・俯瞰的な視野からの事業全体に対する指導・助言。
- ・拠点校への学校訪問による指導・助言。

c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況等について

これまでは、各校の特色ある取組も、単独校での実施にとどまっていたが、本事業の3年間を通して、各校独自のプログラムに、他校の生徒も参加する共同実施が進んだことは大きな成果である。これにより、県内各地の高校生に、単独校の自前だけでは得られない協働的な学びや高度な学びの機会が提供されることとなった。

その1つとして、共同実施校（松本県ヶ丘高等学校）の生徒が主催した「長野県高校生会議」が挙げられる。

この会議は、生徒同士が高校生活に関する興味関心を共有し、熟議を通して考えを深め、発信することを目的に開催され、ALネットワーク校を中心に、県内8校の高校から生徒30名が参加した。生徒たちは、「総合的な探究の時間」をテーマに、自分自身が夢中で取り組める探究活動とは何かについて活発に意見交換を行った。

ほかにも、各学校では次のように、探究を通して自らアクションを起こす生徒が増えている。

例：多世代が行き交う商店街づくりプロジェクト、教室の断熱DIYワークショップ、フードバンク、カンボジア井戸プロジェクト、中学生学習支援 等

さらに、コロナ禍への対応から、本県でも高校における1人1台端末の導入とICT環境整備を前倒しで実施し、臨時休業となっても生徒の学びを保証し継続するために、学校現場のデジタル化は急速に進展した。その結果、オンラインの積極的な活用による、時間や場所の制約を超えた、「探究的な学び」の充実及び、個別最適な学習環境の整備に向けた体制が構築されつつある。

その反面、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業指定初年度からの2年間については、海外渡航が制限され、海外留学や留学生の受入れが十分できなかった。海外研修についても、現地での研修はできなかったが、オンラインを活用し、現地との同時双方向型ライブ配信による研修等の代替プログラムを実施した。

事業3年目の今年度については、コロナ禍にあって、引き続きオンラインによる代替プログラムを実施する高校が散見された。一方で、海外研修の一部を再開し、計画どおりにカンボジアへ赴いて当初の目的を達成した拠点校や、個々の生徒が自分の探究テーマに基づき自ら研修プログラムを組み立てる「個別最適な海外研修」の実施に踏み切った共同実施校のように、アフターコロナを見据えた動きもみられた。このように、各校が工夫を凝らした取組を行っており、本年度の目標は概ね達成されたものと考えられる。他の国内研修については予定どおりの進捗状況である。

9 次年度以降の課題及び改善点

- ・大学の講義の先取り履修については、長野県立大学と履修や単位修得についての具体的な方法等を引き続き協議していく。信州大学とは、教育学部をはじめ、より多くの学部での授業を高校生が受講できるよう引き続き連携に努める。
- ・ALネットワークの各学校の取組を共有し、生徒同士の交流による「学び合い」の機会を充実させるために、オンラインやオンデマンド配信を活用していく。その際、管理機関として、地理的な条件や、異なる日程等の課題について、カリキュラムマネジメントの観点から、連携校における柔軟な教育課程の編成についての研究を促すとともに、必要な人的支援について検討していく。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により中断していた海外でのフィールドワーク等の実施を通して学びの機会を充実させる。
- ・本事業に係る県内外及び海外の関係校の生徒及び教員間の直接的な交流を中心とした取組により、継続的な連携の構築と推進を図る。

- ・海外渡航制限の緩和により，海外留学や研修が再開してきている一方，世界的な物価高騰による，渡航費用の負担を可能な限り軽減できるよう，県独自事業の「信州つばさプロジェクト」や国費留学制度の活用も視野に入れながら，海外留学を希望する県内高校生への支援を促進する。
- ・拠点校・共同実施校を中心に本事業の3年間で開発してきたカリキュラムを他校へも普及するための体制を整備していく。
- ・管理機関として活用してきたプラットフォームの多くは，本事業の開始以前から本県が独自に開発してきたものであり，本事業を通してブラッシュアップし再構築してきた。今後は，国の事業や県予算の獲得に努めるとともに，オンラインの効果的な活用により継続していく予定である。
- ・海外研修については，COVID-19や国際情勢による影響等を見極めながら，従前のプログラム再開に向けて引き続き検討を進めていく。

【担当者】

担当課	学びの改革支援課	TEL	026-235-7435
氏名	高野 英美	FAX	026-235-7495
職名	指導主事	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

管理機関の取組

AL ネットワークの構築

○組織作り

1 高等学校間のネットワーク

カリキュラム開発拠点校	長野県上田高等学校	
共同実施校	長野県松本県ヶ丘高等学校	
連携校	長野県須坂高等学校	長野県長野高等学校
	長野県長野西高等学校	長野県篠ノ井高等学校
	長野県屋代高等学校	長野県上田染谷丘高等学校
	長野県野沢北高等学校	長野県諏訪清陵高等学校
	長野県諏訪二葉高等学校	長野県伊那北高等学校
	長野県伊那弥生ヶ丘高等学校	長野県飯田高等学校
	長野県飯田風越高等学校	長野県松本深志高等学校
	長野日本大学高等学校	

指定初年度より、連携校が6校増加し、15校となった。特色学科を置く学校、SSHや地域との協働による高等学校教育改革推進事業の指定校、長野県「未来の学校」構築事業実践校などの県の研究指定校が多く参加しており、それぞれの特色をALネットワーク内で共有している。

ネットワーク校の連携強化のため、連絡会議を2か月に1回程度実施した。

第1回	4月8日(オンライン)	管理職対象事業説明, 担当者顔合せ, 情報交換
第2回	5月26日(オンライン)	国際会議概要の説明, 生徒募集, 運営体制について
第3回	6月11日(参集)	高校生国際会議終了後の事務連絡
第4回	8月17日(オンライン)	第1回運営指導委員会終了後 連絡会
第5回	10月27日(オンライン)	第2回運営指導委員会の開催連絡, 提供資料について
第6回	11月28日(オンライン)	第2回運営指導委員会終了後 連絡会
第7回	2月4日(オンライン)	第3回運営指導委員会終了後 連絡会

2 運営指導委員会

(1) 運営指導委員(浅井孝司氏は令和4年度着任。他の委員は令和2年度から継続)

(座長)	小村 俊平	ベネッセ教育総合研究所	教育イノベーションセンター長
(副座長)	荒井英治郎	信州大学教職支援センター	准教授
	浅井 孝司	公益財団法人国連大学協力会	常務理事兼事務局長
	讚井 康智	ライフイズテック株式会社	取締役
	坪谷ニューエル郁子	東京インターナショナルスクール	理事長
	南 希成	長野県立こども病院感染症科	部長

(2) 第1回委員会

期 日 令和4年(2022年)8月17日(月)14:00~16:00

実施方法 オンライン

内 容 令和3年度取組報告, 令和4年度事業計画報告
生徒報告「高校生国際会議に主催者として参加した経験から学んだこと, 自分の変容について」・意見交換

(3) 第2回委員会

期 日 令和4年(2022年)11月28日(月)14:00~16:45

場 所 上田高等学校(オンライン併用)

内 容 令和4年度事業進捗報告, 下半期計画報告
生徒発表「私にとってのキャリア形成」・質疑応答
参加教員によるテーマ別発表及びグループ討議

(4) 第3回委員会

期 日 令和5年(2023年)2月4日(土)13:00~16:00

場 所 上田高等学校(オンライン併用)

内 容 事業3年間の総括(成果と課題), 来年度について
課題研究報告会(「グローバルスタディ」)参観
意見交換

I 文理融合のカリキュラム開発

信州グローバルセミナー(小布施サマースクール)

1 目的

(1) 地域に根差しながら, 世界を身近に感じる経験を通して, 自分の将来がより可能性に満ちたものであると知ること, 多様な生き方について考える機会とする。

(2) 地域社会の中に自ら飛び込み, 自分が普段生きている生活世界から広い世界を捉えかえすことで, ローカル・グローバル双方の視点から進路選択ができる人を育成する。

(3) 小布施町教育委員会及び一般社団法人HLABの協力のもと, 県教育委員会が主催し, 夏休みを

活用した体験的な学びとして, レジデンシャル・エデュケーション(寮のような共同生活を通しての体験的な教育活動)を実施することで, しなやかでたくましいマインドを涵養し, 将来長野県を牽引できる人へと導く。



2 実施内容

文部科学省委託事業「地域における青少年の国際交流推進事業」により、長野県にいながら世界を知ることができるセミナーを開催し、広い世界を舞台に活躍する海外の大学生等の姿を目の当たりにすることで、長野県や日本の未来を切り拓く自らの生き方を考える。

期間中、高校生は海外の大学生から、専攻する学問領域や生き方について英語で学ぶ少人数講義（「セミナー」）や、様々な分野の第一線で活躍する社会人からの講演会（「フォーラム」）、自分自身の将来像を描くワークショップ等、ローカル・グローバル双方の視点や価値観を学ぶことができる多様なプログラムを体験する。

3 成果

- (1) 大学生や社会人から、経験に基づく夢の実現や進路決定に至る具体的な話を聞くことにより、自身の将来を想像し、主体的な進路選択を行おうとする意識を高めることができた。
- (2) 3年連続でオンラインによる開催となったため、参加者については、対面実施を予定していた当初から減ってしまったが、お互いの価値観や地域の課題を知り、理解する中で、自分の地域との関わりに対する意欲や、自分の可能性を広げたいという思い、グローバルな視点を持つきっかけとなった。
- (3) 多様な価値観を肌で感じ、自分の生活環境を相対化して捉えるとともに、他者の生きる生活世界への想像力を育む経験を通して、実社会に潜む課題を見出し、解決に向けた具体的な行動への決意を抱くことができた。

4 期 日 令和4年8月15日（月）～8月20日（土）

5 実施方法 新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインで開催

6 参加者 高校生22名（うち長野県内高校生14名 うちWWL関係校から9名）
令和3年度 33名（うち長野県内高校生14名）*オンライン開催
令和2年度 13名（うち長野県内高校生2名）*オンライン開催

2 より深い学び（探究的な学び）

マイプロジェクトアワード長野県 Summit（高校生学びのフォーラム長野）

令和元年度からマイプロジェクト事務局と連携し、全国高校生マイプロジェクトアワードの地域 Summit（県大会）として「マイプロジェクトアワード長野県 Summit」（以下、マイプロ長野県 Summit）を開催している。今年度も昨年度に引き続き、WWLの関係高校をはじめとした県内28校から45プロジェクト91名の県内高校生が参加した。

長野県では、平成28年度からすべての県立高校で地域に根差した探究的な学びとして「信州学」に取り組んでいるが、学校の枠を超えて発表し合い学び合う場としてこの Summit を位置付け、生徒の主体的な課題の発見や、自らの力で解決することに向けて試行錯誤する学びの楽しさを共有するとともに他者のアドバイスを受けて自分を成長させる機会としてきた。

今年度は、マイプロ長野県 Summit を3日間の開催とした。それによって、生徒たちは学びのふり返しを行ったり、様々な分野で活躍されているサポーター、ファシリテーター、さらにはマイプロの卒業生、そして参加した高校生と対話する時間を充分とることができ、参加生徒の学びが一層深まった。

マイプロ長野県 Summit に向けて、今年度は生徒も教員も気軽に相談でき、主体的に活動できるよう個別に対応できるプログラムを6月、7月、10月に実施。生徒や教員が探究的な学びについて相談する機会としても大きな役割を果たしている。

マイプロ長野県 Summit の感想・様子



この場には色々な考えを持った人が集まっていて、自分の考えが全てでないことを学びました。人それぞれに思う対象も違って『これをこうすることもできるんだ』とか新しい発見もできました。人それぞれにすごく強い可能性があってそれを実現するには試行錯誤を繰り返してとことん突き詰めなければと思いましたし、人の協力がなくては決して実現できないことを学びました。

探究 Frontiers 講習

令和3年度から、県教育委員会が主催し、前例や常識にとらわれることなく、『探究』について探究する研修を実施している。受講者の教員は探究 Frontiers として自ら研修テーマや研修内容を決め、グループ内外の多様な人との対話や協働を通して教育実践を行うことで、その過程で得た経験や新たな視点をもとに、これからのSTEAM教育や教科等横断的な学びなどの「探究」のあり方について提案することを目指している。

2年目を迎えた今年度は、受講を希望した県立高校の教諭7名が、2グループに分かれて「探究を探究する」「教科等横断的な学び」をキーワードに「他校に出向き教科等横断的な学びの授業を実践」「授業内等様々な場所で探究的な学びを実践する」などをテーマに取り組んでいる。

また、昨年度の探究 Frontiers メンバーは、自身の1年間の取組を様々な場所で発表し、広く成果を普及する等積極的に活動している。

本研修では、軽井沢風越学園校長の岩瀬直樹氏を伴走者（アドバイザー）に迎え、年3回の全体会における講演及び指導・助言や、風越学園の学びの様子等紹介をいただいた。受講者にとって、自身の探究をどう深めていくかについて考える貴重な機会となった。

11月に訪問した松本県ヶ丘高等学校では、探究学習推進係主任から、探究学習を進める上での体制や、探究学習の取組による生徒の成果や課題について説明いただいた。また、総合的な探究の時間の授業を参観し、探究学習の先進的な取組に触れ、多くの学びを得ることができた。

3月には年間報告会を実施し、その後も受講者は、この1年間で得た様々な経験や人的ネットワーク等を生徒の探究活動をはじめ、様々な教育活動に活用しながら、研究を継続する予定である。

3 国際的な学び

高校生海外留学支援制度

信州つばさプロジェクト（サステナビリティ探究コース）

- ・主 催 長野県，長野県教育委員会
- ・派遣先 オランダ王国アムステルダム市，スイス連邦バーゼル市
- ・日 程 令和4年12月11日（日）～12月17日（土）
- ・派遣人数 3名（県内高校生の応募者から選考）
- ・概 要 次代を担う若者が，環境先進国の視察及び現地の若者との交流を通して，地球規模の環境課題を自ら考え行動できる力を育むとともに，県と協働して，ゼロカーボン及びサーキュラーエコノミーの推進に取り組むことを目的とする。参加者は2月に開催された県環境政策課主催「国際学生ゼロカーボン会議2023」のプレイベントに出席し，報告を行った。
- ・報 告 今回は，環境課題解決に向けた自身の探究を深めることを目的として，オランダ王国アムステルダム市やスイス連邦バーゼル市などを舞台に生徒3名を派遣した。アムステルダムでは，運河でボートに乗り，ごみを拾うプラスチックフィッシング体験や，ファッション業界における環境負荷を減らす取組を学ぶファッション・フォー・グッドの見学を行った。バーゼルでは，100%有機栽培である Bio 食品の取扱いについてスーパーマーケットで実地調査し，自分の取組への考えを深めた。

バーゼルではミュンスタープラッツギムナジウム（現地の高校）の生徒と交流した。3名は自分の取組を紹介してコメントを求めたり，現地の高校生の環境問題に対する意識を聞いたりして，互いの探究を深め合った。交流直前には緊張していた3名が，いつの間にか普段どおりの柔和な笑顔で交流していたことが印象的であった。



信州つばさプロジェクト（SDGs 探究コース，グローバル・インターンシップコース，個人留学）

1 目的

海外での多様な経験と，自ら考え行動できる体験の機会として，県が短期の留学プログラムの提供や，個人留学支援を通して，県内高校生が信州に根ざした確かなアイデンティティと，世界に通じる

国際的視野を持つようにする。帰国後は参加者が自らの経験を県の留学気運向上に還元する。

2 主催

長野県教育委員会

3 事業内容

- (1) 県企画プログラム（SDG s 探究コース・グローバル・インターンシップコース）
- (2) 個人海外留学に対する支援

4 概要および実施期日

- (1) 県企画プログラム

①SDG s 探究コース

カンボジアの歴史や文化に触れ、戦争や内戦が教育に与えた影響について学び、SDG s の各要素について理解を深める。期間は3月8日から14日までの7日間。

②グローバル・インターンシップコース

マレーシアにおいて長野県を拠点にしながら世界に展開する企業等でのインターンシップを通して、専門科の生徒を中心に国際感覚を養い、グローバル時代の経済を体感する。期間は3月16日から22日までの7日間。

- (2) 個人留学支援

明確な目的と意志を持ち、留学を希望する生徒等を対象として、申請に基づき選考し、留学費用の一部を支援する。

5 実績

新型コロナウイルス感染症感染拡大により、令和2年度、3年度は中断していたが、今年度から再開した。

県企画プログラムは、各コース15名、合計30名の生徒が参加する。プログラムの実施に当たり、2回の事前学習会を行う。個人留学支援は、8名に対して行う。

長野県海外進学・留学講座

1 目的

グローバル化が加速する社会において求められる豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を涵養するため、多様な価値観に触れる機会を設定し、高校生が国際的な視野を持ち、自らが主体的に行動できるようなグローバル人材の基盤を形成する取組の一環として、海外大学の学生や留学経験者等による海外進学・留学講座を実施する。

2 主催 長野県教育委員会

3 事業内容

- (1) 海外大学に通う学生による海外進学及びグローバルな学びに関する講話・ワークショップ
- (2) 海外進学等に関する個別相談

4 実施期日及び会場（第1回、第2回はオンライン開催、第3回、第4回はハイブリッド開催）

第1回（中南信地区）令和4年7月23日（土）13:30～16:00 会場：松本蟻ヶ崎高等学校

第2回（東北信地区）令和4年7月24日（日）9:30～12:00 会場：屋代高等学校

第3回（中南信地区）令和5年1月14日（土）13:30～16:00 会場：松本市中央公民館

第4回（東北信地区）令和5年1月15日（日）9:30～12:00 会場：長野市生涯学習センター

5 実績

実施した全ての回において、大学生メンターからは、海外進学に至るまでのパーソナルストーリーについて語られ、主体的に学びをデザインし、自分らしく進路を選択することが大切であるとのメッセージが送られた。自らの信念に基づき生きる大学生の生の声を聞くことで、「自分とは何か」や、「主体的な進路選択とは何か」という正解の無い問いに対する向き合い方や、その多様性について考える機会となり、参加者からは「新たな進路の選択肢ができ、自分の将来について見識が深まる良い機会だった」などの感想が寄せられた。

4 高度な学び

*JIBUN 発 旅するラボ

*長野県教育委員会、KDDI 株式会社、長野県立大学の包括連携協定締結を契機に、長野県中小企業家同友会を加えた4者で主催

1 目的

所属する高校の枠を超え、参加する他の高校生だけでなく、企業経営者や学生等年長の他者との交流を図り、身近な事柄から自ら立てた問いを自ら考える探究（探求）を通して、自分が何者であり、何を実現したいのかを明らかにする。

2 参加生徒数

令和3年度から令和4年度まで のべ49名

3 主な活動内容

(1) キックオフキャンプ（5月29日、長野県立大学）

- ・長野県立大ソーシャル・イノベーション研究科大学院の客員教員による思考体験ワークショップ（セルフマネジメント、システム思考、身体性思考、アート思考）を通して、従来の思考に捉われない異なる考え方や方法論を体験。

(2) サマーキャンプ（8月6日、オンライン開催）

- ・「自分発の問い」を発表し、高校生や大学生・大人との対話を通して問いについて深掘り。
- ・長野県立大学ソーシャル・イノベーション研究科大学院講師による「『問い』が生まれるとき」をテーマとしたワークショップ（哲学対話）を実施。

(3) スプリングキャンプ（3月11日、長野県立大学）

- ・1年間のまとめとして、各自が設定した問いに対して、自分なりの答えを説明し、その内容を他の参加者との対話を通して更に深め、広げ、アップデート。

(4) ラーニング・ジャーニー（3回実施）

- ・経営者を訪問し、ライフストーリーや経営者の視点から見る社会、問題意識等を聞き、その体験を個人やグループで深掘り。

（訪問企業）(株)アโดイシグロ（長野市）、アースシステム(株)（松本市）、(株)JBN（長野市）、(株)牛越製作所（岡谷市）

(5) オンライン部活（週1回程度実施）

- ・ユニット（高校生3～4名、大学生・大人2名程度からなる活動の単位）ごとのオンラインコミュニケーションの場

4 生徒の振り返りアンケートより

- ・大人の方が、私の話を上手に解釈して話してくれて嬉しかった。正解は無い。どんなこともその人の感じ方で違って来る。枠から外れることを楽しめるような言葉に安心した。

*学校×KDDI 共創プロジェクト

*長野県教育委員会、KDDI 株式会社、長野県立大学との包括連携協定の締結（令和2年）と同時に開始

1 目的

学校単独では実施が難しい「生徒主体の特色ある取組」を高校から募集し、KDDI 株式会社と連携し共に創り上げること（共創）で実現を目指す。

KDDI 株式会社は、募集した企画（高校）の選考、計画作成、取組内容のブラッシュアップの段階から高校に伴走し、サポートする。

2 プロジェクトの実施状況

令和2年度から令和4年度までの3年間で8プロジェクトを実施

3 令和4年度の取組

年	実施校	プロジェクト
R 2	須坂高校	文化祭伝統の「龍」を、数研部や生徒会等多くの生徒が関わり映像作品として再現
	諏訪実業高校	ICTを活用し、コロナ禍において3密を回避しながら安全・安心な「諏実タウン」 「ファッションショー」を実現
	松本県ヶ丘高校	企業で行われている手法や取組を題材にしたリアルな探究活動の共創
	松本深志高校	生徒主体の学校ホームページ刷新プロジェクト ～情報デザインの視点による課題解決学習へ～
R 3	飯田風越高校	飯田駅前の新施設「飯田駅前プラザ（仮称）」構想プロジェクト ～私達が交流の場をプロデュースします～

	南安曇農業高校	アルプスから発信！高校生がつくるバーチャル Zoo ～いつでも動物が見られます～
R 4	中野立志館高校	空き家活用プロジェクト ～みんなで作る交流拠点を実現しよう～
	松本工業高校	IoT を活用した獣害対策の研究

4 生徒の感想（抜粋）

- ・探究のテーマは変わってもいいし、原点に戻っても今まで調べたことを踏まえて違う方向にいけばいいと思えたし安心した。探究する理由が後付けになるのではなく、本当に自分がやりたいことを見つめ直し「なぜ」を語れるようになりたい。



大体育館の中をプロジェクションマッピングの龍が駆け抜けた（須坂）



Web カメラ等で会場内の3密の状況をチェック（諏訪実業）



編集した VR 動物園の試作を、VR ゴーグルをつけて確認中（南安曇農業）

大学の先取り履修

1 長野県立大学との連携について

(1) 概要

- ア WWL 事業における高度な学びのプラットフォーム構築の一環として、管理機関である長野県教育委員会と事業連携機関である長野県立大学との連携による「高度な学び」実践講座を実施。
- イ 長野県立大学の夏期集中講座の講義に聴講生として高校生を受け入れる。

(2) 科目及び機関

- ア 科目名：「コミュニティ・デザイン（各論Ⅰ）」（グローバルマネジメント学部）
- イ 期間：令和4年7月31日（日）、8月5日（金）、6日（土）及び9日（火）の4日間
※7月31日（日）はオンライン授業，その他は対面授業。

拠点校である上田高校の3年生1名，2年生2名が受講し，フィールドワークや大学生とグループを組み，プロジェクトの共同発表を行った。今年度，拠点校では学校外における学修として単位認定を行った。長野県立大学とは大学での単位認定に向けて引き続き協議していく。

2 信州大学との連携について

(1) 概要

ア 長野県内の高等学校に在籍する生徒が信州大学の特定の授業科目を履修することができる科目等履修生（先取り履修生）を募集。

イ 長野県内の中核人材の育成を推進するという観点から、信州大学への進学を視野に入れている長野県内の高校生に対して、信州大学の授業科目を履修する機会を提供することにより、学びの複線化・多様化を高めるとともに、信州大学に対する理解を深めてもらうことを目的とする。

(2) 科目及び期間

ア 科目名：「データサイエンス入門【EA】」（全学教育機構）、「繊維科学の基礎」（繊維学部）

イ 期間：入学時期 令和4年度後期（申請期間 令和4年7月29日（金）～8月26日（金））

(3) 対象者及び単位認定について

ア 長野県内高校生（学校長の推薦がある者） ※申請書類について選考のうえ、履修の可否を決定。

イ 試験やレポート等に成績を評価し、所定の成績を修めた場合には、信州大学の単位が授与される。同大学に入学した場合、修得した単位は卒業単位に算入できる場合もある。

信州大学では、令和4年度後期授業において科目等履修生を募集し、拠点校から6名、連携校から3名を含めた13名が受講した。なお、令和5年度前期は、教員志望の生徒を対象に教育学部の科目を含めた8科目において科目等履修生を募集する。

5 主体的な学び

生徒の主体性を育む交流会

長野県高等学校長会の「生徒の主体性を育む専門委員会」と県教育委員会の2者で主催し、希望生徒による実行委員会を立ち上げ、9月に一般参加高校生を交え、テーマごとにグループディスカッションを行い、スライドにまとめて発表し合う交流会を開催する。信州大学に協力を依頼し、大学生がピア・サポーターとして高校生への助言・伴走を行う。

1 目的

次のア～オにより生徒の主体性を育み、主体的に物事に取り組む力を涵養する機会を提供する。

ア 校内外における自主活動について、高校生同士で情報交換する。

イ 情報交換により広がった視野で、これまでの自らの活動を見直す。

ウ 自らの活動を見直すことを通じ、これから取り組むべき活動を構想する。

エ これから取り組むべき活動を実現するために必要な仲間を見つける。

オ 仲間とともに新たな取組についての提言を考え、発信する。

2 主な活動

- (1) 生徒実行委員会 第1回6月25日(土) 第2回7月16日(土) 第3回8月27日(土)
※実行委員18名のうち、16名がALネットワーク校在籍
- (2) 生徒の主体性を育む交流会 9月11日(日) 於：総合教育センター
主なテーマ「今の校則に不満はありませんか。」「長野県の課題を解決し、魅力を広げるには？」
※一般参加生徒31名のうち16名がALネットワーク校在籍
- (3) 『こんにちは県議会です』～高校生との意見交換会～ 12月7日(水) 於：県庁議会棟404号・405号室 県会議員10名参加 ※上記(1)の実行委員16名参加

県立高校「未来の学校」構築事業との連携

1 目的

平成30年9月に県教育委員会が策定した「高校改革～夢に挑戦する学び～ 実施方針」に基づき、「未来の学校」として先進的・先端的な研究開発に取り組む6種別の実践校を指定することにより、県高校教育を牽引する新たな学びの場、学びの仕組みを構築する。

2 事業内容

令和元年度に研究校を指定し、有識者であるアドバイザーの指導・助言や県教育委員会との協働により研究開発計画を策定した。この計画を具体的に推進する実践校は、令和2年度以降、概ね5年間研究開発に取り組み、検証・評価を行いながら成果の普及に努める。

3 WWLとの連携状況

- (1) ALネットワークには、「未来の学校」実践校の須坂高校、野沢北高校、飯田風越高校、松本深志高校が参加している。これら4校の先進的な取組をALネットワークの連絡会や運営指導委員会等で報告し、他校と事業の成果を共有している。
- (2) 令和5年1月24日に、WWL、SSH、「未来の学校」実践校の先進的・先端的な実践研究を共有し、他校へ普及を図ること等を目的に、『学びの改革』ミニカンファレンス High School 2022を開催した。各校からの実践研究報告に続き、参加者同士の対話や「未来の学校」アドバイザー等の助言を通して研究内容を深め、参加者が今後の展望や課題について考える機会となった。

【「学びの改革」ミニカンファレンス High School 2022 の概要】

- 参加者数 97名(教職員 32校72名 「未来の学校」アドバイザー 9名 その他 15名)
- 内容 実践研究発表、質疑応答・意見交換、アドバイザー等による助言

●AL ネットワークの発表校及び発表概要

<p>【未来の学校】須坂高校 信州に根差したグローバルな学びを推進する高校 信州型グローバルハイスクールに相応しい取組の研究 ～3日間英語漬け授業やオンライン海外交流, 教科等横断的な探究実施のカリキュラムの工夫, 単位制における多様な自由選択科目の設定等</p>	<p>【未来の学校】飯田風越高校 国際的な教育プログラムを研究する高校 「育てたい学習者像」から考える学習評価 ～「逆向き設計」により授業を評価の在り方から創る等</p>
<p>【未来の学校】野沢北高校 卓越した探究的な学びを推進する高校 外部機関と連携した探究的な学びの推進 ～佐久地域コンソーシアムの構築に向けて等</p>	<p>【未来の学校】松本深志高校 自治の追求により骨太のリーダーを育成する高校 学びの意欲が向上し, 自治の精神の内面化が促される取組 ～大学との連携ゼミや教員による教養ゼミなどを通して, 生徒が高い志と広い視野を育み, 主体性が向上されるしくみ等</p>
<p>【WWLカリキュラム開発拠点校】上田高校 新しい価値や未来を創造する生徒を育成する学校 「国際会議のつくりかた」～高校生の, 高校生による, 高校生のための国際会議をテーマに, 国内外の高校生とともにグローバル課題について議論した国際会議の開催までの生徒や職員の奮闘の記録等</p>	<p>【SSH】屋代高校 理数科 30 年・SSH20 年の実践に基づいた3つのコースの特徴を生かした探究のスパイラル。県の理数教育を牽引するコンソーシアムの構築等</p>
<p>【WWL共同実施校】松本県ヶ丘高校 生涯にわたり探究し続ける生徒を育成する高校 生徒の心のエンジンを駆動するカリキュラム開発 ～個別最適な海外研修へのチャレンジ</p>	<p>【SSH】諏訪清陵高校 既存のクラウドや SNS などを活用し, 時間・空間を超えた学びの場「清陵ネット」を介して, 学校全体で取り組む課題研究等</p>

●参加者からの感想（抜粋）

- ・学校の特色や地域の特徴を生かしながら, 魅力ある探究を進め続ける工夫を聞き, 大変参考になった。「学校が違うからできない, 生徒が違うからできない」のではなく, 現状を把握し, いかにチャレンジしていくか（教員も, 生徒たちも）が大事なのだと思った。
- ・参加した先生方からの発言から, 育てたい生徒像や目標を全教員で共有すること, 生徒へのアンケート結果を分析して課題を明らかにしてプログラムを改良すること, 外部と上手に連携しながら課題研究を進めること, 生徒自身が成長を実感しながら取組めることなど重要な点を再認識することができた。うまくいかなかった事例や現状の課題が共有できたことも良かった。
- ・グローバル人材育成のための取組は英語科という漠然とした先入観があったが, 上田高校では, 校内で教科問わず様々な分野の教員が手を入れて回す工夫が見られた。生徒の興味や持ち味を引き出すためには, 教員も自身の持ち味を生かしたり自分の殻を破る必要があると感じた。



信州WWL Highlights データで見る3年間 2020~2022

構想名 「SDGs未来都市長野」から世界へ繋げる信州版ALネットワーク



ALネットワークの形成

組織強化・拡充

拠点校

長野県上田高等学校

H27~R1 スーパーグローバルハイスクール (SGH) 指定校

共同実施校

松本県ヶ丘高等学校

「進学型単位制カリキュラム実践校」

県内連携校

15校

県内連携校 (R4年現在)
指定初年度の9校から拡大

長野高等学校
上田染谷丘高等学校
野沢北高等学校
飯田高等学校
長野西高等学校
伊那弥生ヶ丘高等学校
諏訪清陵高等学校
長野日本大学高等学校
篠ノ井高等学校
屋代高等学校
伊那北高等学校
松本深志高等学校
須坂高等学校
諏訪二葉高等学校
飯田風越高等学校

探究的な学びのプラットフォームの構築と産官学連携

未来の学校

6校

指定校数
(うち4校は
WWL連携校)

- 1 スーパー探究校
- 2 信州グローバルハイスクール
- 3 国際プログラム研究校
- 4 高度産業教育推進校
- 5 少人数学級研究
- 6 骨太リーダー育成

先進的・先端的な研究開発に取り組む6種目の実践校を指定。県高校教育をけん引する新たな学びの場、仕組みを構築する。

JIBUN発旅するラボ

49人

R3~R4参加生徒延数
長野県教育委員会
長野県立大学、KDDI株式会社、
長野県中小企業家同友会



高校生だけでなく、企業経営者や大学生等の年長の他者との交流を図り、自らの問いを自ら考える探究を通して、自分が何者であり、何をしたいのかを明らかにする。

KDDI共創プロジェクト

8プロジェクト

R2~R4実績

これまでのプロジェクト例
「空き家活用プロジェクト」
「IoTを活用した獣害対策」
「高校生がつくるバーチャルZoo」



学校単独では実施が難しい生徒主体の「特色ある取組」を、KDDIと連携し、共に創り上げること(共創)によりその実現を目指す。

マイプロ*長野県Summit

高校生学びのフォーラム長野

過去3年間の参加状況

R2 21校 71名

R3 24校 91名

R4 28校 91名



*高校生が「主体性」をもってつくりたい未来に向けて「アクション」を行っていく学びのプロセス。全国高校生マイプロジェクトアワードの地域サミット(県大会)として実施。

探究Frontiers講習

これまでの受講者数

R3 13名*

R4 7名

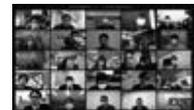
『探究』について探究する教員向け研修会。「教科横断的な学び」における「探究」のあり方について提案。

*受講者13名は今年度「探究バイオニア」として講習で得た知見を県内各校で普及

学びの改革カンファレンス

R4 参加者数

72名 32校



R5は生徒の参加も含め、規模を拡大して実施

県事業や文部科学省の指定を受けている高校の先進的・先端的な実践研究の共有と参加者同士の対話

カリキュラム開発 管理機関の取組

指導・評価研究

ALネットワーク

- ・教育活動の目的の共有
- ・生徒の学びの成果の可視化
- ・探究的な学びの伴走者としての指標
- などの参考資料を作成



育てたい生徒像



信州WWLルーブリック

AP：大学教育先取り履修

AP 連携大学

信州大学

- ・科目等履修生として受講 (R4.9月~3月)
- ・大学の単位認定可
- ・現在15名受講
- ・R5は教育学部等の8科目で新たに募集を開始。

長野県立大学

- ・聴講生として夏期集中講座「コミュニティデザイン各論」を受講 (R4~)
- ・拠点校から3名受講。
- ・拠点校の単位として認定

*教育学部では「学習科学概論」及び「情報機器活用論」の2講座の募集を開始

海外留学・進学促進のための取組

信州つばさプロジェクト*

県企画コース (R4実施コース 各15名)

インターンシップコース (渡航先:カンボジア)

SDGs探究コース (渡航先:マレーシア)

個人留学 (募集生徒数20程度)

個人で計画した留学に係る経費により県が一定額を支援



海外進学留学講座

4回開催/年(県内2会場)

海外進学を果たした大学生による海外の多様な学びと自らの受験体験を語り、生徒の主体的な進路選択を支援。

海外での学び講座

海外での学びや仕事などの経験を持つ講師の知見に触れる機会を高校生に提供する講座。



*長野県独自の高校生のための留学支援制度。R2・R3年度はコロナにより中止。R4年度から再開。



高校生国際会議

テーマ: Considering Multiple Perspectives & Finding Solutions - Our Pledge to Take Action for a sustainable Life -

参加者数

187名

令和4年度現在

(内訳)

県内 **100名**

県外 **32名**

海外 **55名**

海外参加国: 台湾・アメリカ・カナダ・
ニュージーランド・インド・タイ

国際会議開催までの歩み

令和2年 北陸新幹線サミット

※オンライン開催

51名16校

令和3年 北陸新幹線サミット

※参集と対面のハイブリット開催

51名14校

海外生5名

プログラム内容

基調講演

分科会(発表・討論)

共同宣言採択

分科会: エシカル消費、人権、教育、環境、貧困、水衛生



生徒実行委員会

ALネットワーク連携校から募集
生徒主体の運営

53名

参加生徒数

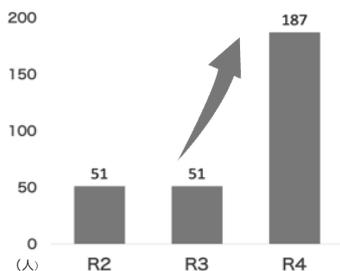
8校

参加校数



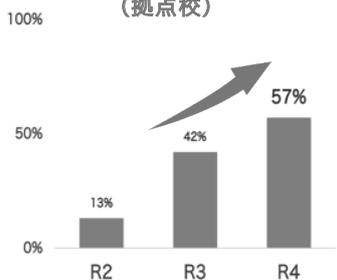
データで見る3年間

拠点校の実施する課題研究 発表会の参加者数



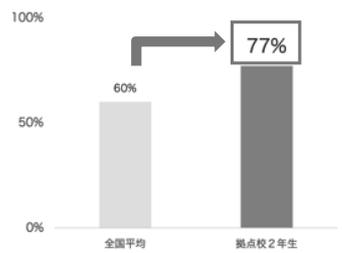
本事業の3年間を通して、各校のプログラムに他校の生徒が参加する共同実施が進んだ。

自由な発想を持つ生徒の増加 (拠点校)



自由な発想を求める学校全体の雰囲気醸成されていることを反映。(GPSアカデミックテスト「着眼点が出している答案を書いた生徒の割合」データより。)

発信力の向上(拠点校)

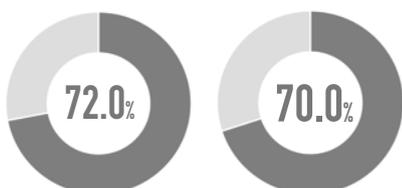


中間報告会の設定など学んだ成果をアウトプットする機会を充実させたことによる外部に発信する能力が向上。(GPSアカデミックテストデータより。)

「問いを立てる力」の向上 (拠点校)

2年生

1年生



「自ら『問いを立てる力』がついた」と答えた生徒の割合。本質的な問題を根本から解決するための「問題発見力」が醸成されつつある。(拠点校生徒アンケートより)

「大いに高まった」「高まった」と回答した生徒の割合

グローバル課題への意識の高まり

郷土・地域社会への興味関心の高まり

異文化理解力の高まり

創造的思考力の高まり



「異文化に対する理解が高まった」と答えた生徒の割合がやや減少。一方「グローバル課題への意識の高まり」「郷土・地域社会への興味関心の高まり」が共に向上。(昨年度比) コロナ禍の継続により、海外に出ることが困難であったが、新たな視点で地域を見直す生徒が増えたと分析。

「信州WWL ALネットワーク 連携校1,2年生対象生徒アンケート」回答数: 708

Q. WWLに係る活動を通して、あなたの意識に変化はありましたか? (令和4年度調より)

来年度以降の予定

- 管理機関はこれまでのプログラムを精査しながらも、基本的にはこの3年間で構築したプログラムを継続。(特に海外研修、対面による生徒、教員間の交流)
- 拠点校はこれまで開発したカリキュラムをさらに深化させながら、学校全体への浸透及び他校への提供を積極的に図る。
- ALネットワークの各学校の取組を共有し、生徒同士の交流による「学び合い」の機会を充実させるために、オンラインやオンデマンド配信を活用していく。

信州 WWL 高校生国際会議実施報告

1 概要

- (1) 開催日時 令和4年6月11日(土) 9時30分から15時30分まで
 (2) 会場 上田高等学校 (オンライン併用)
 (3) 参加者 人数 187名

内 訳

	分科会 1 エシカル 消費	分科会 2 人権	分科会 3 教育	分科会 4 環境	分科会 5 貧困	分科会 6 水・衛生
実行委員	10	9	6	12	8	7
県内	12	6	11	8	5	6
県外	2	6	10	8	3	3
海外	6	8	12	8	10	11
合計	30	29	39	36	26	27

(海外国別：台湾，アメリカ，ニュージーランド，カナダ，インド，タイ)

(4) 参加校

県内 (16校)	須坂，長野，長野西，篠ノ井，屋代，上田，上田染谷丘，軽井沢，野沢北，諏訪清陵，諏訪二葉，伊那北，飯田，松本県ヶ丘，松本深志，東海大学付属諏訪
県外 (6校)	金沢大学附属高等学校，石川県立七尾高等学校，新潟県立三条高等学校，東京学芸大附属国際中等高等学校，筑波大附属坂戸高等学校，沖縄尚学高等学校
海外 (台湾) (13校)	Guoguang Laboratory School, National Sun Yat-sen University National Tainan Girls' Senior High School Jianguo high school New T Luodong Senior High School Tainan Girls High School Nation I-Lan Commercial Vocational Senior High School Taipei Municipal Songshan Senior High School National Feng-Shan Senior High School Taipei Municipal Zhong Shan Girl's High School Taipei Municipal Banqiao High School National Lo-Tung Senior High School LTSH Song Shan senior heigh school
海外 (他) (4校)	Legacy High School, (アメリカ) Nelson College for Girls (ニュージーランド) Thousand Island Secondary School (カナダ) Platinum Jubilee High School (インド)

(5) グランドテーマ

Consider Multiple Perspectives & Find Solutions - Our Pledge to Take Action for a Sustainable Life
 多角的な視点から解決策を考える—持続可能な生活実現に向けた私たちの誓い

(6) 内 容

- ア 開会行事 開会宣言, 主催者代表挨拶, 実行委員長挨拶ほか
- イ 基調講演 講師: 露木志奈氏 (環境活動家, Shiina Cosmetics Founder)
演題: 「Z世代が考える地球の今」
- ウ 分科会 6つの分科会に分かれて発表及び討議

分科会テーマ

エシカル消費	エシカル消費を世間に広めるために私たちにできることはなにか What can we do to spread ethical consumption in the world?
人権	様々な権利と見えていない権利を明らかに。人権の認知度をあげるために Clarify various and not seeing rights
教育	グローバル化していく社会で求められる教育とは What kind of education is required in an increasingly globalized society?
環境	気候変動が及ぼす生態系への影響—地球温暖化を止めるために自分たちにできることは How do we raise awareness of environmental issues?
貧困	コロナ禍における女性の貧困について考える Poverty among women affected by the corona disaster
水衛生	だれもが安全な水を利用できる社会を創るための喫緊の課題とは Understand the current situation and issues of domestic water and sanitation and to think about what we can do.

- エ 閉会行事 分科会報告, 共同宣言採択, 講評, 閉会宣言

2 生徒実行委員会

- (1) 人数: 53名
- (2) 実行委員所属校: 須坂, 篠ノ井, 上田染谷丘, 野沢北, 諏訪二葉, 伊那北, 松本県ケ丘, 上田
- (3) 学年: 2年生40名, 3年生13名 (当日は上田高校から1年生10名がスタッフとして参加)
- (4) 実行委員会の活動
 - ・令和3年9月 実行委員会募集開始 10月 実行委員会説明会 (2回)
 - ・令和3年11月から令和4年6月にわたり延べ11回の実行委員会をオンラインにて開催。
 - ・令和4年4月以降は毎週土曜日の午後に実行委員会を定例開催。
 - ・実行委員会の開催に合わせてALTサポーターによる英語レッスン実施。
 - ・5月20日(土) Zoom 接続テストも兼ねた参加者との事前顔合せ会を実施。
 - ・7月14日(土) 事後実行委員会を開き, 参加者アンケートをもとにふり返りを行った。
- (5) 支援体制 (※人数は延べ人数)
 - ア 教員サポーター24名
(内訳: ALネットワーク校国際会議担当者13名 ALTサポーター11名)
 - イ 大学生サポーター18名
 - ウ 講師8名 (事前学習講師7名, 当日分科会講師1名)
- (6) その他
 - ・ホームページ開設, Google ClassroomやSlack等による情報共有

3 当日の様子及び共同宣言

資料については, 次ページ掲載のQRコードから資料をご覧ください。

国際会議の記録（QRコードから資料をご覧ください）

ポスター・募集要項

当日のプログラムパンフレット



共同宣言 ディスカッションレポート

信州 WWL 高校生国際会議ホームページ



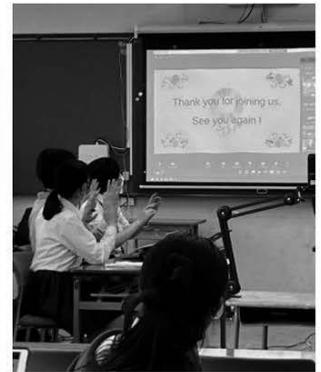
事後報告スライド



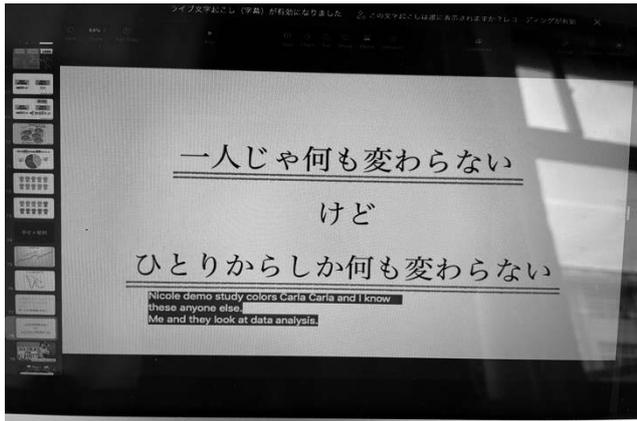
生徒実行委員会の様子



国際会議当日の様子



講演会・共同宣言採択



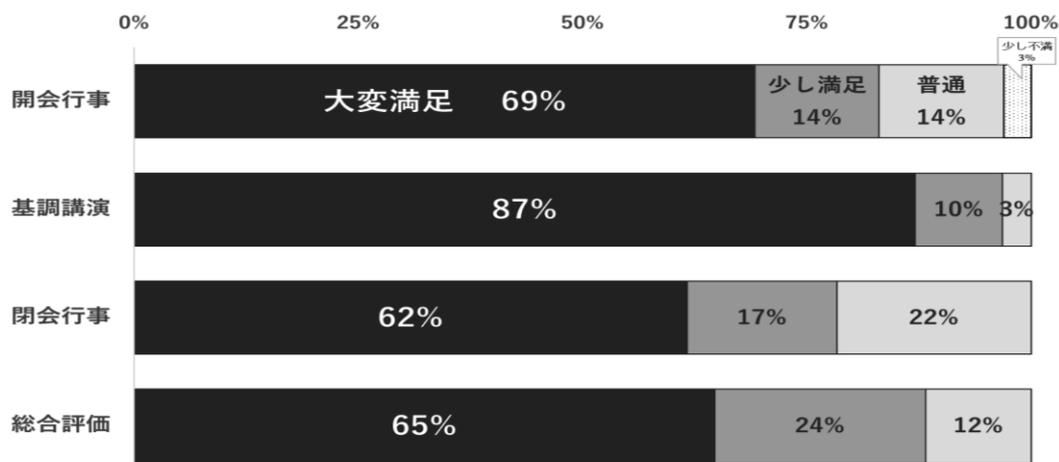
記念撮影



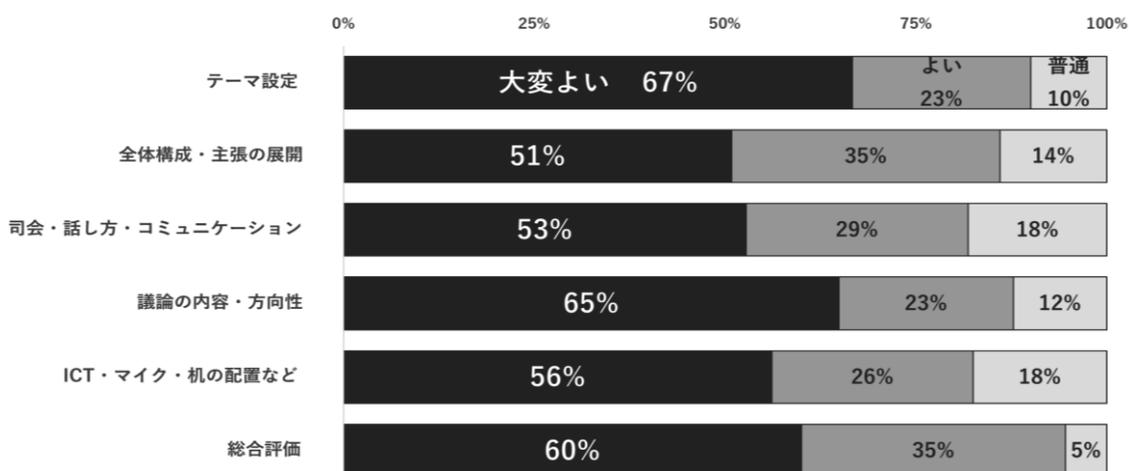
4 ふり返り

【参加者アンケート】

(1) 全体



(2) 分科会



【一般参加者から寄せられた感想】

- 世界的な問題について改めて考える機会にもなったし、海外の方と関われる機会にもなったので良かったです。
- 国際会議を通してすごく色々なことを学びました。参加して本当に良かったです。ありがとうございました。
- 最初は英語が苦手で不安だったが、他の生徒の英語で相手に伝えようとする姿勢を身近で感じて、とても勉強になった。
- It's a memorable experience, and it did boost my thoughts towards environmental issues and even solutions.
- I'm glad that I sign for this international conference, I really have learned a lot! And I'll try to put what I have gained today into practice. Hope we can make the world a better place together. Thank you very much, I appreciate you guys a lot.
- Definitely an important experience for the students. If it were to be held again, I'm sure more schools would participate.
- 英語での議論をする機会が今まで無かったのでとても貴重な経験になった。が、自らの語学力の拙さを痛感した。これからの英語学習の意欲に繋がるようにこの経験を活かしたい。

【実行委員によるふり返り】（事後レポートから抜粋）

- 準備の段階でとても大変なことも多かった。しかし、英語でのメールの書き方や、英語での事前打ち合せなど大切なことを学べたように感じる。分科会の仲間と協力して仕事を進めるのがとても楽しかった。他校に同じような志を持つ仲間がいることを知ることもでき、とても刺激的だった。終わった今となっては少し寂しく思う。1年間準備した甲斐があった。
- 今まで関心のなかった水衛生というテーマに取り組んでみて、はじめは募金程度しか日本にいる私にはできないと思っていましたが、技術の提供や教育など、実は繋がっていることが多いという事実を知ることができて良かった。また、発展途上国の国だけでなく、きれいな水を得ることができている日本にも、災害等によってそれができなくなってしまうときに、同じような方法で代替できるという事実に、自分事としても考えなくてはならないということ強く感じた。
- 実行委員会の仲間とは忙しさのあまり迷惑をかけてしまったことも多かったが、たくさん話し合っ、考えることができたと同時に、進行の大変さ、準備の大変さを身にしみて感じた。一般参加の分科会の人たちとも親しく話すことができ、他の学校の様子も知ることができた。同世代の人たちがこれほど進んで問題に取り組んでいることがとても刺激になった。本当に国際会議に参加できたことを嬉しく思う。
- 私がファシリテーターを務めたグループでは、台湾の高校生の英語があまりに流暢で、ところどころ意味をつかめないことがあったものの、それぞれが自分の国、地域、学校、そして自分自身についての教育に対する問題意識を持つと同時に、教育者に求めるもの、そして自分自身の行動によって変えていけるものを提案していて、レベルの高さを痛感し、勉強ができることだけが知性ではないと身の引き締まる思いがした。
- 自分の意見を持ち、それをグローバルな言語で多くの人に伝えることを満足にできる高校生が世界にはこんなにもいるのだ、と知ることができたことはとても良かったし、私もそうなりたいと思った。また、様々な立場から問題を議論することで、明らかに問題の切り口が増えて広い視野で解決策を探ることができた。このような経験は普段の学校生活では意外とできないものであるから、それを体験できたという意味でも参加して良かったと思った。
- この経験を次にどう活かしていくのが大切だと思う。議論のテーマを長野県独自のものにしても良かったのではないかと。「信州」と国際会議の名前に付いているのだから特性を活かすことが大事かもしれない。
- 今回、国際会議に参加して一番の収穫は、本気で国際レベルの問題について語り合える仲間ができたことだ。今回の会議以上に教育について（特に英語教育）真剣に考え、意見を述べたことはなかった。どこの県、国出身であるかに関わらず、参加者は私のどんな些細な意見にも耳を傾けてくれた。それがとても嬉しかった。また、参加者が自分の意見（本音）をぶつけてくれたことも嬉しかった。お互いに腹を割って話し合ったことで、ディスカッションが思わぬ方向に進み、新たな発見ができた。真剣に語ることができたからこそ、教育という大きな課題と向き合っているのは自分ひとりではなく、意見を共有できる多くの仲間がいると感じることができた。

JOINT STATEMENTS

共同宣言

In order to be a contributing member of the global society, we pledge to keep thinking, researching, and acting, from multiple perspectives and be a positive influence on the behavior of people around us to make our world more sustainable.

Saturday, June 11th, 2022



Ethical Consumption エシカル消費

We recognize that...

【Food waste】

- A lot of edible food is wasted both in Japan and around the world.
- There are two types of food waste: business food waste and home food waste.
- Some companies or organizations have been working on ethical consumption.
- Food waste causes a lot of other problems such as environmental problems.

【Clothes waste】

- A lot of wearable clothes are wasted, and few clothes are recycled in Japan and around the world.
- Many cheap clothes are made in poor working conditions in developing countries.

We recommend that...

【Food waste】

- Promote local production for local consumption.
- Make products last longer.
- Introduce a system where we can bring some food home from restaurants.
- Do not mass produce to make a profit.
- Sell non-standard products.

【Clothes waste】

- Improve the working conditions.
- Make use of limited resources carefully.

We will act to...

【Food waste】

- Not buy too much and not waste leftover food.
- Check expiration date and expiry date. Buy expiring food and consume quickly.
- Know more about ethical consumption.

【Clothes waste】

- Recycle and reuse wearable clothes.

We plan to...

【Food waste】

- Join some activities to reduce food loss such as food drives.
- Buy products by weight as much as possible.

【Clothes waste】

- Gather used clothes and sell them.
- Hold fashion shows using used clothes.



Human Rights 人権 共同宣言

We recognize that...

Exercising one's rights can lead to better lives, but some people do not know their rights and do not exercise them.
Exercising one's rights too much or in certain ways can cause problems.

<Freedom of expression>

Positive Points of exercising this right are ...

- can share ideas
- can convey the opinion of minorities.

Negative Points when people exercise this right are ...

- fake news can be spread around the world
- privacy issues
- hate speech and prejudice can be promoted

People should be careful about...

- misinformation on social media
- words used

<Right to self-determination >

Good points include the following (more shown in discussion report).

- We have the right to make decisions for ourselves, without stereotypes.
- In some cases, the government's decision agrees with the nation's opinion.

We recommend that...

< Freedom of expression >

Education should include a training course on these rights.

The Government should give people a chance to speak.

Teachers should explain the importance of freedom of speech.

People should clarify what they can or cannot say

YouTubers or others should help people to raise awareness of the freedom of speech.

People should be aware of the difference between fact, opinion, and false information

< Right to self-determination >

(parents) must not force their children to adopt their ideas.

(government) Should care about minorities.

(teachers) Should respect children's feelings (including how they want to be called).

We will act to...

< Freedom of expression >

Raise awareness about freedom of speech

Think about whether our information is correct or not when we tell our opinion to other people to advance understanding of human rights.

< Right to self-determination >

we must think about and respect others' opinions when we exercise our rights.

We plan to...

< Freedom of expression/ Right to self-determination >

Create a website about human rights in many languages.

Discuss the topic with many possible answers to advance understanding of human rights.



Education 教育 共同宣言

We recognize that...

In this increasingly globalized society, the development of education required varies from country to country (overcoming language barriers, solving economic problems, and developing independent learning, etc.), and measures taken by the government are essential to solve these problems. However, even in the same county, what constitutes an issue varies among regions, schools, and individuals, and we can influence the internationalization of our country by reviewing our learning attitude.

We recommend that...

Educators not only impart knowledge but also develop the ability to think and use that knowledge to solve problems on their own, as well as the ability to express those ideas to society.

We will act to...

In order to become global citizens, we act to continue to think about "why we are learning", "what is the benefit of what we have learned," and "what activities we can do" in our daily life. Also, spread your thoughts to others and take action.

We plan to...

By encouraging the change in education that we recommend to the nation and the region and the attitude of learning that we have decided to undertake, we will create an environment that will foster global citizens who can contribute to the global society and take action on global issues.



Environment 環境 共同宣言

We recognize that...

There is a lack of interest in environmental issues worldwide.

We recommend that...

Government agencies set up more means for people to

*learn about environmental issues and how to take action against them.

*increase opportunities for environmental activities including taking action in the local area.

For example cleaning local town, and spreading awareness by using social media.

We plan to...

1. Organize an event at school to pick up trash.

For example, making a day once a week for students to pick up trash as they come to school.

2. Taking action on what is close at hand, for example, using our own water bottle, containers, and shopping bags.



Poverty 貧困 共同宣言

We recognize that...

We recognized that poverty is a serious problem made worse for some during the Corona Disaster. In particular, women's poverty is particularly acute. Based on this, we decided to deepen our study by focusing on women's poverty. We also focused on the problems of single mothers' families.

We recommend that...

We recommend that companies and local governments establish scholarship programs for families headed by single mothers. Today, more and more companies are introducing scholarship programs. We would like to propose this to companies and public organizations that have not yet introduced scholarship programs in order to spread this trend. Additionally, talking about the situation and using the media can help to change the education system.

We will act to / plan to....

We will act to tell single mothers and their children that companies and local governments have one-way scholarship programs. Additionally, we will share the situation of the poverty of single mothers' families and propose this to companies and public organizations that have not yet introduced scholarship programs in order to spread this trend. We should transmit this information in society because many people are leaders in schools and participate in this activity and others.



Water & Sanitation 水・衛生 共同宣言

We recognize that...

The water problem is caused by the topography of a nation, especially Taiwan. Although it is difficult to take action on a national scale immediately, we can take *some* action on each issue, such as using water-saving technology, now.

We recommend that...

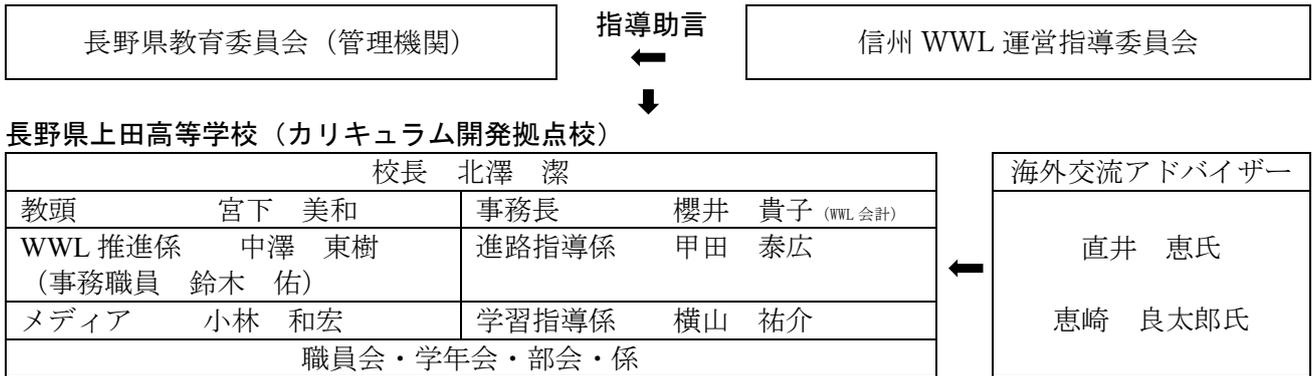
We are required to take specific action to contribute to saving water. We diligently turn off the running water and use bath water to water plants. There are some people (including us) whose small actions will have positive concrete effects.

We plan to...

Concurrently take action and promote saving water among our friends and family. And to increase our knowledge and understanding about water, regularly.

I ALネットワークの構築

カリキュラム開発拠点校 上田高校におけるWWL事業の教職員支援体制



WWL 推進係分担 WWL 業務の企画運営

教頭	宮下 美和	管理機関・AL ネットワークとの連絡調整・予算など	
WWL 推進係（9名） ※校務分掌上の係として位置づけ ○印：責任者 カテゴリー担当			
国語	中澤 東樹 ○	総務 他校連携 研究報告集 高校生国際会議 高大連携 カリキュラム開発 校外発表	GSII（日本語）○ 保健医療
数学 情報	小林 まゆ子	2年首都圏フィールドワーク ヒューマン・アクト・インマニラ NPO アイキャン	GSII（日本語）○GSIII ○ 子どもスポーツ・国際協力
地歴 公民	白鳥 敏秀	松尾ゼミナール JICE 連携 アカデミックプレゼンテーション	GSI ○ 人権ジェンダー・ビジネス都市
英語	宗倉 祐	GS 報告会 海外留学・海外交流 NBL (長野ビジネス外語カレッジ) 連携	GSI 保健医療
地歴 公民	伊藤 光葉	JICA との連携 1年県内フィールドワーク ヒューマン・アクト・インマニラ	GSI 歴史アート
英語	山浦 温子	高校生国際会議 生徒研究集録	GSII（英語）○ 歴史アート
理科	丸山 慧人	アンケート作成・処理 GPS-Academic WWL 通信	アンケート分析 生命情報・テクノロジー
英語	北澤 有里子	ボストンスタディプログラム 台湾研修旅行 ビジョン委員会	GSII（英語） 国際協力・国際理解
GI	Andrew Parkinson (グローバル講師)	Website 管理 台湾研修旅行、国際交流	GSII（英語）○ GSIII（英語） 国際理解

↑ 総合的な探究の時間、グローバルスタディーズやWWL行事を連携して推進

1 学年会 WWL 推進係：白鳥 敏秀		2 学年会 WWL 推進係：小林 まゆ子	
数学	横山 智典 (学年主任)	地歴公民	丸山 賢一 (学年主任・台湾高校交流担当)
国語	小林 賢太郎 (進路指導キャリア教育担当)	保健体育	酒井 拓也
地歴公民	伊藤 光葉 (県内 FW・国際交流担当)	英語	北澤 有里子 (台湾研修旅行担当)
英語	宗倉 祐 (進路指導担当)	理科	大石 隆裕
理科	松本 俊一 (学習指導担当)	数学	土屋 稔
芸術	宮下 靖弘	国語	母袋 由紀 (進路指導キャリア教育担当)
英語	木村 貴峰	数学	御子柴 恭介
数学	清水 真治	英語	菊原 健吾 (進路指導・台湾高校交流担当)

I ALネットワークの構築

2 信州WWL高校生国際会議

(1) 趣旨

- ① 信州 WWL コンソーシアムのテーマ「SDGs 未来都市長野から世界へつながる」をテーマとし、グローバルな社会課題，持続可能な開発をベースに国内外の高校生とともに問題解決に向けて議論する場とする。
- ② 国や地域を超えた共通の社会問題についての認識を深め、グローバル課題について分析・解決する能力を涵養する。
- ③ グローバル社会を担う中心の世代となる世界各地の高校生がグローバル課題の解決策をイノベティブな視点から構想する中で自身の行動や価値観を見直し、将来的な協働につながる国際的なネットワークを構築する。

(2) テーマ

「高校生の高校生による高校生のための国際会議」

Consider Multiple Perspectives & Find Solutions -Our Pledge to Take Action for a Sustainable Life

(3) 日程

日時：6月11日（土）午前9時30分から午後3時30分まで（日本標準時間）

日程：9:00～9:20 集合・接続開始（オンライン参加者）

9:30～9:40 開会行事

9:40～10:20 基調講演

講師：露木志奈氏（環境活動家、Shiina Cosmetics Founder）

10:30～14:30 分科会討議（途中昼食休憩あり）

14:40～15:30 閉会行事

(4) 参加者

県内高校生（信州 WWL コンソーシアム連携校 AL ネットワーク校および県内高校）

県外高校生（全国の WWL カリキュラム拠点校・SGH 指定校・各校の交流校等）

海外高校生（県内各校の海外姉妹校等）

国際会議サポーター（大学生・ALT・県内教職員）

参加高等学校

県外校	生徒数	県内校	生徒数
筑波大学附属坂戸高等学校	4	長野県松本県ヶ丘高等学校	2
東京学芸大学附属国際中等教育学校	9	長野県長野高等学校	1
金沢大学附属高等学校	4	長野県篠ノ井高等学校	6
石川県立七尾高等学校	3	長野県伊那北高等学校	1
新潟県立三条高等学校	1 2	長野県諏訪清陵高等学校	3
沖縄尚学高等学校	1	長野県諏訪二葉高等学校	4
海外	参加者数	長野県上田染谷丘高等学校	1 2
America	1	長野県長野西高等学校	1
New Zealand	1	東海大学付属諏訪高等学校	5
India	1	長野県松本深志高等学校	2
Canada	1	長野県野沢北高等学校	4
Tailand	2	長野県軽井沢高等学校	1
Taiwan	4 9	長野県上田高等学校	4 4

この他にも、各校教員、講師、管理期機関職員等が接続

I ALネットワークの構築

(5) 実施内容

開会行事

開会宣言・主催者代表挨拶・実行委員長挨拶・趣旨説明・日程確認

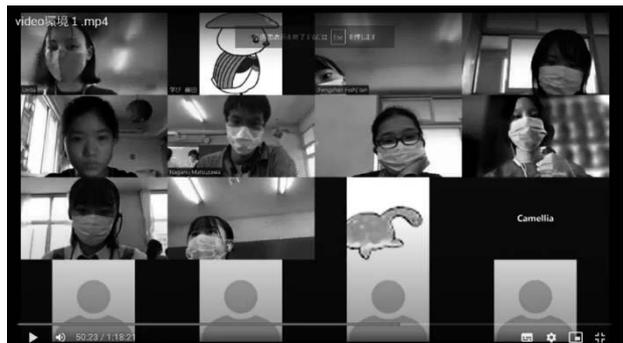
基調講演

講師：露木志奈氏（環境活動家、Shiina Cosmetics Founder）



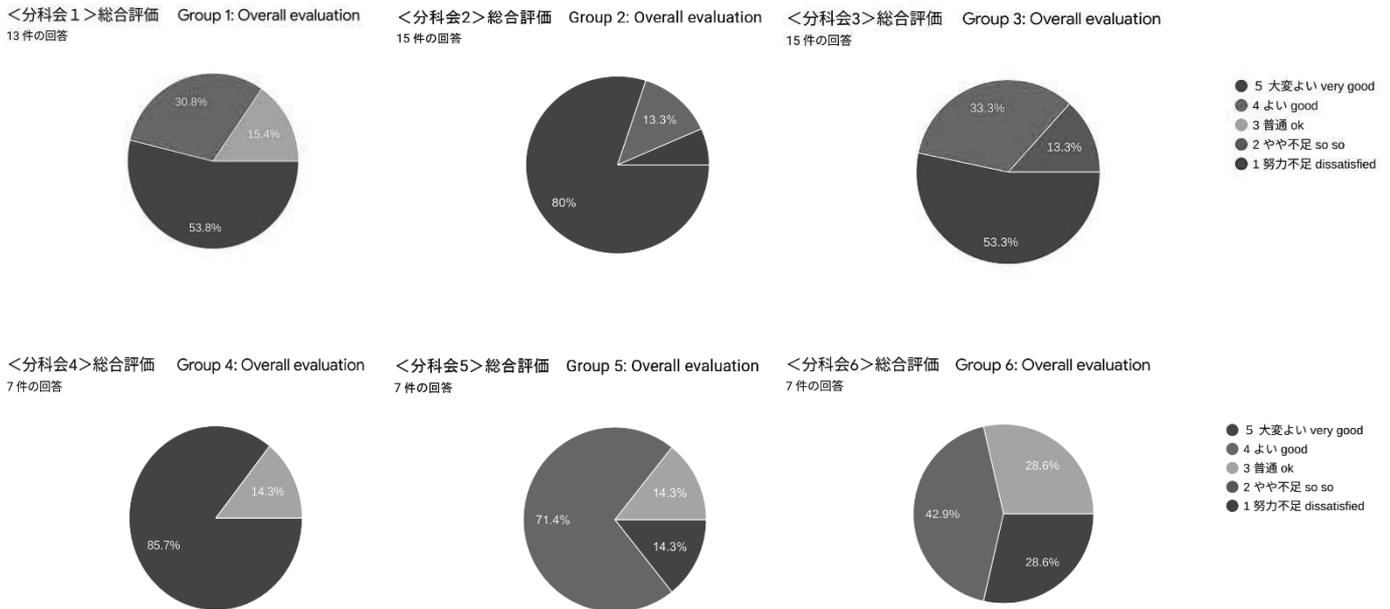
分科会

<p>Discussion in breakout sessions</p> <p>Group1 Ethical Consumption</p> <p>Group2 Human Rights</p> <p>Group3 Education</p> <p>Group4 Environment</p> <p>Group5 Poverty</p> <p>Group6 Water and Sanitation</p> <p>Summary of group discussion and preparation of joint declaration</p>	<p>分科会討議</p> <p>分科会 1 「エシカル消費」</p> <p>分科会 2 「人 権」</p> <p>分科会 3 「教 育」</p> <p>分科会 4 「環 境」</p> <p>分科会 5 「貧 困」</p> <p>分科会 6 「水・衛生」</p> <p>分科会まとめ・共同宣言作成</p>
<p>Closing event</p> <p>Discussion Report</p> <p>Joint declaration</p> <p>Feedback & Comment</p> <p>Closing Declaration</p>	<p>閉会行事</p> <p>分科会報告</p> <p>共同宣言採択</p> <p>講評</p> <p>閉会宣言</p>



I ALネットワークの構築

(6) 生徒の感想・アンケート



寄せられた感想	今後の課題
○自分たち（高校生）のみの力で会を運営しようとしていた姿勢がとても良いと思った。	○もう少し英語を使えるようになったらいいと思った。専門用語なども多くなってくると思うため、スマホなどを活用する方法を更に模索していけば英語へのハードルも下がると思った。
○参加者の、自分の力で英語を喋って海外の人に伝えようとする姿勢がとても勉強になった。	○テーマを細かくしたり、時間をもう少し伸ばすべきだと思った。
○同じ志を持つ多くの高校生と意見交換することができたのでよかった。	○zoomを併用しての開催、進行であったので、少し滞りがあって無駄になってしまった時間があったと思う。
○自らの語学力の拙さを痛感した。もっと英語を学びたいと思える貴重な機会だった。	○宣言が英語のみで(英語が苦手なので)内容が全く分からなかった。
○全体で共有することで、どのテーマについてもしっかり把握できたのでよかった。	○もっと、「高校生が」つくる、国際会議にすることができたのではないかと思う。
○心配だったが他の参加者の方々の発言に自信をもらい、自分の意見を述べることができた。	

(7) 成果と課題

コロナ禍による開催であったため、対面で参加した生徒とリモートで参加した生徒がいる状況だった。その中でも、生徒が企画・運営を行い、会議を作り上げることができた。生徒にとって貴重な経験になったと考える。また、オンラインを活用することで、海外からの参加が可能になり、多くの外国の学生とコミュニケーションできる機会となり、参加者にとって有意義な時間であったと思う。必然的に英語を用いる機会が多いため、会議に絶える英語力をどう培うか、課題である。来年度からは北陸新幹線サミットと国際会議をうまく組み合わせ、今回得たノウハウを生かして、参加者が多様な価値観に触れる有意義な時間となると良いと考える。

I ALネットワークの構築

3 信州WWL高校生国際会議実行委員会

- (1) 目的 信州WWL高校生国際会議の企画・運営を行う
- (2) 主催 長野県教育委員会（学びの改革支援課・上田高等学校）
- (3) 内容 令和4年6月に開催予定の信州WWL高校生国際会議の企画・運營業務を行う
- (4) 参加者 56名
- (5) 活動内容
 - 9月下旬 実行委員募集案内
 - 10月初旬 実行委員会募集説明会（2回実施）24名参加
 - 11月6日（土）第1回実行委員会（15:00-16:30）自己紹介・基調講演について
 - 12月5日（日）第2回実行委員会（9:00-11:00）English Lesson・分科会テーマについて
 - 1月23日（日）第3回実行委員会（18:00-20:00）6つのカテゴリー毎のミニレクチャー
 - 3月16日（水）第4回実行委員会（10:00-15:00）対面開催（予定）
 - 4月16日（土）第5回実行委員会（10:00-15:00）英会話レッスン、分科会スケジュール
 - 5月7日（土）第6回実行委員会（15:00-17:00）グランドテーマ、係分担
 - 5月14日（土）第7回実行委員会（15:00-17:00）テーマ、分科会日程
 - 5月21日（土）第8回実行委員会（18:00-19:00）分科会内容確認
 - 5月28日（土）第9回実行委員会（18:30-19:00）分科会詳細打ち合わせ
 - 6月4日（土）第10回実行委員会（15:00-17:00）英語リハーサル、当日の日程確認

(6) 実行委員会の様子



4 研究発表交流

(1) 松本県ヶ丘高等学校課題研究発表会

日程：1月27日（金）10:00-16:00 午前：プレゼンテーション個人の部 午後：全体の部

主催：松本県ヶ丘高等学校

会場：対面開催

参加者：3年1名

概要：

松本県ヶ丘高校の1、2年生全員参加により、午前中は個人の部として課題研究を2年全員が発表する。午後は、会場を体育館に移して、全体の場でプレゼンテーションを行う。本校生徒もプレゼンターとして参加した。

5 令和4年度 信州大学 長野県内高校生による科目等履修生（先取り履修生）

長野県内の中核人材の育成を推進するという観点から、信州大学への進学を視野に入れている長野県内高校生に対して、授業科目を履修する機会を提供することにより、学びの複線化・多様性を高めるとともに、信州大学に対する理解を深めることを目的とする。

授業形態：オンデマンド

授業科目名：繊維科学の基礎（繊維学部） データサイエンス入門 A【EA】（全学教育機構）

授業期間：9/26-1/30（冬季休業：12/28-1/4）

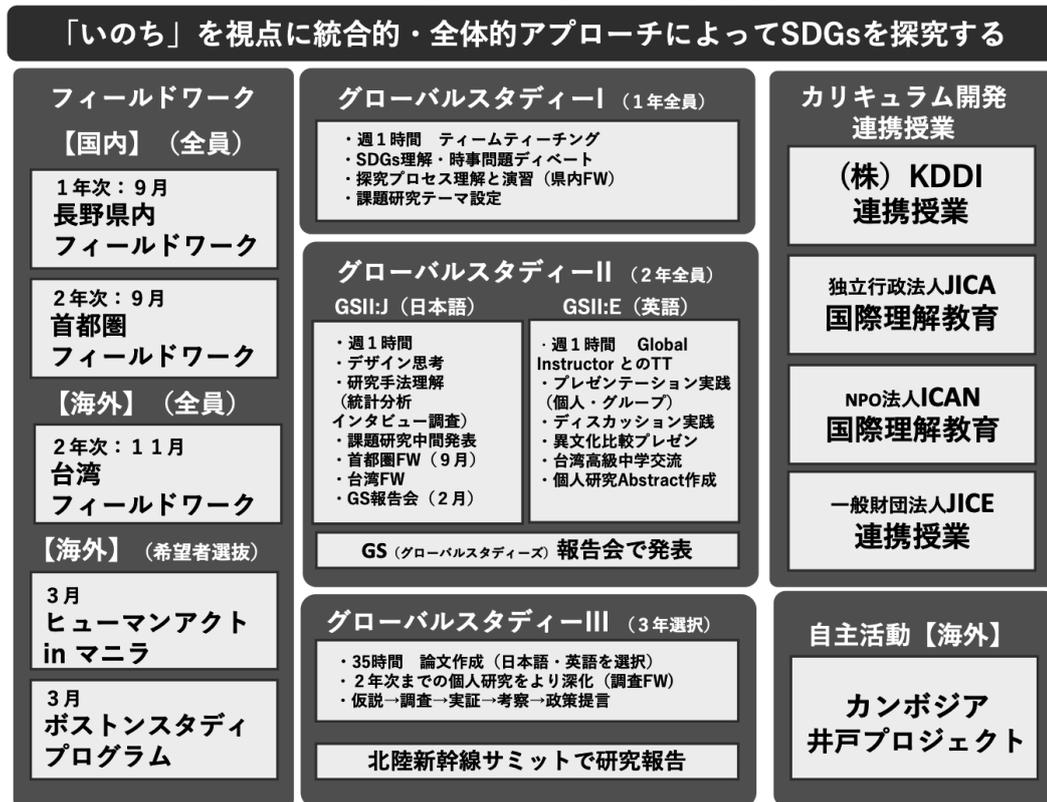
II 文理融合のカリキュラム開発

1 令和4年度WWL 研究開発活動

(1) 課題研究の概要

教科教育や進路の目標と連動した課題研究を重視し、グローバルな視点から地域を捉え、同時に地域からグローバル課題について考察できる科目横断型カリキュラムを開発する。課題研究においては自己の興味関心を掘り下げ、地域や社会、もの、ことと自分自身の関わりの中から社会課題の解決とSDGsの実現を目指し、社会に貢献しようという意識を育むことを目指し、全職員による指導体制を構築する。

WWL カリキュラム開発拠点校 上田高校探究テーマ



(2) グローバルスタディーズの概略（詳細は次ページ以降を参照）

ア グローバルスタディーI (GSI)（1年・1単位）：授業担当とHRTによるTT

グローバル課題を題材としてレポートにまとめる力とICTスキルを身に着け、県内フィールドワークにより、自らのキャリアプランを通じて協働力を構築する。自らの設定した研究テーマに沿って課題研究をはじめ、探究力を養う。

イ グローバルスタディーII (GSII)（2年・2単位）：日本語（1時間）と英語（1時間）で行う。

・グローバルスタディーII（日本語）

GSIIで設定した個人研究テーマへの探究を深め、情報収集・データ処理、分析・考察の探究スキルを身に着ける。首都圏・台湾フィールドワーク（今年度は首都圏は中間報告会に切り替え、台湾は、オンライン交流会）を通じてグローバル課題についての理解を深め、2月のGS報告会で年2生全員が研究報告を行う。

・グローバルスタディーII（英語）

個人の課題研究を英語で探究し、発表できるスキルを身に着ける。台湾研修においては、異文化比較発表や高校生との交流を通じて情報収集や多様なコミュニケーションツールとしてICTを活用する力を身に着ける。

ウ グローバルスタディーIII（3年・1単位）自由選択

2年間の課題研究を自身のキャリアに応じてさらに深化させる。地域で自主的に調査活動を行い、解決策の実践・検証を通して課題解決に向けたアクションプランを6月の北陸新幹線サミット（国際会議）で報告する。

II 文理融合のカリキュラム開発

2 グローバルスタディ I

(1) ねらい

探究的な学びを体験的に進めると同時に、協働性・可塑性や国際感覚などの汎用的な能力の養成をめざすとともに、個々のSDGsに注目しながらも、その課題を取り巻く社会や歴史などの構造的で複雑な側面を教科横断的に探究する。それと並行してICTスキルや情報リテラシーを身につける。

(2) 年間計画 (シラバス)

月	学 習 内 容	学 習 の ポ イ ン ト
4	時事問題から、社会への問題意識を持つ	<ul style="list-style-type: none"> ・写真から、近年の国内外の課題を読み取り、発表する ・PC室のPC使用ガイダンス ・意見をまとめるためのワード文書作成指示 ・図書館ガイダンス
5	問題解決策をグループで議論し、まとめ、発表する	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット情報利用のスキルとモラル ・信毎記事検索利用案内 ・探究活動の基礎として、自分が関心を持つカテゴリー毎にグループ形成 ・グループ単位で1つの課題を取りあげ、多面的意見を基にディスカッションを行い、その解決策をまとめて発表 ・グループ内の議論や、解決策形成過程を、個人でレポートにまとめ、提出 ・FWガイダンスの実施
6		
7	フィールドワーク (FW) 事前学習	<ul style="list-style-type: none"> ・県内FWに関連して課題解決学習に取り組む。秋以降の課題研究の土台ともする。 ・事前学習のまとめさらには終了後のまとめとしての解決策、などをパワーポイントスライドにまとめる。 ・「総合的な探究の時間」枠内で実施する「課題研究入門講座」(同窓会主催)とも連動させ、問題意識を持つ。 ・フィールドワークレポート提出
8	フィールドワーク (FW) 事前学習	
9	フィールドワーク (FW) 事前・事後学習	
10	課題研究に向けての準備学習	<ul style="list-style-type: none"> ・合同授業「課題研究テーマの見つけ方」 ・課題研究に向けての学校作成資料の読み合わせ ・図書館を利用した資料探索ガイダンス (短時間) ・文献、資料引用ルールの再確認
11	課題研究のリサーチクエスチョンの設定	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsと連動させて、自らテーマを設定し、課題研究テーマ設定に取り組む。 ・課題研究構想ワークシートの提出 (12月上旬)
12		
1		<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを元に、担当教員の指導を受ける ・論文執筆開始
2	GS 報告会 JICE 特別講座	<ul style="list-style-type: none"> ・論文の1章、3章と参考文献を提出 ・地域における外国人問題を知る
3	課題研究の深化	<ul style="list-style-type: none"> ・研究構想への評価を基に1年間の総括を行い、2年次の「GSII」への土台とする。

II 文理融合のカリキュラム開発

(3) 授業の概要（主な取組）

① 時事問題学習から課題解決策を提案

1年間の授業開始時に8枚の時事問題テーマに関する写真を提示、それが何かを授業グループ毎に考えさせて発表させた。そのうえで、クラス内で本人の希望を基にA～Hのカテゴリー（↓）別に数名毎のグループに再編し、さらにそれをテーマに関する賛成、反対のグループに分け、自らの主張の根拠を調べさせたうえで、ディベートを実施した。



ディベート終了後は自らの主張と対立側の主張を整理したうえで、自らのオリジナルな解決策を作成する過程を、レポートのかたちで提出させた。

取組む課題カテゴリー	自分の主張する立場	備考
A 環境・生命	太陽電池パネル設置は環境問題優先で	近年、各地で「景観権」をめぐってトラブル発生
	〃 景観優先で	
B 人権・ジェンダー	「中国人権状況批判は内政干渉」に賛成	ウイグル、チベットの統治に関して、米中の主張が対立
	〃 に反対	
C ビジネス・都市	18歳での金融契約認可に賛成	民法改正により、4月から18歳での保護者抜きでの契約が可能に
	〃 に反対	
D 平和・貧困	辺野古への米軍基地移設推進に賛成	普天間飛行場の代替施設として建設が進むが、根強い反対の声も
	〃 に反対	
E 国際協力	アフガニスタンのタリバーン政権への支援に賛成	2021年夏に復活したタリバーン政権は人権に非寛容な統治方針
	〃 に反対	
F 子ども・スポーツ	スポーツ選手の競技場での意見表明に賛成	2020東京五輪の際にIOCがそれまでの規制を一部緩和
	〃 に反対	
G 保健・医療	新型出生前検査の適用年齢引き下げに賛成	2022年2月に日本医学会が年齢制限撤廃を決定
	〃 に反対	
H テクノロジー	リニア中央新幹線の建設推進に賛成	2020年以来静岡県知事が建設工事反対を表明
	〃 に反対	

② 県内フィールドワーク事前学習、事後学習（Ⅲ-1参照）

9月14日（水）の県内フィールドワークに向けて、クラスを訪問先別に2つに分け、それをさらに3～4のグループに分け、訪問先と連絡を取らせるなかで先方から「宿題」を受け取り、その解決策を議論し、数枚のスライドにまとめ、当日発表した。終了後は訪問先からの講評を受けて、その振り返りをスライドに加えた。

II 文理融合のカリキュラム開発

③ 課題研究のテーマ設定

昨年度来、早期からの生徒の問題意識の涵養に努めた。すなわち、5月以降の「ワクワク」集めやIRで取り組んだ新聞記事レポートなどを土台に、9月下旬には学年合同LHR（オンライン）を実施、担当者が「課題研究テーマの見つけ方」としてテーマ設定に向けてのガイダンスを行った。以後GS授業内でHRTと連携してテーマ設定に取り組みせ、12月上旬にワークシートの形で提出させた。さらにそれをカテゴリ別に集約し（右表）、2月のGS報告会では2年生の同カテゴリの生徒とマッチングさせて、その発表を聞き、質疑応答を通じて刺激を受け、GSⅡでのインタビューなどを通じた本格的な研究へと繋げていくことを目指した。

また、12月半ばに集約した生徒個々人の研究テーマとカテゴリに基づいて全教職員（除3年HRTと進路指導主事）に割り振り、テーマ設定や研究構想について指導を受け、指導終了後にはチェックカードをHRTに提出するよう指導した。

カテゴリ	人数
A 環境・防災	35
B 人権・ジェンダー	42
C 歴史・アート	16
D 農業・資源	28
E 食品・栄養	12
F ビジネス・都市	57
G 平和・貧困	11
H 国際協力	8
I 子ども・スポーツ	34
J 生命・情報	14
K 保健・医療	40
L テクノロジー	22

④ JICEとの連携授業 「地域に暮らす定住外国人との共生について考えよう」（Ⅱ-8参照） 国際性の涵養という視点で、コロナ禍での貴重な機会となった。

（4） 授業の評価（生徒より）

- ・フィールドワークや課題研究でインターネットで情報を調べるときに、より丁寧に辞典や情報の信用性を確認するようになった。
- ・1つのことを様々な視点から、深く調べ、そこから生まれた別の問題についても調べていくことで、情報を見極める能力が向上し、課題をより深く掘り下げることができた。
- ・クラスの人達と議題について話し合ってプレゼンしてみて、自分の意見をより伝えられるようになった。知らない時事問題に興味をもって調べていきたい。
- ・入学時に比べ、情報収集能力とそれを分析して、課題解決へつなげる力がついた。また、グループの人達と意見を交わし、違った視点からの意見を受け入れる力もついたと思う。
- ・日本語でのディベートが今までよりもうまくなったと思うので、今後は英語でも同じようなことができるように頑張りたい。
- ・入学時よりも「世界では何が起きていて、どうしたら解決できるのか」という視野の広い考え方ができるようになった。

（5） 総括・課題と改善点

- ・個人のタブレット端末利用が本格化し、ディベートやフィールドワークの事前学習でも生徒が知恵を出し合っ上手に使えるようになってきた。
- ・昨年度から時事問題のレポートを書く前提として、グループ内でのディベートを導入した。上記の感想にもあるように、生徒には比較的好評で、事象を多面的に考える契機になったものとする。
- ・昨年度から5月頃から課題研究の間を立てる土台となる「ワクワク集め」などに努めた結果、場当たり的に、あるいは大きすぎるテーマ設定をする生徒は例年より減ったと思われる。
- ・県内フィールドワークなどを通じて身近な事象や社会問題に関心が集まりやすくなった分、難民や地域紛争などのグローバル課題に取り組む生徒が昨年度に続いて少なかった。
- ・コロナ禍で、相変わらず台湾高校生との交流ができなかった一方で、前年度と違って一部のフィールドワークは現地で行うことができた。生徒の「内向き」指向の克服に努めたい。
- ・時事問題を扱うディベートやフィールドワーク、課題研究と多忙感はあるが、クラス担任、全職員と協力しながらのTTの良さを生かして、生徒理解の機会ともしつつ、発展させていきたい。

II 文理融合のカリキュラム開発

3 グローバルスタディ IIJ (日本語)

(1) ねらい

- ・教科活動と連動し、主として探究活動、さらにはその表現活動に取り組む。
- ・1年次に現代のグローバル課題や地域課題に目を開き、その解決方法を模索し、諸問題の解決に取り組もうとする姿勢を身に付けたものを、課題に合わせて適切な研究手法を用いて深めていく。
- ・自らの問題意識を持ってフィールドワークや課題研究に積極的に取り組み、先行研究を参考にするとともに、DDP能力を養う。
- ・コミュニケーションを大切にする。

(2) 年間計画 (シラバス)

月	学 習 内 容	学 習 の ポ イ ン ト
4	課題研究テーマの確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマの再考察。 ・ 課題研究の日本語レポート作成。 ・ インターネットの引用だけにとどまらないように指導する。
5	課題研究テーマの再設定 デザインシンキングとは	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究手法を考える ・ デザインシンキング学び、調査した内容を研究に活かす。 ・ なぜそうなのか、背景を確実に検証してから仮説に対する結論を導く。担当教員から助言を頂く。研究手法を学び実践する。 ・ インタビュー、アンケート、文献調査。
6	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究手法を学び、実践する。 ・ コミュニケーションの手段を学ぶ。 ・ インタビュー、アンケート、文献調査。 メールを利用してみる事ができる。
7	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・ 論文の仮完成 ・ 担当の先生の助言を頂く。
8	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・ スライド作成の基礎を学ぶ。 ・ 論文からスライドを作成する。
9	課題研究 中間報告会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動を課題研究にフィードバックする。具体的に提案できる内容を考える。 ・ スライドの作成。
10	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・ スライドの作成。 ・ 中間報告会でのアドバイスを再考察。
11	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・ 担当の先生の助言を頂く。
12	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・ スライドの作成。 ・ 「GSII E」の授業と連携しつつ、英語レポートとともに自分の課題研究をまとめる。
1	課題研究まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表のスキルを学ぶ。
2	GS 報告会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内外に向けフィールドワークの成果や自らの課題研究を発表し、助言をいただく。
3	課題研究報告書作成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表への評価を基に1年間の総括を行い、キャリアに結びつける。

II 文理融合のカリキュラム開発

(3) 授業の概要（主な取組）

① 個人課題研究

各自インタビュー・アンケート・実地調査を行いながら、仮説検証を行った。

以下個人研究テーマを抜粋した。

A 環境・防災	いまある資源の再活用で環境にやさしい暮らしの普及を目指す	リビセンの活動をもっと広めたい
	今世の中にあるプラスチックごみ量を少しでも減らし、持続可能な社会へ	中食による包装袋を見つめ直したい
	エコツーリズムを拡大させ、自然と共生する	身近なところから考えるエコツーリズム
	焼却大国日本の課題	生ごみのリサイクル
	「放置竹林の解決と竹の利用方法」	～身近な資源、竹の可能性～
	深刻な環境問題をどうしたら解決につなげられるだろうか	健康にいい植物肉を使って
	2050年までに二酸化炭素排出量を実質ゼロにしていくなには	学校断熱で気候変動へのアプローチを
	日本中の美しい星空を守りたい！！	様々な課題解決の鍵！？
B 人権・ジェンダー	日常で見られる小さな差別を減らしていく	根強い偏見を新しい意識に変えたい
	セクシャリティが足枷にならない世の中にするために	意見交流から始める意識改革
	障がい者に対する社会からのイメージ	～暮らしやすい社会へ～
	誰もが暮らしやすい日本のために	企業における男女差から考える、性差別の解消法
	同性パートナーに対する差別をなくす	上田市に同性パートナーシップ制度を導入しよう
	パパにも育休という選択を	“男性の育休取得率増加を目指す”
C 歴史・アート	将来のゴミの有効利用のために子供たちにごみアートの体験を	子供たちのごみへの関心を高める
	芸術の力は地域にどのように貢献できるか	芸術祭が持つ地域創生の可能性
D 農業・資源	上田の農業の改善	農業を法人化しよう
	地熱発電で日本の持続可能な社会実現へ	長野県の火山の多い地形と有数の温泉地を生かして
	田舎の農業を推進しよう	兼業農家という考え方
	食料問題に対してどのようなことができるか	スマート農業を用いて
	長野市の耕作放棄地を減らそう	ソルガムを使って地域の活性化
	農産物で上田市を活性化	上田市の農作物の魅力を
	合同農園の推進による企業的な農業	農業の観点で気候変動に対して行動を
	緑を残すためにも、放置竹林をなくそう。	気候変動への対策も兼ねて
	日本の農業の未来はどうなるのか	外国人労働者を有効に
	AIで変わる農業	AIの活用で人手不足は解消できるか
E 食品・栄養	すぐ食べるなら手前からでよくない？	「てまえどり」に対する消費者の本音と普及方法
	食料自給率を上げ未来の生活を守る	「地産地消」で一番身近な地域を生かして
	日本の食品ロス	地域とお店と協力し、食品ロスを減らす
	食べることでできる食料達	3分の1ルールって必要？
	日本の食品ロスを減らすために	農家の食品ロスを減らすには
	干し野菜から食品ロスを減らす	減塩、排塩にも
	日本の食料問題を長野県から考えていく	食料自給率の観点から
	貧困+食品ロス=解決	作りすぎた食品を貧困で困っている人のもとへ
F ビジネス・都市	働きやすい社会に 幸せな人生に	働き方いかくについて
	駄菓子子を後世に伝えるために	“古き良き”を残すために
	学生のエネルギーで商店街を活気づけるには	海野町商店街の活性化計画
	長野県の観光業の可能性	長野県の外国人向け観光業をより発達させるには
	地域内で人と人のつながりを強くするには	地域コミュニティの活性化で命を守る
	すべての市民が関われる街づくり	～「上田まちなか商店街」のシャッター街化を防ぐ～
	未来のために地域経済を回すには	「漏れバケツ」問題の解決

II 文理融合のカリキュラム開発

G 平和・貧困	”音楽の力”と多文化共生	
	あなたの買い物で未来をつくる	安ければいいんですか？
	ファッションから貧困問題を解決したい	ファストファッションの問題点とエシカルファッションへの転換
	学びたい子どもが教育を受けられるために	家庭の貧困と教育
	「戦争」に対する若者の意識の低下について	「戦争」と「今」
H 国際協力	真のフェアトレードとは何か。	世間が思うフェア、私が思うフェア
I 子どもスポーツ	どうすれば年下の世話をしている高校生ヤングケアラーの学業との両立ができるのか	ヤングケアラーの負担を減らすには
	子どもが夢を持ってないのはなぜか	自己肯定感の観点から考える
	日本の教育に世界の教育の良さを取り入れるために	皆んながそれぞれにとっておもしろいことを見つけるために
	障がいを持つ子どもと持たない子どもが同じ空間で生活するために何が必要か	特別支援学級の必要性和インクルーシブ教育
	ヤングケアラーを知ろう	学校に行けない子どもたち
	発達障害の子どもが不登校になる前の効果的な支援とは？	～学校への行きづらさが社会での生きづらさにならないために～
	生活保護世帯の子供たちに十分な教育を	高校生が先生になろう
	J 1 情報	日本人の日本語がやばい！
	日本の世界幸福度ランキングの順位を上げるには	身近で出来ることは何か
	商品のパッケージが与える消費者心理	売れるパッケージの共通点
K 保健・医療	睡眠不足の人を減らすためには	あったかいふとんでぐっすりねる！こんなたのしいことがほかにあるか。
	感染症拡大を防ぐ	過去の対応から今後について学べることは何か
	地域医療から日本の医療を見直す	佐久地域の医療体制を考える
	脱ブラ歯ブラシが地球も人々も救う！	アフターコロナの先も健口に！
	少子化高齢化に伴い働く人の負担を減らそう	健康な高齢者を増やそう
	ひとり暮らしの高齢者が幸せに暮らすために	2025 問題の軽減と QOL の向上へ
	地域における医療提供体制の確保について	薬局における在宅医療の可能性
	2030年の上田市の医療は皆が受けやすい医療になるのか	市民全員が受けられる医療
L テクノロジー	クリーンエネルギーをよりクリーンに	環境保護と両立するには
	日本の電力事情を安定させるためには？	各国と比べた日本の特徴
	上田市のHPを見やすくするためにできること	市民のニーズに最大限まで寄り沿ったHP

(4) 授業の評価（生徒より）

- ・ 深掘りする力がついたと思う。今後は周りから吸収する力を伸ばしたい。
- ・ インターネットに触れる機会が多くなり、世界のニュースなどを知れた。来年はそれを続けるとともに、課題を見つけられるようにしたい。
- ・ 人前で発表を堂々とできるようになった。どうやったら伝わりやすいかを考えながら発表し、相手の反応や目を見ながら伝えようとするできるようになった。課題に対する考えや自分の気持ちが去年に比べしっかりとした気持ちが持てた。今後はさらに質問などに自分の考えをスムーズに答えられるようになりたい。また、課題に対してさらに深く考えていきたい。
- ・ 今までには何か行動を起こそうとしても、色々考えてしまいなかなか実践できずにいたが、前よりは軽い気持ちで色々な活動に参加できるようになった。

(5) 総括・課題と改善点

- ・ 自分の立てた課題を振り返りながら深く考察する生徒が増えた。
- ・ ほとんどの生徒が各自、学校外でアドバイスをいただきたい方を見つけ、コンタクトを取り、自分の研究のためのインタビューや活動を行った。対面でのやりとりが苦手でも、オンラインの手段を用いることによって教員以外の大人とやりとりをすることができた。
- ・ 調べ学習で終わっている生徒に、実際に効果検証をするまでつなげる展開を考える必要がある。
- ・ 仲間の研究に対して自分の意見を持ち、良いところだけでなく改善点も述べるできるようになってきている。

II 文理融合のカリキュラム開発

4 グローバルスタディ IIE (英語) Global Studies II English 2022

(1) Aims: The Global Studies II: English (GSII:E) activities and coursework this year was aimed to increase students' abilities to think logically, conduct research, and share their ideas and information with others. Throughout the year students simultaneously developed their ICT skills by using Google Classroom, Docs, and Slides on their devices to plan, prepare, collaborate, write, deliver and evaluate presentations on a variety of topics.

(2) Year Project Schedule: This year's four presentation projects are outline in the table below

Period	Project Contents and Description
April- July	i. Presentation and Debate Skill Level Up Project
	<p>1. English Speaking Skills Self-Assessment</p> <ul style="list-style-type: none"> Self assess speaking skills using the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR). ICT skills introduction: Login to and navigate google classroom. Use Google Forms to enter speaking skills self-assessment data. <p>2. Team Presentation-Persuasive</p> <ul style="list-style-type: none"> “3 Reasons Ueda SHS is the best school in Japan”: Develop Collaboration and Presentation skills to create a persuasive presentation on the good points about their school. Construct logical arguments in English starting with an opinion and then constructing a thesis statement with supporting points and evidence. Develop ICT skills: Use Google Docs to create scripts, Slides to create and present visual aids, as well as Forms to enter rubric-based peer evaluation data.
Aug- Nov	ii. Taiwan Research Project
	<p>Compare & Contrast - Informative Speech</p> <ul style="list-style-type: none"> Team Research: Form teams around a topic. plan, research and write a presentation script. Compare & Contrast Team Presentation: collaborate to design and create slides. Practice communication skills for presentations and discussion based on rubric. Each team presents, and each individual evaluates the teams based on rubric. Use Google Forms to enter data
Dec- Feb	iii. Independent Research Project Abstracts
	<p>1. Academic Essay Writing: Compose and revise short summary essays (abstracts) about individual Independent Research Project topics</p> <ul style="list-style-type: none"> Research Project English Summary Interview Abstract and Title Writing: Use topic-specific technical language to explain students' research topic, background, objective, research method, results, and conclusions. <p>2. Academic Presentation</p> <ul style="list-style-type: none"> Research Showcase English Presentation Q&A session: Present abstracts in English to an audience of peers, teachers, parents, and community members.
Feb-	iv. SDGs Donation Pitch

II 文理融合のカリキュラム開発

March	SDGs Donation Pitch: <ul style="list-style-type: none">● In teams, identify a target SDG, problem, and place to help with● Design a product to help with the SDG, decide on the cost per unit and number of units required to help with the problem.● Create and deliver a pitch to classmate ‘donors’ to attempt to gather needed donations for the project.
--------------	---

(3) Project overview: Projects were completed individually, in pairs, and in small groups to foster collaboration skills. Each project had its own learning goals. Additionally, two of the team presentations had a self-evaluation and peer-evaluation component. Students completed these peer/ self-evaluation assessment forms online and gained increasing awareness of the components and skills of effective presentations as well as ICT competencies.

(4) Project samples: Below are photos of the students in the process of working on worksheets and materials related to each project, as well as using ICT, collaborating, and presenting.

i. **Presentation and Debate Skill Level Up Project.** ICT Skills, CEFR Speaking skills Self-Assessment. The first project began with students answering assessing their interaction and production speaking skills according to the CEFR descriptors and then entering their current and target levels into a google form.

Following that the ‘Ueda SHS is the Best School in Japan!’ PR Presentation Project began. Students each brainstormed three reasons to support the position that Ueda SHS is the best school in Japan. They wrote individual essays giving their reasons and examples to support the opinion. Next, they formed eight groups and worked together, combining their ideas to create a single presentation script on the topic. After that, they learned how to make visual aids using google slides and created their PR presentation. The groups rehearsed their presentations and then each presented to the class. This was followed by self and peer evaluations based on the rubric. Evaluation focused on timing, structure and content, appearance and style of visual aids. voice, eye contact and audience engagement.

ii. **Taiwan Research Project:** Compare & Contrast Presentation Project: Students generated a list of topics they were interested in researching and presenting on. They then formed eight groups around those topics. In their teams they decided on three aspects of their theme to compare and contrast. They then researched and completed a logical presentation script, and created a visual aid using google slides. After rehearsals, all teams presented their research and were evaluated by themselves and their peers on the contents, visual aids and their presentation skills and style. Evaluation data was then entered into a google form.

iii. **Independent Research Project:** Students crafted an English abstract that summarised the contents of their year-long Japanese research in GSJ as accurately as possible. During the process they presented their work to classmates and gave mini presentations. After completing the abstract students wrote a title and then each students added an English abstract slide for their presentation. Finally, students presented their research to an audience of teachers and peers, and participated in Q&A feedback sessions.

iv. **SDGs Donation Pitch & Course Reflection:** This exercise was to reflect on development and integrate skills learned during the year. Students were invited to notice their progress since the beginning of the course. Following that, in groups of four they identified a need in the world that related to an SDG and used their imagination to create a product to meet that need. After completing the script for the product pitch they created slides and presented their donation pitches for their product to other groups in the class.

(5) Summary: The students increased in their confidence and ability to use ICT, as well as confidence and ease in collaborating with others and delivering presentations. Additionally, students’ logic and reasoning in their written work, and their ability to provide support for opinions steadily increased throughout the year. This concluded the course, not only for this year, but going forward as the GS course has now ended. I believe that we met our aims this year and in previous years and am appreciative of the students’ efforts.

II 文理融合のカリキュラム開発

Photos of students in the process of working on project worksheets, using ICT, collaborating, and presenting.



II 文理融合のカリキュラム開発

5 グローバルスタディ III

(1) ねらい

- ・WWL 全員カリキュラム（グローバルスタディ I II）で実施した課題研究をキャリアに応じてさらに深化させる。
- ・課題解決のアクションプランを地域で考案するため、地域で自主的にフィールドワークを実施し、論文を作成する。
- ・各種外部のプレゼンテーション大会、コンテストに参加し、フィードバックをもらったりディスカッションを行う。

(2) 年間計画（シラバス）

月	学習内容
4	課題研究（調査）
5	課題研究（調査）
6	課題研究（論文作成）
7	課題研究（まとめ）
その他	校外プレゼンテーション

(3) 授業の概要（主な取組）

- ・この授業では、個人、またはグループで課題研究を行った。
- ・課題研究では、日本語または英語での研究を行った。週一回お昼にランチミーティングをし、各自の進捗状況の確認や情報交換、意見交換をした。担当教員との面談を繰り返しながら、内容を深めた。休日には個人で企業や学校、市役所等に出向き、調査や提案等を行った。自分の行ってきた活動を含めて論文等を作成した。
- ・各種プレゼンテーション大会やコンテストは各自の課題研究に合わせてそれぞれが見つけ、参加した。

(4) 総括・課題と改善点

- ・例年はGSⅢの発表の場として北陸新幹線サミットを行っていたが、今年度は高校生国際会議を開催することが決まっており、北陸新幹線サミットが開催できなかった。それにより、成果発表の機会を校内のプレゼンテーション大会や外部のコンテストに代えた。例年のサミットでは生徒同士のディスカッションは活発にできたが、専門家からのご意見をいただくことが難しかった。今年度外部で発表した生徒は、自分の研究に対する評価を受けることにより、課題への知識がより深まった者もいる。しかし、年度当初に発表のゴールが分かりにくかったことで計画的に取り組みにくくなってしまった。
- ・課題研究では、自分で予定を立て時間を見つけて研究することができた。また、GSⅢでは、外部に調査に行くことが求められているため、各自が企業などの外部の団体に、アポイントを自ら取り、調査を行っていた。今年度は、地元上田市の商店街を盛り上げるための団体を作り、商店街でイベントを開いたり、自分の特技を生かして動画を作成した生徒もいて、創意工夫があった。
- ・今年度は週1日ランチミーティングをし、各自の研究の進捗状況を話すとともに、それぞれの研究に対してディスカッションを行い、GSⅢ選択者間のコミュニケーションがとれるようにした。研究内容は異なるが、話を聞くことによって刺激になったようである。3学年の担任の先生にも1人1人の研究を担当していただき、大人の目を入れることによって軌道修正ができた。

II 文理融合のカリキュラム開発

(5) 選択者の研究テーマ

1 A

1年	GS I	時事問題 「表現の不自由」展への公金抛出
2年	GS II	課題研究 暮らしやすく生きやすいまちづくり
3年	GS III	課題研究 暮らしやすく生きやすいまちづくり ～見て感じて幸せなまち～
進路		京都精華大学 デザイン学部 建築科

2 B

1年	GS I	時事問題 大学での軍事関連研究について
2年	GS II	課題研究 商業演劇で地方を活性化させるために ～地域の魅力を生かす演劇～
3年	GS III	課題研究 How effective is the direct support that is provided to developing countries?

3 C

1年	GS I	時事問題 小中学校へのスマホ持ち込みについて
2年	GS II	課題研究 今まで農業と新しいビジネスモデル
3年	GS III	課題研究 食と農

4 D

1年	GS I	時事問題 レジ袋全廃について
2年	GS II	課題研究 海野町商店街を守りたい
3年	GS III	課題研究 「学生×商店街」の活動で日本の幸福度をあげる
進路		高崎経済大学 地域政策学部

5 E

1年	GS I	時事問題 「表現の不自由」展への公金抛出
2年	GS II	課題研究 食品ロスに向き合う新たな時代
3年	GS III	課題研究 肉を食べるっていいことは！ ～食品ロス問題への攻め方～

6 F

1年	GS I	時事問題 新型出生前診断の活用について
2年	GS II	課題研究 BLACK LIVES MATTER
3年	GS III	課題研究 学校生活を安全に過ごすために ～廊下のヒヤリハットを防止するには～

7 G

1年	GS I	時事問題 外国人労働者の受け入れ拡大
2年	GS II	課題研究 尖閣諸島の資源を有効活用するには？
3年	GS III	課題研究 [会話]一日中関係のキー

8 H

1年	GS I	時事問題 外国人労働者の受け入れ拡大
2年	GS II	課題研究 次世代の医療
3年	GS III	課題研究 Let's Learn English from Mr. Soseki! Methods and Purposes for Learning English
進路		名古屋大学 文学部 人文

II 文理融合のカリキュラム開発

6 JICA * ICAN 連携による国際理解教育 「世界が 100 人の村だったら」

(1) ねらい

連携機関 JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所と共同して作成した、国際理解教育カリキュラムの学年行事である。様々な疑似体験を伴うワークショップや講演を通じて、世界の構造やその矛盾、さらには国際協力の現場を実感し、グローバル課題解決に向けた学習の機会とする。

(2) 概要

講師 木島 史暁氏 (JICA 国際協力推進員)
直井 恵氏 (WWL 海外交流アドバイザー、NPO 法人アイキャン)

場所 1 年各 HR、第 1 体育館

(3) 日時 10 月 6 日 (木) 第 5・6 時限

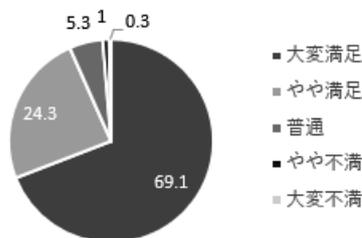
(4) 参加者 上田高校 1 学年生徒

(5) 実施内容

各ホームルーム教室において、2 年生を進行役としてワークショップを実施した。年齢、性別、宗教、所得、居住地域、言語などを記した「役割カード」を各人が持ち、様々なテーマ別に集団を作り、世界や国内の現実の疑似体験を行った。続いて、学年全体の場で講師の方の講演を聞き、グローバルな視点から平和や人権について考察を深めた。

(6) 生徒の感想・アンケート

ア 行事の総合評価



イ 本日のワークショップで気づいたこと

- ・世界には、食料が足りないなどの理由で命を落とす子供が五秒に一人はいることを知り、私たちが当たり前前に思っていることは当たり前ではないことに気付かされた。
- ・人口の比率や貧富の差など、知識的に知っていた部分もあったけれど実際に視覚的に見るとその差がぐっつきり浮かび上がってきて、SDGs の切実さを感じられた。
- ・産まれる場所もカードをランダムに配られることも同じことなのに、一生の生き方がざっくりと決まってしまうことが世界の不平等さを実感した。

ウ 世界の格差を解決する方法

- ・まずは自分ごととして捉えて、自分の行動を変えて行くことが大切だと思った。
- ・機会があればマニラなどの現地へ行って現状を知ることが大切だと考えた。
- ・スーパーやコンビニ等の廃棄処分をフードバンクに寄付するなどの取り組みが必要だと思った。

エ 本日のワークショップの全般的感想

- ・ワークショップで格差や貧困を自分事として捉え、講演会でもっと詳しく現地の様子を知ったことで、自分たちに何かできることはないのだろうかと考えるきっかけになった。
- ・実際に文字が読めずなんて書いてあるかがわからない状態になったり、配分されたお菓子を分けるときのグループごとの差を見てみると自分たちの当たり前は当たり前ではないと実感できた。
- ・ゲームは楽しく学べたが世界の現状がすごく顕著に表されていて、胸が苦しい気持ちになった。

(7) 評価と考察

1 学年人権平和教育を兼ねて実施した。前半のワークショップでは、昨年度この講座を受講した 2 年生が司会進行を担当した。先輩によるメンター制度は生徒間においても定着しているため、学年を超えた取組として今後も継承していきたい。後半の講演では、ウガンダにおいてボランティア活動に従事された木島史暁さん、フィリピンの社会問題に取り組む直井恵さんを講師に迎え前半の解説も踏まえてお話いただくことで、生徒がグローバルな諸課題について関心を持つ契機となった。講師を交えた座談会においても多様な開発援助の在り方や、日本で報道されていない農家の実態など活発な議論がなされ、他の WWL 行事への意識を高めている生徒の姿も見られた。

II 文理融合のカリキュラム開発

7 JICE との連携授業 「地域に暮らす定住外国人との共生について考えよう」

(1) ねらい

日本で暮らす定住外国人の抱える課題、「外国人就労・定着研修」事業、さらには外国人支援の取組を支える現地連絡調整員の業務について理解を深めるとともに、グループごとのワークショップを通じて、地域社会で暮らす定住外国人との共生について考察を深める。

(2) 概要

外国人就労・定着支援研修を担当されている2名の現地連絡調整員の方からご講演いただいた。

講師 原田 エリオ 知博氏 (ブラジル出身)

国吉 文子氏 (ブラジル出身)

場所 1年各 HR 教室

(3) 日時 2月15日(水) 3時限～6時限

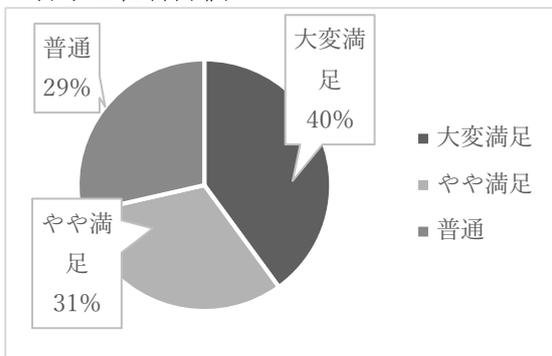
(4) 参加者 上田高校1学年生徒

(5) 実施内容

2名の講師が2クラス合同の講座を2回担当し、4時間、のべ4回にわたって講演やワークショップを実施した。生徒は「地域に暮らす定住外国人との共生のために今自分ができること」を考察した。

(6) 生徒の感想・アンケート

ア 行事の総合評価



イ 地域で暮らす定住外国人の状況について

- ・アジア圏の方が多く、英語が母国語ではないためやさしい日本語などが必要とされていること。
- ・学校で不公平な扱いを受けたり、面接でビジネスマナーがわからなかったりしてまだ十分に配慮がなされていない。
- ・外国人というだけで差別をされたり、不当な扱いを受けるのはおかしいことだと思った。

ウ 現地連絡調整員の方の講話より

- ・東日本大震災の際、「高台」の意味ができず逃げそびれてしまった外国人がいたというお話を聞いて、やさしい日本語の大切さを知った。
- ・定住外国人について、日本側は、日本に住む外国人の数が増えていることを肯定的に捉えたり、ニュースなどで報道されているが、外国人側からしたら、自分の無能さを知ったり、落第したりと、精神的に追い込まれてしまっている事がよくわかったので、これからは外国人側の視点でも考えていきたいと思う。
- ・外国人だからと決めつけるのではなく、日本人と外国人の壁をなくしていきたいと思った。

エ 地域に暮らす定住外国人との共存のために、私たちが今できることは？

- ・外国人だからというフィルターを通さずに、一人のひととして接するようになっていきたい。
- ・やさしい日本語やジェスチャー、ゆっくり話すなどを意識してコミュニケーションを取る。

(7) 評価と考察

一般財団法人 JICE (日本国際協力センター) の支援を受け、コロナ禍を考慮してオンライン形式での実施となった。講師の方々と生徒は直接対面できなかったものの、1人1台ずつタブレット PC で接続していたこともあり、質疑応答の時間に積極的に質問が出された。本授業は、日本の人口の約 2.3% を占めるものの意外に気付きにくい在留外国人の現状を、生徒が自分ごととして捉える機会となった。

1. 県内フィールドワーク（1学年）

(1) ねらい

- ・長野県、特に上田市近隣の企業・研究機関と連携し、地域でのフィールドワークを通して、SDGsに関連した課題の解決方法を考え、社会に発信していく力を養う。【協働力+発信力】
- ・連携企業・研究機関の最先端の学問や技術に触れることを通じて、自らのキャリアプランの形成、及び、秋以降本格化する課題研究の基盤構築の機会とする。【進路選択+探究心】

(2) 概要

クラスを2つに分け、上田市の企業・団体計16コースを設定した。総合的な探究の時間の枠組み内で実施した。

(3) 日時 9月14日（水）

(4) 参加者 上田高校 1学年

(5) 実施内容

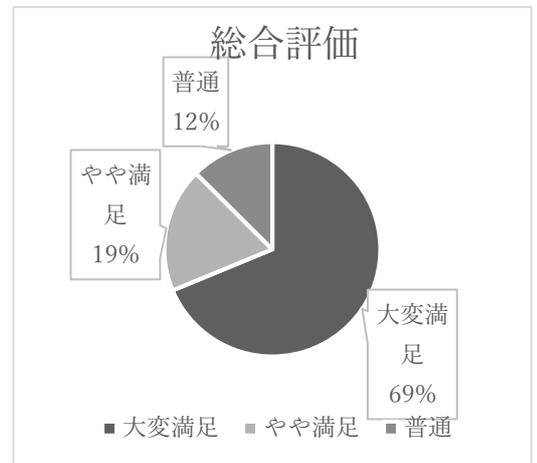
事前学習として、研修先の方に考えていただいた、SDGsや企業の社会貢献に関連した課題について、グループ毎に解決策を考えた。また、研修先と連絡を取り合う、地域の方にインタビューを行うなどの活動を通じて、それぞれの解決策を深めた。研修当日は、考えた解決策を企業・団体の方に発表し、アドバイスをいただいた（校外実施あるいは校内実施）。事後学習として、個人でレポートを作成した。

(6) 生徒の感想・アンケート

- ・原稿を見ずに話すことやデータを数値化することなど、社員の方に頂いたアドバイスを参考にプレゼンテーションの仕方を改善していきたい。（研修先：シナノケンシ株式会社）
- ・利益を得ることだけでなく、信頼や安心を得ることの大切さを学んだ。自分が知りたいと思うことと、社会のためになることの両方を満たすことのできる課題研究を進めていきたい。（研修先：インターサポート）
- ・「高校生の働くをクリエイトする」という観点でいま高校生である自分たちが将来に向けて何ができるのか、また現状の課題が何かを考え、知ることができた。（研修先：はたらクリエイト）

(7) 評価と考察

昨年度に引き続き、上田市の企業・団体に協力していただいた。身近な企業・団体の課題解決に取り組むことで、自分たちの生活に関わる新たな気づきが生まれた。今年度は校外実施・校内実施ともに、対面にてプレゼンテーションを実施できたほか、工場見学・職場見学を実施できたコースもあり、地域の企業・団体の取り組みを実感し課題研究について意欲を高める機会となった。さらに内容を充実させるために、夏期休業中に実施できそうなインタビューや調査方法、イベントの情報などを校内で共有できる機会がとれるとよい。また、生徒の役割分担を明確化し、司会進行や講師の出迎えなど生徒が主体的に動くことができるような程度決まった型を示したが、企業や生徒による裁量をもう少し残しておくべきだった。限られた時間内で、事前発表・発表練習・情報共有等、何に重きを置くか考えつつ、より充実させた活動にするため、その都度工夫していく必要がある。



<研修先および取り組んだ課題>

1組	<p><u>(有) ウッドベルファーム</u></p> <p>1. 日本では、肉類やコメ・野菜等の食料生産のための原料・燃料を輸入に頼っている部分が多い。この状況下でどうすれば持続可能な農産物生産を行えるか。 2. 農業現場では休暇の取得が難しい。また、生産物の販売価格等も自分で決めることが困難なため収益率が低く、農業に取り組む人が減少している。このような労働条件・労働環境を改善するにはどうすればいいか。</p>	<p><u>シナノケンシ株式会社</u></p> <p>当社が参入している4つの業界(自動車、自動化・ロボット、家電住宅設備、医療)について、それぞれの分野ごとにSDGsに絡めた課題を考え、解決策を提案する。</p>
2組	<p><u>コムパックシステム株式会社</u></p> <p>1. 包装という視点でSDGsの達成に向けて私達に出来ることは？ 2. 梱包資材以外の用途で段ボールという資材を活用してSDGsに貢献できることは何か？</p>	<p><u>NPO法人 上田市民エネルギー</u></p> <p>1. 上田高校の断熱性能と断熱の効果 2. 上田市役所の断熱性能と断熱の効果</p>

III より深い学び（探究的な学び）

<研修先および取り組んだ課題>

3組	<p><u>日なた堂ベーカリー</u> もしみんなが海野宿の空き家を借りて事業を行う場合、</p> <ol style="list-style-type: none"> より多くの来訪者が海野宿に集まるためにどんな事業やイベントを実施するか？ どんな人に来て欲しいか？ なぜそう思うか？ 	<p><u>株式会社見える化</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 障害者の雇用の実態に関する社会問題について、以下の課題を考える。 <ul style="list-style-type: none"> 障害者の社会での就業状況（現状の働き口）について調査する。 障害者が働く場をどのように設けていくか。 私たちが働く目的について、以下の課題を自分ごととして考える。 <ul style="list-style-type: none"> 自分らしい仕事をするためにはどうすればよいか。
4組	<p><u>株式会社インターサポート</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 「SDGs」達成のために「保険」ができることは？ 魅力ある「保険代理店」とは？・「保険+α」の+αとは？ 中小零細企業にBCP(事業継続計画)策定や、「健康経営」を普及させるために「保険代理店」ができることは？ 若年層や高齢層の交通安全意識を高めるために「保険代理店」としてできることは？ どのような「保険」があれば安心か？ 自動車運転免許に関する実話を題材にした映画を視聴し、高校生の目から見た感想を書く。 	<p><u>VALUE BOOKS</u></p> <p>これまでの生活の中で、自分の性格や個性により感じた不便さや困難を思い出し、以下の3点について考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> その不便や困難は解消できたか。 どのように解消したのか。 解消できなかった原因と、解消する方法について考える。
5組	<p><u>マリモ電子工業株式会社</u></p> <p>「SDGsに役立つ工業（電気）製品を考えてみよう」</p> <p>SDGs 17の目標達成に向け、どんな工業製品の開発が考えられるか、アイデアを出し、その実現性を探る。</p>	<p><u>一般社団法人ローカルカラー</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 企業の掲げる「SDGs」を達成するために現場で働く人たちの「SDGs」に対する意識を高めるにはどうすればよいか。 地元のお店を利用してもらうにはどうしたらよいか。
6組	<p><u>株式会社はたらクリエイト</u></p> <p>高校生の「はたらく」をクリエイトするには？ (ボランティアではなく仕事であること。仕事が楽しめたり、将来のキャリアにつながること。)</p>	<p><u>上田プラスチック株式会社</u></p> <p>SDGsの観点から、10年後の上田市を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「環境課題」「社会」「経済」×「素材としてのプラスチック」・「ダイバーシティ」 大課題に向かって自分たちが「今できること」・「できていること」・「やりたいこと」・社会に「やってほしいこと」。
7組	<p><u>上田ガス株式会社</u></p> <ol style="list-style-type: none"> SDGsの目標達成に向け、地域の課題および上田ガスができる地域貢献について考える。 カーボンニュートラルに関する以下の項目について調べる。調べた事項と低炭素社会・脱炭素社会の結びつきを考える。(分散型エネルギーシステム/スマートエネルギーネットワークなど) 	<p><u>株式会社アトリエデフ</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 食品と農業に関わる問題 <ul style="list-style-type: none"> 普段口に入っている食べ物が、自分達の口に入るまでに、どのような過程を経ているのか。 森林と竹林に関わる問題 <ul style="list-style-type: none"> 森林や竹林は、なぜ放置されているのか。環境を配慮した商品とは何か。 エネルギーに関わる問題 <ul style="list-style-type: none"> 毎日使っている電気はどこからきているのか。
8組	<p><u>上田市多文化共生推進協会 [AMU]</u></p> <p>多文化共生社会において、日本人と外国人、それぞれの国の文化・習慣・考え方などの違いを知り、日本人との違いに驚きながら会話することにより、より一層、その人（その国）に親しみを持つことができるのか、試してみる。</p>	<p><u>シスラボ・スエヒロ</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 中小企業の環境への取組意識が低い要因は何か。 サプライチェーンの中の中小企業が環境へ取組まないリスクは何か。 環境の必要性を社員に教える方策

III より深い学び（探究的な学び）

2 探究の日（2学年）

（1）ねらい

- ・自ら考察した課題を他人と意見交換し、広い視野で再度試行錯誤する。相手とのコミュニケーションをすることにより、今まで気が付かなかった点に気づいたり、新たな発想を得たりする。
- ・先生や友だちなどから助言をいただくことにより、探究を一層深めるきっかけをつくる。
- ・自身のキャリア（進路）を見据え、興味関心のある分野について探究を深める。

（2）概要

課題研究の中間報告と進路学習

（3）日時

9月13日(火)、9月14日(水)

（4）参加者

2学年

（5）実施内容

第1日目

- ・2学年の進路担当と協力し、自分が興味のある大学・学部・学科の調査をおこなった。

第2日目

- ・課題研究の中間報告会。（詳細は以下に記載）



中間発表会内容

- ・事前に生徒は研究の概要を発表できるように準備。
- ・A~Lまで研究内容別に全12カテゴリー、そのなかでグループに分かれる。カテゴリーごと以下のように発表と質疑応答を行った。1時間15分のセッションを3回行い、どこかのセッションで発表を行う。発表以外の時間は興味のある人の研究を聞く。発表のあとは必ず質疑応答を行う。
- ・別室でアドバイザーとの面談を設け、12名のアドバイザーに100名ほどの生徒の研究にご助言をいただいた。

（6）生徒の感想・アンケート

- ・環境問題を分かりやすく解説していただいたので理解が深まってよかった。
- ・反対意見にも触れていた。アンケートを取った。自分の考えを聞いてもらい、もらった意見からさらに自分の発表を発展させることができた。スライドを効果的に見せるためにアニメーションを追加した。
- ・私と似たような研究をされていたが、知らないこともいくつかあり、私よりも深いところまで考えられていて、もっと調べないと考えた。
- ・遊休農地は私の家のそばにもあり、私自身の家も農家なので他人事ではないな、と思いながら聞かせていただきました。

（7）評価と考察(アドバイザーの方々より)

- ・生徒の興味のある分野を探究できていると感じた。
- ・大人では思いつかなかったアイデアや着眼点があり、逆に勉強になった。
- ・問題が大きすぎて個人の力でできることに限界を感じている生徒が多かった。
- ・ひとりひとりこだわりを持ってテーマ設定、仮説、検証を実施しており、レベルの高さを感じた。多角的な視野を持ってもらうため、もっと我々と頻度を高くコミュニケーションがとれるといいなと思った。
- ・自分が感じていることから始め、共感性のある言葉にできるとなお良い。
- ・バックキャストで考えられるとなお良い。
- ・大変貴重な経験、且つ大きな刺激を受けました。彼らを通じ、将来への高いポテンシャルを感じる同時にバトンを渡す我々のすべきことへの責務を感じた。
- ・十分な準備と明確に伝えたいこと/聞きたいことをもって発表されていた姿勢には驚いた。また、ドバイスに対しても傾聴し、研究内容を一層良いものにしたい意志を感じました。

II より深い学び（探究的な学び）

3 第1回アカデミックプレゼンテーション

(1) ねらい

海外研修体験者を中心とした生徒のプレゼンテーション能力の向上と、WWL 事業の一般への公開

(2) 概要

テーマ 「コロナ禍のなかの探究活動」

日時 6月18日（土）12時30分～13時45分

場所 上田高等学校 会議室

助言者 廣田昌彦氏（学びの改革支援課高校教育指導係係長）

(3) 発表内容

- ① 私のロシア留学体験
- ② ポストスタディプログラム研修報告
- ③ ヒューマンアクトインマニラ研修報告
- ④ 高校生模擬裁判選手権参加報告

(4) 聴衆のアンケートや、助言者の講評より

- ・ロシアに対する愛がとても伝わってくるような発表でよかった。
- ・冒頭にプレゼン内容の流れを説明してくれたので、どこに重点を置いて聞けばよいか明確になった。
- ・プログラムの経験をベースにフードバンクの活動が進んでおり、学習が発展的に進行していたことが頼もしかった。

- ・全発表者のプレゼンの完成度がとても高かった。発表全体を通じて、新しい考え方や将来について多角的な視点を持つことの重要性について考えさせられる良い機会になった。

(5) 評価と考察

この行事は本来、4、5月の公開授業やPTA 総会にあわせて実施され、中学生や保護者、新1年生などにも本校のWWL 活動を紹介していくものだったが、今年度はコロナ禍のなか、校内の生徒や発表者の保護者対象の企画となった。3月に予定されていた海外スタディツアーが全て中止となったため、オンラインを利用した代替探究活動の報告、留学体験報告が行われた。なかでも①、④は実際に現地に行っている活動であり、コロナ克服に向けての励みになるような報告だった。



4 第2回アカデミックプレゼンテーション

(1) ねらい

夏季休業を中心とした探究活動を学校内外への発信と、プレゼンテーション能力のスキルアップ

(2) 概要

テーマ 「暑かった夏の探究活動の成果」

日時 10月8日（土）12時30分～13時45分

場所 上田高等学校 会議室

助言者 腰原智達氏

（学びの改革支援課高校教育指導係主幹指導主事）

(3) 発表内容

- ① 地方演劇における劇場のあり方
- ② 肉を食べるっていいことは！
- ③ 長野県立大学「高度な学び」実践講座参加報告
- ④ HLAB OBUSE サマースクール参加報告

(4) 聴衆のアンケートや、助言者の講評より

- ・「演劇の魅力を知ってほしい」という思いが一貫していて、思いがよく伝わってきた。課題の分析にも納得できた。

- ・手作り感のある映像に自分たちの思いがたくさん詰め込まれていて圧倒された。

- ・高校と大学の学びの違いが具体的にまとまっていた。

- ・活動を通して、進路について考えるときに必要な考え方がまとめられており、理解しやすかった。

(5) 評価と考察

この行事は、本来夏季休業中の探究活動の発表が軸になって行われるものだったが、今年度はGSⅢの活動発表の場としても活用した。とりわけ②の発表はアニメーションの映像も交えたもので、③の高大連携の新たな活動の報告と併せて、今後のWWL 活動の新たな可能性を拓くものであり、注目を集めた。



III より深い学び（探究的な学び）

5 研究発表 長野県上田高等学校グローバルスタディ報告会

（1）ねらい

2年生は、グローバルスタディ I IIを通して行ってきた課題研究の最終発表をする。1年生は2年生の発表を聞く。発表者がアドバイザーや担当教員、発表を聞いた生徒と研究についてやりとりをすることを通して、2年生は研究内容を振り返り、1年生は探究の意欲を高める。

（2）概要

日時：令和5（2023）年2月4日（土）

場所：長野県上田高等学校（対面実施）

○午前の部

プレゼンテーション 午前の部（1～4組）			
8:30-8:40	10	SHR (出席確認)	各 HR 教室
8:40-8:55	15	全体会(放送) ・ 学校長挨拶 ・ 生徒会長挨拶 ・ 諸連絡(日程確認など)	各 HR 教室
9:05-9:55	50	プレゼンテーション Round 1 12 カテゴリー別会場にて 【2年生】 ・プレゼンテーション&質疑応答を繰り返す。 ・最初に2分間程度の英語での「要旨」説明あり。 ・カテゴリー毎の部屋で発表する。 【1年生】 ・1 Round は自分のカテゴリーで。あとは好きなところへ。	発表に必要な机と椅子を残して、机椅子を教室中央に集める。（4. 教室準備レイアウトを参考） 会場は20部屋 1部屋あたり発表者最大6人。 発表者へのフィードバックはフィードバック用紙を用いてその場で伝える。
10:05-10:55	50	プレゼンテーション Round 2	繰り返し 終了後、机椅子を元に戻してからHRへ戻る。
11:05-11:15	10	振り返り・アンケート記入（Google フォーム）	
11:15-11:25	10	午前の部 閉会式（放送） ・各部屋の担当教員からの講評	終わり次第、午前の部参加者帰宅

III より深い学び（探究的な学び）

○午後の部

プレゼンテーション 午後の部（5～8組）			
12:20-12:30	10	SHR (出席確認)	各 HR 教室
12:30-12:45	15	全体会(放送) ・ 学校長挨拶 ・ 生徒会長挨拶 ・ 諸連絡(日程確認など)	各 HR 教室
12:55-13:45	50	プレゼンテーション Round 3	発表に必要な机と椅子を残して、机椅子を教室中央に集める。（4. 教室準備レイアウトを参考） 繰り返し
13:55-14:45	50	プレゼンテーション Round 4	繰り返し 終了後、机椅子を元に戻してから HR へ戻る。
14:55-15:05	10	振り返り・アンケート記入（Google フォーム）	
15:05-15:15	10	午後の部 閉会式（放送） ・各部屋の担当教員からの講評	終わり次第、午後の部参加者帰宅

○今年度は完全対面実施

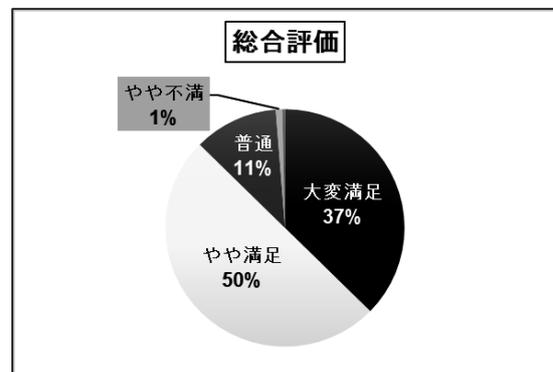
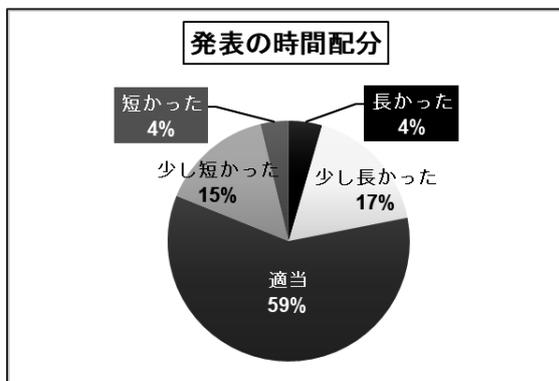


↑発表の様子。今までの探究活動でお世話になったアドバイザーや教員も聞き手として参加することで、緊張感を持ちながら発表をすることができた。また、1年生も2年生も事前に発表者のスライドに目を通して、より深く内容を理解でき、質疑応答でも活発な様子が見られた。

III より深い学び（探究的な学び）

（3） 生徒の感想，アンケート

- ・ 話すスピード相手によって変えてくれる先輩や、書いているところの様子を見つつ発表してくれる先輩がいてしっかり発表を聞くことができた。
- ・ 意見の根拠や事例などが想像していたよりも詳しく細かく示されていて全ての意見の裏に根拠が存在していることが良かったと思う。
- ・ 自分の知らないことについても詳しく知ることができた。興味深い発表もあり、それについてもっと調べてみたいと思うような機会になった点。
- ・ 実際の2年生が行ってきた研究を聞いた。表面的なことだけでなく、詳しい背景や生の声を聞いた。
- ・ たくさん質問してくれる1年生がいて、興味を持ってくれたと思うととても嬉しかった。
- ・ 原稿にとらわれない発表形式にすることで、傍観者との対話も成立させることができた。
- ・ 中間報告会の時よりも落ち着いて、ハキハキと話すことができた。質問に的確に答えることができた。



（4） 評価と考察

年間の WWL 諸活動の集大成を発信する行事として企画されている。昨年度は感染予防対策のため本校を会場に、完全オンラインで web 会議ツールを利用しての開催となったが、今年度は教室内の人数を最大 20 名と制限しつつも、完全対面で実施することができた。構成も昨年度はポスターセッション（午前）とディスカッション（午後）の形式だったが、今年度は午前も午後もタブレットを使用したプレゼンテーションへ変更した。

発表者には事前に Google クラウドで発表用スライドを共有し、1 年生も 2 年生も事前にスライドに目を通すことができた。そのため、質疑応答で質問する内容を事前に考え、発表を聞くことができたので、当日の質疑応答は昨年度以上に活発なものとなった。

運営指導委員の参加者や県内フィールドワーク等でお世話になったアドバイザーの方々からの質問やコメントもあり、発表者のみならず 1、2 年生の聞き手にとっても有意義なものとなった。

発表の最初に英語で研究の概要を説明しているが、その意義が理解できていないがために相手に伝えようとして発信していない生徒が見られた。英語で発信することによって、国内だけでなく国外の聞き手も研究報告を読むことができ、関心を持ってくれる人がいるということを再認識する必要がある。

行事が制約される中、今年度は完全対面で実施できたことやアドバイザーを招集できたことには大きな意義がある。

IV 国際的な学び

1 上田高校の海外研修の概要

(1) ねらい

探究活動を通して世界のグローバル課題を学ぶなかで、研修先の国・地域の特性や諸問題へ視野を広げるとともに学際的な学びを体験する機会とする。同年代や異なる文化的背景を持つ人びととの対話を通して、多様な価値観に触れ、リアルな現場を見ることによりグローバルな視点から自身の探究課題を捉え、かつ身近な地域でも活動する意欲・行動力を育成する研修プログラムを目指す。

(2) 本校の海外研修・海外交流の概要

台湾研修旅行(2年生全員)

総合的な探究の時間の一環として、2年次の秋に全員が台湾を訪れ研修を行う。台湾と日本に共通する社会課題について、大学や医療機関、地元企業などを訪問し、台湾の実情を見聞し、意見発表を行う。現地の高校生との交流や、活気ある台北の街を散策するなど異文化を体験する。



現地の高校を訪問しプレゼン交流

ヒューマン アクト イン マニラ (希望者選抜)

フィリピンで貧相の支援を行う認定 NPO 法人「アイキャン」の活動に参加し、路上の子どもたちやごみ処分場の見学を通して格差問題や環境問題について考える。現地の子供たちや住民との交流を通じて、フィリピンの参加型の自立的な生活向上について学ぶとともに、自分たちにできる支援のあり方について考える。



マニラ首都圏スラム街を見学

ボストン スタディ プログラム (希望者選抜)

ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学および周辺施設の研究所などの学術機関を訪れ、事前にしたプレゼンテーションの指導をうける。論理的構成からなるアカデミックプレゼンテーションの基礎を学ぶとともに、講師との意見交換を通じて最先端の教養に触れ、学問の枠を超えて異分野が協力する学際的研究の重要性を理解する。



MITで講師とディスカッション

カンボジア井戸プロジェクト(生徒による自主活動)

フィリピンでの研修で、社会の格差を目の当たりにした生徒たちが「自分たちにできる支援の形」を模索する中で立ち上げたプロジェクト。SDGsの目標のひとつである安全な水へのアクセスを可能とするために生徒が主体となって行う活動。自らの手で資金を集め、カンボジアのシェムリアップ地区へ実際に赴き井戸を掘り、現地の人々に寄贈する。



カンボジア井戸掘削作業

※今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により、現地への渡航が中止となったため、研修はオンラインで実施した。

IV 国際的な学び

2 台湾高級中学オンライン交流

(1) ねらい

台湾高級中学との異文化交流と英語など多言語によるコミュニケーション能力の向上を図る。

(2) 概要

【交流校】 国立苗栗高級中学（苗栗県） 国立科学工業園区実験高級中学（新竹県）
私立延平高級中学（台北市） 台北市立中正高級中学（台北市）

4つの学校に2クラスごとに分かれ、11月8日（火）をメイン日とし、一人一台タブレットを使ってGoogle Meetによるオンライン交流を行った。各クラス5人～6人のグループに分かれて以下の日程で事前打ち合わせも併せて3カ月間にわたり交流を行った。

11月8日（火）は、3年生は通常授業、1年生は交流場所確保のため休業日とした。

(3) 日程

4月～5月上旬	交流校および交流日の決定 交流校ごとのクラスの決定
8月～9月上旬	台湾交流係の職員顔合わせおよび打ち合わせ（オンライン）
9月中旬～11月	生徒グループ分け 交流内容の決定・準備【生徒】
11月8日（火）	オンラインメイン交流日 午前グループ（1組2組3組5組） 10:00-12:00 午後グループ（4組6組7組8組） 14:00-16:00

(4) 参加者 上田高校2年生8クラス（309名）

(5) 実施内容

オープニングセレモニー（メインルーム）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校長挨拶 ・ 生徒代表の挨拶 ・ 学校紹介（事前に作成したビデオの視聴、またはプレゼンテーションの実施）
メインセッション（グループに分かれて交流）
<ul style="list-style-type: none"> ・ アイスブレイク： <ul style="list-style-type: none"> Two Facts and One Lie about Me Quiz about Our School ・ グループで決めたトピックについてディスカッション交流 （日本語・中国語講座、おりがみ・あやとり・たこ焼き作りなど日本の文化を体験してもらう講座、学校のユニークな校則・食文化・食事・班活・COVID-19についてなど、文化・教育・グローバル課題について自作のスライドや動画を共有しながらプレゼンテーションを行った。） ・ 質疑応答 ・ フリートーク ・ 記念写真撮影
クロージングセレモニー（メインルーム）
生徒お礼のことば・記念写真撮影

※交流校によって、事前に、メールアドレスやインスタグラム等のSNSを交換し、連絡をとりながらグループごと自己紹介やメイン交流日の準備を行った。また、お昼休みの時間を利用して、ペアになったグループと接続テストを兼ねた顔合わせ会を行った。

IV 国際的な学び



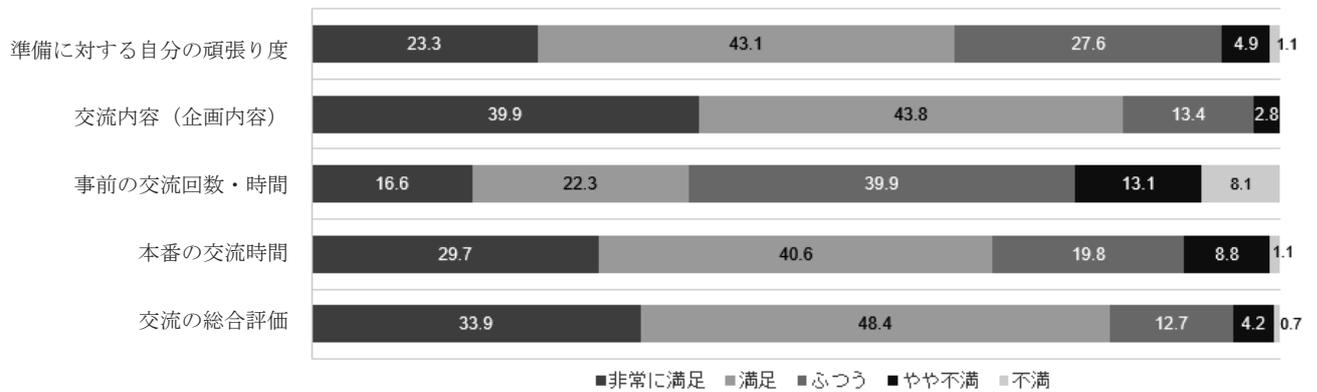
【科学工業園区実験×1組】
オープニングセレモニーにおける
学校紹介ビデオを視聴している様子



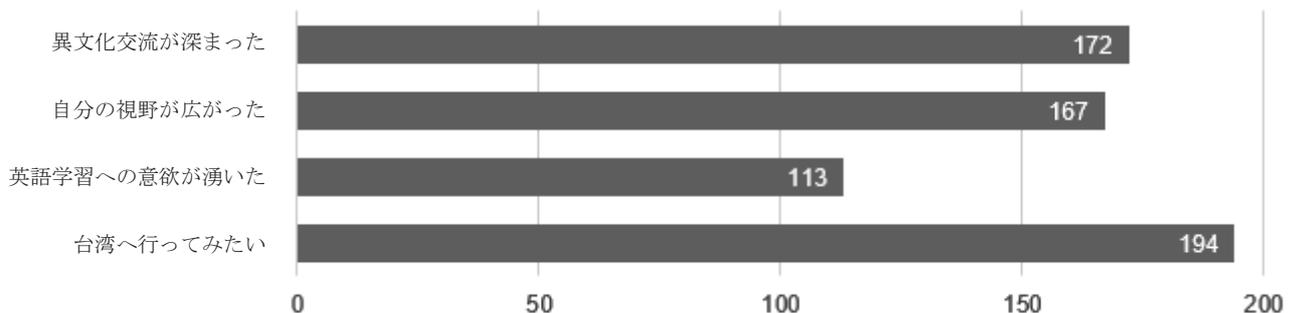
【苗栗×3組】
メインセッションにて、おりがみの折り
方を説明している様子

(6) 生徒の感想・アンケート

ア 交流後の感想



イ 交流のビフォーアフター



- ・外国の同年代の人と話すという経験がこれまではなかったもので、非常に有意義な経験となった。英語力をもっと伸ばして、日常会話ができるようになりたい。
- ・コミュニケーションの大切さと異文化の理解の重要性が知れた。また、自分の英語力に自信が持てるようになった。

(7) 評価と考察

アンケートより、異文化理解を深めることや、自分の英語が日本語話者でなくても通じるという自信を持つことができた生徒が多くいた。互いに刺激を受け学び合う機会となった。

校内 Wi-Fi 配備と一人一台タブレットの利用で、いつでもどこでも交流できるようになったため、接続テストや交流当日の動きがスムーズになり、お昼休みの短い時間でも接続テストが行えるようになった。今後は事前交流をより充実させていくことを検討したい。

IV 国際的な学び

3 ヒューマン アクト イン マニラ (令和3年度3月の報告)

(1) ねらい

- ・ 多角的な視点でグローバル課題を発見し、解決策を探求できるようになる
- ・ 交流を通して、フィリピンの住民参加型の自立的な生活向上について学ぶ
- ・ 積極的に意見交換や交流をしながら、コミュニケーション力をつける
- ・ 様々な立場での役割を学び、キャリア形成における視野を広げるプログラムを通して、異文化理解、多文化共生、国際関係など多角的な視点でグローバル課題を発見し、課題を分析し、解決策を探究出来る人材を育成する。

(2) 概要

- ・ 3月の4日間において、現地のビデオ映像を見たり、オンラインテレビ会議システムでフィリピンとリアルタイムでつなぎ、NPO 法人アイキャンのスタッフや住民の方との交流を通して、フィリピン住民参加型の自立的な生活向上について学ぶ。積極的に意見交換や交流を行う。

(3) 日程

事前研修 (基礎理解) (2月中旬 講師オンライン講演会)

オンラインセッション (2022年3月17日~20日の4日間 オンライン開催)

(4) 参加者

上田高校9名 (1年9名) 篠ノ井高校1名 (2年1名) 須坂高校5名 (2年1名 1年4名)

(5) 実施内容

3月17日 (木) 12:00-15:00	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリエンテーション (研修概要、フィリピン概要、自己紹介等) ・ アイキャン・フィリピン人スタッフとの交流 ・ アクティビティ①
3月18日 (金) 12:00-16:00	<p>1、パヤタスごみ処分場</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ごみ山からの健康被害や貧困に対し、母親たちが協力して運営する住民組織から学ぶ ・ ごみ処分場周辺に住む人々のプロジェクト事業地と背景紹介 (ビデオ・パワーポイント) ・ 地域散策→家庭訪問 (ライブ中継) ・ 住民組織 (SPNP・PICO) 紹介、インタビュー (ライブ中継) ・ フェアトレード商品説明、販売
3月19日 (土) 12:00-16:00	<p>2、路上の子どもたち</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 貧困問題とそこで奮闘している元路上の青年たちから学ぶ ・ 路上の子どもたちのプロジェクト事業地の紹介 (ビデオ・パワーポイント) ・ ブルメントリット地域散策・家庭訪問実施 (ライブ中継) ・ 「子どもの家」の子どもたちの紹介、インタビュー ・ カリエメンバー紹介、アクティビティ②
3月20日 (日) 12:00-16:00	<p>3、世界の課題解決に取り組む日本人</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 様々な立場から世界の課題解決に取り組む日本人の話聞き、キャリア形成における視野を広げる JICA フィリピン金塚匠氏、リコー赤堀久美子氏を迎え、講演及び質疑応答 <p>4、ふりかえり</p>

(6) 生徒の感想・アンケート

- ・ 今回この機会に現地に住む人々の声や心を直に聞き、直に訊く事ができたのは私の平和ボケしたようなこの価値観を変えてくれた。今私が聞いた声は、心は、紛れもない当事者である、実在する人々のものであるのだと。向き合うべきものであるのだと。先進国に生まれた私には発展途上国支援をする責務があると思った。
- ・ 将来は今のところ国際関係の仕事に就きたいと思っています。「海外で働きたい」という志望はあったけれど、どこかで「自分には無理」と考えていました。でも JICA の方のお話を聞いて、無理してでも自分が楽しいと思うことをしようと思いました。

(7) 評価と考察

- ・ オンラインではあるが現地の街中や施設を中継していただき、リアルタイムで様子を見たり質問に答えていただいたことで、想像以上に厳しい環境を目の当たりにし、生徒間でも活発な意見交換をすることができた。
- ・ 向き合った現実を変えようと、別の形自分のできる範囲で行動した生徒が増えた。

IV 国際的な学び

4 ポストスタディプログラム（令和3年度の実施報告）

(1) ねらい

ハーバード大学やMITを有する学術都市ボストンとリモートでつなぎ、グローバル社会で活躍する講師陣に対してのプレゼンテーションを通して英語による学術プレゼンテーションの手法を学ぶ。基礎研修として、ビジュアルコミュニケーション、グローバルコミュニケーションの基本を学ぶ。講師との意見交換を通じて世界の豊かな先端教養に触れ、自分から発信することの重要性を理解し、SDGsを身近なことがらと結び付けて考え、持続可能な社会づくりに貢献できる可能性を見つける。

(2) 概要

テーマ：「自分と世界と上田をつなぐ知の交流」

講義およびディスカッションテーマ：

- ①Getting to YES ハーバード流異文化交渉術
グローバル交渉術を使って、上田市（長野県）の魅力を伝える
- ②Visual Communication
ビジュアルコミュニケーションで上田市（長野県）の魅力を表現する

日程

【基礎研修】12月～2月 毎週火曜日 【ライブセッション】3月17日～20日（4日間）

(3) 参加者 上田高校12名（1年11名・2年生1名）

企画協力および研修指導：蝦名 恵氏・猿橋 あや子氏

（株）BOSTON BRIDGE to Higher Education

(4) 実施内容

1日目：ポストン白熱教室 in 上田高校

講義：世界最高峰の学びのまちボストンと将来の可能性 講師：蝦名 恵氏

2日目：講義：Getting Lost/Finding Myself

講師：ダニエル・ボアーズ氏（日本語学士・ボストン大学国際学生アドバイザー）

発表：My Dream & My Future

3日目：講義：ハーバード流 Selling Yourself 自分と世界と上田をつなぐグローバル交渉術

講師：バージニア A. グレイマン氏（法学博士・ボストン大学ロースクール教授）

発表：上田市（長野県）の魅力を伝える「野沢菜」「観光」

4日目：講義：ハーバード流デザイン学と自己表現

講師：アイシャ・デンスモア-ベイ氏（デザイン学修士・ハーバード大学デザインスクール博士課程）

発表：上田市（長野県）の魅力を表現する「パンフレット」「Map」「公園」



(5) 生徒の感想

- ・この研修に参加したことで、プレゼンテーションのスキルだけでなく学ぶことの重要性を痛感しました。このことは、大学だけでなく生涯にわたって重要なことだと思います。自ら積極的に学ぶことで、自分の考えを豊かにし、社会を良くする力に役立てたいです。
- ・これからの自分にとって絶対に欠かせないものを気づかせてもらったことに感謝しています。

(6) 評価と考察

基礎研修からライブセッション本番まで3ヶ月間の研修を行った。講師とのやり取りを通して、試行錯誤しながらプレゼンテーションをより良いものへと作り上げた。研修を通して、学際的な学びと学問とは何かを知り、自分の生き方についても考える機会となった。

IV 国際的な学び

5 海外留学・進学セミナー

(1) オーストラリア科学奨学生（ハリー・メッセル国際科学学校）の応募

ア 開催期日 令和5年7月2日（日）～7月15日（土）14日間

イ 趣旨

オーストラリア科学奨学生（ハリー・メッセル国際科学学校）（以下「奨学生」という。）は、シドニー大学内物理学財団がシドニー大学において開催する「ハリー・メッセル国際科学学校」（以下「科学学校」という。）に参加し、最新の科学知識に関する講義を受けるとともに、他国奨学生との交流を深めることを目的としている。

ウ 応募者 本校生徒1名

エ 奨学生に与えられる恩典

- (a) 奨学生認定証書
- (b) 東京・シドニー間のエコノミークラス往復航空券
- (c) 科学学校の講義用テキスト
- (d) シドニー滞在中の宿舎（奨学生は、大学等の寮に滞在する予定）

オ 募集人員

10名程度

カ 応募資格

令和5年4月現在、高等学校又は高等専門学校第2学年又は第3学年に在学見込み、若しくは中等教育学校の第5学年又は第6学年に在学見込みの者であること。

(1) HLAB 懇談会・サマースクール（オンライン）

ア 開催期日 8月15日（月）～8月19日（火）5日間

イ 内容

メンターによる講座、社会の第一線で活躍している方による講演・パネルディスカッション、大学生や社会人とのディスカッション、答えのない問いに対して参加者同士が協同して創造性を発揮するワークショップ等

ウ 参加生徒の感想

ウ 参加生徒の感想

私はHLABを通して答は一つではないことに気づきました。私は今までたった一つの絶対的な答えをどんな時も見つけようとしていたのでこの気付きは私にとって衝撃的なものでした。

また、HLABではかけがえのない人たちに出会えました。特に、共に過ごす時間が長かったHOUSE11のファミリーは、5日間しか一緒にいなかったのに信頼できて、尊敬できて、大好きな人達です。これもHLABがとにかく素敵な場所だったことを表していると思います。

私のこれからの目標は、HLABでの経験を活かして、HLABに参加したことではっきりした、やりたいことに向かって進んでいくこと、そしてHLABで学んだ考え方や、できたつながりを大切にすることです。きっと、進むべき道がわからなくなったら、最高に暑い夏に何十枚も書いた裏紙を見返して、あのとき語り合ったすべてを鮮やかに思い出すはずです。宝物をたくさんくれたHLABに私もいつかメンターとなって帰って来たいです。（2年）

V 高度な学び

1 松尾ゼミナール

(1) ねらい

SGH 指定期間から継続する、国際的に活躍できる人材を育成することを目的に、世界的に活躍する方の講演を聞く企画である。今年度は信濃毎日新聞社取締役、メディア局長の井上裕子さん（本校卒業生）をお招きし、女性の活躍をテーマにお話をいただいた。

(2) 概要

講師 井上裕子さん（信濃毎日新聞社取締役、メディア局長）

演題 「「しなやかに働き続けるための知恵—新聞人 35 年のキャリアから—」

コロナ禍につき、本部の大会議室と全 HR をオンライン会議システム Zoom を用いてつなぎ、これに向けて組織された生徒の実行委員会の司会進行により実施した。

(3) 日程

5月30日（月）5時限、6時限

(4) 参加者

全校生徒



(5) 実施内容

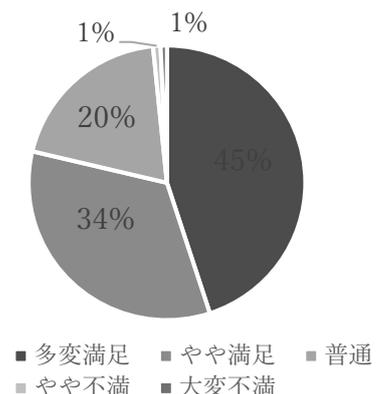
井上さんは、自らの高校、大学時代の学び、さらには「前例は自分でつくる」という信念の下で取り組んできた信濃毎日新聞社入社以降の米国留学、結婚と出産と仕事との両立、初めての管理職、コロナ禍の東京生活、といった、これまでの人生の大きな転機を語るなかで、若いうちに海外に行ってみることや、逆境を逆手にとることの重要性を指摘された。また、「しなやかに働き続けるために」として、転機を生かす、弱みを強みにする、変えられるのは「自分」と「未来」であることを強調された。

そのうえで「若い世代に知ってもらいたいこと、考えてほしいこと」として、自らの取材経験やキャリアを通じて日本のジェンダーギャップ指数の低さや選択的夫婦別姓の重要性、生命倫理と科学技術の進歩の葛藤などを指摘し、メンタルケアや自己肯定感を持つことの重要性を話された。

(6) 生徒の感想・アンケート

- ・「変えられるのは、自分と未来だけ」という言葉がすごく心に響きました。何かで失敗しても、未来を向いて頑張っていきたいと思います。
- ・「アメリカで取材をした際は、人生の中でトップクラスに勉強する機会があった」という話が印象的でした。
- ・特に印象に残ったこの講義の中の言葉は「前例は誰かが作る」ということだ。その言葉から将来に繋げたい
- ・個人が頑張ることはもちろん大切だと思いますが、出産・子育て時期の女性を行政がもっとサポートすべきだと思います。また、男性の皆さんも理解を深める必要もあると思います。

松尾ゼミナールの総合評価



(7) 評価と考察

今年度は女性の社会での活躍が話題になっていることもあり、身近な地域の代表的な企業の中核部で活躍する井上さんをお招きした。終了後の質疑応答や座談会の場でも、教室や生徒実行委員からは質問が相次ぎ、井上さんはいずれの質問にも丁寧かつ熱心に答えて下さった。終了後のアンケートでは、女性の社会活躍に関して具体的に自分なりのアイデアを提起した生徒が目立った。また、講師が新聞関係者でかつ就職後米国に留学したこともあり、就職後のキャリアアップや、講師の著作に刺激されて出生前診断について思索を深めた生徒も多かった。生徒の満足度も高かった。

V 高度な学び

2 1年生課題研究入門講座

(1) ねらい

本講座の目的は、社会で活躍する上田高校の卒業生の講演を聞くことで、生徒が①社会には様々な職業があることを知り、②いくつかの職業について理解を深め（魅力・大事な価値観・現実など）、③自分の価値観や信念とある職業において大切にされている価値観や信念を比較し進路選択に生かすこと、④講演の内容と自身の課題研究を関連させながら、社会にある課題と向き合うことであった。

(2) 概要

日程 2022年8月26日（金）第1部 12:30～13:40 第2部 14:00～15:15
参加者 上田高校1学年

講師と講演内容 本校の卒業生を講師としてお招きし、1部2部で2度講演をお願いした。講師（12名）と講演内容は以下の表の通りであった。

講師	演題
内山憲一（工学院大学教授）	外国語学習の意義、文学の楽しみ
高松寿夫（早稲田大学文学学院教授）	日本の古典文学を、学ぶこと、研究すること、教えること
西川かおり（漫画家・フリーライター）	夢を現実にする戦い方
石黒久仁子（東京国際大学国際戦略研究所教授）	ライフキャリアについて考える
田中 誠（元税理士法人タクトコンサルティング、慶應義塾大学非常勤講師）	税理士の仕事
掛川治男（元NHKエデュケーショナル代表取締役社長）	大河か、紅白か、それとも…～テレビに期待すること～
堀内哲吉（信州大学医学部脳神経外科教授）	未知なる脳の世界
唐沢 健（帝京大学アジア国際感染症制御研究所教授）	薬学部における教育と研究
松原隆彦（名古屋大学大学院准教授）	宇宙論の研究について
両角達男（横浜国立大学教育人間科学部准教授）	「学校の先生」になろう：学校の先生は授業で勝負！
吾妻こずえ（上田市職員・看護師）	保健師としての私の仕事
宮崎純一（元ユニバシアード台北大会サッカー日本代表監督）	「する・みる・ささえる」スポーツに関わる人たち

(3) 評価と考察

生徒の感想から、本講座を通じて生徒が、様々な職業に就くことができる可能性を見つけたり、講師の職業について理解を深めたりしたこと、進路についてこれまでの考えが変化したことが分かった。また、社会の課題解決に資する研究に興味を持ったり、学際的な視野を手に入れたりした生徒がいたことも分かった。社会で活躍している本校の卒業生の話を実際に聞くことで、進路選択や課題研究に対する意識を高めることができたと考えられる。

Take Action— 課題研究から発展した生徒たちの様々な自主活動



カンボジア井戸プロジェクト Facebook



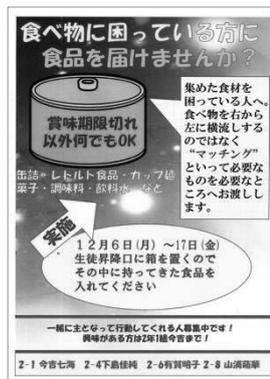
中学生学習支援ボランティア



外国籍市民
交流プロジェクト



教室の断熱 DIY



フードバンク



MeETree
-高校生のサードプレイス



商店街活性化イベント



気候危機突破プロジェクト



多世代が行き交う商店街づくりプロジェクト



エンカル消費を広めるための小学生イベント



教室の寒さを改善 断熱 DIY プロジェクト

VII 特色ある取組

校外における研究発表

- (1) エシカル甲子園 12月オーディエンス参加
主 催 徳島県教育委員会 徳島県
参加者 2年生3名
概 要
エシカル消費の推進に向けた取組について、地域にとどまらず、全国、世界をフィールドに、高校生等のしなやかな感性と発想で「新しい生活様式」を踏まえてできる実践を募集し、特に優れた取組発表について表彰する。地元の商業施設で5月に行ったエシカル消費イベントを企画・運営した3名の生徒がその取り組みと今後の展望についてまとめた資料でエントリーした。審査の結果、本選進出には至らなかったが、先輩から引き継いだプロジェクトをより発展させるために、これまでの自身の活動を振り返り探究を深める良いきっかけとなった。
- (2) WWL新潟・高校生 フォーラム (三条高校)
期 日 1月31日 (火)
主 催 新潟県教育委員会、新潟県立三条高等学校
参加者 2年生6名
概 要
特色ある各校の課題探究等の成果を英語で発信し、多様な他者と共有する体験の場を設け、より高度な学びを実現する新潟AL (アドバンスト・ラーニング) ネットワークづくりを推進する。本校からは、カンボジア井戸プロジェクトの6名が参加し、英語でプレゼンテーションを行った。
- (3) マイプロ長野県 Summit (高校生学びのフォーラム長野)
期 日 1月28日 (土) Zoomによるオンライン開催
主 催 長野県教育委員会 (協力: マイプロジェクト関東事務局)
参加者 2年生5名
概 要
自分発の探究に取り組む高校生たちの学びの祭典として、県内の各校の「総合的な探究の時間」や各教科で行われている「探究的な学び」を通して取り組んできた探究的活動の成果を学校の枠を超えて発表し、学び合い、生徒の主体的な課題の発見や解決に向けて試行錯誤しながら探究していく楽しさを共有するとともに、他者なフィードバックから自分のプロジェクトをブラッシュアップする機会にする。本校からは「商店街再生」「地熱発電」「ジェンダー平等」「発達障害」をテーマに探究を進めている2年生5名が自身の研究発表を行なった。
- (4) 未来へつなぐSDGs 高校生人材育成事業
期 日 2月10日 (金) 軽井沢プリンスホテル
主 催 G7外務大臣会合長野県推進協議会
参加者 2年生5名
概 要
G7外務大臣会合の本県での開催を契機に、県内の高校生と外務省などグローバルな機関との交流により、将来的に世界で活躍する人材を育成する。県内の高校生を対象に2回の事前オンラインレクチャー+1回の対面ワークショップを実施(「持続可能な開発目標」を達成するために、長野県からできることを自分事化して考える)長野県の高校生の意見を国内外に向けて発信する。SDGsに関わるもののうち、高校生が自分事化しやすいテーマを設定し、深堀する。
テーマ あらゆる人々が活躍する社会・ジェンダー平等の実現
省・再生可能エネルギー、循環型社会づくり、生物多様性、森林、海洋等の環境の保全

VII 特色ある取組

(5) WWL 全国高校生国際フォーラム

期 日 12月18日(日) 13:00-16:00 Zoomによるオンライン開催

主 催 文部科学省、国立大学学校法人筑波大学(WWL 幹事管理機関・SGH 幹事校管理機関)

参加者 2年生1名

概 要

全国の WWL 等などの指定に通う生徒たちが、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決に向けた学びを英語で発表するとともに、全国の高校生とアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生が、発表テーマに関する SDGs の 17 目標に関して英語でディスカッションする機会を通じてつながり、今後のネットワークを作る機会とする。本校からは 2 年生 1 名が“Ways to solve the food waste problem / 食品ロスを減らす方法”というタイトルで食品ロスについてどのような対策や工夫ができるかについての発表を行い、全国の高校生との意見交換を通して、自身の課題研究を深化させる良い機会となった。

(6) 「世界津波の日」2022 高校生サミット in 新潟

期 日 10月19日(水)～10月20日(木) 会場：朱鷺メッセ

主 催 新潟県、新潟県教育委員会、新潟市、新潟市教育委員会

参加者 2年生1名

概 要

“復興を力に、経験と教訓を世界へ”

～雪国で育まれた助け合いの精神から学ぶ防災～をテーマに、災害に対して的確な判断や避難を行うため、過去の災害や先人の教え、発生のメカニズムなどについて理解を深めるとともに、「自分の命は自分で守る」という姿勢を身につけ、自ら率先して安全を確保するための行動をとる。災害発生の可能性を減らし、また災害が発生した場合にも、その被害を最小限にとどめることを目指す。復旧・復興に向けた学校や地域の活動に進んで参加・協力し、災害が起こる前よりも災害に強い、より良い地域社会を創る。また、復興に向け、国や地域を越えて協力を行う。以上を目標に、地震や津波などの災害から国民の生命、身体、財産の保護、国民生活及び国民経済に及ぼす影響を最小化できる国土強靱化を担う将来のリーダーの育成と、世界各国の「きずな」をより一層深めることを目的に開催された。海の面していない健からの参加者は少なかったが、自然災害について研鑽を深められた。

(7) 国際ゼロカーボン会議 2023

期 日 2月8日(水)～9日(木) Zoom ウェビナー開催

主 催 長野県環境政策課 一般社団法人長野県環境保全協会

参加者 2年生1名(実行委員として参加)

概 要

長野県は、フィンランド共和国北カルヤラ県と林業、再生可能エネルギーなどの分野において協力関係を促進・強化することを目的とした覚書を令和元年度に締結しています。覚書に基づく取組の一つとして、長野県とフィンランドの大学・高校などに参加を呼びかけ「国際学生ゼロカーボン会議」を開催することになった。当会議は、長野県及び北カルヤラ県の学生はもとより、世界各地の同年代がつながり、人類が直面している気候変動や環境問題について共に学び、共に解決策を考え、行動を起こすきっかけとなることを目的としている。本校生徒は、この会議の実行委員として参加した。



WWL 全国高校生国際フォーラム



国際ゼロカーボン会議

松本県ヶ丘高等学校

1 カリキュラム開発

(1) 学校設定科目「探究」(探究科)

探究科に学校設定科目「探究基礎」・「探究実践」を置き、「総合的な探究の時間」にプラスして卒業までに7単位探究活動を行う。令和4年度入学生からは、普通科1年次にも「総合的な探究の時間」を週2単位設定した。すべての教科に「探究」の横軸を設定し、授業を展開する。

(2) 進学型単位制の試行

1年生の英語と数学を少人数講座にしたほか、希望者による「英検準1級講座」と「小論文講座」を火・金の放課後に設定した。「英検準1級講座」は、学校独自雇用のALTがオールイングリッシュで担当するもの。また小論文講座は、本校卒業生へ業務を委託し、松本市内や東北の被災地等、各地でのフィールドワークを通して、実体験に基づいた小論文の作成を指導するもので、単なる受験対策ではなく、生徒が物事を深く考えるようになるきっかけとなり好評であった。これら2つの講座は改善点を生かして次年度も実施する。

2 より深い学び(探究的な学び)

(1) 松本市×縣陵＝「信州学」【1年】

地域の課題を見つけて解決に向けて探究する「信州学」を松本市の協力を得て年間を通じて行った。松本市に探究活動の窓口を置いていただき、スムーズに各部署へつないでいただいた。

4月28日(木)	探究科1年:松本市内ロゲイニング(市内の指定した場所を制限時間内に訪問し、仲間と協働的に地域の課題を発見する)を実施。
6月9日(木)	探究科1年:松本市役所の総合戦略室・地域づくり課から松本市の現状・課題についての説明。
夏休み	探究科1年:松本市の課題について探究するため、グループによるフィールドワークを行い、地元企業へのインタビュー等を実施。
10月13日(木)	探究科1年:「信州学」中間発表会ポスターセッション。探究科2年生が1年生の発表に対して助言を行った。
11月9日(水) ～11日(金)	普通科1年:県の東・北部方面へ出かけ、コース別でフィールドワークを実施。コース別に探究テーマを設定し、新聞形式で探究成果を報告。
12月13日(火)	探究科1年:「信州学」発表会。松本市役所職員約30名が参加。ポスターセッションにより、これまでの探究の成果を発表。
2月9日(木)	普通科1年:「信州学」発表会を実施。

(2) 「信州学」県内東北信研修【1年】

信州学の一環として、3日間の県内研修を実施。班ごとにテーマを決め、長野、上田、飯山等で取材活動を行い、夜ホテルにて新聞を作成。2日目の午前中には、取材結果をプレゼンテーション形式で報告し合う。午後は長野市内でのロゲイニング、3日目は松本市内でのフィールドワークを実施し

た。コロナ禍で東京研修の代替として昨年から実施しているが、地域を題材とした探究活動により、2年生の個人探究に向けて生徒が主体的に考え、行動できるようになってきている。

3 国際的な学び

(1) 「個別最適な海外研修」への転換

コロナ禍により海外研修が実施できない状態であるが、今年度後半、個人での海外留学は可能になっている。この機会に海外研修の在り方等について検討し、探究科については集団を引率する海外研修から、個人の探究テーマに沿って、各自が研修先を決定する「個別海外研修」に方向転換した。

これまで生徒は、学校が設定する海外研修2コースのうち、どちらを選ぶかということが関心事になりがちであったが、個別研修になったことや、海外だけでなく、国内での個人研修も可能としたことで「何のために」「何をしに」「どこへ行くか」を主体的に考えるようになった。

本年度は試行的な面も多いが、次年度以降の着実な実施に向け研究を重ねていきたい。

(2) 松本市内ガイド研修及び羽田空港研修

個別海外研修に向けた事前学習の一環で、松本城など市内観光地を外国人とまわり、英語でコミュニケーションをとる機会を設定したほか、初めて1人で海外へ旅立つ生徒も多いことから、実際の空港での事前研修を行った。出入国にあたってのシミュレーションや、現地空港に到着したことを想定した外国人スタッフとの英語でのやりとりや、空港施設見学等を実施した。

(3) 多文化共生講座

NPO 法人中信多文化共生センターと連携し、1年生の英語の授業及び2年生の異文化理解等の講座において、外部講師による多文化共生講座を行った。代表である信州大学の佐藤友則教授の講義に加え、実際に松本市在住の外国人の皆さんに授業に入ってもらい、自身の体験を語ってもらうとともに、生徒と意見交換を行った。

(4) 外部講師による講演

全校を対象に、NHK 解説委員の二村伸氏（本校28回卒）をお招きし、ロシアのウクライナ侵攻を例に、戦争とジャーナリズムについて講演を行った。講演後、希望者で二村さんを囲んで座談会を行い、「メッセージのマーケティング」「ジャーナリストの倫理観」などをテーマに話し合った。

同じく本校卒業生の紀行作家・斉藤政喜さん（シェルパ斉藤さん）による図書館講座を実施。世界をバックパック1つで旅してきた体験談を、著作物を紹介しながらお話いただいた。

また国際探究科の生徒を対象に、NPO 法人アースワークソサエティ代表の大谷映芳さんの講義を実施し、発展途上国における医療・教育支援などの国際貢献について、ご自身の体験からお話いただいた。

(5) 海外留学・留学生受入れ

現在、スペイン（バルセロナ）と中国（広州）から1年間の長期留学生を受け入れている。今後も留学生の受け入れは積極的に行っていく。

マレーシアのテイラーズ大学と指定校推薦協定を結び、海外進学個別説明会を実施した。3年生1名が受験合格し、来年度からの進学を予定している。

4 高度な学び

(1) 金沢大学と連携した海洋実習

金沢大学環日本海域環境研究センター、および一般社団法人 能登里海教育研究所等との連携により海洋実習を実施。能登半島九十九湾で実習を行った。

この分野の最新研究や、海の生態系の特徴などを網羅的に学び、生徒自身が水界生態系に関する課題設定を行い、能登半島における2泊3日の海洋フィールド実習でその課題についての実験、検証を行った。実施は2年目となるが、前年度参加した2年生が、1年生グループのメンターとして参加し、指導したほか、学校と現地をオンラインで結び、学校でも実験を行い共有する等、様々な形で生徒が参加した。参加した生徒が県主催の課題研究発表会で成果発表を行い、審査員特別賞を受賞した。

(2) 本格的学会での発表

日本動物学会中部支部大会へ参加。高校生の中で最優秀賞を3本受賞。能登での実習成果を発表し、大学の先生方から、生徒の探究活動に取り組む姿勢について評価していただいた。

5 主体的な学び

(1) 長野県高校生会議

長野県内の高校生が、高校生活に関する疑問や興味関心を共有し、熟議を通して考えを深め、発信するもので、探究科の3年生が主催した。今回は、今年度から必修となった「総合的な探究の時間」をテーマに、県内の高校8校から30名が参加して意見交換を行った。指導する教員への改善の提案など、やらされ感なく、夢中で取り組める探究活動とは何かについて率直な意見が出された。

(2) 「まちなか文化祭」の開催

松本市内の高校の生徒会役員が連携して「松本市全体で文化祭」を行う構想を企画。共同で「折り鶴モザイクアート松本城」を制作し、各学校巡回展示するとともに、松本駅改札での展示、松本マラソン開会式でのお披露目など、松本市のバックアップもあり、盛り上げてもらった。

6 その他（特徴的な取組）

(1) 異校種との連携・協働

【大学対象】

- ・プレゼンテーション道場@信州大学：探究科2年生が信州大学へ出向き、各自の探究の成果を大学生に伝え、意見やアドバイスをもらう。
- ・信州大学経法学部の政策コンテスト協力：国の政策コンテストに出場する大学生のプレゼンテーションを拝聴し、高校生が意見や質問を投げかけ、大学生のプレゼンテーション向上に一役買うとともに、自身の探究力の向上につなげる。

【高校対象】

- ・松本県ケ丘高校×松本蟻ヶ崎高校：本校探究科2年生が松本蟻ヶ崎高校へ出向き、個人探究の成果を披露し、意見交換を行う。探究活動の悩みについても共有する。

【中学校対象】

- ・清水中学校探究アドバイス：探究科1年生が清水中学校へ出向き、中学生の探究発表についてアドバイスをを行う。

(2) プラットフォームを活かした取組

- ・ 県議会議員との意見交換会

校長会が主催する「主体性を育む交流会」に参加した本校生徒4名が、校則の見直しやICTの活用等、交流会で出た意見をまとめ、県議会議員に向けプレゼンテーションし、その後意見交換を行った。今年度はさらにその結果を生徒たちが職員にフィードバックし、提案を行った。

(3) 成果の普及

本校が先進的に取り組むICT活用や探究活動について多くの学校から視察いただくことで、第三者の目で、再度自校の取組を振り返ったり検証したりする機会となった。

- ・ 県内からの視察：高校6校、小中学校研修1校
- ・ 県外からの視察：三重県4校、宮城県2校、広島県2校、兵庫県、岐阜県、静岡県各1校
- ・ 教育委員会視察：広島県教育長および教育委員会事務局、青森県教育庁高校教育課、栃木県教育委員会総務課高校再編推進担当、三重県教育委員会高校教育課

(4) 先進校視察

本校の取組をさらに深化させるべく、探究活動で知られる学校や、IB校への視察を精力的に実施した。生徒に主体的に学習活動・探究活動に取り組ませるカリキュラム開発や、全職員で探究活動を進めるための基盤づくり、またSSHやIBの手法をどう探究活動に活かすか、視察成果を本校に還元するための研究が若手教員を中心に行われている。視察先は以下のとおり。

- ・ 探 究：宮城県仙台第三、山形県立山形東、神戸大附属中等教育学校、立命館宇治
- ・ SSH校：福井県立若狭、福井県立高志、福井県立武生、滋賀県立膳所
- ・ IB校：宮城県仙台二華、山梨県立甲府西、東京都立国際、東京学芸大附属国際中等教育学校、広島叡智学園中学・高等学校

連携校における取組

須坂高等学校

1 カリキュラム開発

文理融合の科目設定までには至っていないが、今年度から「リベラルアーツ型単位制」を導入し、3年生の選択科目として「自由選択(1単位)」を設け、受験に必要な科目にとらわれない選択ができるようにする。将来的には、ここに文理融合型の科目の設定の余地がある。

2 より深い学び(探究的な学び)

「総合的な探究の時間」(2年生月曜日6, 7時間目)

個人探究+グループ探究で、生徒は個人またはグループを選択して取り組んでいる。

7月「テーマ発表会」、10月「中間発表会」、1月「最終選考発表会」を経て、3月に「探究発表会」として、代表者による全校発表を行う予定である。

3 国際的な学び

「台湾の姉妹校(羅東高級中学)とのオンライン交流」

今年度は年間7回行った。また、韓国梅香女子情報高校とも2回、同様の交流を行うことができた。全体を通じてのべ300人以上の生徒が関わる活動となっている。

「SAC(須坂アカデミックチャレンジ)2022」

今年度3回目で、11月に1年生全員を対象に実施した。

背景の異なる6か国出身のメンター(講師)による対面のワークショップ、米国ハーバード大学の現役生とのオンライン交流、同大学卒業生によるオンラインワークショップと、盛り沢山の内容で、3日間全て英語による授業を行った。



4 高度な学び

「哲学対話」

年2回(7月, 9月), 1年生と2年生を対象に対話を大切に活動を実施。7月は学年別, 9月は学年を超えた縦割りで行った。

5 主体的な学び

「須坂市立小山小学校 英語授業交流」

9月~12月, 1, 2年生希望者48人が参加し, 小山小学校の5, 6年生それぞれ2つのクラスを訪れ, 英語授業のサポートを行った。

「生徒会企画 プレ百周年イベント」

10月8日, 生徒会が中心になって, 地域の企業の協賛も得て, 翌年に控える創立百周年に向けて, 展示やフリートークを企画運営した。

「グローバル・キャリア・シリーズ」

6月～令和5年2月までの8回、希望者がJSIE主催のオンラインレクチャーに参加した。

「東京大学金曜特別講義」

前期・後期の2期に分けて、オンラインで合計26回行われた。全学年から希望者が参加した。

「古民家プロジェクト」

通年。希望者が、須坂市の町おこし協力隊員と一緒に、空き家を改装し高校生の居場所づくりに取り組んでいる。

「生徒発 気候危機突破プロジェクト」

1～2月、1, 2年生希望者が、県主催のプロジェクトでLL教室の断熱化工事を専門家の指導のもと行う。

「SAP(サイエンスアソシエーションプロジェクト)」

10月～12月、1, 2年生の希望者32名が、県主催のプロジェクトで小布施町、中野市、山ノ内町の水源の水質調査を、東大の研究者の指導も受けながら行った。

長野高等学校

2 より深い学び(探究的な学び)

1年生は課題研究の基本的な手法について1年間を通して学んだ。具体的には、ディスカッション講座、インタビュー講座、テーマ設定講座、グループ作り、フィールドワーク等、研究に必要な資質・能力を育成する講座を実施した。年度末に中間発表会を実施する予定である。

2年生は個人研究を行い、各自で課題を設定し、約9か月かけて調査・研究を行った。夏にはフィールドワーク(一部オンライン)や実験を行い、より深い調査を行った。12月に校内での課題研究発表会を行い、外部講師と保護者が観覧した。午前の部では、各分散会に分かれ、1年生が2年生の発表を聴いた。午後の部では、2年生の代表者6名が各々研究について発表した。

3年生は選択生徒を中心に課題研究活動を行い、研究成果を校内で発表した。

また、世界の台所探検家 岡根谷 実里氏を特別講師として迎え、1, 2年生の課題研究指導や講演等を実施した。



岡根谷氏によるインタビュー講座の様子



3年生校内発表の様子

3 国際的な学び

台湾国高雄市の7校と、複数回にわたるオンライン交流を行った。自己紹介、学校紹介から始まり、お互いの国の観光地について情報交換した。新型コロナウイルス感染症対策のため、台湾への訪問は叶わなかったが、オンライン交流を通して台湾について知ることができ、国際交流に興味を抱く生徒が多かった。

11月には2年生が立命館アジア太平洋大学を訪問し、現地において海外からの留学生と交流した。学校紹介と観光地紹介を英語で行った。海外からの留学生にも母国について紹介してもらい、本校生徒が質問をした。

3月には、1年生を対象としたリーダー研修を立命館アジア太平洋大学にて実施する予定である。



立命館アジア太平洋大学での交流の様子



高雄市とのオンライン交流の様子

4 高度な学び

令和4年度 信州 WWL コンソーシアム高校生国際会議に2名の生徒が参加し、「教育」と「環境」についてそれぞれ研究発表を行った。大阪大学大学院で行われた Future Global Leaders Camp (FGLC) 2022 Online に2名の生徒が参加し、より専門的で深い学びを追求した。

5 主体的な学び

動物園における動物の環境エンリッチメントをテーマに課題研究を行った3年生が、市民 ZOO ネットワーク主催のエンリッチメント大賞 2022（公益社団法人日本動物園水族館協会後援）に応募し、正田賞を受賞した。

長野西高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

学校設定科目の Active English（国際教養科2年）と Debate Discussion I（国際教養科1年）において、英語によるプレゼンテーション能力の向上を目指すとともに、価値観の相違から世界各国で起きている諸問題に目を向け、体系的、批判的思考力や、協働していく力を育むことに取り組んでいる。1年次には身近なテーマから始まり、2年次にはディベートや模擬国連を扱い、より難解で抽象的なテーマにも挑戦している。最終的には卒業論文として1人1研究を行い、校内プレゼンテーションコンテストと卒業論文集の執筆を行っている。英語での質疑応答の時間も設けることで、より双方向的な学びとなるよう心がけている。

3 国際的な学び

8月、新規 ALT の先生方との交流会に参加し、プレゼンテーションなどを通して日本の文化について紹介した。普段の英語学習の成果を実際にアウトプットする貴重な機会となった。

10月、2名の全国通訳案内士をお招きし、国際教養科1年を対象に善光寺ガイド研修を実施した。生徒たちは、実際に自分たちでガイドする際をイメージしながら熱心に取り組んでいた。生徒からは、身近な善光寺に関して新たに発見があったことや、ガイドする際に気を付けるべきことを学んだ等の感想が聞かれた。



ALTとの交流

4 高度な学び

9月、国際教養科1年を対象に信州大学教育学部の小池浩子先生と学生の皆さんによる「異文化理解」のオンライン授業（ロールプレイ）を実施した。人によって立場や状況、考えが違う中で、どうすればお互いにとってより良い結果を導くことができるか、生徒たちは悩みながらも熱心に取り組んでいた。日常生活における問題や、国際的に起こっている問題にも通ずる内容であり、貴重な経験となった。1月にも、国際教養科2年を対象に小池先生による「異文化理解」の特別講義を実施した。



特別講義の様子

5 主体的な学び

9月、国際教養科1・2年を対象に英語合宿を実施した。イギリス人講師2名を招き、1泊2日の日程で英語による授業やアクティビティを行った。1年生はコミュニケーションスキルとSDGsに関するポスタープレゼンテーション、2年生はコミュニケーションスキルとミニドラマを主に扱った。特にミニドラマは初めての試みであり、海外生活をテーマとした自作の劇を各グループが発表した。生徒からは、「英語で話すことが怖くなくなった」「英語を学ぶことの楽しさを改めて感じた」などの感想が聞かれた。

6 その他

11月に長野市のセントラルスクエアで開催された「ワールドフェスタ in 長野 2022」において、国際教養科1年の生徒がブースを出展した。「クイズで世界を知ろう」というタイトルで、クイズを通して

来場者の皆さんに国際理解を深めてもらう内容であった。英語・日本語両方で外部の方々とコミュニケーションをとる貴重な機会となった。



ワールドフェスタ

篠ノ井高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

木曾青峰高等学校新開キャンパスにおいて、「生徒の主体性を育む専門委員会・実践発表会」が行われ、生徒2名が参加した。ユースリーチに参加した体験内容を紹介した後、体験前と体験後の自身の考え方の変化を客観的に分析し、今後の探究を発展させるための方向性を示した。

3 国際的な学び

2年生10名を対象とした本校独自の海外研修（同窓会企画）を今年度は実施した。コロナ禍ということもあり、海外への渡航は断念したが、その代替として東京の浅草において2泊3日の語学研修を行った。

1日目は日本に留学している学生とのアイスブレイクの後、浅草でのフィールドワークをグループ単位で行った。

2日目は浅草でのフィールドワークを踏まえ、日本と他国の文化の共通点と相違点についてのプレゼンテーションを行った。

3日目は東京グローバルゲートウェイにおいて、海外に渡航した際に想定されるシチュエーションで英会話をを行い、フィードバックをってもらうことで語学力の向上を図ることができた。3月には校内の探究発表会において、研修成果の報告を予定している。

台湾国立中央大学附属中歴高級中学とオンライン交流を行い、2年生3名が参加した。お互いの国の食文化や祭文化について紹介しあい、漫画やアニメなどの共通の趣味を通して、海外の文化を知るだけでなく自国を振り返ることで、見識を深めることができた。



浅草・雷門にて



プレゼンテーション



台湾の学生と記念撮影

5 主体的な学び

未来へつなぐSDGs 高校生人材育成事業へ、2年生5名が参加を希望した。G7外務大臣会合の本県での開催をきっかけとして、グローバルな機関との交流により将来的に世界で活躍する人材を育成するという目的のもとで、全3回のワークショップを行う。ワークショップの内容は、G7外務大臣会合の際に活用される予定である。

屋代高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

- ・SSH ミニフォーラム（5月～10月）での外部講師による講演等。
- ・構想相談会（6月）や課題研究・課題探究の中間発表会（8月）で専門的なアドバイスをいただく。

3 国際的な学び

- ・2・3年理数科（4月～6月）

コンピュータープログラミング演習（信州大学工学部デービッド・アサノ教授）。講義は英語で実施。

①高校数学で用いる数式や関数を、英語ではどのように言い表すのか。口頭英語による計算問題演習。

②HTMLを用いたBLOGの作成。

③Javascriptを用いたプログラムの作成。

- ・3学年理数科（4月～10月）

グループ研究のまとめスライド発表を英語で実施（5月）。上位3グループがオンラインでオーストラリアの理系高校生（Wenona School）と研究発表会を実施（6月）。

昨年、コロナで海外研修が中止になった理数科生徒に国際的な経験をさせる目的で初めて実施し、今年で2回目。事前交流の意味合いで互いの興味や趣味などのアンケートを事前に行い、お互いの情報を見ることができるような内容。発表内容の要旨も事前に送り合い、理解しやすくなるよう工夫した。



- ・信州WWLコンソーシアム高校生国際会議（6月）

「水・衛生」の分科会で1グループが発表し、ディスカッションを実施。

- ・1・2年理数科（英語での受講、質問、サイエンスダイアログ日本学術振興会）（12月～2月）

日本で研究している外国人研究者をお招きし、研究内容を英語で講演。理解を深めるため英語による質疑応答を実施。

5 主体的な学び

- ・日本地球惑星科学連合（JPGU）大会（5月）
日本気象学会や日本宇宙生物科学会など50を越える学会が一堂に会し研究成果を発表しあう「日本地球惑星科学連合2022年大会」でポスター発表。
本校生徒の発表テーマ：「長野気温予想～過去の経験に基づく予報～」(奨励賞受賞)
- ・マifesta（8月）
数学への興味関心を高めることを目的として、全国から多数の高校生が集まり、数学に関する生徒の取組（課題研究）について研究発表。
本校生徒の発表テーマ：「N進法の変換」, 「出生数から必要な保育所等の数を予測する」
- ・日本植物学会高校生ポスター発表（9月）
- ・長野県学生科学賞（9月）
- ・長野県統計グラフコンクール（9月）
本校生徒の発表テーマ：「おきろ！居眠り大調査」（知事賞受賞）統計グラフ全国コンクールに出品
「日本人なら米を食おう！」(SBC賞受賞) 統計グラフ全国コンクールに出品
- ・千葉大学理科研究発表会（9月）
本校生徒の発表テーマ：「微生物燃料電池の実用化に向けて」（奨励賞受賞）
「生分解性プラスチックの実用化」
- ・英語班 長野県高校生英語ディベート大会（10月）優勝
第17回全国高校生英語ディベート大会出場
- ・信州サイエンステクノロジーコンテスト 科学の甲子園長野県予選（11月）
屋代Aチーム（2年理数科）総合優勝（筆記7位 実技2位）
「第12回科学の甲子園全国大会」（3月につくば市で開催）長野県代表
屋代Bチーム（2年普通科）4位（分野別：数学分野，情報分野1位 筆記総合1位 実技5位）
屋代Cチーム（1年理数科）18位（筆記17位 実技15位）
- ・課題探究「屋代高校前駅の活性化，イルミネーション計画」グループ
第7回長野県高校生プレゼンテーション大会（12月）最優秀賞受賞
- ・科学に親しむ教室（7・8月）や東北サイエンスツアー（8月）への参加。

上田染谷丘高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

(1) 概要

本校では「総合的な探究の時間」を使い、生徒一人ひとりが自らの興味や関心から問いを立てて調査・研究をしたり、また地域の中に入りプロジェクトを企画・実行をする中で、自らの適性や進路について深く知ることを目標として探究活動を行っている。本校の探究学習が、何かアクションを起こすことを大切にしている理由は、本校の校歌の中にある「いざや 学びて 遊ばまし」の精神を大切に、一人ひとりの「好き」から生まれる学びを大切にしたいという願いが込められている。各学年のテ

ーマは以下の通りである。

【各学年のテーマ】

- 1年次：自分を知る・地域を知る・社会を知る
- 2年次：地域のヒト・モノ・コトとつながる
- 3年次：自分と社会をつなげる進路選択

(2) 今年度の取組

【1学年】

- 4～6月 自分史作成（自分を知る）
- 7月29日 SDGs Day
- 8～10月 SDGs 探究（社会を知る）
- 11～2月 地域探究（地域を知る）



1学年：SDGs 探究（講演会⇒探究活動⇒発表）



【2学年】

- 4～6月 探究のテーマ設定（個人 or グループ活動：100 グループ程度）
実験・調査・アンケート・地域に出て活動する企画等を考える
- 7～12月 企画書に沿って活動 夏休み：中間報告資料の作成
探究活動中間報告会、修学旅行へ向けた平和学習
- 12～2月 報告会に向けて発表準備
1学年との交流会 代表：マイプロジェクト参加



地域探究（社会人講演会）



地域探究プレゼン



まあみん音楽教室さんと一緒に作曲

- 3月 探究成果最終報告会 春休み：探究レポート作成



イベント企画のために長野大学生と意見交



心理学について長野大の先生に学ぶ活動



ドナーへの理解を深め隊インタビュー活動



淡水生物学研究所でのフィールドワーク



無言館×灯キャラバンプロジェクト



沖縄修学旅行：平和の礎『平和学習』

3 国際的な学び

(1) 概要

本校には普通科と国際教養科が併設されており、国際交流などの活動を通して、国際社会の諸問題に対する思考力、情報を的確に発信するためのプレゼンテーション能力、実践的なコミュニケーション能力を養い、豊かな国際感覚を育む教育を行っている。コロナ禍において対面による国際交流が制限されていたが、今年度は外国人学生を招いての交流を複数回行うことができ、4年ぶりに海外語学研修の実施も可能となった。リモートによる交流も昨年度に引き続き行い、国際教養科だけでなく普通科の生徒も意欲的に参加する様子が見られた。

(2) 今年度の主な取組

・長沼スクール東京日本語学校の留学生とオンライン交流（5月，7月，9月，12月）

本校生徒有志が、アメリカ，フランス，イタリア，ギリシャ，スペイン，フィリピン，ドイツ，カナダ，香港，タイ，中国，台湾，観光，モンゴルからの留学生と日本語を使って互いの文化に関する国際色豊かな会話を楽しんだ。



長沼スクール東京日本語学校の学生と交流

・台湾の高校生とのオンライン交流（6月，1月）ポストカード交流（2月）

国際教養科1・2年生が、姉妹校である台湾國立華僑高級中等学校の生徒と、新年の挨拶でポストカードを送り合った。また、本校生徒有志が姉妹校生徒とオンラインを通して互いの文化や趣味について紹介し合い交流を深めた。1月には、国際教養科2年生が台湾台中市立中港高級中學の高校生とオンラインで交流し、修学旅行で体験したことをプレゼンした。



台湾の高校生とオンライン交流

・長野ビジネス外語カレッジの学生との交流（対面）（7月）

長野ビジネス外語カレッジの学生10名（アメリカ・ブラジル・アルゼンチン・フランス）と国際教養科1年生41名が対面で交流をした。グループトークでお互いのことを知り合った後に、日本の伝統的な遊び（はないちもんめ・だるまさんが転んだ）をしてさらに親睦を深めた。



長野ビジネス外語カレッジの学生と交流

・オーストラリア高校生とのオンライン交流（6月）

本校生徒有志が、オーストラリアのブリズベンにある幼・小・中・高一貫校 Calamvale Community College の生徒7名と、互いの学校や文化について英語で紹介し合い交流した。

・MANABI 外語学院の学生との交流（対面）（1月）

国際教養科2年生40名が、MANABI 外語学院の学生50名（ベトナム・タイ・中国など）と交流し、修学旅行の体験をプレゼンテーションした。



MANABI 外語学院の学生と交流

・台湾語学研修（3月実施予定 8泊9日）

本校有志15名が3月に台湾の中国文化大学において中国語と英語の語学レッスンを受けるとともに、姉妹校の国立華僑高級中等学校の生徒や中国文化大学の学生との交流を通して語学力と異文化コミュニケーション能力を磨く。

野沢北高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

普通科・理数科ともに探究的な学びを展開しており、本校全教員で探究の学びをサポートしている。

普通科は毎年改変している本校オリジナルテキストを用いて、1年次「探究基礎」で様々な視点から物事を見ること、人と協力して物事に取り組む経験を大切に、多様な活動を行っている。1年後半から始まる「探究」では5つのカテゴリーに分かれ、各グループで仮説検証を行っていく。探究発表会以降は個人探究を続け、3年次に論文を完成させ、その後は個人の進路に向けた研究や進学後の探究的な学びについてのリサーチ等を行っている。

◆普通科では、今年度より problem based learning（以下 PBL）を新たに取り入れた。

これまで project 学習の手法をもとに演繹的な探究学習を行ってきたが、教員たちで PBL 学習会を開き学んだ結果、教員も生徒たちも帰納的な探究の仕方を身に着けることが可能になり、両者を合わせることで、より多角的に物事を捉えられるようになったと感じている。

探究発表会の投票結果上位グループによるプレゼンテーションコンテストを実施し、外部サポーターの方々からも講評をいただいた。コロナ禍ではあったが、全校の前で発表することで自分たちの探究の成果をより明確に表現し、自信につながった。

- ・ 5月プレゼンテーションコンテスト全校参加
- ・ 6月2学年探究『『本物』に尋ねる』インタビュー方法ワークショップ実施
- ・ 7月1学年カードゲーム「SDGs de 地方創生」ワークショップ実施
- ・ 12月1学年探究基礎「SDGs 地域課題調査」ワークショップ実施
- ・ 12月2学年「効果的なプレゼンテーションの仕方」講座実施
- ・ 1月2学年探究発表会



◆理数科では平成6年度創設以来、「課題研究」において自然科学分野の事象を研究（探究）している。オリジナルプリントを使用し、1年前期では科学的探究の学びの基礎を作り、1年後期ではミニ探究として研究の流れを学んでいく。2年次末まで物理・化学・生物・地学・数学の5分野に分かれて、グループで協働し研究を深めていく。2年次に理数科課題研究発表会を行い、普通科同様論文にまとめていく活動を展開している。3年次も論文や進路に関する研究を進めている。

- ・11月…1・2年「佐久地域における防災」講演会開催
- ・12月…1・2年信州大学出前講座「ダンゴムシ、オオグソクムシ、ミナミコメツキガニの心理学！」講演会開催
- ・1月…2年理数科課題研究発表

☆今年度は、普通科・理数科共に発表会を地域の中学生・教職員に配信した。小中高の探究の連携も今後の視野に入れている。

3 国際的な学び

今年度、コロンビア大学の先生との交流を通して、生徒自身の探究について英語でプレゼンテーションをしたり、意見交換をしたりした。また、気候変動に興味を持ち、地域でゼロカーボンについての取組をしている生徒がつばさプロジェクトの一環でオランダ・スイスへ研修に行き、今後情報共有や報告会を行う予定である。短期留学も含め4名（2月現在・3月も数名が予定している）が留学した今年度は、海外に目を向け、積極的に様々なことに挑戦する生徒たちの姿が多く見られた。

- ・5月…インターナショナルカフェ信州大学オンライン3名参加
- ・6月…国際会議4名参加
- ・7月…留学キャラバン海外進学留学講座2名参加
- ・7月…長野県高校生英語レシテーションコンテスト生徒4名参加2名決勝進出
- ・12月…信州つばさプロジェクト「サステナビリティ探究コース」オランダ・スイス研修1名参加
- ・1月…未来へつなぐSDG s 高校生人材育成事業ワークショップ2名参加
- ・年3回コロンビア大学の先生とオンラインセッション6名参加

☆今年度留学を経験した生徒が多かったため、来年度1・2学年合同で体験報告会を開く予定である。



4 高度な学び

理数科において課題研究や進路選択の一助となるよう、最先端の専門機関を訪問し、実際の研究や観測を見学したり、卒業生のお話を聞いて科学分野の研究の魅力を体感したりすることができた。また佐久地域で作られた製品が世界で活躍していること、科学が日々の暮らしを支え役立っていることを理解し、科学的見地を広めることができた。

- ・6月…県防災セミナーで「浅間山の火山活動」について生徒発表
- ・7月…エネルギー加速器研究機構・JAXA 筑波宇宙センター研修見学（2年生）
- ・12月…ミネベアミツミ株式会社見学・うすだスタードーム天体観測実習実施（1年生）
- ・3月…筑波大学・JAXA 筑波宇宙センター研修見学予定（1年生）



5 主体的な学び

他校の生徒との交流の中で探究の在り方を考え、自発的に活動する姿が見られた。また積極的に地域の方とも交流し、地域課題の問題意識を高め、自分たちに何ができるかを考え、取り組む姿が見られた。

- ・ 7月…佐久平地域まるごとキャンパス1・2年生数十名参加
- ・ 7月…マイプロキックオフミーティング4名
- ・ 10月…中間報告会2名，12・1月…マイプロ2名参加
- ・ 8月…高校生会議1名参加
- ・ 8月…H-LAB Obuse 1名参加

6 その他

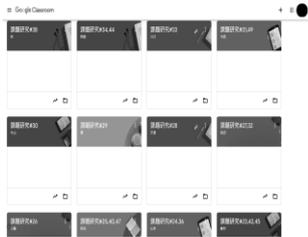
「未来の学校」構築事業にて、「卓越した探究的な学びを推進する高校」の実践校として県より指定を受けて3年目である。佐久地域コンソーシアム（仮）構築に向け、昨年より外部サポーターの方々に様々な活動に参加・助言をいただき、生徒たちの大きな刺激となっている。今年度も新たな外部サポーターの方に加わっていただいたが、生徒・教員・地域の方々とより一層の連携を目指し、さらなる探究的な学びを進めていきたいと考える。

諏訪清陵高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

・ 課題研究に徹底して取り組めるカリキュラムと環境の研究開発

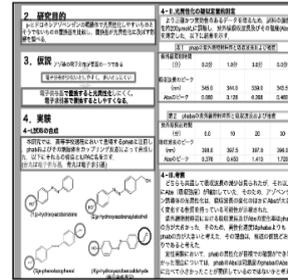
自らが学びたいことを主体的に学習したり，疑問に感じたことを自主的に解決したりする時間として，学校設定科目「課題研究」を各学年に1単位設置。1，3学年は放課後，より深い探究活動を目指す生徒を対象に，課題解決に向け，グループで協働的，能動的な活動（ゼミナール活動）を行った。令和3年度から2学年では必修とするにより，全生徒が探究活動を経験できるようにした。具体的な実施方法としては，1，2学年全員が取り組む学校設定科目「問題発見」（2単位）での探究活動を踏まえ，物理・化学・生物・地学・数学分野や人文・社会科学等，身近な自然現象や社会課題から研究課題を設定。また，全職員をグループの担当教員として配置。担当教員と生徒は金曜7限の対面のやりとりの他に，グーグルクラスルームを基盤とした学習空間「清陵ネット」内でやりとりを行った。ポスターや研究要綱といった成果物を共同編集で作成したり，チェックしたりすることで，丁寧な研究指導体制を構築することができた。授業内での中間発表や，10月の「課題研究中間発表会」において，各グループの研究活動について，全員で徹底的な質問，助言，討議を行い，研究活動をより質の高いものにした。最終的には2月の「課題研究発表会」で，全グループがポスター発表，代表グループが口頭発表を実施する。成果は各種コンクール等でも発表する予定である。



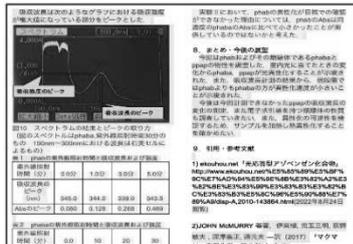
研究グループ毎に
クラスルームを設定



成果物の共有や連絡



共同編集集中のポスター



共同編集集中の研究要綱



10月課題研究中間発表会①



10月課題研究中間発表会②

4 高度な学び

・2022年12月4日(日)～5日(月) 信州大学遺伝子解析講座

信州大学上田キャンパスにおいて、松村英生教授・小笠原寛准教授に実施していただいた。

参加者は15名で、県内からは篠ノ井高校、伊那北高校からもWWL連携校として参加があった。テーマは昨年度と同様の「16SリボソームDNA配列を用いた環境中の菌叢(きんそう)解析」。初日の前半は、DNA解析の歴史や理論を講義していただいた。後半には実験室に移動して、グループ毎に持参した環境水から細菌のDNAを精製・培養した。3人の大学院生のみなさんにマイクロピペットの使い方から丁寧に指導していただいた。最後にPCR装置に試料をセットして1日目は終了。2日目はまず培養が適切に行われたのかを電気泳動法でチェック。最後に、細菌の種類や量をデータ化するためにDNAシーケンサーにかける。一般的にはDNAシーケンスは研究室に設置した大型装置で行うとのことだが、宇宙ステーションでの実験が可能にほど小型の装置が開発されたことで、サンプルを研究室に持ち帰ることなく、現地での解析が可能になったとのこと。松村先生も研究に使用しているという最先端の手法である。今回はナノポア社のMinION(ミニオン)という装置を用いて遺伝子の解析を行った。解析に少々時間がかかるとのこと、解析結果を待ちながら施設内を見学した。

繊維学部の遺伝子実験支援部門には、生物学の研究や解析に必要な機器がほとんどそろっており、また、危険な病原菌を扱うことのできる特殊な部屋も完備されているとのこと、参加生徒は驚いていた。

実験室に戻り解析結果を見てみると、2日ばかりで精製・培養したDNAが、教卓上に置かれた手のひらサイズの装置で解析され、データ化されていく様子に皆感動していた。

また、データはオンラインで即時見ることができ、解析されたDNA配列をデータベースサイトで照合して細菌の種類を特定したり、細菌が何種いたのか、それらの系統樹上での位置関係はどうかなども確認したりすることができた。

実験も理論も非常にボリュームのある実習となり、学びを深めることができた。



諏訪二葉高等学校

①キャリア教育

ア)内容 課題探究「地元企業を知る」として、諏訪市と合同開催で、学校で地元企業10社20名による1年生対象の説明会を実施した。

イ)成果 ・事前に地元の企業や産業について調べ、地域経済や社会への問題関心を持って説明を聞いたため、事後に新たな質問をすることができた。
・社会人としてのあり方についても説明があり、自分のキャリアプランや生き方についても考えることができた。

5 主体的な学び

①フィールドワーク

ア)内容 総合的な探究の時間として、諏訪湖周辺の水環境をテーマとしている2年生の有志が、信州大学理学部諏訪臨湖実験所の一般公開に参加した。

イ)成果 ・自分の興味・関心を具体化させ、一層地域の課題に対する視野を広め、問題意識を高めるとともに、意欲的に探究の見通しを立てることができた。
・大学教授、学生、大学院生の研究成果のみならず、日頃の研究活動の様子や就職活動などについても質問し、将来の社会的役割を考える契機となった。

6 その他（特徴的な取組）

①中高連携事業

ア)内容 近隣の諏訪市立上諏訪中学校と諏訪市立諏訪中学校の中学生の夏期休業中の補習(受験対策)の支援に、本校3学年と2学年の教員養成系志望者19人が参加した。

イ)成果 ・卒業後の進路希望につながる活動で、自分で目標を持って取り組んだ。中学生に対し、説明がうまくできない、あるいはどこが分からないのかが掴めないなどの新たな課題を発見した。
・中学生が理解して嬉しそうな表情を見ることができ、教職希望を一層強めた生徒もいた。

②小学校の公開学習指導研究会に参加

ア)内容 キャリア教育として、諏訪市立上諏訪小学校の公開学習指導研究会に、本校3学年と2学年の教員養成系志望者9人が参加した。

イ)成果 ・共同参観授業では参加体験することもでき、研究協議会では授業担当者や信州大学教授と意見交換する生徒もいて、教職に関する課題を深めることができた。

伊那北高等学校

1 文理融合のカリキュラム開発

昨年度導入が決定した“学際コース”に関する内容の洗練を行った。“学際コース”では、文理融合の授業を目指して、国語・英語などで学校設定科目を導入し、教科等横断的な授業を行いやすいように教育課程を編成しているが、来年度は30名ほどの生徒が“学際コース”を選択することになった。

2 より深い学び（探究的な学び）

昨年度・一昨年度に引き続き、通常時間割の中で総合的な探究の時間及び理数課題研究を行った。上級生がこれまでに積み重ねてきた活動に感化されてか、今年度は生徒が非常に活発で、学校内外において生徒たちの活躍する様子が窺えた。

3 国際的な学び

東ティモールからの留学生（上智大学）2名と元大使の北原氏を招いての講演会を、LHRの時間で全校生徒を対象に行った。講演はすべて英語で行われた。本校会議室を本部として、有志の生徒約40名がその場で参加し、残りの生徒はGoogle Meetを利用して各教室で参加した。講演後の質疑応答の時間では活発な意見交換がなされた。



講演会で留学生へ質問する生徒

4 高度な学び

昨年度に引き続き、1年理数科の生徒を対象に、大学の先生をお招きして“ミニ課題研究”を実施するとともに、東京大学の今須良一教授によるCO₂の測定機を用いた実験、東京学芸大学の相原琢磨講師によ

る整数論の実習を行った。また、今年度から信州大学農学部との連携を深め、伊原正喜准教授による水素酸化細菌を用いた細菌培養実験を新たに行ったり、信州大学農学部の大学見学・実習を行ったりすることができた。今後も信州大学農学部とはさらに連携を深めていく予定だが、大学見学などに他校の生徒も参加できるよう調整していきたいと考えている。

“ミニ課題研究“はゼミ形式で行っているが、教員間の連携を密に行うために、スプレッドシートを活用して、各担当教員が生徒と行った会話の要旨を共有した。これにより、指導の統一性を図ることができるとともに、教員のスキル向上につながった。また、ゼミ形式の活動は生徒と細やかにコミュニケーションを取ることができるため、生徒の成長にとって非常に有効である。

5 主体的な学び

高校生国際会議の役員として、本校から1名の生徒が参加した。

伊那中学校の文化祭で行われた探究の時間（マインクエスト）に13名の生徒が講師として参加した。探究活動に関わるワークショップを行い、伊那北高校で行っている総合的な探究の時間や理数探究の内容を伝えるとともに、探究の楽しさを中学生に伝えるよい機会となった。

伊那弥生ヶ丘高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

- ・大学の先生方による探究ガイダンスを実施。（1，2年）
- ・2年生では、地域とのテーマ別活動の後、個人探究に取り組み、大学生も参加したピア検証を実施
- ・2年生代表者による個人探究発表会を実施。（ゲスト伊那北生による発表交流）（3月予定）
- ・次年度新2年生に向けて、テーマ別活動の後、個人探究に入る前の一段階として、高大連携による企画の下準備を整えた。

4 高度な学び

次年度予定の高大連携による探究学習の下準備ができた。

5 主体的な学び

1学年から観点別学習状況の評価の充実が図られ、協働学習やパフォーマンス活動など主体性評価につながる学びの工夫が各教科で始められている。

6 その他（特徴的な取組）

探究学習については、地域の団体のサポートを得て講師を招く形が4巡目を迎えている。アクション重視で魅力ある講師陣に恵まれている。

飯田高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

- ・1学年の総合的な探究の時間の中で、外部講師による講演と振り返りを計8時間かけて行った。概要は以下の通りである。

講師	所属	テーマ	振り返りの内容
古野香織	NPO 法人 カタリバ	ルール メイキング	講演内容を深める為の問い候補を3種類設定し、1つ選んでグループディスカッションを行う
三船功基	飯田市役所	飯田市の課題	飯田市が策定した未来ビジョン・人口ビジョンを実現するための「中期4年間に取り組む13の基本目標」の中から1つ選び、実現するためのアイデアを話し合ってみよう。
佐伯彩	八戸工業高等 専門学校	ジェンダー	質問作り
四方圭一郎	飯田市美術 博物館	飯田市の自然	現時点で探究したいと思っているテーマと何を調べたいか、どのように調べたいかを考える

- ・3学年の教育，医療系への進学を希望しているものに対するワークショップを8月に開催した。概要は以下の通りである。
 - ①教育 講師：宮下俊也先生（奈良教育大学学長） 参加者：9名
 - ②医療 講師：内藤悦子先生（健和会病院副看護部長） 参加者：13名

4 高度な学び

- ・総合研究大学院大学の「未知への挑戦～若手が語る最先端研究」事業を11月に開催した。概要は以下の通りである。

講師	テーマ
櫻井 隼	哺乳類の胚発生 ～母親の子宮内では何が起きている？～
刘 丹	中国のもう一つの顔 —内陸農村の人たちの暮らし—
窪田 雅弓	見えない放射線を可視化する
波多野 駿	研究が進むのはいつ？（私の視点：学んだことの応用，多角的に捉える，人間原理）
津村 賢宏	脳活動の計測と活用方法
萩原 淳	技術の先にある不安と期待 — AI と人間の共存共栄の先を知る —

5 主体的な学び

- ・令和4年度「生徒の主体性を育む交流会」：1学年の生徒2名が参加
- ・マイプロジェクトアワード長野県 Summit：1学年の生徒2名が参加

飯田風越高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

課題研究（国際教養科 2 学年）

1) 目的

グローバル教育のために、まずは自分たちの地域の文化、歴史、社会を学び、自分が育ってきた背景やアイデンティティを理解する。各自テーマを決めて研究し、論文を作成、プレゼンテーションを行うことを通して、問題解決能力や発信力を養う。

2) 概要

4 月～7 月 研究テーマを設定するための特別講義

- ・おひさま進歩エネルギー株式会社 伊藤緑氏
「地球温暖化を防止する再生可能エネルギー事業による地域づくり」
- ・高森町長 壬生照玄氏 「地域創生とまちづくり」
- ・飯田市企画課 小島一人氏「南信州・飯田の魅力ー市役所の仕事から見る飯田市」
- ・米澤酒造 Nigel Hay 氏 「外国人から見る南信州の魅力」
- ・飯田市歴史研究所 羽田真也氏 「歴史を知るおもしろさ」

<夏休み テーマに関する調査（フィールドワーク）>

8 月～11 月 論文作成 発表のためのスライド作成

12 月～2 月 まとめ

- ・グループ内発表 代表者決定（12 月下旬～1 月）
- ・課題研究発表会（2 月 10 日（金））（1 年国際教養科見学）

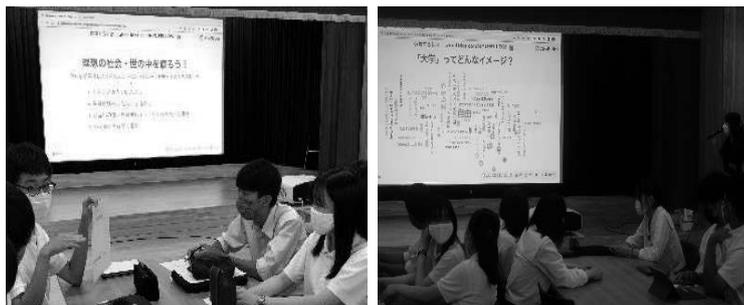
3 国際的な学び

1) English Day（国際教養科 1 学年 4 月 16 日（土））

グループごとに担当 ALT から出身国について学び、また、文化に触れた。学んだ国についてプレゼンテーションを行った。

2) FUETSU Global Camp（国際教養科 1 学年 7 月 27 日（水））*他校高校生 1 名、中学生 3 名参加

- ・海外進学志望の醸成と海外進学についての情報提供を目的に 7 月末に実施した。
- ・内容は海外大学生・卒業生（4 名）による大学紹介、模擬授業、ワークショップ等。
- ・ワークショップでは学ぶことや自分の理想とする社会について考えるなど、進路選択のヒントになるような活動がたくさんあり、海外進学をする・しないに関わらず、生徒が自分の考えを深める良い機会となった。
- ・アンケートの「海外大学進学は自分でも可能だと感じる」は、「非常にそう思う」「ややそう思う」の回答が 8 人から 23 人に増え、海外進学を現実的な選択肢として考える生徒が増えたことが伺えた。



- 3) JICA 駒ヶ根施設研修（国際教養科1学年 12月23日（金））
隊員の体験談やワークショップを通して世界の実情や、日本の国際協力、異文化について学んだ。
- 4) 海外語学研修（普通科および国際教養科1・2学年希望者38名、3月17-30日予定）
オーストラリアへ2週間の語学研修。
- 5) 海外大学生とのオンライン交流会（普通科および国際教養科3学年 6月2日（木））
海外での大学生活や、どのように進路決定をしたのかを日本人海外大学生（4名）より聞いた。
マレーシア留学サポートセンターとの企画。

4 高度な学び

- 1) 南山大学 大濱 裕 先生特別講義（国際教養科1学年 6月2日（木））
今日の国際社会・開発協力のあり方、参加型地域社会開発について学んだ。
※次年度に向けて、このような学びが年間を通して実践できるとよいというアドバイスがあった。
- 2) 信州大学模擬授業（普通科および国際教養科1・2学年 11月24日（木））
「経済学の使い方」「光るナノカーボン」を選択して講義を受けた。

5 主体的な学び

- ・スピーチコンテスト（普通科および国際教養科1・2学年希望者14名 12月9日（金））
*中学生は近隣8校より8名参加
レシテーション部門、スピーチ部門、中学生のスピーチ部門を設け、英語発信能力を高める機会としている。

6 その他（特徴的な取組）

- ・本校は「未来の学校」構築事業の実践校に指定されている。国際的な教育プログラムの長所を生かした飯田風越高校独自のカリキュラムや学びの指導・評価方法を開発するとともに、海外大学進学を実現するためのプログラムと支援体制を構築することを目標に研究している。

松本深志高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

- 1 1年・2年の探究の授業における学び。各自テーマを設定し、学年全体でのプレゼンテーションを経て優秀作品を決定。
- 2 京都大学ポスターセッション 2022（令和5年3月開催）への参加。（予定 現在発表者を選考中）

3 国際的な学び

6月に上田高校で開催の高校生国際会議に2名が登録、事前学習ののちオンラインで参加。2年次のSDGsに関する英語（ALTとのTeam Teaching 年間17回）の授業からの発展。

4 高度な学び

1 県立高校「未来の学校」構築事業実践校としての取組

土曜日の午前中を活用し、1学年は信州大学と連携した「信大連携ゼミ」（年間4日）を開催し、2学年は本校職員（一部、外部講師を含む）が講師を務める「深志教養ゼミ」（年間3日）を開催した。

信大連携ゼミ開設講座一覧

ゼミ	担当者	専門分野	タイトル	ゼミ概要
A	荒井 英次郎 田村 徳至 河野 桃子	教育学(教育行政学) 社会科教育 教育哲学 教育思想史	「問い」との向き合い方を学ぶ	様々な「問い」との向き合い方(データファシリテーション 哲学対話)を学ぶ
B	小池 洋平	憲法学 比較憲法学	映画で考える憲法ゼミ	このゼミでは『映画で学ぶ憲法Ⅱ』(法律文化社 2021年)で紹介されている映画を使って「人権とは何か」「平等はどうやって達成されるのか」などの問いに向き合い、みんなで意見交換をしながら自分なりの答えを探究する
C	勝亦 達夫	建築計画:歴史・意匠, 建築学, まちづくり, キャリア教育	建築とまちづくり～まちを見る 視点と課題解決	時間, 空間, 建築でまちを見る視点を学び, 自分が暮らす町の歴史や環境からまちづくりを考える
D	仙石 祐	グローバル教育・ 留学生支援	様々な対象をグローバルという文 脈からアプローチしてみるゼミ	自分の関心のある事柄を, とにかく「グローバル」という視点から考えてみましょう。またゼミのメンバー同士で議論したり, 留学生と意見交換する
E	三澤 透	天文学	宇宙について語り合うゼミ	「宇宙」に関する幅広いテーマについて毎回トピックを選び, 事前に調べた内容を発表するとともに, 思う存分語り合うゼミです。
F	有路 憲一	認知神経科学	バカデミーのスミエ-数理解のミカ タ	とっつきにくい数理解(数学と科学)をバカバカしくもマジメに探究します。
G	松岡 幸司	環境文学, ドイツ文学ドイツ語教 育	「本を読む」ことについて考えるゼ ミ	「本を読むとはどういうことか」を, 国語の授業ではない視点から考える
H	分藤 大翼	文化人類学	(異)文化の学び方	自分や他人を理解することの面白さや難しさを文化人類学的な考え方にもとづいて探求する
I	片長 敦子	数学(微分位相幾何学, 特異点 論)	数学ゼミ	数学的な捉え方を学びます。
J	中澤 勇一	外科(移植外科), プライマリ・ケア	医学教育モデル・コア・ カリキュラムの先取り学習	それぞれの分野のエキスパートの先生方に講演いただき, その後に医学科学生とグループワークを行う。

深志教養ゼミ開講講座

NO	担当者	所属	タイトル	内容
1	梅村 泰代	国語	NeoZ世代と語る『源氏物語』	現代の高校生は『源氏物語』をどう捉えているのか, 近代以降の現代語訳の比較。物語全体の流れ, 各「巻」の説明。
2	水野 好美	国語	プレゼン資料は見た目が9割	プレゼン資料の作り方, フォントの選び方などなどを実際に作りながら, よりよいプレゼンができる資料作りをしましょう。
3	秋本 裕子	地歴	鉄道スケッチ	マイスケッチブックと色鉛筆を持って, 鉄道の絵を描きに行きませんか?
4	武田 邦秀	地歴	ミュージカル映画とその考察	ワシントンハイツ(2021)を題材とする予定。
5	速渡 賀大	公民	古文書ことはじめ	江戸時代に書かれた古文書を読んでみませんか? 解読の基礎の基礎を実践で学んでみましょう。
6	松山 景洋 高橋 正俊	数学	ますます Mathematics	教科書から離れて教科の内容を深く探究することで, 数学への興味を深めるとともに, 論理力, 思考力を磨く。
7	中村 克	数学	大学における研究～生物物理学を 例に～	世間では研究成果ばかりが喧伝されていますが, その裏には地道な研究があります。今回は中村の大学時代の研究を例に, その地道さと楽しさを感じてもらえればと考えています。
8	渡邊 絵	理科	生物の体のつくり	ブタの心臓を解剖し, 構造を学ぶ。
9	古瀬 和貴	芸術	「落書き」の可能性	「美術」に対して難しいイメージを持っている人は少なくないでしょう。そんな人でも教科書やノートの隅についつい落書きをしまった経験はありませんか? 何気なく描いた落書きを「美術作品」として鑑賞してみましょう。
10	伴野 大悟	英語	ビジュアルデザイン	様々な広告, ポスターの表現について学び, 最終的に与えられたテーマに沿って写真とキャッチコピーを使ったポスターの制作を行います。
11	安部 武志	外部	リチウムイオン電池と次世代電池	京都大学の安部先生によるオンライン講義
12	保護者	外部	大人の方を交えて話し合う	現在の仕事, 生活, 努力していること。若者への期待。

2 京都大学学びコーディネーター事業 若手研究者による出前授業

12月に実施。生徒の参加は2講座のべ80名。

A講座 京都大学3回生 吉田 瞳さん 「マンガの語り，歴史学の語り」

B講座 京都大学3回生 北 悠人さん 「iPS細胞がもたらす未来の医療」

3 深志44回生・24回生による講義での多岐にわたるトピックの学び（詳細省略）

5 主体的な学び

フードロスに関心を持った生徒が，文化祭においてフードドライブの紹介と呼びかけをし，ブースを作って不要な食料品の回収活動をした。生徒会として活動の周知などに協力した。今後もこのような活動を支援していきたい。



長野日本大学中学・高等学校

※中学での主な取組

1 文理融合のカリキュラム開発

生徒の興味関心をテーマに探究学習を行う「探究の時間」を週5コマ設置。

2 より深い学び（探究的な学び）

【1学期の実践】

生徒自身が問いを立てて調査発表ができるよう，探究学習を「仮説」→「検証」→「発表」から成る「探究サイクル」として図式化し，その各要素を講義と経験を通して学んだ。

今年度の中学1年生では，「よりよいクラスを実現するためにはどのようにすればよいのか」という大きな問いから，生徒らが貸与された一人一台のipadを活用し，インターネットやロイロノートを組み合わせて情報収集を行い，その情報に基づき個別の仮説を立てた。そして，その仮説のプレゼンテーションを経て，選出された案を生徒の協働のもとで具現化した（写真1）。生徒らはこの過程を通してipadを活用した基本的な情報収集スキル，プレゼンテーションスキルに加え，協働する上でのコンセンサスの重要性などを経験的に学習した。

（写真1）

生徒立案によるクラスの雰囲気を明るくするサボテンを模したスピーカー「ポテト」。黙食時に日直が選曲した音楽が土台部分から流れる。



3 高度な学び

【2，3学期の実践】

「生き物をテーマに長野県に価値を生む」というテーマのもと，各所と学びのコンソーシアムを組み

ながら、生物について多面的に学び、その成果を発表する（2/15（水）於：東部文化ホール 10：30～12：30）。

本年度は茶臼山動物園と長野運動公園でそれぞれ山上獣医師と本校理科教諭（農学博士）から、動植物の魅力や分類法、遺伝子の基本などを学ぶことを嚆矢とし、続けて日本大学生物資源科学部の教務課と連携して恒川教授、成澤准教授、太田教授から3週間にわたって生物の講義を受講し、私たち人間と生物のつながりについて学んだ。翌月には長野県環境保全研究所の須賀研究員と高野研究員より長野県の生物の現状と課題について学び、生物多様性の保全の意義やその危機、そして保全への貢献策について考えを深めた（写真2）。さらに、実際に幅広く環境保全活動を行ってきたやまぼうし自然学校とエコツアーを実践している霧ヶ峰自然教室から現場ならではの経験を講演していただいた。

現在、生徒らは今までの知識を活用して環境保全仮説を立案し、発表会に向けてプレゼンテーションの改善を行っている。

（写真2）

探究対象の専門家に来校もしくはオンラインで授業をして頂いた。生徒らは新鮮さも相まって、集中して授業を受けており、授業後には質問する姿も散見された。導入や振り返りは教員側で準備し、知識の定着を図った。



4 主体的な学び

教員主導のいわゆる「やらされ探究」からの脱却を図り、生徒らが探究を通して自己実現を図れるよう、探究テーマは個々の興味関心を重視している。今年度までは「探究サイクル」やコンソーシアム先と連携するなど探究の方法を共通テーマで学んできたが、来年度からはその方法論を個々の探究に応用して探究学習を進めていく予定である。

5 その他（特徴的な取組）

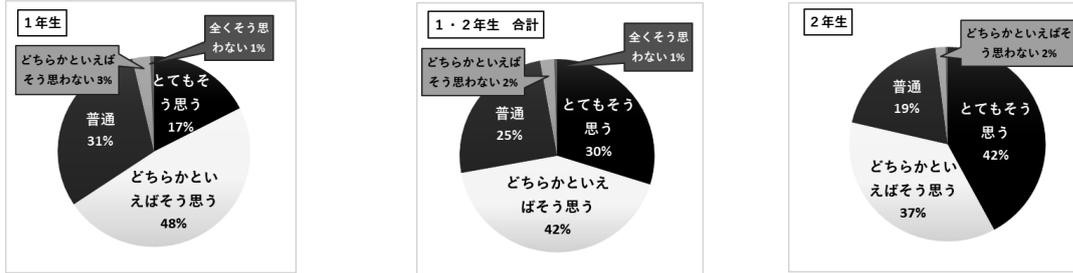
- ・ 日本大学はじめ、幅広くコンソーシアムを組んでいる。
- ・ 「好きを学びに」をモットーに、生徒の興味関心に重点を置いた探究学習を計画実施している。
- ・ 「好きなもの」をテーマに学ぶ先に教科学習の必要性を見出し、教科の学習においても主体性を引き出すなど、教科と探究学習の相乗効果も狙いとしている。たとえば、確実性の高い典拠として自らの仮説に学術論文を援用する際に読解力が求められる場面や、探究対象について数理モデルによる理解や分析が必要になる場面に遭った際に、国語や数学への学びの必要性が内発的に引き出されると推測する。あるいは、探究対象について、より専門的に学ぼうとして進学を希望し、そのために教科学習に打ち込むようになることも考えられる。その意味では「好き」を発端に学びが深化・拡張されていく。つまり、好き「で」学ぶ人の育成を目指している。
- ・ 中学3年間、高校3年間の計6年間での探究学習を計画している。

WWL 事業の評価と考察

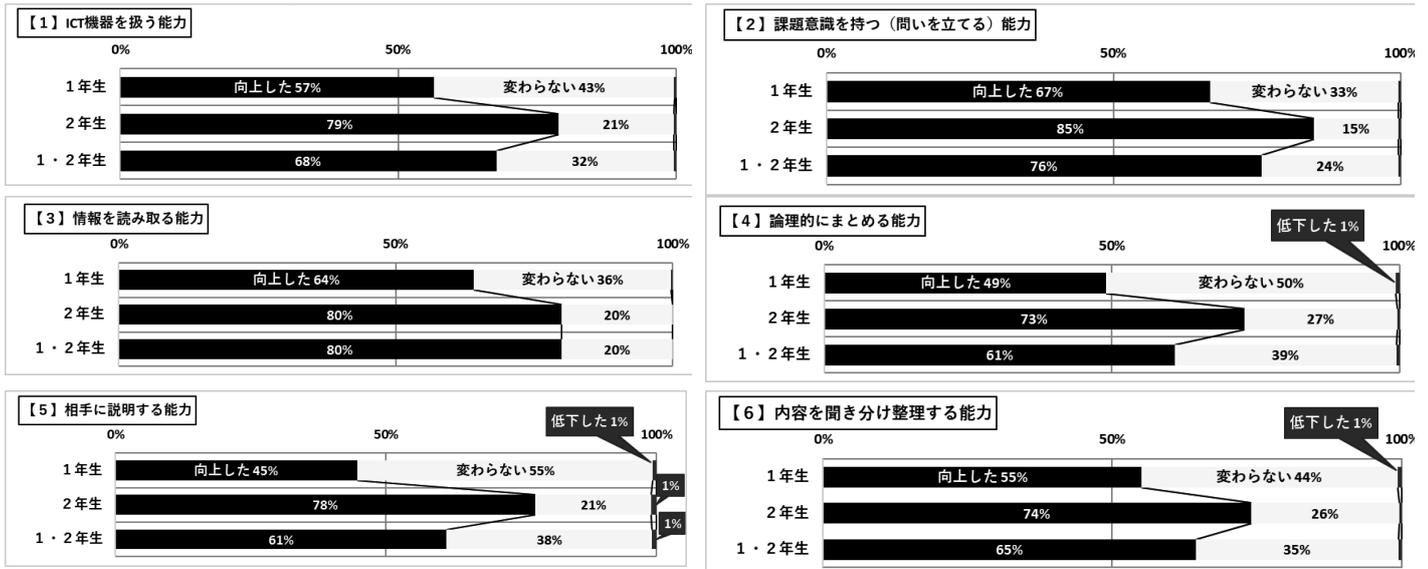
1 生徒によるWWL活動に関するアンケート（拠点校）

(1) 実施日 2月6日(月)～17日(金) 1・2年生対象 回答数 611 (回答率 97%)

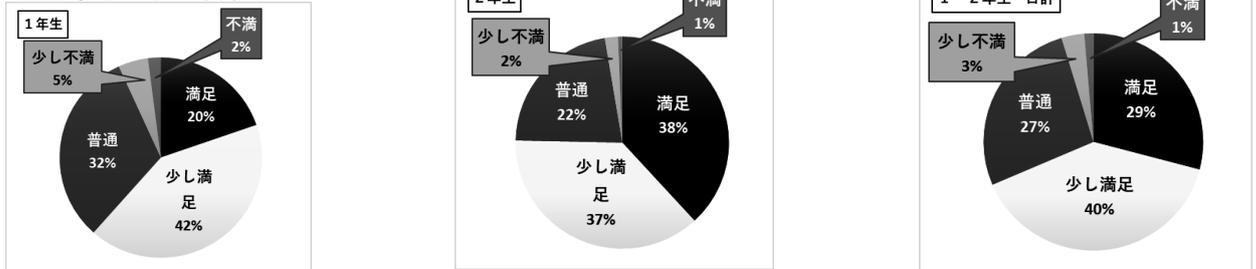
ア WWL活動への自分自身の取組に満足していると感じるか？



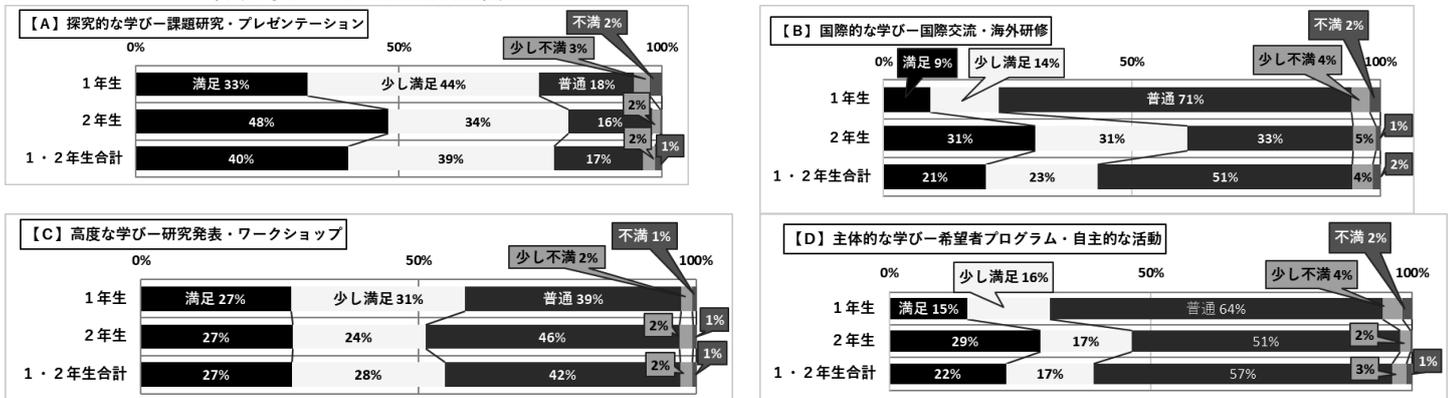
イ WWL活動を通してDDP（ディスカッション・ディベート・プレゼンテーション）スキルが向上したか？



ウ WWL事業の総合評価



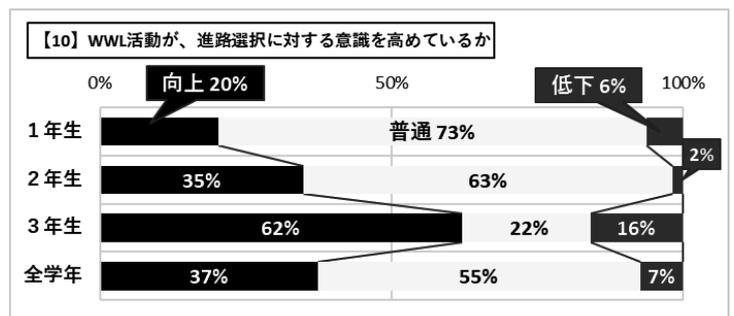
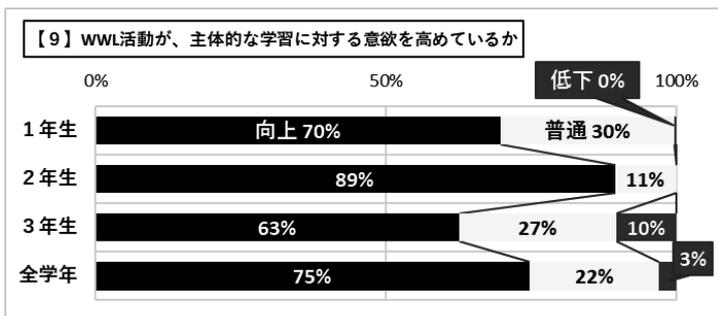
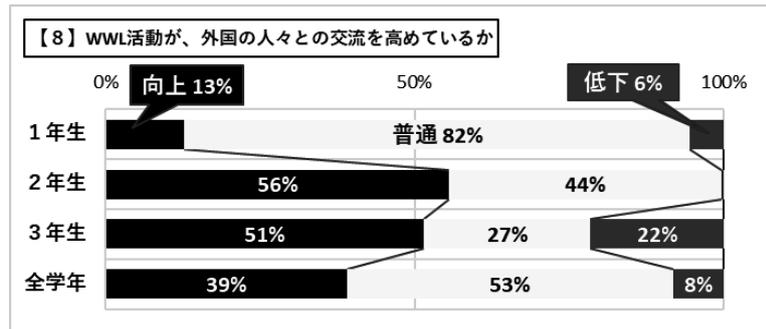
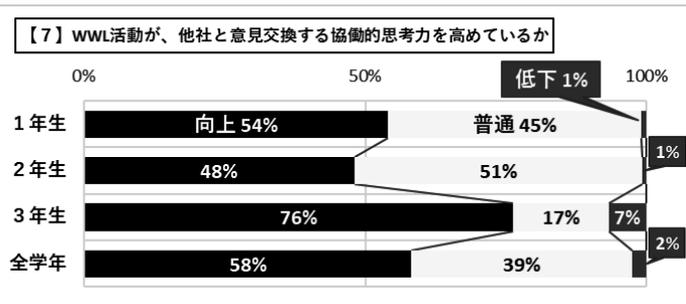
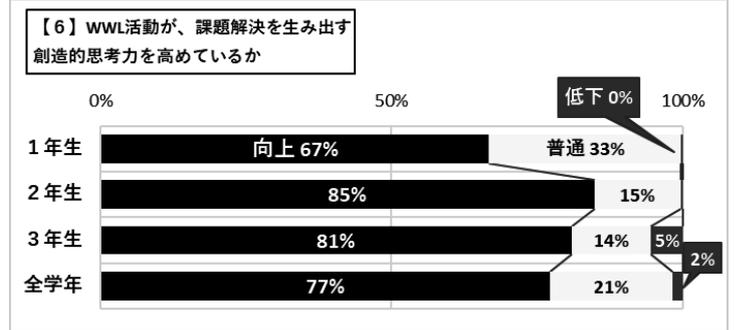
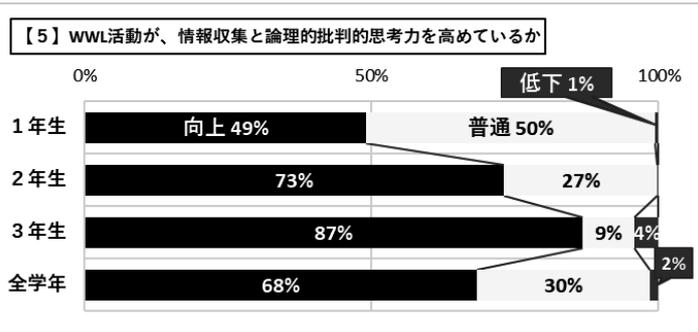
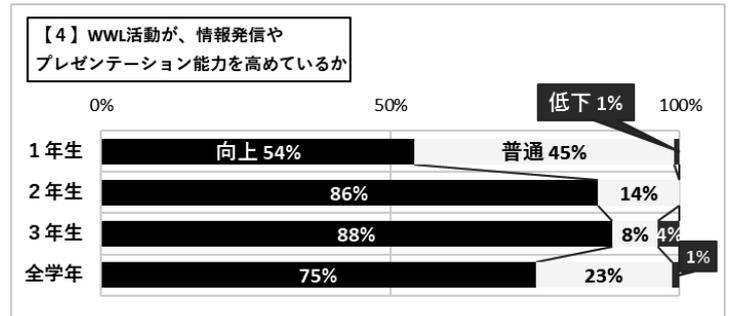
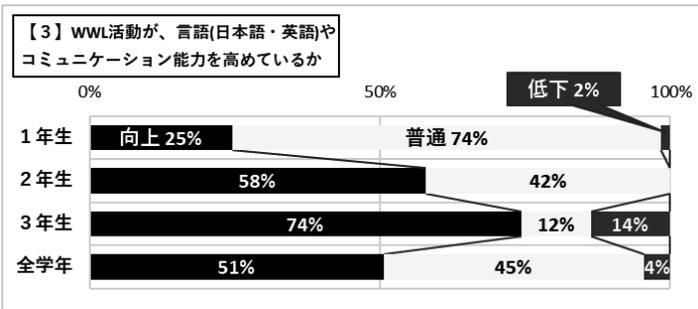
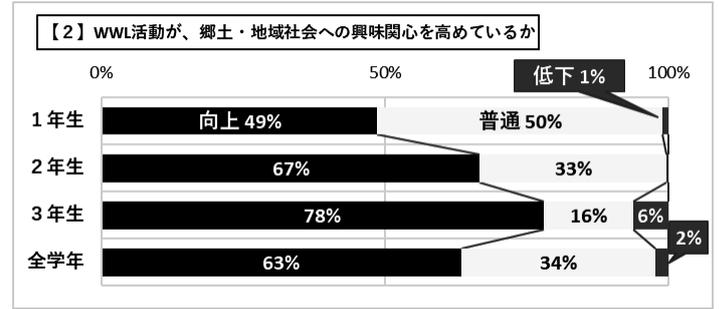
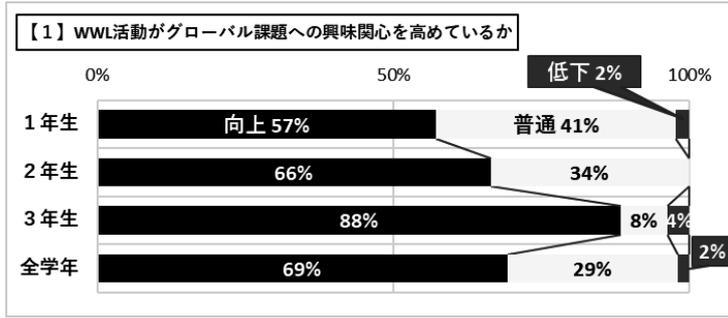
エ WWL各行事についての満足度



WWL 事業の評価と考察

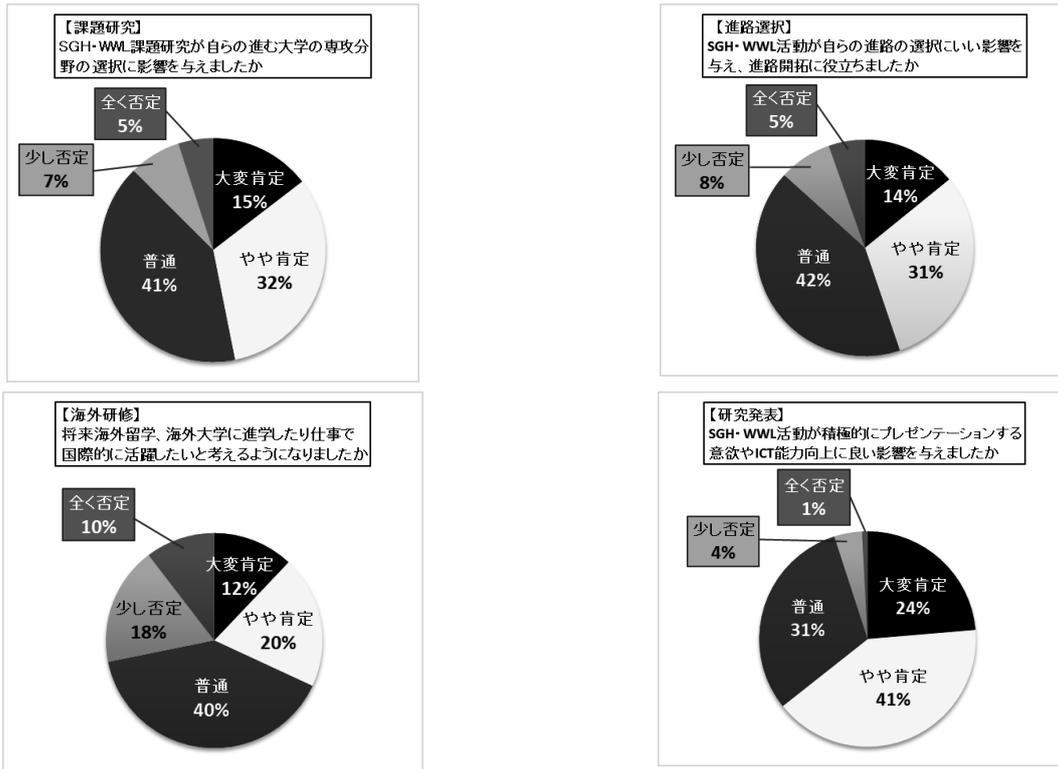
2 WWL活動がどのような能力を高めているかについてのアンケート（拠点校）

(1) 実施日 1・2年生12月 3年生11月 対象：全学年 回答数 852 (回答率 91%)



WWL 事業の評価と考察

(2) 3年生への質問項目



(3) 記述回答(1～3年)

- 先生と数回面談をしていく中でどうすれば聞き手に伝わりやすいか等を考えながら発表する力を得ることができた。(1年)
- 学校内の授業や発表会だけでなく、県外の学校の発表会に参加したり、WWL国際会議に出席したりしたことで、コミュニケーション能力だけでなく、周りを見る力や問題解決能力も身についた。外に出る活動をすればするほど楽しくなった。(1年)
- 身の周りの出来事や地域での問題に関心を向け、主体的に情報を集め、たくさんの人と意見交換をすることができたと思う。(1年)
- 情報は受け身の姿勢から、それを活用し新たなアイデアを生み出す意欲が出てきた。(2年)
- 自分の考えた仮説などに批判的な目線で見ることができた。また、先のことを見通して課題の解決策を考えることができた。スライドの作り方など社会人になったときにいかせることを学び、そのスキルも上がったと思う。(2年)
- 英語で話そうとする姿勢は変わったと思う。また、ニュースで流れる問題についても環境や福祉、医療といった様々なカテゴリーから見るできるようになった(2年)
- WWLは総合的な力を高めてくれるとても良い機会だったと思う。(3年)
- コロナ禍で、一人一人直接学校で発表することはできなかったが、ネットを通じてプレゼンできたので良い経験になった。(3年)
- 発表が目的ではなく、活動することを全員の目標にした方がいいのではないかと思います。(3年)
- GS3での活動が特に有意義だった。参加率をもっと上げていけると良いと思う。(3年)

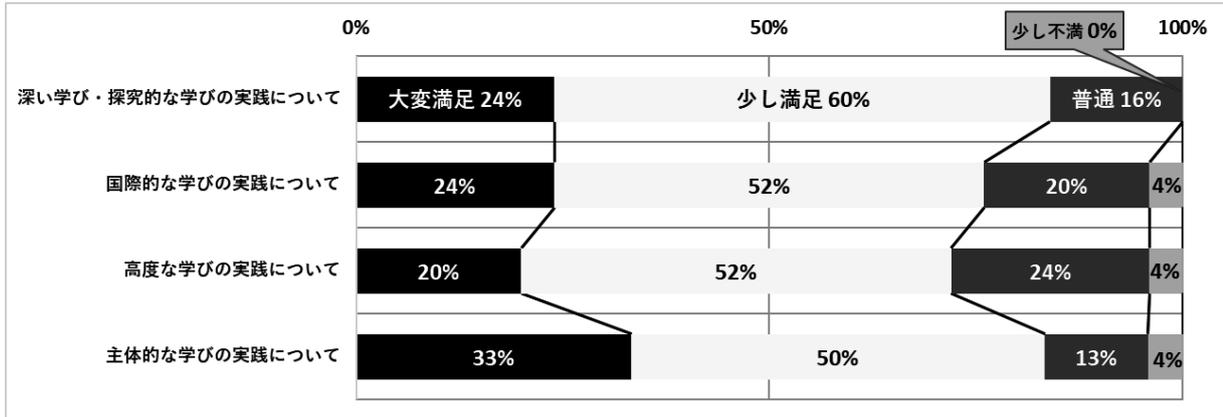
(4) 分析・考察

全体としては、WWL行事や探究活動に関しては肯定的な回答が多い。特に課題意識について1年生の8割近くが向上したと回答しており、「問いの立て方」についての授業の効果と感じる。どの能力を高めているかの項目は、1年生で低い項目も2年3年では大幅に伸びている。一方、コロナ禍の影響か、外国の人々との交流の項目はのびを感じている生徒は少ない。ひとり1台端末の導入による影響か、2年生の9割近くがICT機器を扱う能力の向上が見られる。一方で「探究」の意義を理解できていない生徒への意識づけや生徒が探究活動を行える十分な時間を確保するため、全職員の教育活動における共通理解や指導体制の構築に向けたさらなる研究が必要である。

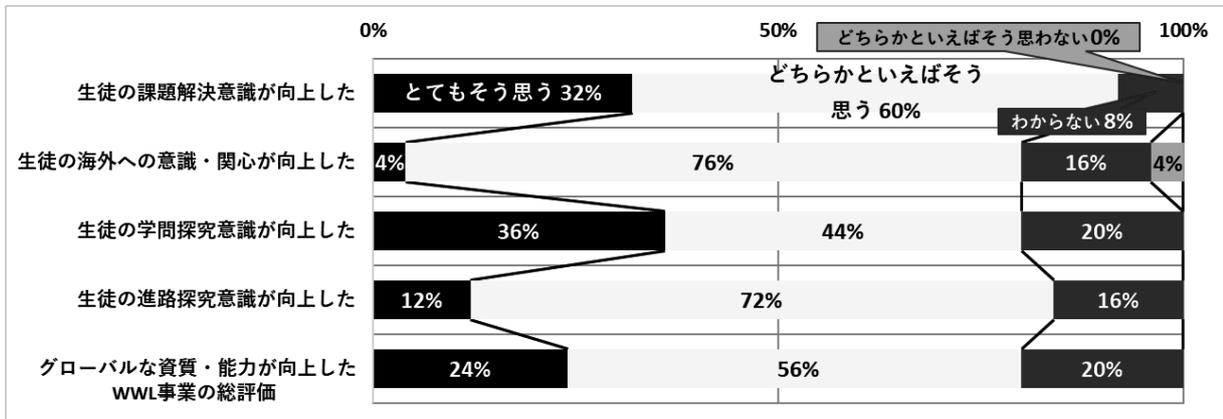
3 WWL 事業に関する教職員アンケート分析と考察 (拠点校)

(1) 実施日 2月1日(水)～2月17日(金) 全職員職員対象 回答数 25 (回答率 40%)

ア WWL 活動に対する教職員の分野別満足度



イ WWL 活動を通じた生徒の成長について



ウ 記述回答

- ・ 個人の課題研究を協働していく活動を今後も大切にしていきたい。全職員で協力して、それを見守っていききたい。
- ・ 社会的関心は高まった。井戸プロや学習支援、フードバンク、DIYなどはその具体的な表れ。
- ・ 生徒全員を一定の研究レベルに持ち上げるのは難しい。ただやる気のある生徒が視野を広げ、自分の進路や可能性を広く持つことができた点は評価できる。
- ・ コロナの中にあっても、能動的に自分の活動に取り組む生徒がたくさん育っている。
- ・ スマホやタブレットの普及に伴って、考える力をどう養っていくか課題である。AIの普及、インターネットの利用ですぐ調べて、うつすようになっている。活動の精査が必要だと思う。
- ・ 外に目が向いて、将来の仕事への意識が高まれば良いと思います。そのように指導したく考えています。
- ・ コロナ禍でも、タブレットを駆使して、調査や議論、プレゼン等に取り組む活動が一般化した。
- ・ 活発な活動が見られるが、教員の伴走体制については検討の必要があるか。

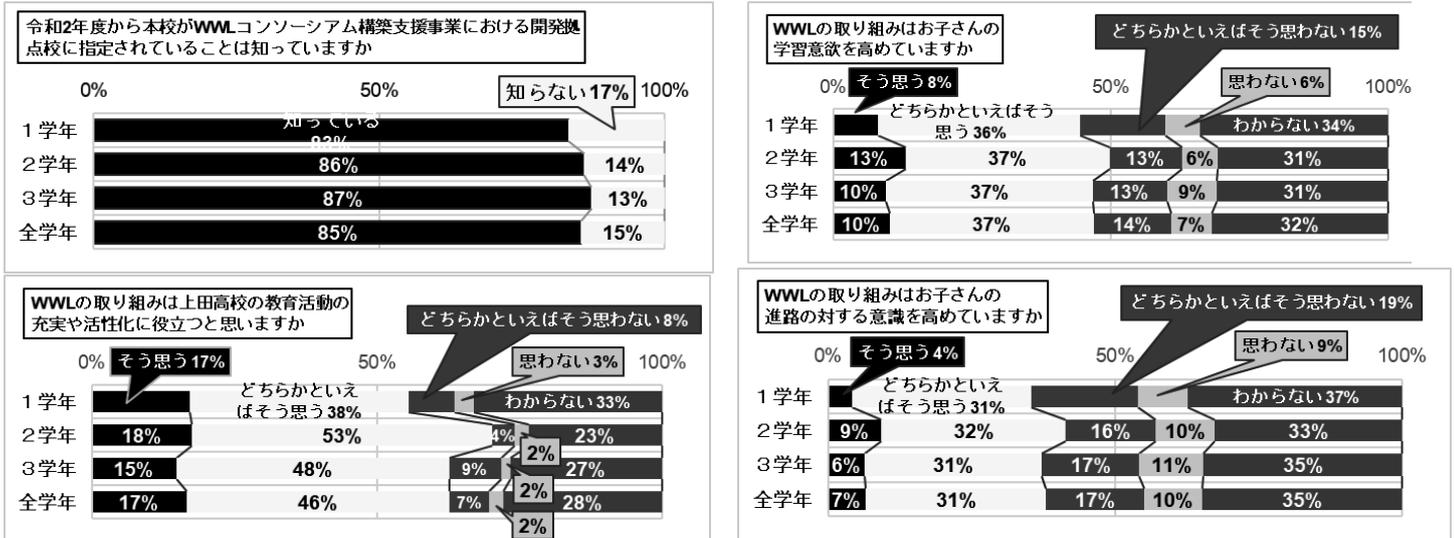
(2) 分析・考察

今年度も昨年に引き続き多くの探究活動や WWL に関する行事の制限や、形態を変えて実施せざるを得ない場面が多かった。しかし、国際会議や台湾高級中学との交流など、オンラインの利用により、結果的に思わぬ効果が生まれ、今までの取組をブラッシュアップするよい機会となった。一方で、海外渡航ができなかったことにより、国際的な学びについては対面での実施を強く望む声も多く、コロナ禍における国際交流の在り方について検討していきたい。課題研究指導については、能動的にどう取り組ませるべきか意見が寄せられている。「探究」を教育活動の中心に据え、本校での探究を通して育成したい資質能力や生徒が探究活動を通して自己の在り方生き方を考え、進路を選択していく支援の在り方やそのための指導体制について全職員で共通理解をはかることが課題である。

WWL 事業の評価と考察

4 WWL 事業に関する保護者アンケート分析と考察 (拠点校)

(1) 実施日 9月3日(金)～9月17日(金) 全学年保護者対象 回答数 629 (65.9%)



(2) 分析と考察

全保護者を対象としたアンケートからは、全般的には肯定的な意見が多いといえる。一方で WWL 行事や探究活動とクラブ活動や学習に費やす時間について悩む生徒も多く、探究活動と各教科の内容を往還させ、教科横断的な視点で全職員が連携を図り探究を教育活動の中心とする体制を整えていきたい。

5 GPS-Academic テストによる 3 つの能力評価についての分析と考察 (拠点校)

(1) 概要 汎用能力として社会に必要な 3 つの思考力である批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力を測定するアセスメント

実施日 12月18日(木) 1・2年生対象

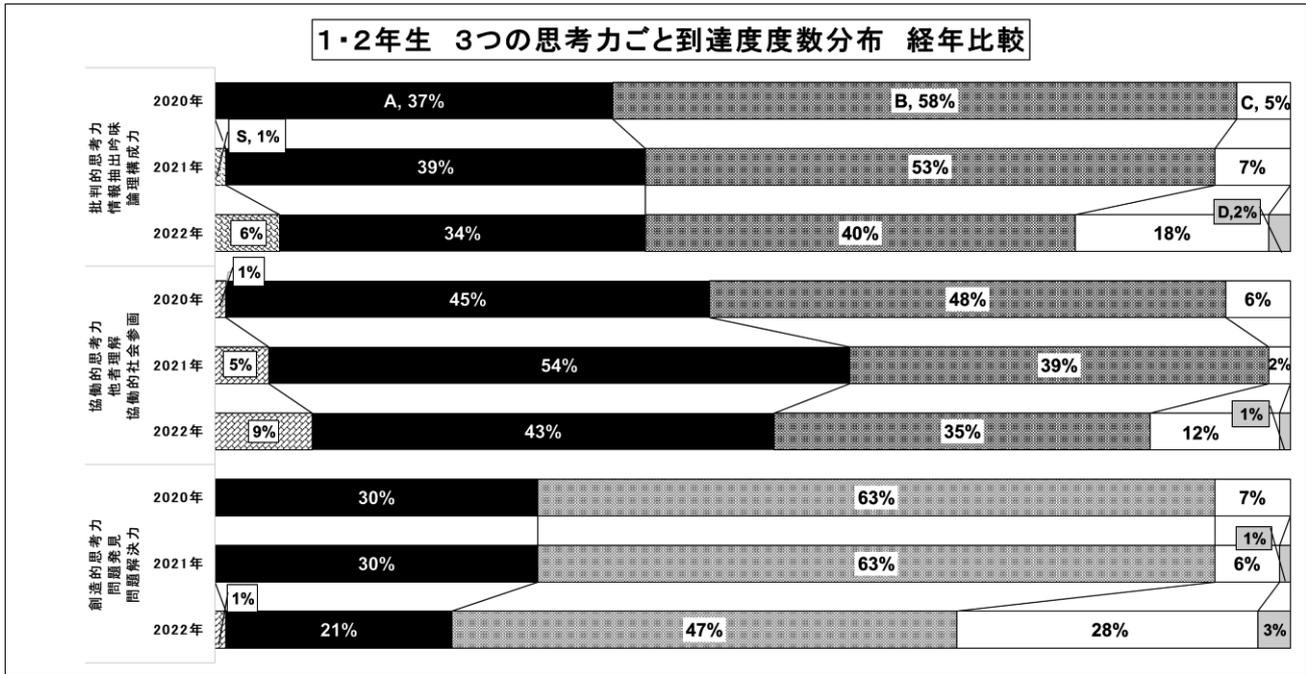
(2) 1・2年生全体

ア 学年全体到達度

到達度の高い順に S・A・B・C・D の 5 段階で評価 2 年生の () 内は 1 年次の到達度

資質・能力	到達レベル		Can-Do
批判的思考力	2 年	B (B)	<ul style="list-style-type: none"> 提示された資料から必要な情報を抽出し、その情報を客観的かつ正しく評価できる 適切な主張や根拠を提示し、説明できる
	1 年	B	
協働的思考力	2 年	A (A)	<ul style="list-style-type: none"> 他者の信念や価値観を理解・尊重しながら一定の条件下で合意形成ができる 身近な範囲で問題をとらえ、他者とともに解決策を検討できる
	1 年	A	
創造的思考力	2 年	B (B)	<ul style="list-style-type: none"> 条件に沿って、よいと思う解決策を選択したり、ほかの事例との関連性を見出したりできる 問題の枠組みを理解し、解決のための条件を満たし解決策を提案できる
	1 年	B	

イ 3つの思考力ごとの到達度分布



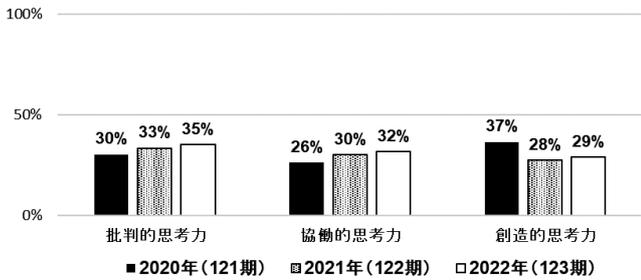
ウ 分析・考察

今年度実施した GPS—Academic テストの数値を、昨年、一昨年を含めた過去3年間の経年変化で考察した。3つの思考力のなかで、批判的思考力はあまり大きな変化は見られない。本校で力をつけさせていきたいと考えている協働的思考力はS・Aランク層の割合は今年度は数字が下がったが、Sランクの数字は増加した。一方、創造的思考力は3年前と比べてSはやや増えたもののAランク層が減少傾向を示しており課題である。

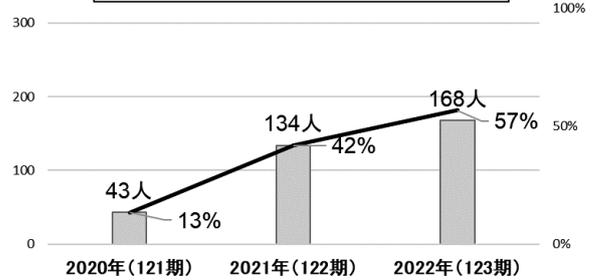
(3) 学年ごとのデータ

ア 1年生 (2021年度入学生) 8クラス 320人

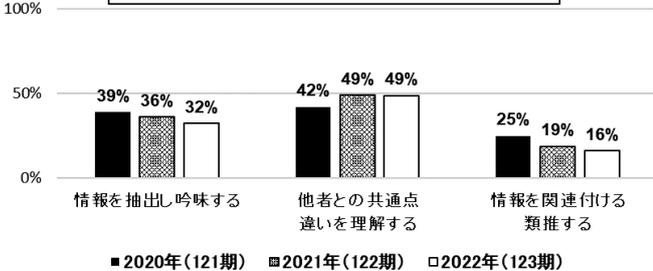
Bレベル以上1年生 経年比較



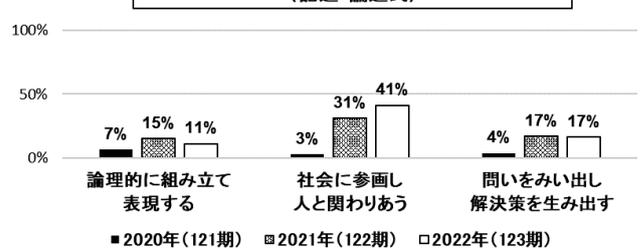
着眼点が出ている答案を書いた人の数と割合



Aレベル以上の割合1年生 経年比較 (選択式)

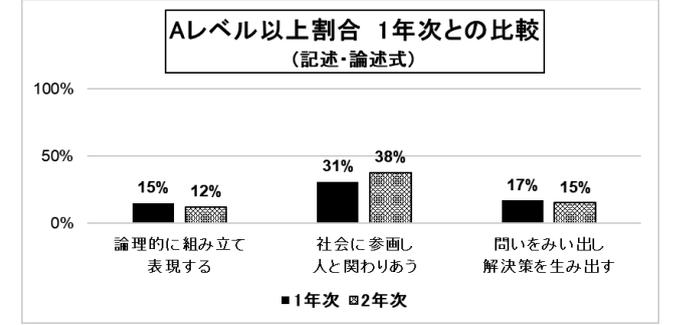
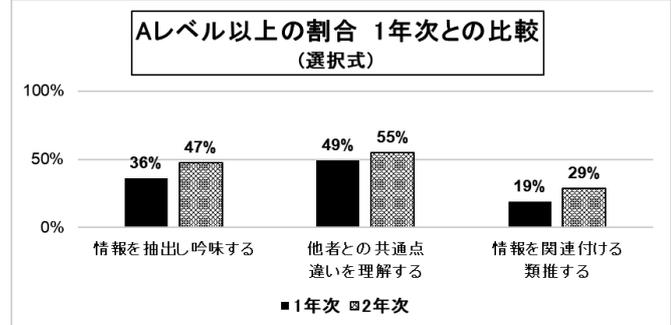
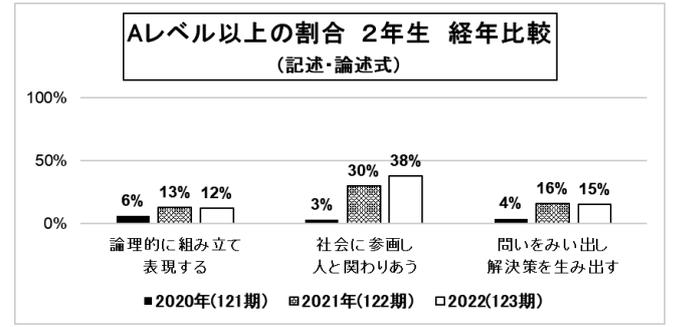
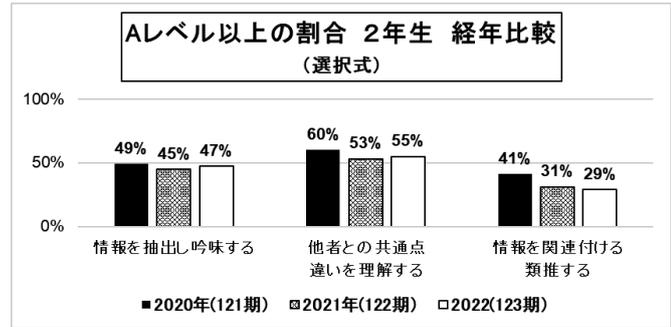
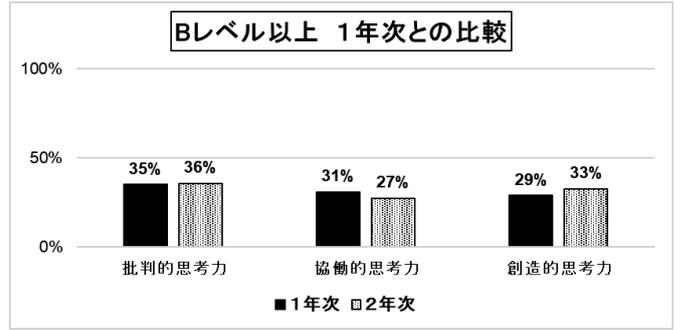
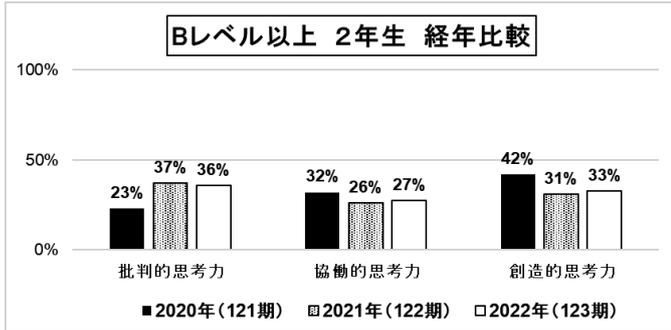


Aレベル以上の割合1年生 経年比較 (記述・論述式)



※Bレベル以上：選択式問題の結果からB以上かつ最も評価の高い力を「強み」とし、各力に強みを持っている生徒の割合
 ※Aレベル以上：高校段階で目指したいレベルとして設定している「A評価」に到達している生徒の割合

イ 2年生(2020年度入学生)8クラス 318人



※Bレベル以上：選択式問題の結果からB以上かつ最も評価の高い力を「強み」とし、各力に強みを持っている生徒の割合
 ※Aレベル以上：高校段階で目指したいレベルとして設定している「A評価」に到達している生徒の割合

ウ 分析・考察

学年ごとの経年比較では、1・2年生ともに前年度と大きな変化は見られないものの「着眼点が出ている答案を書いた人の割合」が1年生は57% (134人→168人)、2年生は54% (149人→156人)と昨年度の生徒と比べ大幅に増加した(2年生のグラフは割愛)。また、Aレベル以上の割合を見てみると、1、2年生共に、「社会に参画し人と関わり合う」が過去3年間で最も高く、昨年度の1、2年生では低下した「創造的思考力」もやや高くなっている。学年全体の「強み」と視点から批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力の3つの能力を、到達レベルから見るとバランスは取れているが、高校段階で目指したいAレベル以上の生徒の割合が増えることを期待したい。

Aレベル以上の生徒の割合を「選択式」「記述・論述式」の問題別に比較してみると、2年生においては、「情報を抽出し吟味する」「情報を関連付ける類推する」の観点で1年次よりかなり向上している。2年間の探究活動の中で課題の設定・情報収集・整理分析・まとめ表現の探究スパイラルを繰り返し身に着けた力であると考えられる。一方で「記述・論述式」で測定される能力が低い。自分の考えを言語化し、わかりやすく論理的に他者へ伝える力をどのように育成するかが今後の課題である。

これらの汎用的能力としての思考力が教科学力とも相関がみられる。教科学習で得た知識を探究で生かし、物事の本質をとらえ、解決策を提案する力を養うための生徒への意識づけが重要である。そのためにも問題発見・解決のプロセスに必要な思考力を教科学習、進路学習、課外活動(部活動、主体的な活動)など探究を基盤として展開し、学校の全ての教育活動の中で育てていく体制をどう構築していくかについてより深い議論をする必要があると考える。

6 WWL 事業 3年間の本校への影響と考察

- (1) 通常授業への影響
 - ・ プレゼンテーション能力・資料作成能力の向上
 - ・ G Sでの協働授業（グループワーク、発表）の慣れ→通常授業の活性化
 - ・ I C T機器活用能力の向上
- (2) 生徒の変化
 - ・ 社会課題への関心の高まり
 - ・ 学校外のイベントへの参加
 - ・ 探究のプロセスを経験することで、将来の学びにつながる
 - ・ 生徒の主体的な活動の増加
（断熱D Y I ワークショップ、フードバンク、カンボジア井戸プロジェクト等）
- (3) 教員と生徒の関係の変化
 - ・ 教員全員による課題研究指導→普段関わりのない教員との関わりができる
 - ・ 生徒にとっては社会性を身につける機会、教員にとっては生徒の問題意識や個性との出会い
- (4) 他の組織との連携に対する変化・効果
 - ・ フィールドワーク受け入れや探究アドバイザーを外部の方に依頼
 - ・ 学校外の大人との関わりによって生徒の世界が広がり、自分が社会に参画しているという意識づくりにつながる
 - ・ 他校生との交流によって良い刺激を受けることができる
 - ・ K D D I やフィールドワーク訪問先との交流を通じて、S D G s 達成に向けての企業の役割やその可能性に気づく

(5) 総 括

WWL事業の始まった2020年度は、ちょうどコロナウイルスによる感染症の拡大と同じスタートとなってしまった。本事業の中核をなす、「国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成」に重要な要件となる、海外の生徒との交流や、海外を含めた校外へのフィールドワークなどが制約を受けることとなった。しかしその反面、人的な直接的な対面による活動が制限されたことにより、オンラインに関するI C T機器の配備が進み、その活用ノウハウが一気に向上した。生徒ひとりひとりにデバイスを持たせる動きが始まっていたことも有り、対面ではできなくなった交流事業が、オンラインという形で可能となったことは非常に大きかった。

国際会議や、各校との交流イベントなどは、そもそも生徒の移動や宿泊にかかる費用の問題も大きかったが、オンラインは開催の仕方の新たな方法として今後も活用が増えていくはずである。対面とオンラインのハイブリッドで開催した「信州高校生国際会議」は、県内の高校生は対面、県外海外の高校生はオンラインで参加が可能となり、活発な内容となった。コロナ禍、制約のある中でも工夫によって様々な活動は可能であることが認識できた。

事業のもう一つの柱である「A Lネットワークの構築」については、県内の連携校は15校まで増加し、本校と共同実施校を含めると17校のネットワークが作られた。本校のカリキュラムである、「ヒューマンアクトインマニラ」（フィリピン海外研修）に連携校からの生徒が参加するなどカリキュラムの連携も進んでいる。県外の姉妹校、海外のシミ校との連携も広がり、台湾研修旅行は渡航できなかったが、オンラインで台湾の複数の高校と交流を行うことができた。大学との連携もスタートし、信州大学は、「先取り履修」、長野県立大学では「高度な学び実践講座」が実施された。県内の多くの高校生が参加している。

コロナによる制約の3年間ではあったが、WWL事業のカリキュラム開発、A Lネットワーク構築の両面に渡って、大夫進捗がはかられたものと感じている。

令和4年度 信州 WVL コンソーシアム構築支援事業
第1回運営指導委員会議事録

期日 令和4年8月17日(水) 14時から16時まで

場所 オンライン開催

参加者(敬称略)

運営指導委員

参加者 小村俊平, 浅井孝司, 讚井康智, 坪谷ニューエル郁子, 南希成

欠席者 荒井英治郎(仕事の都合により)

学校関係者(拠点校:校長ほか6名, 共同実施校:校長ほか3名, 連携校:管理職, 担当者)

県教育委員会事務局(廣田教育幹兼高校教育指導係長ほか2名)

1 開会行事

県教育委員会あいさつ(廣田係長)

参加者紹介(浅井委員の紹介含む)

日程説明

2 議事 取組報告

管理機関

- ・各プログラム実施にあたり外部機関, 学校間連携の推進に取り組んできた。
- ・連携校を対象にオンラインによる連絡会議を実施。4月に管理職を対象とした顔合せ会と事業説明会を実施。今後, AL ネットワークの連絡会議をさらに充実させてまいりたい。
- ・6月11日(土)に高校生国際会議を開催。国内外から総勢190名の高校生が参加。コロナ禍で準備等苦労も多かったが, 対面とオンライン併用で開催。ICT機器の活用により持続可能な取組になると感じている。
- ・高大連携の取組として, 高校生の先取り履修を開始。県立大学の夏期集中講座に上田高校から3名が聴講生として参加。上田高校では増加単位として認定する予定。信州大学は県内すべての高校生を対象に授業の科目履修制度をスタート。所定の成績を修めた生徒には, 単位が授与される。
- ・事業3年目となり, 今後の自走に向けどのように学びのコンソーシアムを構築していくかについて, 生徒のフィードバックも取り入れながら検討を進め, 方向性を定めていく。

カリキュラム開発拠点校(上田高校)

(1) 昨年度からこれまでの取組について

- ・高校生国際会議開催に係る運営指導委員からの助言指導への御礼。
- ・昨年度末にボストン・マニラ研修をオンラインで実施。
- ・6月11日(土), 上田高校を会場に高校生国際会議を実施。
- ・スマートニュースと連携した「メディアリテラシー」の授業を実施。

(2) 令和4年度の取組について

- ・台湾研修旅行（2学年全員参加）については行き先を国内に変更。
- ・3月のボストン・マニラ研修（希望者）の渡航については情勢を見ながら継続検討。
- ・探究学習への支援のための外部連携を引き続き推進。
- ・アフター WWL を見据え、これまでの取組を持続可能なものにしていくことが必要。
- ・上田高校のグランドデザイン、育てたい生徒像を見据え、SGH や WWL のこれまでの取組を外部の力を借りながら、生徒に有効な学びとしてどのように提供できるか考えていく1年となる。
- ・予算的な裏付けが無くなることへの対応についても運営指導委員から助言をいただく。

共同実施校（松本県ヶ丘高校）

(1) 「探究活動のアーカイブ」について

卒業した3年生の論文集を作成。HPにも「探究」アーカイブページを作成。（アクセスには学校のドメインがないとアクセスできないが）在校生が卒業生の論文を検索閲覧できるように整備。

(2) 生徒の力の経年変化を見るためのGPSアカデミックの実施。

「協働的思考力」の数値が高いのが特徴。協働的な学びの実践の成果か。一方で、「批判的思考力」「創造的思考力」の数値が低い。2年生の経年変化について、3つの思考力について探究科と普通科を比較すると、普通科の数値が下がってきている。今後は「批判的思考力」「創造的思考力」「協働的思考力」の3つの能力を涵養するためのプログラムをバランスよく導入していきたい。

(3) 学校生活におけるタイムマネジメントについて

学習面だけでなく部活動のあり方を含め、どのように生徒支援していくかを全職員で検討してまいりたい。

(4) 海外研修について

本校の海外研修は、探究活動を行い、現地の人に発表するという内容で設定してきたが、コロナ禍により中止せざるを得ない状況。これからもどうなるか見通せない中、引率する職員の経費負担も大きい。今後探究科については、全員を海外に引率していくのではなく、個人で海外研修の行き先を考え、夏休みを基本実施期間とするスタイルに変更。国内研修や添乗員付きのコースなども含め、複数のモデルコースを提示し、その中から生徒に選択させることを検討中。探究科の現2年生対象。令和5年度実施予定。（普通科は台湾研修を予定）

常にアップデートを試み、教員・スタッフもまた「探究し続ける」松本県ヶ丘高校を目指したい。

諸連絡（管理機関より）

連携校からALネットワーク校へ公開または生徒参加可能な行事について情報提供いただいた。生徒同士・教員同士の交流を進めてほしい。また、単独で実施が難しいプログラム研修などがあれば管理機関にお知らせ願いたい。他校への呼びかけ等実施に向けた支援を行ってまいりたい。

小村座長 委員からコメントを。私自身、色々なWWL・SSHに参加しているが、これだけ学校間の連携に取り組んでいることに感銘を受けている。

坪谷委員 何点か気付いたことを述べたい。

1つ目は、信州大学と県立長野大学の先取り履修という新たな取組が素晴らしい。

2つ目は、指導の中にある海外留学について。欧米の学費もさることながら、滞在費の高い国も多い。選択肢の1つとして、日本の大学に入学後、その大学の留学プログラムを利用し、日本の大学に学費を払うことで留学ができる大学がたくさんある。生徒には、日本の大学で1年間学び、場合によっては2年半留学することもできることを伝えていただきたい。

3つ目は、アフターWWLという話にも関連するが、進路指導のあり方について考えてみるのはいかがか。生徒本人の特性を発見し、それを進路進学、専攻する学問領域につなげていくのが教育の目的の1つ。札幌開成高校という中高一貫校の例を紹介したい。生徒自らが、担任と保護者に進みたい大学や勉強したい分野についてプレゼンテーションを行うというもの。生徒が自ら進学先を選んでいけるように後押しをする進路指導のあり方を考えてはいかがか。自ら選んだ進路であるので、途中で違うと思っても自分で責任を取っていかなければならない。これは人生で一番大事なこと。

讚井委員 感想としては、PDCAを回しながら発展していることが良いと思う。実証事業はやって終わりということがよくあるが、見返しをしながら積み上げていること、子供達の変化をデータで取りながら分析されている。探究科と普通科の違いなどは学術的にも価値のあるデータではないか。

今後のことについて気になっている点を申し上げる。国際会議に参加してみて、英語で議論したチームは苦労していたようだ。英語のチームはなかなか意見が出ていなかった。ファシリテーションの部分を工夫することで、たどたどしい英語でも意見を伝えられたという成功体験が出来たのではないだろうか。

スピーキングやリスニングの体験をWWL以外のところで積み重ねていかないと、海外との差は大きいと痛感している。長野県に限ったことではないが、WWLや「総合的な探究」ということでは英語との連携、他教科との連携について、WWLを起点としながら見直していったらどうか。

他教科との連携ということだが、「情報I」との連携も探究を深めていく上で非常に有効。プログラミングが注目されがちだが、プレゼンテーションのデザインやデータ分析が4領域目として入っており、この分野をしっかりと学ぶことは、探究活動の中で、外部のオープンデータを収集し、適切な方法で分析し自分の論に使っていくという点で必要。ディスカッション等においても、データベース、エビデンスベースで考えることができる。WWLと他教科との連携について取り組んでいくことで、他教科の学びを深めることができるのではないか。

最後に、これだけの素晴らしい活動を行っている生徒たちが、大学進学においてももっと評価されてほしいと思う。出口の部分が一般受験となってしまうと、高校3年生で探究をやめてしまいもったいない。一般試験で受験をすることを否定するものではないが、探究で強みを持っている生徒達が、希望の進学や就職につなげていけると、生徒も保護者も安心して高校3年生まで探究していくことができる。「教育の出口づくり」についても大きな論点になるのではないか。

南委員 大学の講義に高校生が参加するという事例は、興味のある学生にとって大学の学びは幅が

あるので、多くの生徒が参加できると良いと思う。来年度以降の予算についての言及があったが、予算が無くなったのでこれまでの取組が来年度以降無くなってしまうのはもったいない。予算措置をしていただいて、続けてもらえると良い。

浅井委員 大学との連携については新鮮だと思った。自分の将来を考える上で大変有益である。WWLのプログラムが来年度以降無くなってしまうのはもったいない。とはいえ、予算は大きな要素である。予算が無いから何もできないのでは2年間の積み重ねが無駄になってしまう。この中の要素をどのように活かしていくか、国内外も合わせ、ネットワークを活かした取組を続けていくよう考えてもらいたい。

小村座長 私からは2点ほど申し上げたい。

1つ目はアフターWWLで自走していくために課題をどう乗り越えていくか。まず予算という課題がある。本来ならば国が予算として出すべき話かと思うが、いずれにしても国や財団から予算をいただく時に、どう成果を見せて、どう説明するかを考えることが必要。

2つ目は国際会議について。当日参観したが、英語での議論は難しい。特に日本人が英語でファシリテーターを務めるのは大変。大人でも難しい。それを高校生に求めるのは相当ハードルが高い。OECDの会議に出たことはあるが、ファシリテーションしている日本人は誰一人としていない。無理をしてファシリテーションするより、まずは自分たちの意見をしっかりと述べるのが大事。国際社会の中で日本人は意見を言わないと思われているが、まずは日本という立場からしか言えない意見、長野県の高校生でなければ言えない意見を述べるのが大事である。そのためには十分な事前準備をして、仮説を立て、当日の参加者の意見を聞きながら、アレンジしながら、自分の意見を発信することが必要。

その上で、行政の世界で言われることだが、「赤ペン」ではなく「黒ペン」を握るのが大事。赤ペンを出てきた意見に対して修正するという。多くの場合、日本人は赤ペンしか持たない。黒ペンを握るということは原稿を作ることができるということ。今回の国際会議とかG7とか、最後の共同宣言を作ることが黒ペンを握るということであり、これはホストの特権。

例えば、当日の会議のファシリテーションは海外からの参加者に任せつつ、共同宣言を作る時の黒ペンはせっかくホストをやっているのだから、我々がしっかり握って、我々が作った原稿をベースにみなさんに議論をしていただいて仕上げていく、といった考え方でいくのも、ホストをやるからこそその役割かと思う。

休憩

議事 高校生国際会議報告と情報交換会

高校生生徒実行委員 土屋凜華さん、小林 響さん、桑田葵衣さんによる報告

新型コロナウイルスの関係でオンラインと参集での実施となったが、オンラインでも参加できたことで、海外から多くの参加者が集まってくれた。実行委員会ですべて役割分担をしながら準備した。各分科会で事前研修会、参加者との顔合わせ、昼の英語ファシリテーション講習などを行い準備を進

めた。

当日は開会行事，基調講演，分科会そして閉会式で共同宣言を採択した。HP を作成したり，分科会ごとにポスターを作成したり，スラックなどで参加者と事前の情報交換を行った。参加者については，思うように集まらない分科会や，逆に集まり過ぎる分科会など様々あった。

また当日は Wi-Fi の調子が悪かった会場もあり，色々とトラブルもあったが，協力して進めることができた。実行委員のメンバーとは当日初めて会うことができ嬉しかった。参加後のアンケートでは，貴重な経験の機会に加え，英語力不足の実感という回答が多かった。実行委員の主なふり返しとしては，まとめの時間をしっかり取ること，英語によるコミュニケーション能力を高めることが必要という点が挙げられる。

他校の生徒と協働して会議を開催することは初めての経験であり，とても楽しかった。今後も学校の枠を超えてこのような機会があればぜひ参加したい。

ブレイクアウトルームに分かれて情報交換

テーマ：「国際会議の主催者として参加したことから学んだこと，そして自分の変容について」

※各分科会からの報告内容は最後に掲載

議事 運営員による指導・助言

讚井委員 先生方から高校生のために素晴らしい体験の機会を提供してもらい，高校生の明確な変化も見られたのではないかと。参加した高校生は，英語での議論を通して多様な人たちと対話することの楽しさを実感したり，英語をもっと学びたいという意欲が出てきたり，ブレイクアウトルームでの生徒との会話の中で，議論の本質であるテーマの部分，自分のブレイクアウトルームでは「エシカル消費」について自分の消費行動が変わったというコメントがあった。こういうことは座学で活字を追うだけではそこまでマインドチェンジできないことが，当事者としてテーマについて自分の意見を述べたりすることで，変容が起きている。探究によって自己実現や本質に迫る部分をグローバルな範囲の中で体験しているのは尊いこと。ぜひ，今年のふり返りの中で出た意見を取りまとめながら，より良いものに発展させていただければと思う。

坪谷委員 まずは，こういう体験を通して高校生がたくさん学びを得たことを素晴らしいと思う。ぜひ今後も続けてほしい。その中で，言いたいことが1つ。第2外国語の習得については，自分の母語と習得したい言語にどれだけ親和性があるかによって，例えば今回のようなディスカッションができるレベルにまで到達するのに必要な時間がある。日本語が母語の場合は，大体3,000時間かかると言われていた。だが，生徒が小学校から外国語を学び始めて高校生の段階までにのべ約800時間，これしかないのに3,000時間のレベルを要求するのはナンセンスな話。それによって生徒が自信を無くしてしまう方がよほど心配。私が生徒たちに伝えたいのは，自分の言語能力ではなく，テーマに対してどんなことを伝えたいのかを明確にして，パッションを持つことと，事前の準備がとても大事。何を伝えたいのか，キーワード，そしてシナリオ，ストーリーを作ること。それを発展するためにはどんな投げかけ，質問をすればいいのかというストーリーとシナリオを考える。深く考えられるのは母語であるので，日本語で構わない。関係する

英単語は少し調べておいた方がいいだろうが、話す内容全てを英語に訳しての準備などはしなくて良い。大事なのは、自信を失わずに、事前の準備をしっかりすること。キーワードとストーリーとシナリオ。何よりも大事なのは、深く考えること。自分が伝えたいことは何かを明確にし、パッションを持って伝えること。生徒達が口々に英語をもっと勉強しなければと言っていたが、深く考える力、パッションを持って相手に伝える力、その部分を大切に、自信を持つよう生徒達を励ましてもらいたい。

南委員 高校生国際会議については、運営自体に苦勞されていたようだが、それも含めて良い経験だったのではないかと。学校内外や海外にもつながりができ、参加した学生たちの世界が、確実に広がったと思う。

SDGs などのテーマは、我々大人にとっても非常に難しい内容。それでも校外や海外の人たちと一緒に作業し、違った文化や考えを有する人たちと意見を交わすということ自体が貴重で大事な経験になったと思う。

ある生徒が、海外の生徒と話をする中で、あなたの国はどうかと意見を求められ、自分が何も考えていなかったことに気付いたと発言していた。世界やグローバルといった大きなテーマを掲げて考える中でも、自分の足元を見つめ直すことはすごく大事なこと。また海外の人たちからも、自分や自分の国については常に聞かれ、発言を期待されることだと思う。

英語を上達する秘訣について、私からもう1つ追加したいのは、雑念や煩悩を持つこと。例えば、誰かにファンレターを書きたいとか。真面目な目標を掲げるのももちろん良いが、それより自分に関心のあることに対して、煩悩や雑念を働かせて、あの人と話してみたいとか、そういうことが出発点になった方が語学の上達は早い。ハンガリー出身の大道芸人で数学者であるピーター・フランクルさんもそのように言っていたのを思い出した。

浅井委員 ESD に深く関わっているのだが、探究とはまさに ESD。学習指導要領でも柱になっている。教育全体が探究という形になっていくべきだと思っている、この取組が非常に有益であることは言うまでもない。ずっと継続していくことを期待したい。

予算が無くなる中、例えば規模を縮小しながらでも続けていくことを管理機関としてお考えいただき、共通のテーマで国際協働学習の取組を継続していただきたい。自分も関わっているユネスコスクールは ESD の取組なのだが、国際的なネットワークで繋がっているのだから、この枠組を利用することもいがか。信州大学の安達仁美先生がユネスコスクールの世話をしてくれている。UNION ネットワークという大学間連携を担当しているのだが、こうした枠組をうまく利用して WWL 活動を続けていくこともあっていいのでは。ユネスコスクールに入ったからといって、国からの予算付けはないが、三菱 UFJ 銀行が毎年 100 の高校に 15 万円ずつ助成金を出している。海外の学校や、教員同士を繋ぐこともやっている。ぜひこうしたことも活用しながら、取組を続けていってほしい。

小村座長 最後に私から。改めて今回の国際会議を終えて、生徒からは思いどおりにならなかったという意見もあるが、そもそも計画どおりにいったということは新しいことをやらなかったという

こと。計画どおりにいかなかったことは、みんなで新しいことをやったという証。それを踏まえてこれをどう継続していくか。今回の取組の中で、長野県にとって何が最もコアなのかについて改めて見定めることが大事である。継続性については今後議論できればと思う。必要であれば、個別のセッションなどは、運営指導委員のみなさんもできるかと思うので、遠慮なくお声がけいただきたい。

2つ目に、南先生から雑念、煩惱についての発言があったが、これは大事なこと。よく探究の良し悪しを大人は素材で見えてしまうところがある。立派なものを扱っているとよく見えてしまう。何を扱ったではなくて、どう探究したのかが探究の本質である。どんなプロセスで、どんな方法で研究したか、そこを見極めていくことが大事であり、プロセスの質が良いものになっていくために大人がどう関わっていくかを考えることが改めて大事である。

最後にブレイクアウトルームで実行委員長さんからもらった言葉をこの場で共有したい。

実行委員をする中で、大人が何に混乱しているのか、どんなことに困っているのかを知りたかった。準備をする中で、高校生と大人の間に情報の断絶があった。大人がどんなことに困っているのかが分かれば、高校生としてもっとできることもあったろうし、優先順位も付けられた。

つまり、高校生を中心というからには、大人と高校生がフラットな関係で情報交換をすることが大事ではないかという問題提起かと思う。一方で、先生たちも生徒に見えないところで色々な苦労があったのでは。今回、運営を高校生に任せるというハードルの高いことに挑戦された。問題が起こらないように先回りするのではなく、生徒と一緒に苦労してきたということが、先生方にとって一番苦労されてきたことでは。ちなみに、最近の問題が起こる前に先回りする保護者のことを「カーリングペアレント」というようである。カーリング先生ではなく、生徒と一緒に苦勞し、悪戦苦闘したことが素晴らしい姿だと思う。その中から学びを紡ぎ出していくことをWWLの誇りにしていければ良いのではないか。

閉会行事

- ・北澤 上田高等学校長あいさつ
- ・諸連絡

※閉会后、連絡校会議

(参考) ブレイクアウトルーム の記録

分科会①

参加生徒：林 真由（3年エシカル） 松田歩由菜（2年人権）

小林 響（2年教育） 中澤美結（2年貧困）

運営指導委員：小村座長

教 員：北澤 潔 徳永佳代 小林まゆ子 倉石典広 山田春樹 山岡淳一

司会：よろしくお願ひします。参加した4人の生徒の話をそれぞれしてもらいます。

生徒A：(学んだこと) 実行委員長として皆をまとめる立場だった。自分の指示で皆が動くので、自分の

責任をすごく感じた。しっかりしなければいけないことを学べた。

(変容) 少し計画性に乏しい会議だったように思う。自分たちがどのように動いて良いかわからない時があった。計画が大切だということを学べた。

(エシカル) 裏テーマが人と人とのつながり (仲良くなること)。英語がうまくいなくて、よく話すことができなかった。

生徒B : (人権) 午前は発表, 午後はディスカッション。実行委員で考えていた5グループすべてには人が集まらなかった。そのようなことは想定していなかったなので, もう少し想定しておけばよかった。海外の人が多いグループだったが, 海外の人の考えが違ったりもして, 色々な人の意見を聞くことは大切だと改めて思った。海外と日本の考え方の違いをもう少し調べておけばよかった。

生徒C : (教育) 海外, 日本ともに参加者が多かった。部分的な参加の人もいて, ブレイクアウトルームのグルーピングが大変だった。司会がミュート状態になって困ったが, 台湾の人が司会をやってくれて助かった。何かあった時の対応力が必要だと思った。英語は, 相手の目を見ながら相手の気持ちを汲み取る, という力が大切だということが分かった。日常からこういった力を付けていきたい。

生徒D : (貧困) 準備に関して, 皆忙しくて中心メンバーばかりがやることになってしまい, 当日までにやるべきことを知らない人もいた。もう少し仕事をしっかり振り分けて, 共有できていればよかった。当日のテーマは「コロナ禍での女性の貧困について」だったが, テーマがズレたり, 英語力の不足が原因と思われる意思疎通がうまくいかないことが多かった。全員話す機会を作ることができなかった。もっと皆で対話できればよかった。もっと英語力を磨きたいと思った。計画の重要性, 不測の事態に対するアドリブ力が必要。

司会 : 何か聞きたいことがある人はいますか?

生徒A : ベネッセの小村さんに, 私から質問して良いですか? 生徒が中心になる国際会議は今回が初めてだったと思うのですが, 大人の考えが分からない状況で動いているのが, 生徒にとっては苦しいことでした。もっと改善策はないのでしょうか? 大人の考えを子どもに伝えるのは良いことなのでしょうか, それとも良くないことなのでしょうか?

小村座長 : 自分がやった時に心がけたのは, 「大人しか知らないことはなるべく作らないようにしよう」だった。先生たちが意図的に生徒に考えさせようとしているのか, 先生も困っているのかわかりにくかったのだと思うが, お互いの情報共有が肝要かと思う。先生たちも困っていたのでは。お互いのコミュニケーションを密にするのが大切だったと思う。今後その辺を話して, 次に生かして行ってほしい。

生徒A : ほかの質問をして良いですか? A先生は困ったことなどありましたか?

教員A : 私は当日参加していないので困ったことは無いですが, 難しいことをしたのだろうとは思った。

司会 : 当日参加した先生で何かあれば。

教員B : 年間計画が無かったという指摘はとても鋭いと思いました。正直言うと教員側もいつ何をやるかよくわかっていなかった。それを皆さんにやってもらったのは申し訳ないところがある。計画性を持ってやればよかったと思ったのと同時に, 皆さんはとても良い経験をしたと思う。

生徒A : 生徒だから先生任せにしないで, 生徒から本部の先生にどんどん言えばよかったですし, それを

してよかったのか迷いましたが、本部に意見を言える関係になればよかったと思います。

司会：私も中心として関わったが、一から始めたことなので、手探り状態で困った。誰が、どこで、いつまでに、ということをしちんと決めてやればよかった。コロナで対面の会議ができなかったのも原因の1つとしてはあると思う。何度か対面で集まっていたら、もう少し言いたいこと（上記のような本部への意見云々）も言えたのかもしれない。生徒、教員ともに考えられたこともあったと思うので、今後に生かしたい。

分科会②

参加生徒：八楸美月（3年教育） 土屋凜華（2年エンカル）

運営指導委員：讃井委員

教 員：金井繁昭 倉下 直 北澤有里子 黒岩周平 中澤俊樹 羽賀規真

1 国際会議を運営した感想

- ・同年代でSDGsについて考えている仲間と一緒に活動できて良かった。
- ・参加者が多くなりすぎたことで、発言できない参加者のいたことが残念だった。
- ・様々な人と関わりを持てたので、刺激を受けてもっと成長したいと思えた。
- ・一から分科会等をつくっていくことが難しかった。海外からの参加者もいたので運営に苦労した。

2 今回の経験を通しての変化など

- ・広く物事を見なければならなかった。他の参加者が違う視点から発言するのを聞いて、気付くことが多かった。
- ・英語をもっと勉強して話せるようになりたいと思った。
- ・エンカルの分科会を運営したが、実際に普段の生活でも行動が変容したことを感じる。

3. 質疑、アドバイス等

Q 次回もしこういった会議を運営することがあったら、どんな改善点が考えられるか。

- ・英語で会議をすることは、日本語の場合と全く別物である。普段の英語の授業の語彙力では足りないと思った。事前に、会議を運営することに向けて準備しておく必要がある。
- ・英語で話すこと自体に集中して、話の内容が浅くなったことが反省点。スケジュールなどをよく考えて進めることが必要である。
- ・意見を言えないのは、意見を伝える練習を積みばできるようになる。引き続き頑張してほしい。
- ・日本人同士でも話し合うことで視野が広がるので、今回のように海外の方との話し合いでなくても、場数を踏んでほしい。
- ・マインドだけでなく、行動面でも変容があったことは、素晴らしいと感じた。自分自身にも学びがあった。他の教科も含めて自分の意見を伝える機会を持つことが重要だと感じる。

（讃井委員より）

- ・今回このような会議の運営に携われたことは大きな財産なので、後輩にも引き継いでほしい。

- ・体験の質をいかに高めるかが重要。

Q 英語が聞き取れないときに「もう一度言ってください」と言えたか？

- ・聞き返したり，チャットで要約して送ってもらったりした。
- ・英語が得意な人に訳してもらったりしながら参加者みんなで協力した。

Q 上記のような状況については事前の対策はあったか。

- ・事前の打合せとは発話の量も違うので，当日の対応だった。
- ・当日なんとか対応できたことは素晴らしい。英語による話の中身が分からない時に「分からない」と言いやすい環境をファシリテーターがつくることも重要。場合によってはオンラインの辞書などでシェアしながら調べるのも可。
- ・次回の開催があれば，早い段階から引継ぎをして，ファシリテーションをすることを意識して英語の学習をしていくと良いのではないか。

分科会③

参加生徒：張 驪驕（3年人権） 油井千夏（2年水衛生） 谷保暢浩（2年環境）

運営指導委員：坪谷委員

教 員：馬場正一 吉沢規至 中澤東樹 藤牧 淳 宮坂正義 ファーみちわ 松澤望美

1 参加生徒の感想

生徒A：自分の成長につながった。運営の仕方やどうすればスムーズに行えるかを学んだ。

生徒B：オンライン上で意見を言うことへの抵抗感が無くなった。初対面の人とのコミュニケーションができるようになった。楽しかった。

生徒C：普段の学校生活では学べないことを学んだ。生徒同士のディスカッション，計画性など。普段気付けないことに気付くことができた。

2 教員から質問

Q 英語についてどう感じたか。英語学習を今後どのように行なっていきたいか。

生徒A：予測しながらのやり取りが多かった。英語なので深掘りは難しかった。「人権」の分科会だったが、「人権って大切だよ」で終わってしまうことがあり，それ以上の深掘りはできなかった。心を開いた話し合いを目指したが，そこまでいかなかった。受験英語だけでなく，心を通わせられる英語を自力で学びたい。

3 坪谷委員より助言

母語以外を学ぶ際は，その言語と母語の親和性がどの程度あるかが大きく関わる。英語に触れる時間が母語より圧倒的に少ないので，レベルの違いは当たり前。まずは自信を持つ。何語だろうと，何を伝えたいかキーワードを書く。どれだけ心を込めて伝えられるか。事前準備。英語力を伸ばすには，日頃の生活でどのくらい英語に触れる時間を作るかが重要。

4 教員から意見

これが First Step。上手くいかなかったとしても気にしない。海外の人とのつながりができたことが重要。

5 参加生徒の変化

生徒B：色々な視点で物事を見るようになった。積極性が増した。

生徒C：英語の学習に対する意欲が湧いた。

分科会④

参加生徒：島田和音（2年教育） 青木緋音（2年貧困） 桑田葵衣（2年水衛生）

運営指導委員：浅井委員 南委員

教員：宮下美和 平林哲郎 伊藤光葉 白鳥敏秀 大房信幸 波多腰啓 白鳥敬秀

Q 国際会議を運営した感想。よかったこと、苦労したことなど

生徒A：参加前にはこうした経験無く、大変戸惑った。しかし準備段階から仲間がいたこともあり、初めて会う実行委員の人とも協力して、いい会議ができた。

生徒B：苦労した点でいうと、LINEのグループ通話で事前連絡を待っていたが、見ていなかったり、当日土壇場でキャンセルした生徒もいた。周到な事前確認が必要。実行委員だけでなく、参加者の生徒の意識付けも大事。

生徒C：他校との連携で苦労した。LINE以外でも連絡手段を考えたが、なかなか難しかった。事前に実行委員が対面で会う機会がほしかった。

司会：自分が担当した教育分科会は参加者が一番多く、実行委員の中心生徒が準備段階や運営面で苦労していた。英語で苦労している生徒が多かったが、知っている単語を何とか繋ぎ合わせていくことで活路を見出していた。

Q 今回の経験を通して自分の中で何か変わったことや気づいたことなどはありますか？

生徒C：最初はブレイクアウトルームでも発言が出ず、悩んだ。しかし徐々に皆で「何とかしよう」という気持ちが生じてきた。協力することの重要性を学んだ。

生徒B：台湾の生徒から「あなたの学校はどう？」と聞かれて言葉に詰まった。自分の身の周りについて知っておくことも外を見るのと同様に重要。事前に分科会担当の先生方の考えも伺い、なるほどと思った。自分の意見を持てるようになりたい。

生徒A：今までは先生に与えられたものが中心だったが、今回の経験を通じて、以前より受動的でなく積極的になることができた。

Q 今回の経験は今後どんなことに役立ちそうですか？

生徒B：分科会に参加した生徒や先生との繋がりが今後も続くのではないかな？ 自分の探究学習にも役立つ。

生徒C：今回の経験は、学校の探究学習のように、日常生活でも活かすことができる。特に自分から行動できるようになった点は大きい。

生徒A：実行委員会で他校の初対面の人と会ったが、こうした経験が貴重で、海外の人とも知り合いになって良かった。英語を使って今後も交流していきたい。

運営指導委員より助言

浅井委員：2014年にESD（持続可能な開発のための教育）国際会議を主催した。全体をまとめるために、一人ひとりの役割があるのだが、こうした経験は絶対に今後も生きる。国際会議に出席するということは、しっかりした意見を持ち、述べるということ。こうした会議に参加すると良い点は、繋がりができること。仮に意見が対立しても繋がりはできる。かつてある会議で中国人とやりあったが、30年来の私の友人となっている。今回知り合った仲間との繋がりを絶たないようにしてほしい。今後の人生できっと役に立つ。英語の参加はハードルが高い。そのためには入念な準備が必要。上記会議でも通訳は付けたが、それだけでなく、英語力をアップさせてほしい。

南 委員：ハイブリッド会議は大変だったのでは。会議の中で参加者の個性が見えたのでは。今回できた学校外の繋がりを今後も大切に。アイデンティティーを大事にしてほしい。

分科会⑤ 教員グループ

教 員：神岡寿賀子 高橋侑里 進藤秀樹 堀内哲男 中村智章 室井 明

国際会議について

教員A：教員の関わり方が難しい。他校の生徒である点、生徒主体である点など。どこまで関わって良いのか。なかなか分科会のテーマが決まらなかったが、生徒が前向きだった。充実感があつたように感じた。ただ残念なことに当日は結局日本語の会議になってしまっていた。

共同宣言について

教員F：事前にできていたものを使っていた。時間が短く、一から書き出すのは大変。事前に原案を作成し、当日のディスカッションの内容を踏まえて追加修正していた。

時期について

- ・部活動との兼ね合いで参加できない生徒もいたのでは。
- ・部活動帰りの車の中からオンライン実行委員会に参加している生徒もいた。

全体を通して（当日の様子、今後に向けてなど）

教員B：英語が得意な生徒が通訳の役割をしてくれた。コミュニケーションが取りやすい。自動通訳の精度がもっと高いと良い。現時点で全て英語を用いるのは難しい。対面の機会が無かったゆえの意識の差か、一部の生徒の負担が大きい。

教員C：英語の議論は難しいが、当日は綿密な準備の上、丁寧に質疑応答している様子が見られた。講演を聴くことにより、日本語でコミュニケーションを取りやすくなる状況もあった。教員もアクティブに議論に参加していた。

教員D：色々な学校の生徒，色々な視点からの意見に接する機会になった。こうした機会を多くつくることで，生徒も議論に慣れて上手になるだろう。

教員E：参加生徒から，充実した時間だった，英語力の差を実感した，英語学習への意欲が増した等の感想が聞くことができた。教員目線からも良い機会だったと思う。生徒の課題意識について知ることができた。

教員F：英語で話し合うことの難しさを感じた。日本語で話すにもどう話すか悩む時がある。悩んでいる時に，英語でどのようにやり過ごすかを事前に身に付けておくことが必要。話し言葉としての英語力を育成しておきたい。他国の同年代とのコミュニケーションを取る良い機会だった。

教員間の交流について

教員C：各学校の状況の共有ができた。勤務校に生かすことができる。

教員D：継続して教員間の交流の機会を持ちたい。

各校の取組について

須坂：台湾の高校と。年8回オンラインで交流。継続的に実施。

野沢北：コロンビア大学との交流。周辺校との交流もしたい。

グローバルキャリアシリーズ お金の問題

要望

教員A：予算があれば活動がしやすい。やはりこうした機会を今後も設けるためには予算付けが必要。

教員B：3年でプロジェクトは終わってしまう。終了後の予算について保障してほしい。

令和4年度 信州WVLコンソーシアム構築支援事業
第2回運営指導委員会議事録

期日 令和4年(2022年)11月28日(月)13時30分から16時まで

会場 上田高等学校 会議室(オンライン併用)

参加者(敬称略)

運営指導委員

参加者 小村俊平, 浅井孝司, 坪谷ニューエル郁子, 南希成

欠席者 荒井英治郎委員, 讃井康智委員(仕事の都合により)

学校関係者(拠点校:校長ほか4名, 共同実施校:校長ほか4名, 連携校:担当者)

県教育委員会事務局(今井教育次長ほか5名)

1 開会行事

管理機関あいさつ(今井教育次長)

参加者紹介

日程説明

2 議事

(1) 報告及び下半期の計画について

カリキュラム開発拠点校(上田高等学校)

- ・拠点校校長(北澤潔校長)あいさつ
- ・担当者による報告
 - ・8月に長野県立大学と信州大学における先取り履修に生徒が参加。
 - ・9月に2年生が課題研究の中間発表を実施。1年生は県内FWを実施。2月に報告会を予定。
 - ・アカデミックプレゼンテーション(HLABや県立大学の先取り履修, 3年生の課題研究成果報告)
 - ・1年生国際理解教育, 2年生台湾の高校生とオンライン交流を実施。3月にはボストンとフィリピンのオンライン研修を実施予定。他校の生徒も参加可能。
 - ・来年度「グローバルスタディーズ」については「情報」の授業内容とこれまでの授業内容とすり合わせながら, 今後の展開について検討を進めている。
 - ・WVL事業の成果検証として, 6月にリベルタスによる生徒アンケートを実施。拠点校として, グローバル人材の育成に取り組んでいるが, 「外国語に抵抗がある」と回答している生徒もあり, 今後検討の余地がある。

共同実施校(松本県ヶ丘高校)

- ・共同実施校校長(金井繁昭校長)あいさつ
- ・進路と探究における取組報告

テーマ: 探究と進路の関わりについて 探究を活用した進学事例の紹介

発表者: 松本県ヶ丘高等学校 進路指導係: 塩原 潤 教諭

内容: 「探究」の成果として進路実現へ直接的に結び付いた事例と学びへのモチベーションや自信に繋がるなど, 間接的な影響がみられる。また, 過去10年間の進路選択における変化をみると, 総合型選抜を利用する生徒数, 全国の国公立大学への進学者数がともに増加している。探究を通して様々な分野の学問を学びたいと希望する生徒が全国各地の大学へ進学していく傾向がみられる。

探究コーディネーターの支援や3年次まで探究を続ける生徒への支援、探究の成果物作成等の指導を行っている。また、本年度から進学型単位制を取り入れており、その増加単位分として、外部講師による英語検定指導や小論文指導などの放課後講座を実施している。

昨今の生徒の様子から、生徒と共にやりたいことを考え、共に進むべき道を考える、教員が指示する指導というより、生徒の学びを支援する形なのかと感じる。引き続き生徒に寄り添う支援をしてまいりたい。

連携校の取組について（書面報告）

- ・連携校のこれまでの取組及び今後連携校が参加可能な行事を掲載。

管理機関

- ・前回の運営指導委員会での指導助言を受け、生徒の探究活動と主体的な進路選択について、全県の進路指導研究協議会でテーマに取り上げ、各校の取組について情報交換を実施。
- ・WWLのルーブリックを作成。改めてALネットワークで育てたい生徒像について共通認識を図り、そのような生徒が育っているのかについて考えるきっかけとしていく。
- ・マイプロジェクト長野県Summit, 小布施サマースクール, 信州つばさプロジェクトサステナブルコース, G7外務大臣会合開催に向けたSDGs高校生ワークショップ等の取組を報告。
- ・令和5年度WWL事業の1年延長について
文部科学省が、令和4年度にWWL事業の最終年度を迎える拠点校に対して、カリキュラム開発事業の1年延長を認めるというもの。予算措置が無いことが前提ではあるが、教育課程の特例が認められるため、令和5年度、自走に向けて引き続きカリキュラム開発を進めていくことを希望し申請。

(2) 生徒による発表

テーマ：「探究活動と主体的な進路選択」－小布施サマースクールに参加して

発表者：上田高等学校2年 白井 まおさん

内容：「なぜ自分は勉強するのか」「自分が選ぶ進路に確信を持ちたい」という思いから、7月にHLABが主催する小布施サマースクールに参加。メンターの大学生をはじめ様々な人たちとの対話を通して自分を見つめ直し、自分の進路について多角的に考えることができた。今は、アメリカの大学に進みたいと考えており、そのために必要なTOEFLの勉強や奨学金などについて調べている。

質疑応答

質問 アメリカの大学に行って、インプットしたものを自分の中で加工してアウトプットしたいとあったが、なぜそれが大事だと思ったのか。

白井さん 気付いたきっかけは、中学までQuick&Responseできることがいいことで、それで評価されてきた。いざ、自分の意見を求められても、新聞や本に書いてあることを同じフレーズでそのまま繰り返しているような気がして、自分の頭で考えていないと悩んでいた時期があった。インターナショナルスクールに通う友人の話を聞いて、その授業方法や学び方が新鮮だった。インプットをただ再生するだけではダメだと感じた。

坪谷委員 サマースクールでインスパイアする人との出会いがあり、そこから考えることがいかに大事か、自分の人生を自分で選択していくことに気付いた、その成長が素晴らしい。

1つ情報としてお伝えすると、日本の大学も様変わりしており、日本の大学に入学してから提携する世界の大学に留学するという方法もある。日本の大学の授業料を支払うことで、その何倍もするアメリカの大学に留学することができる。これも1つの選択肢として考えてもよいのではないかな。

(3) テーマによる発表及び討議

・上田高校からの実践報告

テーマ：「探究活動と進路指導」

発表者：上田高校 進路指導主事 甲田 泰広 教諭

内 容：本校の進路指導の立場から、探究活動とどのように関わりを持たせていくことができるかについて、「探究と研究」の考え方、「探究活動と進路選択の関わり」、「集団としての探究活動を行うことの意義」について日頃の取組を発表。

探究学習と進路選択を結び付ける1つの案として、ある1つの共通の事象について、自分がアプローチしたい様々な分野から考え、その中からやりたいものを見付けて、進路選択に結び付けるという方法もあるのではないだろうか。例えば、「上田城」を共通のテーマとした場合、ある生徒は経済の視点から観光の場としての価値について考え、芸術という観点から上田城を捉えるとどうかなど。そこから学部や学科などの学問分野につなげていく方法も考えられるのではないかな。本校の進路指導としては、探究のプロセスを学び、その過程で何を学んだのかを生徒が進路を開拓する過程において、言語化して伝えられることが大事だと考えている。

・ALネットワークで育てたい生徒像とWWLループリック集について

信州WWLコンソーシアム構築支援事業で掲げる3つの目標は、長野県の「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」の中に示されている、長野県の高次教育が目指すべき方向性として示しているもの。WWLの取組やALネットワークでの学びを通して、長野県の高次生はどうなっていくのがよいのか、ゴールイメージを共有するとともに、本事業で実施しているプログラムが目指す生徒像を育成するための取組となっているのか、についてこの後のグループ討議で様々な立場からご意見をいただきたい。

ALネットワークから各校の探究活動に関するループリックを提供いただいた。前回の運営指導委員会で、「探究の本質とは、何を扱ったのかではなくどう扱ったのか、そのプロセスをよいものにしていくために、大人がどう関わっていくかが大切である」との助言をいただいた。本日は、各校における探究活動の指導において、うまくいっていること、課題としていること、今後目指したいことなどについて、2つのテーマで情報交換をお願いしたい。

・テーマによるグループ討議

テーマ① キャリア教育の一環としての探究活動のあり方

—探究学習をどのように主体的進路選択に結び付けるか

テーマ② 探究学習の形成的評価における現状と課題

—探究の過程をどのように評価するか

・情報共有

グループ1

キャリア教育の一環としての探究活動のあり方について、学校によってはなかなか探究学習が全職員に浸透していない現状もあるが、生徒の興味によってテーマを設定し、探究活動を進めているところが多い。探究学習を必ずしも進路に結び付ける必要はない。探究学習を通して身に付けるべきことは、自分で選択できるスキルを身に付けることであり、選択できるスキルがあれば、それに対して自分で責任を取ることができるのではない。

探究の評価については、各校悩まれている様子。知識と探究は強い相関関係があるのは確かである。生徒同士の相互評価を自己評価として取り入れているところもある。

グループ2

一般選抜だけでよいとか、総合型選抜を大いに活用しようという二元化はよくないのではないかという意見が出た。探究で結果を求め過ぎてもいけない。必ず成功して、こういう形で答えが出てこなければいけないというのもよくない。しかし、大学側も入試が変容しているので、我々もそれにアジャスト（適応）していかなければならないか。

探究のトピックは実用的でこういう結果に結び付かなければならないということではなく、教員はそのプロセスを支援していかなければならない。教員の指導体制として、教科を横断したり、時間を工夫したりすることなどが考えられるのではないかといった意見も出た。

グループ3

はじめから進路選択と探究活動を結び付けているところは無いのではないかと。生徒が興味関心から調べていったことが結果的に進路選択に繋がったという例もあるが、それは稀である。仮説を立てて検証し、最終的にはアクションまで持っていくことができればいいのだが、多くは調べ学習に終わってしまうところに学校が課題を抱えているようである。

評価については、研究の中身を評価するのではなく、どのように学んでいったかのプロセスや学び方を評価する学校もあった。途中の論文を作成したところで、ルーブリックを用いてフィードバックし、そこからさらに生徒たちに考えさせるといった学校もある。管理機関で作成したルーブリックを参考にしていきたいという意見もあった。最終的な探究活動の目的をはっきりさせて支援や指導をしていくことがまずは大切であるという意見も出た。

グループ4

地域とのつながりを大切にしたい取組、様々な形で外部からの刺激を取り入れる工夫、探究の成果を可視化、テキスト化しているといった報告があった。探究活動に取り組んだ中でボランティアに発展した事例もあり、それを教員間で話題にしている。

どうしたら主体的に取り組むことができるようになるか、との質問について、「現状、好きなことを見付けなければいけないという強迫観念に囚われすぎているのでは。主体的に取り組むこと、好きなことにこだわり過ぎず、興味があること、ニーズがあることにまで少し視野を広げてみるとよい」という話があった。

評価については、現状と課題を含め、生徒の学習の状況を見ていく中で、まずは教員の見目をどのように養っていくのか、生徒のつまづきを把握して授業に活かしたり、あるいは外部評価を導入しているという取組もあった。評価について、生徒の探究が様々な分野に及んでいる中、画一化したルーブリックで評価するのは難しいのではないかと。生徒の取組が最も高く評価される方法について考えていくことも大事なのではという話もあった。

(4) 運営指導委員による指導助言

浅井委員 生徒の発表について、どこに行きたいかという説明があったが、何をしたいのかについての言及が無かった。自分は何をしたいのかによって、どこに行きたいかを考え

るロジックに持っていかなければいけないのではないか。まずは大学に行って何をしたいのかを考えることが大事。

探究の時間とは何のために生徒が探究をするのか。探究の先には、課題解決能力を養うことが一番大事なのではないか。この力を養うことが目的であれば、探究のテーマを決めるのは生徒自身であるべき。一方で、テーマを決められないという生徒も出てくる。自分が何をしたいのかわからない生徒も多いのでは。そのような生徒に対しては、自分が何をしたいのかについて発表させる。他の生徒の発表を聞く中で、自分のテーマを見付けていくことができるのではないか。

テーマと課題が見付かれば、その解決に向けて自分たちはどう動くのか、課題がはっきりしない場合は、それを調査する。グループ討議の報告の中でも、調べ学習で終わってしまうという発言があったが、そこまで行ったら、教員は調べたことをまずは褒めた後、「その課題を解決するためにはどうしたらいいか」について考えるよう導くことが大事である。

探究については、学校の中だけで解決できることは少ない。学校の外、地域や会社などへ赴き調査する、多角的に物事を捉える機会を生徒に与えることが必要であり、探究と進路については、進路ありきで探究を考えるのはおかしい。探究の先に見えてくる進路であることは有益である。評価については、先生方が悩まれているところ。生徒の探究のプロセスを評価する、その過程で生徒がどのように変容したかを見る。その際、生徒が少しでも成長したのであればよい評価をするのがよいのではないか。

坪谷委員

発表について順番に感想を述べたい。

まずは上田高校について。コロナ禍の中、夏休みの活動報告会、課題研究の発表会、オンライン交流など生徒に対してアウトプットの機会をたくさん用意している。このアウトプットの積み重ねが一番大事であり、生徒がこれを行うことにより、自分の活動をブラッシュアップしていくことにつながる。

次に松本県ケ丘高校の取組について。話を聞いてこれがメインテーマだと思ったのだが、我々の人生は選択の連続である。ここで大切なのは、選択する力をどれだけ育成できるか。探究だけでなく認知能力の育成も大事。探究とは、学び方を学ぶこと。認知能力が必要無いということではない。書く力、読む力、話す力、計算する力が無ければ探究はできない。両方大切であり、表裏一体である。キャリア教育とは、人生を自分で選択するスキルを教えるということ。自分で選択すれば、必然的にその選択に対して責任を持つことができる。自分で選んだ人生に対して自分で責任を持つというのが根本にある。ではそこで必要な人生のスキルとは、人に伝える力、リサーチする力、コミュニケーションを図る力、そしてアクションを起こす力などである。そういったスキルを小さなプロジェクトというより、もう少し大きい領域の中で、テーマを見付け、探究を通して体得していく。自分の好きなことは途中で変わってもよい。そこで情緒的ではなく客観的に評価できることが大事である。ここでループリックが必要になってくる。

管理機関からの報告について。予算は付かないが、プロジェクトは1年延長する可能性があるというのはグッドニュース。予算が付かないのは1つのハードルであるが、来年度は再来年度の体制について考えていく予算措置も含め、1つの柱として考えていく必要がある。

よく1つのプロジェクトが終わると、予算が付かないからやらないという話を聞くが、そうではなく、一度立ち上げたものは花を咲かせなければならない。勝負はこれから。何らかの形でぜひ自走できる体制を整備して行ってもらいたい。

最後に生徒の発表。やんわりと伝えたつもりであるが、アメリカの大学は1年間に1千万円はかかる。生活費や家賃、特に安全な地域は家賃が高い。保険も高い。とにかくお金がかかる。経済的に可能な家庭は少ない。海外進学にかかる財政的な支援についてはぜひ考えていただきたい。

先生方との話から熱心な取組を伺うことができた。ありがとうございました。

南委員

本日はどうもありがとうございました。主に、休憩前の話から感想を述べたい。

探究学習の評価については、結果ではなくプロセスが大事であるという点に、なるほどと思った。松本県ケ丘高校の報告にあった生徒の事例は大変興味深く伺った。

上田高校の白井さんの発表も印象に残っている。一方で坪谷先生がおっしゃるように、現実的に海外の学校はお金がかかることは事実である。また、白井さんがアメリカの大学を希望していることの理由に、日本の大学が面白くなっている、日本の大学の勢いが無くなっていることがあると思っているのであれば、（坪谷先生は必ずしもそうではないとお話されていたかと思うが）少し辛いものがあると感じる。色々な縛りで大学の先生方もやり辛くなってきているという話を報道等で目にするが、高校生が多様な活動を通じて、広い視点で何かやりたいと思った時、その次に高等学府として大学でこんなことをやりたいということを選択肢として具体的に学生に示すことができる状況だともっといいと思う。本日はありがとうございました。

小村座長

本日もありがとうございました。

まずは、探究だからこそ生徒に主体的に学んでほしい、自分たちで問題設定してほしい、ここにどう向き合うかということだが、私は「主体的」＝「生徒が好きなことをやる」ではないということがポイントだと思っている。重要なのは、探究とは、生徒が没頭したり、生徒が元気に取り組めることであり、そうなるための動機は色々あってよい。自分が得意なこと、世の中にニーズがあること、あるいは自分が一番評価されやすいこと、そういうことをやるのもOKである。

もう1つ大事なことは、主体的＝決めた目標に向けて、まっしぐらにやるということではないということ。これから大学にますます入りやすくなる。入りやすいからこそ何となく進学した後、何か違うなと思う生徒も増えてくる。大学に入った後、違うことをやりたくなった時に、新しい道をうまく考えられるケースもあるので、まっすぐのキャリアだけでなく、紆余曲折や試行錯誤を前向きに捉えられる自分のあり方を、柔軟に考える基礎体力のようなものを高校時代に培うことも大事だと思う。

主体的ということは決して利己的なことではない。自分と社会のWell-beingを両立させることが大事であることも付け加えたい。

探究の評価についてであるが、生徒が色々なことに取り組んでいるので、必ずしも同じでなくてよい。一番重要なのは、同じ活動をしていても持っていく場所によって評価が変わるということ。研究者であれ大学であれ、どこに論文を持っていくかによって評価が変わる。高校生までの生徒は、たった1つの評価軸で序列化されることに慣れ過ぎている。どこに持っていくかによって評価が変わる事実を生徒も実感すること、自分たちの活動が一番評価される場所を見付けるというメンタリティーが大事。もちろん探究活動のベースとなる部分（根拠がある、自分の意見があるなど）はあるが、その先の評価は複数の評価軸があることを理解していないと、結局いつまで経っても正解探しになってしまう。ここを越えていくことがポイントではないかと思う。

本日もどうもありがとうございました。

3 閉会行事

- ・ 学びの改革支援課曾根原課長あいさつ
- ・ 事務連絡

※閉会后，連絡校会議

令和4年度 信州WVLコンソーシアム構築支援事業
第3回運営指導委員会議事録

期日 令和5年(2023年)2月4日(土)13時から16時まで

会場 上田高等学校 会議室(オンライン併用)

参加者(敬称略)

運営指導委員

参加者 小村俊平, 荒井英治郎, 浅井孝司, 讚井康智

坪谷ニューエル郁子, 南希成

学校関係者(拠点校:校長ほか3名, 共同実施校:教頭, 連携校:担当者)

県教育委員会事務局(今井教育次長ほか5名)

1 開会行事

管理機関あいさつ(今井教育次長)

参加者紹介

日程説明

2 議事①

(1) ALネットワークの取組及び成果と課題について

カリキュラム開発拠点校(上田高等学校)

北澤校長 3年間ではあるが、その前のSGHアソシエイトの時期を含めると9年間の取組となる。コロナと共にWVLの事業を行ってきた。この間、様々な制約も多かったが、ICT環境の整備が進み、オンラインを活用した様々な取組が行われ、海外との交流がオンラインで可能になったのは大きな変化であり成果である。ALネットワークにおいては、それぞれの学校が独自に積み上げてきた探究の取組をALネットワークという形で点と点を線で結び、その重なりを大きくしながら長野県としてのネットワークを創り上げてきたことが本県の取組の特徴であると考えている。

今年度の主な取組の報告

- ・文理融合のカリキュラム:国際理解教育
- ・より深い学び(探究的な学び):グローバルスタディーズ
1年生:ワクワク・ディベート 2年生:課題研究→中間報告会→GS報告会
- ・国際的な学び:
11月 台湾オンライン交流
3月 ヒューマンアクトインマニラ(オンライン実施)
ボストンスタディツアー(オンライン実施)
カンボジア井戸プロジェクト(渡航予定)
- ・高度な学び:6月 信州WVL高校生国際会議
- ・主体的な学び:アカデミックプレゼンテーション, 生徒企画

3年間のまとめについて

- ・WVL事業の実施による学校全体への波及効果
通常授業への影響, 生徒の変化, 教員と生徒の関係の変化について
- ・他の組織との連携に対する変化・効果について報告

今後の課題について

- ・ 予算措置，連携分野の拡張，管理機関と拠点校の役割分担の明確化。
- ・ 先進自治体，先進校などの実践例，民間のプログラム開発業者との連携，活用。
- ・ コロナ禍で中断している，対面での海外スタディツアーの再開。
- ・ 安全保障上の問題や渡航費用の高騰の影響から，台湾研修旅行の実施が難しい状況になりつつあるが，これをどのように克服していくか。
- ・ 課題研究で，“think globally, act locally”として，ローカル課題の重要性や可能性を伝える一方，グローバル課題への関心が低下しているようにも思える。これをどのように高めていくか。
- ・ 課題研究に本気で取り組んだ生徒が進路実現などで報われるようなシステムの設計。
- ・ 今後の自走の在り方，職員の意識統一と各活動のブラッシュアップをどう図るか。
- ・ 発信力の強化。

※ 連携校より，カリキュラム開発，より深い学び，国際的な学び，高度な学び，主体的な学びについて1年間の取組の報告あり。この内容については，「令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究収録集」に掲載する予定。

(2) 来年度について

管理機関 長野県教育委員会

- ・ 信州WWLコンソーシアム構築支援事業3年間の取組について報告
ALネットワークの組織拡充，カリキュラム開発，大学先取り履修，海外留学，進学支援，高校生国際会議等について。
- ・ 今後の課題について
管理機関としては，これまでのプログラムを精査しながらも，基本的には3年間で構築したプログラムを継続。プログラムの実施に係る経費については，国の事業活用及び来年度県の予算措置を調整中。

(3) グローバルスタディ報告会について

拠点校担当より

2年間の個人探究活動の報告会。本校では1年生で1単位，2年生で2単位の「グローバルスタディ」という科目を設定している。1年生は主に課題を発見する力を養い，2年生ではSDGsに関連した課題研究を進めている。県内のフィールドワークや国際交流，そしてアドバイザーの助言を受けて個人で探究した内容を本日の報告会で2年生全員が報告する。2年ぶりに対面で実施することができた。ぜひ生徒の様子を観覧いただき，助言等をいただくと生徒にとっても励みになると思う。

休憩・移動

3 報告会参観等

- (1) 参観「グローバルスタディ報告会」
- (2) 運営指導委員・参加教員，生徒との懇談
上田高校2・3年生6名と運営指導委員，参加職員との懇談。

休憩・移動

4 議事② 運営指導委員からの指導・助言

浅井委員

私は3年間ではなく1年間だけだったが、今日のグローバルスタディ報告会を拝見させていただき、個人的にはすごく楽しくて面白く、もっとずっと聞いていたかったというのが率直な感想。

その中でも特に、発表する側も、そして報告を受ける側も、お互いの生徒同士の学び合いがすごく素晴らしいというのが第一印象。教育はいろいろと言われているものの、今後の教育のあり方の中で、こうした生徒同士がお互いに学び合って高め合っていくというのが、理想だと私は思っていて、今日それを間近で見ることができたことについて深く感動している。

では教員はどうするのかということがあるが、こうした時に重要になってくるのは、多分教員としてはファシリテーターとしての役割ということがかなり求められるのではないかと生徒の報告を聞いていて改めて感じた。

それから、グローバルスタディの中で、視点がやはり鋭い生徒がいた。私が聞いた報告の中で、国際問題のフェアトレードを題材にしていた生徒がいて、真のフェアトレードとは何かという問いについての研究であったが、今現在フェアトレードには認証ラベルが付いているが、それをそのまま鵜呑みにしない。その認証ラベルについて本当にフェアトレードなのかと疑問を持って、そこを追究して、認証ラベルが付いているからといってそれは必ずしもフェアトレードではなかったと、そう研究した生徒がいて、それはすごく感心した。

まさに物事を鵜呑みにしない、ESD (Education for Sustainable Development) と我々が呼んでいる学びを地で行っている生徒だと思い感心した。ただ、それについては解決策をどうするかについて考えているが、自分では解決策をどうしたいか少しまだよく見えていないという正直な感想があって、そこをもう少しみんなで考えていきたいという報告があったたいへん面白かった。

また、他の発表で、タイトルは「日本の学力と教育の現状」で、PISAの成績発表、日本はどのくらいの地位にいるかということから関心を持ったという報告で、報告そのものよりも、実はその生徒が言った先生と生徒の関係について非常に印象的なことがあって、学校の先生は進路指導の時に、自分の指導している生徒に「あなたはここができないね」「あなたはここができないから頑張らなければいけないね」と、成績の悪い教科を指摘する。そうすると生徒というのはモチベーションが下がってしまう。成績のよいことをなぜ褒めてくれないのか、といったことを言っている生徒がいて、「なるほど」と思ったのは、確かに日本の場合は苦手なところを指摘されると人間はどうしてもシェンとなってしまうことが多いので、ここは生徒を指導する時に先生方もぜひ気を付けていかなければならないのではないかと感じている。それから、その生徒が非常に面白かったのは、学力についていえば、高校までくると生徒個人個人の学力にかなり差が出てくる、そして、そういう学力差のある生徒たちが、なぜ同じ教室の中で学ばなければならないか、そして教員側の問題として、どのレベルに合わせるか非常に苦労すると思うが、その生徒はアメリカの教育制度を見ていて、飛び級制度や学力別のクラス、能力別のクラスなど、そういうことの方が、自分としては学習するのに非常にいい環境ではないかという報告をしていたので、そこはその生徒が勧める考えだが、他の人たちはどう考えるのかということところが面白いと思って聞いていた。なかなか時間が無くて、全部聞くことができなかったが、今日のグローバルスタディ報告会の中に、非常に考えさせられることがあったと思う。

讃井委員

私の方では3年間の取組を振り返って、いくつかお話できればと思う。

まず、これまでの取組を見せていただき、やはり生徒のみなさんが自分でテーマ設定をしながら、まさに主体的・対話的で深い学びを体現していたところが、日本全体の高校に対してもロールモデルとなるような取組を全県で展開されていて本当に素晴らしいと思っている。

そういった中で、長野県の先生たちが、各校で工夫した取組を行うなど、新しいことに挑戦している姿勢に感銘を受けた。また、生徒の発表が素晴らしくなっている背景として考えられることは、生徒の探究ということであり、あとはそのオープンエンドになっていく学びということを、先生たちが受容されたり適応されていった姿があったから本当に素晴らしかったのではないかとと思っている。

やはり大人の方で、どこかに枠を設けてしまうようなことをしてしまうと、探究的な学びの特徴である生徒たちのクリエイティビティであったり、探究心みたいな、もっと伸びるものがとどまってしまう可能性があったりする。それが、探究的な学びの特徴というふうに思っているが、そういったことを先生たちの方で、生徒たちの考えを肯定したり、もっとよくしていくことができるアドバイスは無いかといった、先生たち自身も生徒たちとの探究的な関わりというのを研究されていったことが、この3年間の取組に繋がっているのではないかと思った。

ぜひこういったことを続けていっていただきたいと、まず思っている。そういった点で、本日もそうだが、おそらくさらに年度末にかけてというところで、WWLの取組の総括が進んでいくと思う。その中で、ぜひ、何ができて、今何が課題なのかということ、そして来年度以降何に取り組んでいくのかということを確認にして終わっていただけたらと思っている。

これは探究、またはプロジェクト学習という言い方がよいのかわからないが、そういった中でもやはり、一番大事なことが課題発見力であり、あとは 이슈を立てる力が大事。それらの力を、今自分たちの会社の中でも、特にマネージャー育成では大切にしているところがある。やはり次に向けての 이슈 というところが不明確なまま終わってしまうと、これまでやってきたことの共有はできたとしても、今後に向けて何らかのベクトルを、教育委員会の中であるとか各校の中で持つことができないまま終わってしまうことは非常にもったいないことだと思っている。

したがって、そのあたりをより明確にして3年間を終われたらよいのではないかと、いうところがまずあった。

その上で、もしデータが取れていればだが、子どもたちの変化がどうであったかというところを、定性的な変化については先ほど話をいただいたが、定量データでのブレ・ポストの変化みたいなところを取ることができれば、それを分析して、今後の取組の方向性を導き出してもよいのではないかと思った。

今回の取組で、生徒たちにかなりいろいろな変化が起きていると思っている。特に非認知能力の面ではかなり大きな変化が起きているのではないかと、そのあたりがこの取組を続けていく科学的な根拠であったりとか、あと予算措置という話が先ほどあったが、やはりこういった変化が出ているからこそ、来年度以降も予算を付けてやっていく必要があるのだということを経済部局に対して説明していく上でも非常に大事な、先生たちを助ける材料になるのではないかと思う。したがって、そういったデータなどがあれば、ぜひ分析し活かしていただけたらとも思っている。

あと、よりよくするというところで、最後に1点付け加えさせていただくと、今後は、高校生自身がWWLとか、探究的な学びづくり全体の研究に関わっていくこともよいのではないかと思う。つまり、自分の学校の中で自分でテーマを定め、研究していくということに限らず、WWLの取組全体、いわゆる各学校の枠を超えて俯瞰して見た時の、

こういったWWLの取組をどうしていくかといったところにも高校生が関わっていったよいのではないかと思う。

というのは、この取組が理想的に進んだ時には、多分学びという域を超えていると思うから。学校とか授業とか学びという域を超えていて、オーセンティックな本当に課題解決のプロジェクトになっていくと思う。そうなった時に、このWWLという取組も、学校の中での限られた学びというような、言ってしまうと模擬体験というようなことでは絶対なくて、実はそうではない取組が今回たくさん出てきていると思っているが、そうではない神聖なプロジェクトになっていく。そういう中では、今後は当事者である高校生というところも中心的に入りながら、課題解決に取り組んでいくようなところにも今後関与していったら嬉しいと思っている。皆様、3年間にわたる素晴らしい取組、お疲れ様でした。

坪谷委員

まずグローバルスタディ報告会について、高校生のプレゼンテーションとしては皆たいへん立派に堂々とやっていたという感想を持った。最初に英語で要約するが、そのあとの日本語でなぜこの課題なのかというところのストーリーは心を打たれるが、英語だとやはりそこに心を込めることはなかなか難しい。ここは生徒たちがなぜ英語で要約しなければならぬか、それは英語で発信することによって、国内のみならず国外の人もそれを読むことができ、もしかするとその中には関心を持ってきている人がいるかもしれない、その目的のためにどのような要約にすれば一番興味を惹くのかといったところを指導していくといいのではないかと思った。

それから2番目がデータの出典先。データの出典先については、信頼に値する出典先なのかどうなのかというところの指導が必要なのではないか。あと、アンケートについては母集団の数はどうなのかという基本的なところを指導とするとよいのでは。そして次は課題の抽出をしたあと、その課題に対する解決方法を提案するというのがパターンであるが、課題の抽出と解決方法との関連性が「あれ？」というところがいくつかあったので、それは、課題の抽出に対する解決方法はあるということ、またその解決方法を提示したらそれに対するアクションプランとしてどういう行動をとるのか、という点を明確にすることが大切。

次に、生徒との懇談だが、私と同じチームでリーディングしてくれた荒井先生の鋭い質問に対して子どもたちも本音が出ていた。私が本当に感心したのは、生徒たちが自分のやりたいことが明確であるということ。自分のやりたいこと、研究したいこと、それに対して大学側がどんな質のものを提供しているのか、そこまで考えて進学先を選んでいるという生徒がいて、私たちの時代とはずいぶん変わったとたいへん感心した。さらに付け加えると、私のいたチームの中の一人の生徒は、廣田先生が自分の中学に来て話をしてくれたことに感激して、この上田高校を進学先に選んだということをつけ加えさせていただく。

そして次に、3年間の成果だが、まず、1番最初に来た時と、今日のこの委員会を比べると、この3年間で素晴らしい成果を挙げられた。これは、関係者の皆さんの努力の賜物。

本当におめでとうございます。これでWWLが終わってしまうということではなく、これからがスタートであると思う。WWLの3年間でいろいろと試行錯誤してきた、今はその成果が出てきたところ。したがって今後の課題は、いかに継承するか、ではなく、いかにこれから発展させていくのか、というところ。これからがいよいよ本番。

それからもう1つは、他校との連携が長野の場合はこの3年間でずいぶん広がった。これを継続のみならず、長野県内の高校が、みな情報共有できるようにしていく。これが2番目。

そして3番目は、教育県長野なのだから、さらに県外の教育委員会や高校、いろいろな学校とシェアしていく。これはSNSなどを使えば可能かと思う。そのような形で発展させていってほしい。

あともう1つ。今日、報告があった中で、「おー！」と思ったのは、課題の検証のところで、1人の教師で1年生の5人か6人くらい、課題を選ぶ時に付いて指導しているという話があったが、私はこれをうまく利用してキャリアスタディ、つまり進路指導につなげていけないか、と思った。生徒は何が好きなのか、何が得意なのか、どんな課題を選ぶのか、どういう研究分野がよいのか、それらを進路指導につなげていき、生徒が、自分はこの勉強を大学でしたい、だったらこの大学がよいのでは、将来こういう職業に就きたい、だったらこういう大学に行ってみたらどうか、人数的にも1人で5～6人を指導できるというのは、ちょうどいい人数だと思った。

当然のことながら、進路指導については、ただ単に好きということだけでなく、経済的なバックグラウンドや社会的なバックグラウンドなども考慮したうえで、先生方が色々、生徒が選択をする際のサポートをする役割を担うのではないかと思った。

最後に、私はかねてから長野の教育をたいへん尊敬している。というのは、この探究型の学習を誰が始めたのかというと、大正時代に長野県が始めた。教育史を見てもらえばわかるし、皆さんご存知だと思うが、それが戦時中、戦争にどんどん向かうにつれて、これはまずいぞと、長野から考えられる人を出してしまうぞということになって迫害された。だから皆さんの先人はたいへんな思いをした。だから私はその血が長野の民には流れていると思い、この運営指導委員会の委員をやらせていただいて、この3年間ではっきりとわかったのは、やはりその血は流れているということ。コロナ禍のため、オンラインが多く、なかなか長野を訪れることが叶わなかったことは残念ではあるが、この3年間、長野県で委員の片隅においていただいたことを誇りに思う。本当にありがとうございました。そして、いつでも応援しているので、どうか今後とも頑張ってください。

南委員

コロナ禍もあり、今までずっとオンライン参加だったが、今回初めて上田高校に来て生徒の報告を拝見し、とても面白かった。自分の高校時代に戻ったようなとまではいかないが、壁のひびなども含めて非常に懐かしく感じたところ。まず、今日の報告会について、浅井委員もおっしゃっていたとおり、自分も興味深く参加させてもらった。3つほどプレゼンテーションを聞いたが、どの生徒も臆せずというか、しっかりとプレゼンテーションを作って口頭でしゃべって質疑にも答えてという感じで、きちんと報告ができていて感心した。

それから、情報収集という能力に関しても、多分インターネットやソーシャルメディアなどをうまく活用していて、3件中2件ではグーグルフォームでアンケートを行ったと言っていたので、そういうメディアを使っての情報収集とか、プレゼンテーションに長けている、慣れているということがよく伝わってきた。その一方で、懇談の時にも話したが、活字のメディアというか、本からの情報は生徒たちには意外と疎遠なのかという感じを受けた。本を読むこともなかなか時間がかかってそこから情報を取ってくることはなかなかたいへんだということのある学生が言っていて、なるほどとも思ったが、活字メディアの使い方にもうまく慣れてもらおうとよいのではないかと思った。とはいえ、3つのプレゼンテーションはどれも個性的で、非常に熱意を持ってやっている点がよく伝わってきた。

それでこの運営指導委員会には自分も3年間参加したが、ずっと探究型学習は実際に生徒たちにとってどのような意義、意味があるのか、押し付けになったりしていないのか懸念している部分もあったが、実際生徒たちが発表したり、話をしたりしている姿を見て、きちんと生徒たちの肌感覚というか、地に足が着いているというか、そういうと

ころに根差して自分たちの興味とか探究心とかを深めて学んだりプレゼンテーションしているということがわかって非常に安心した。こういう取組はそういう面では非常によく機能しているという感想を持った。あまり俯瞰的な感想ではないが。

ただ最後の懇談のところで、これも確か荒井先生がおっしゃっていたと思うが、生徒たちに「忙しすぎない？」という質問に対し、生徒は苦笑いしながら「忙しすぎます。」と答えていたので、これはやはりオーバーロードになっているというか、生徒たちが処理できる分量を超えてしまっていて、読みたい本もすぐに次を読める感じではないんですよと言っていて、少し可哀そうな感じがしたので、勉強の仕方というか、時間のマネジメントの仕方を含めて調整していただいた方がよいのではないかと感じた。

荒井委員

私の方からは5点ほどお話させていただく。

1つ目に、探究プロセスの各段階について感じたことをお話ししたい。探究には「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」といった段階があると説明されることがあるが、「課題設定」に関しては、学術的な意味で課題設定がなされているかという点、まだまだ不十分な点があるかもしれないが、生徒たち自身の問題意識が大切にされ、それを生徒自身が相手に懸命に伝えようと努力している点は素晴らしい。まさに「自分」のテーマとなっていた。

他方で、「情報収集」や「整理・分析」に関して、生徒たちにとって、ネット検索があまりにも身近すぎるものとなっており、その検索方法だけで満足してしまうことにもったいなさを感じた。指導場面で、もう少し文献の検索の仕方や引用の仕方、あるいはアンケートの収集の仕方や母集団の概念など、指導することで学びの深まりがずいぶん変わってくるのではないかと思う。このことは、データリテラシーの問題とも関係してくると思うので、今後の展開に期待したい。

「まとめ・表現」に関して次に挑戦してほしい点は、より広範囲の対象にプレゼンするという点を意識することである。現在、自分のタブレットを見せながら、半径1メートル以内の人に何かを伝えるという訓練は相当にやっていると感じた。今後は5メートル以上離れた人や、不特定多数の人に対しても同様のプレゼンテーションができるか、様々な機会も設けてみてはどうかと感じた。

2点目は、生徒の皆さんが「未来の計画書」として、自分自身の次のアクションにつながる部分を紹介していてとても勉強になったが、そのプロセスにおいて経験学習を経ている生徒とそうでない生徒でかなり差が出てきている印象を持った。テーマの特性もあるため2年次の時点ですでにフィールドに出ている人とこれからの人とのギャップを完全に揃える必要はないが、今後の課題として提起しておきたい。

3点目が、カリキュラム・オーバーロードの問題である。学校は良かれと思って様々な機会を用意しているが、生徒にとって消化不良になっていないのか、自覚的である必要がある。生徒自身が自分の学びにおける自己課題を認識している点は実は介入のチャンスでもあると思われる。

4点目は、ルーブリックに関して。ルーブリックは「育成する生徒像ルーブリック」というタイトルになっているが、これは裏返せば、こうした機会や指導を教員はできているのかが問われていることを意味する。「課題を自らの生き方と結び付ける」、「学校外の方とつながる」、「試行錯誤を繰り返す」、「実社会への応用」など、学びの伴走者としての教師が生徒に適切なアドバイスができていないか、省察する機会ともなる。

最後に、WWLにおけるネットワーク構築はある程度できたと思われる。今後は、こうした取組の評価自体を生徒たち自身に問い、今後の改善策や学びのデザインについて学びの当事者としての意見を生徒からもフィードバックする機会があるとよい。

小村座長

まず最初に思ったのは、今日、上田高校の生徒の発表を見て、この生徒たちを、大学はさらに伸びるように育てられるだろうかと思えるくらいの可能性を感じた。これは自分も大学に関わる人間の一人としては、可能性とプレッシャーを感じている。これは非常に嬉しいこととして最初に申し上げたい。その上で、4点ほどそれぞれの観点で申し上げる。

まず1つ目は発表について。荒井委員がおっしゃったことと少し重なることでもあるが、今回本当に久々の対面の場で、非常に楽しかった。ただ久々の対面の場であるがゆえに難しい点というか、経験不足の点もあったのではないかと考えていて、端的に申し上げると、生徒が相手の目を見てプレゼンテーションをしていなかった。これは非常にもったいないと思った。端末を紙芝居的に使うのは見た目が綺麗だし、最初に英語の要約を使っていることもよいのだが、ただ読み上げている生徒がほとんどだった。質疑応答になってようやく相手の目を見て会話ができているが、プレゼンテーションがものすごく一方通行的で、しっかり話すことを優先していた。そうではなくて、プレゼンテーション自体が会話であるということ、相手の表情を見ながら伝わっているのか、伝わっていないのかを確認しながら行う双方向的に行うものであるというマインドセットを生徒へ早めに伝えておいた方がよいのではないかと考えた。

2つ目が内容について。後で懇談の時間もあって非常にありがたかったが、生徒からはやはり好きなテーマをやりたい、好きなテーマをやるのが大事だという声があった。裏を返すと、自分がやりたいテーマがあったが、これはふさわしくないという趣向があったのではないかとと思うが、私は良し悪しがあるとすると、それはテーマ設定ではなくテーマに対するアプローチではないかと考えていて、要は例えば漫画を扱うから駄目という話ではなくて、漫画を深く掘り下げるアプローチができているかどうかであって、テーマを否定するのではなく、テーマに対するアプローチをどうしたら深められるか、どう新しくできるか、そんな支援ができることよいのではないかと考えた。非常にわかりやすい言葉で言うと、真面目なことを真面目にやってももちろんよいのだが、不真面目なことを真面目に扱うことも探究である、やはり中学生や高校生にはいろいろな思いがあると思うが、いかがわしさに対してしっかり向き合うことも探究の醍醐味であると考えている。これをテーマ設定のところではびしゃりとやってしまうと、実は生徒のテーマに深く切り込む力を失わせてしまうことになるのではないかと考える。あとは勉強とGS（グローバル・スタディ）の探究が分断しているという声もあったが、これはもったいないのではないかと考えていて、GSの意義を生徒に改めてしっかり伝えていく必要があるのではないかと考えた。特にやはり、言われたことを頑張るレベルの勉強しかできない生徒は、大学入学後には伸びないし、社会に出てからも伸びない。せっかくこのすばらしいGSという探究の場があるのだから、これは勉強と不可分のものであるということを生徒にしっかり伝える工夫が大事だと思う。

3つ目が先ほども申し上げた、テーマへのアプローチの方法だが、今日生徒に「よいGSとは何だと思えますか？」と聞いてみたところ、私が嬉しかったのは生徒1人1人違う意見だったこと。ここが皆同じ意見だと面白くないというか、かえって心配になるが、ただ、1人1人の意見は皆違うのだが、一方で行動することが大事だとか、この活動を通じて自分のやりたいテーマを見つけたいとか、そんな声が共通だったら素晴らしいと思った。深めたいと思ったのは、単なる調べ学習ではなく、というような言葉が出てきたが、これはよく世の中で言われるが、別に「調べ学習」自体が悪いというわけではないと思う。ただ、質が高い調べ学習と、質が低い調べ学習があるというだけであって、調べるということをよりクオリティ高く行うとはどういうことか、たとえば、アウトプットをしっかり体系化していくとか、独自の観点があるとか、他

とは違う情報にアクセスしているとか、調べ学習だから駄目ということではなく、いい調べ学習とはどういうことなのかということについてしっかり会話ができるとよいと思う。調べ学習以外がやりたい、行動したいという生徒もいたのだが、よい行動とは何か、行動した後の仮説検証をするにはどうしたらよいか、そのあたりを学校の中でしっかりと知見が蓄積されて、生徒に伝えられるようになっていくことが今後の課題ではないかと思う。

最後に、評価についてだが、今日、ルーブリックを拝見して勉強になったのだが、やはりせっかく今日これだけのテーマで、いろいろな活動があったものを、すべて一つの軸で評価することはなかなかできない。日本の探究活動としてどうかという、探究のプロセスを評価することはできるが、今日の生徒たちの報告は、持ち込む先がどこになるかによってもものすごく評価が割れるものだと思う。ビジネスコンテストに持っていか、学会に持っていか、いろいろな場に持っていくことによって評価が違おうと思う。そこを私は生徒たちに理解してもらい、気付いてもらうことがこのような活動においてとても大事なことだと思っている。なぜかという、持ち込む場によって、見る人によって、自分の作品の評価が変わる。これって実はものすごく自己肯定感につながる。普遍的な評価というもの無く、環境との関係性で決まるということでもあり、生徒自身がセルフプロデュースをする力を高めることにも繋がると思う。

上田高校の生徒は今日活動を拝見する限り、みんな大人が何を求めているかをわかる生徒たちばかりなので、油断していると大人に対してどんどん合わせていってしまう。そうではなくて、自分たちがよいと思ってやったこと、自分たちがとことん掘めたことを、どうすればより周りの人たちに評価してもらえるか、どういうフィールドに行くか自分が活躍できるのか、そういうことをメタに考える習慣を身に付けるという意味でも、あまり共通の観点で評価する、公平に、公正に評価するというよりも、この生徒たちがどうすればセルフプロデュースできるようになるのか、そんな観点が評価の観点として持てるとよいのではないかと思う。

私自身が感じたことは以上だが、いずれにせよこの3年間は素晴らしい挑戦だったと思う。当初は考えられなかったコロナというものもあり、このあとどうするか、私もいろいろな学校と関わっているが、よくあるのが、校長が変わったら探究の質が落ちたとか、国の予算がなくなったら活動がなくなったとか、そういう例は枚挙にいとまが無い。しかしそうではなく、ここで経験したことを長野県全体の血肉としていく、その時には当然予算とか、大きな足かせになったりもするが、一つ収穫があるとする、コロナでオンラインの活動が多かったということ、オンラインの活動はオフラインに比べてコストが少なく済む。これを今後いかに生かしていくかがすごく大事な観点だと思う。オフラインだったらもっとできたのに、ということではなく、オンラインでもできたこと、あるいはオンラインだからこそできたこと、ここを来年以降、カリキュラムの中にしっかりと入れておくことが、オールオアナッシングではなく、これまでやってきたWWLの活動がなくなるのではなく、より発展していくために非常に大事なことではないかと思う。本当にこの活動をさらに発展させていただきたいと、運営指導委員全員が思っていますし、声をかけていただければいつでも馳せ参じるつもりですので、ぜひ今後もお声がけいただければと思います。

5 閉会行事

- ・北澤 潔 上田高等学校長あいさつ
- ・廣田 昌彦 学びの改革支援課高校教育指導係 教育幹兼係長 あいさつ
- ・事務連絡

※閉会后、連絡校会議

信州WWL コンソーシアム構築支援事業令和3年度検証会議のまとめ

期日：令和4年3月14日（月）

参加者：慶應義塾大学総合政策学部 教授 清水唯一朗

拠点校 上田高等学校 教頭 宮下美和

WWL推進係主任 高野英美

管理機関 長野県教育委員会事務局

指摘事項と助言

SGH から7年目がこれで終わるということで、非常に今までの蓄積が学校側にあると読みとって感じた。去年の資料と比較しながらコメントしたい。

【生徒アンケートについて】

昨年のWWL 初年度では、生徒の満足度が85%あったが今回68%に下がった。顕著に下がった理由が気になる。これはWWLが二年目になり、新鮮味が薄れたからなのかどうか。対してDDPスキルが上がっており、「問いを立てる力」が導入時の授業により生徒からの認識としても身に付いていると感じた。

・着眼点

着眼点が突出して回答する生徒が増えたことについて、これは先生側が突出している着眼点を許容、面白いと思えるようになってきたということ。これはSGHからWWLを続けてきた大きな成功と言える。そう感じている生徒にヒアリングをして確認し、今後につなげるべきである。

・自主的な活動

コロナ禍で海外渡航が難しいのであれば、「日本の中にある海外」を見てみてはどうか。高校をハブにし、地域にいる卒業生とつながり、地域内で活性化させてみてはどうか。

【他校との交流について】

リモートの活用によりとても活発な印象。長野県内の同じ課題意識をもった生徒同士の横のつながりが、安心安全に結び付けてくれるといいのではないか。それをきっかけに大人同士も結びつき、更なるネットワークが広がっていくと考えられる。

【卒業生の活用について】

せっかく7年間の実績があるので、SGHを経たOGOBからの現実的な話をしてもらおうと良い。年齢が近いほうが、手が届きイメージしやすい。

【教員アンケートについて】

問いを立てる授業をやったことで、全体のプログラムへの取組みが合理的に進んでいる。科目間連携を検討し、全教員で進めていくとよい。生徒側からアドバイザーとなる教員を見つけて動くことが本来の理想。

【教員の負担について】

「探究バディ」のようなプラットフォームを活用し、県内でネットワークを広げ同じ課題意識を持った生徒をグループ化する。その生徒の指導教員がグループに一人付くことで、負担が減る可能性がある。

【今後の取組について】

従来に形に当てはめず、学びの定着のために班活動として探究活動をすることはどうか。組織にしてしまえば、継続的に活動を行っていくことが期待できる。それぞれの学校がどれだけ自主性をもっていか、実際に探究を行った先生たちが各学校に異動してどう広めていくのかに対してのインフラ整備が重要。生徒の集まれる場所、先生たちが繋がる場所などを作っていくのが大切となる。



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

NAGANO WWL AL NETWORK KEY COMPETENCIES

ALネットワークで育成する生徒像

「社会の創造者」に関する資質・能力

混沌とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして共同しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に想像していくことができる

1 課題発見力

世の中の事象から課題を見つけ出し、自分ごととして設定することができる

2 協働力

人と協働してともに活動することができる

3 解をつくり出す力

試行錯誤を繰り返す中から最適な解をつくりだすことができる

4 アクションを自ら起こす力

問題解決のために、アクションを起こすことができる

5 新しい価値や社会を創造する力

課題解決を通じて、新しい価値や社会を創し、世の中をよくしようという志を持っている

「自分らしく生きる力」を培う資質・能力

社会（世界）との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」という自分の人生を構想する力

6 自らの行動を振り返る力、レジリエンス

自らの取組を評価し、失敗しても試行錯誤を繰り返し、努力し続けることができる

7 人生を構想する力

課題に取り組む中で、自分の人生や生き方を構想することができる



グローバルマインドを育む資質・能力

信州に根ざした豊かなアイデンティティと世界に通じる広い視野、資質・能力

8 地域に根差したアイデンティティ

地域と積極的に関わることができる

9 グローバルなマインドセット

世界を見る視野を持ち、他者の多様な考えや価値観を理解し、受け入れることができる

10 世界に通じる教養

幅広い知識と教養を身につけ、生涯にわたり学び続けることができる

11 世界に通じるコミュニケーション力

自分の考えを書いたり話したりすることで伝え、人の考えを書物や対話を通して理解し、恐れず対話することができる

観点		レベル				
		S	A	B	C	
<p>混雑とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして協働しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に創造する力</p>	課題発見力	世の中の事象から課題を見つけて出し、自分ごととして設定することができ。	見つけた課題を自分の身の回りの事象と結びつけて設定することができ。	事象を多角的に見て、オリジナルの課題を見つければできる。	課題を設定できるが、オリジナルタイプが感じられず、一面的である。	
	協働力	人と協力して共に活動することができ。	自ら仲間を探し、協働することができる。	グループの人と協力することができる。	自主的に人と協力する姿勢が見えない。	
	解をつくり出す力	試行錯誤を繰り返す中から最適な解をつくり出すことができ。	自分がつくり出した解を試行錯誤を重ねて改善していくことができ。	一般的に知られている解を組み合わせて自分の解とすることができる。	インターネットや書物などから、一般的に知られている解を見つめることができる。	
	アクションを自ら起こす力	課題解決のためにアクションを起こすことができる。	起こしたアクションを改善しつつ継続することができる。	自ら必要なアクションを起こすことができる。	指示によりアクションを起こすことができる。	アクションプランがプランにとどまっている。
<p>社会(世界)との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」という自分の人生を構想する力</p>	自らの行動を振り返る力・レジリエンス	自らの取組を評価し、失敗しても試行錯誤を繰り返す、努力し続けることができる。	失敗を省みて試行錯誤を繰り返しながら、改善に取り組みより良い解にたどり着いている。	失敗を省みて改善に取り組もうとする。	失敗を省みることができない。	
	人生を構想する力	課題に取り組みの中で自分の人生や生き方を構想することができる。	自分の人生や生き方を構想している。	高校卒業後の将来の自分について考えている。	考えが現状にとどまっている。	
	地域に根ざしたアイディア	地域と積極的に関わろうとしている。	課題に取り組みの中で広く地域と関わり、輪を広げている。	課題に取り組みの中で広く地域と関わっている。	部分的ではあるが、課題に取り組みの中で地域と関わろうとしている。	自分の考えに固執している。
	グローバルなマインド	世界を見る視野を持ち、他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとしている。	十分に他者の多様な考えや価値観を理解し自らに取り入れていく。	十分に他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとしている。	他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとするが不十分である。	自分や自分の価値観に固執している。
<p>信州に根ざした確かなアイディアと世界に通じる広い視野、資質・能力</p>	世界に通じる教養	幅広い知識と教養を身につけている。	学んだことを更に深く、実社会に活かそうとしている。	課題解決のために必要な基本的な知識を身につけている。	基本的な知識を一部身につけているが、不十分である。	
	世界に通じるコミュニケーション力	自分の考えを書いたり話することで、伝え、人の考えを書物や対話を通して理解し、恐れず対話することができる。	他者と十分に意思疎通を図った上で、対話を通じて新しい考えを生み出すことができる。	十分に他者の考えを理解し、また、自分の考えを伝えることができる。	おおまかに他者の考えを理解したり、自分の意見を伝えることができる。	十分ではないが、他者の考えを理解したり、自分の意見を伝えるようとしている。



学び応援キャラクター「信州なび助」©長野県教育委員会

長野県教育委員会事務局学びの改革支援課

〒380-8570 長野県長野市大字南長野字幅下692-2

TEL 026-235-7435 FAX 026-235-7495

E-mail: kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

長野県上田高等学校

〒386-8715 長野県上田市大手1-4-32

TEL 0268-22-0002 FAX 0268-23-5390

E-mail: ueda-hs@pref.nagano.lg.jp